仙台市文化財調査報告書第36集

北前遺跡

発掘調査報告書

1982年3月

仙台市教育委員会

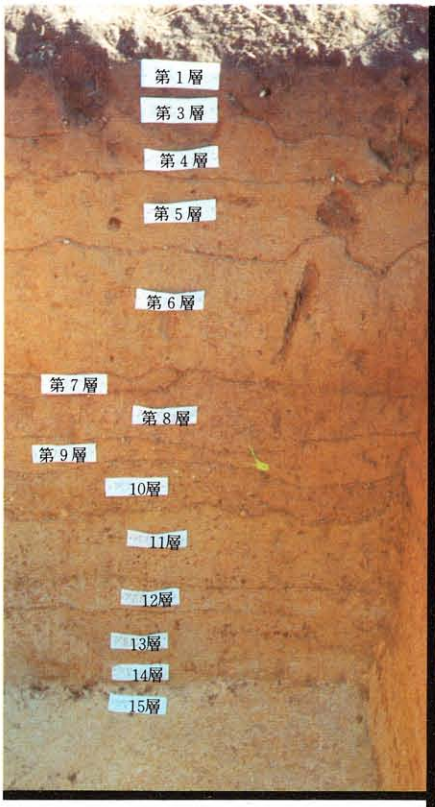
仙台市文化財調査報告書第36集

北前遺跡

発掘調査報告書

1982年3月

仙台市教育委員会

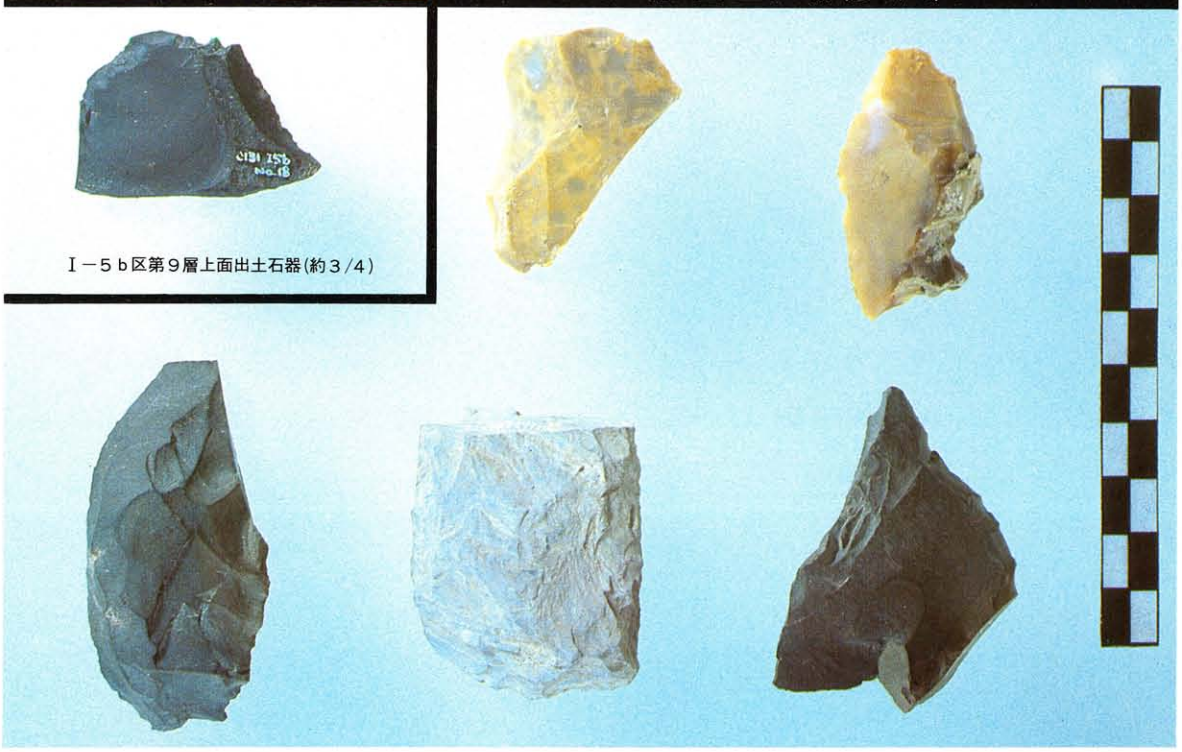


▲D－３ａ区15層上面出土状況

◀D－３ａ区東壁セクション

▼D－３ａ区15層上面出土石器群（約３/４）

Ｉ－５ｂ区第９層上面出土石器（約３/４）



序　　文

仙台の南縁を画して東流する名取川の北岸一帯には、数多くの埋蔵文化財が包蔵され、随所にその分布をみることができます。なかでも山田上ノ台・人来田・上野・三神峯の各遺跡はその代表として古くから周知されています。

北前遺跡は、一昨年発掘調査の対象となり、５～６万年以前にまで遡る前期旧石器時代の遺跡を包蔵する重要な遺跡として注目をあつめた山田上ノ台遺跡の北縁に接して一段高い青葉山段丘状丘陵の南縁一画に位置しています。

仙台の中心的市街の北縁を画する台ノ原丘陵を「北の杜」とするならば、名取川北岸にせまる青葉山丘陵は南縁を画する「南の杜」とも言うべき貴重な緑園でありましたが、戦後の土地開放や市街地の拡大によって、近年、特に大型団地を中心とする土地開発が進展し、自然地形を大きく改変しながら市街化が促進されてきています。この北前遺跡を中心とする根岸地区一帯もその例にもれず、最近ますます宅地化が進められている現況にあります。

こうした中にあって、今回の発掘調査の対象となった北前遺跡の一画は、畑地として利用されてきたことによって保存継承されてきた貴重な遺跡でありますが、土地所有者の下山氏の、農業経営上、どうしても深く天地返しを行い、土壌の改良を計らねばならないとの要請から、仙台市教育委員会が県・国との協議を重ねた結果、国の補助対象事業として、緊急発掘調査に踏み切ることとなった次第であります。

本調査は、多くの地元民や学識者の協力を得ながら、８月から12月末まで実施されましたが、東北地方でも数少ない縄文時代早期（7,000～10,000年前）の集落跡の発見や、縄文時代前期（6,000～7,000年前）の土壙群の検証をはじめ、これらの遺跡群の基盤をなす火山灰層からは前期旧石器、後期旧石器時代の文化層も発見され、結論的には、隣接する山田上ノ台遺跡と連続する重要な複合遺跡であることが判明するに至りました。

本報告書は、その調査結果をまとめたものでありますが、調査や整理にあたっては、多くの方々のご協力やご指導と調査員の夜を徹しての労苦によって作成されたものであります。心から敬意と感謝を申し上げる次第であります。

本報告が多くの学兄諸氏、研究家はもとより、文化財保護啓蒙思想の啓発に大きく役立つことを念じて、その序にかえるものであります。

昭和57年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

本　文　目　次

序　　文
例　　言
調査要項
第Ⅰ章
　1．調査に至る経過……斎野……1
　2．遺跡の位置と環境……佐藤……1
　3．調査の概要……斎野……4
第Ⅱ章　層序……佐藤・斎野……6
第Ⅲ章　遺構と遺物
　1．遺物分類表……佐藤・斎野・吉岡・荒井……19
　2．旧石器時代……吉岡・荒井……27
　3．縄文時代早期の遺構と遺物……佐藤……44
　4．縄文時代前期の遺構と遺物……斎野……75
　5．縄文時代中期の遺構と遺物……斎野……99
　6．平安時代の遺構と遺物……斎野…117
　7．江戸時代の遺構と遺物……佐藤…122
　8．時期不明の遺構……斎野…138
第Ⅳ章　考察とまとめ
　1．縄文時代早期……佐藤…147
　2．縄文時代前期……斎野…151
　3．まとめ……佐藤…157

挿図・表目次

第1図　北前遺跡と周辺の遺跡分布図……2
第2図　調査区設定図……5
第3図　基本層序模式図……6
第4図　調査区基本層位（東西・南北断面図）……7
第5図　深掘りトレンチ断面図(1)……10
第6図　深掘りトレンチ断面図(2)……11
第7図　深掘りトレンチ柱状図……14
第8図　仙台付近の地質図……15
第9図　遺構全体図……17
第10図　縄文土器器形模式図……21
第11図　旧石器時代の石器出土状況図(1)……28
第12図　旧石器時代の石器出土状況図(2)……29
第13図　D－3a区15層上面出土石器（旧石器時代）……35

第14図　D－3a区15層上面出土石器
(旧石器時代)…… 36
第15図　Ⅰ－5b区17層上面出土石器
(旧石器時代)…… 37
第16図　Ⅰ－5b区17層上面出土石器
(旧石器時代)…… 38
第17図　Ⅰ－5b区17層上面出土石器
(旧石器時代)…… 39
第18図　Ⅰ－5b区17層上面出土石器
(旧石器時代)…… 40
第19図　Ⅰ－5b区17層上面出土石器
(旧石器時代)…… 41
第20図　Ⅰ－5b区第9層上面出土石器
(旧石器時代)…… 42
第21図　A－3d区 第5層上面出土石器
(旧石器時代)…… 43
第22図　1号住居跡（縄文時代早期）…… 45
第23図　2号住居跡（縄文時代早期）…… 46
第24図　2号住居跡出土遺物…… 47
第25図　3号住居跡（縄文時代早期）…… 50
第26図　3号住居跡出土遺物…… 51
第27図　4号住居跡（縄文時代早期）…… 52
第28図　4号住居跡出土遺物…… 53
第29図　5号住居跡・6号住居跡
(縄文時代早期)…… 55・56
第30図　5号住居跡出土遺物…… 57
第31図　7号住居跡（縄文時代早期）…… 58
第32図　6・7号住居跡出土遺物…… 59
第33図　8号住居跡（縄文時代早期）…… 60
第34図　7・8号住居跡出土遺物 …… 61
第35図　1号土壙（縄文時代早期）…… 66
第36図　2号・3号土壙（縄文時代早期）…… 67
第37図　4号・5号土壙（縄文時代早期）…… 68
第38図　5号土壙出土遺物・6号土壙
(縄文時代早期)…… 69
第39図　7・8・9号土壙（縄文時代早期）…… 70
第40図　包含層・遺構外出土土器…… 71
第41図　遺構外出土土器・早期包含層出土
円盤状土製品・石器 …… 72
第42図　11・12・13・14号土壙(縄文
(縄文時代前期末葉)…… 76
第43図　15号土壙（縄文時代前期末葉）…… 77
第44図　16・17号土壙（縄文時代前期末葉）…… 80
第45図　16号土壙出土遺物(縄文時代前期末葉)… 81
第46図　18・19・20・22号土壙
(縄文時代前期末葉)…… 82
第47図　22・21号土壙（縄文時代前期末葉）…… 83
第48図　23号土壙（縄文時代前期末葉）…… 86
第49図　24号・25号・26号土壙
(縄文時代前期末葉)…… 88
第50図　26号土壙（縄文時代前期末葉）…… 89
第51図　27・28号土壙（縄文時代前期末葉）…… 92
第52図　27・28号土壙出土遺物・29号土壙
(縄文時代前期末葉)…… 93
第53図　29号土壙出土遺物・30号土壙
(縄文時代前期末葉)…… 94
第54図　31号・32号・33号土壙
(縄文時代前期末葉)…… 95
第55図　遺構外出土縄文土器
(縄文時代前期末葉)…… 96
第56図　1号竪穴遺構（縄文時代中期中葉）
1号埋設土器（縄文時代中期後葉）……103
第57図　9号住居跡（縄文時代中期後葉）……105
第58図　9号住居跡（縄文時代中期後葉）……106
第59図　9号住居跡出土遺物……107・108
第60図　10号住居跡（縄文時代中期後葉）……109
第61図　10号住居跡出土遺物……110
第62図　10号住居跡出土遺物……111
第63図　遺構外出土遺物（縄文時代中期）……112
第64図　遺構外出土（縄文時代中期）…… 113
第65図　遺構外出土の縄文時代の石器(1)…… 114
第66図　遺構外出土の縄文時代の石器(2)…… 115
第67図　遺構外出土の縄文時代の石器(3)…… 116
第68図　11号・12号住居跡（平安時代）…… 119
第69図　11号・12号住居跡…… 120
第70図　11号・12号住居跡出土遺物、34号

35号・36号土壙（平安時代）…… 121
第71図　1号溝・2号溝（江戸時代）……123・124
第72図　3号・5号・6号溝（江戸時代）……125
第73図　4号溝（江戸時代）……127
第74図　7号・8号溝（江戸時代）……131
第75図　37号・38号、39号・40号・41号・
42号墓壙・43号土壙（江戸時代）……133
第76図　古銭・土師質土器（江戸時代）……134
第77図　時期不明土壙（44号～50号土壙）……143
第78図　時期不明土壙（51号～56号土壙）……144
第79図　時期不明土壙（57号～61号土壙）……145
第80図　時期不明土壙（62号～69号土壙）……146
第81図　第2群土器頻度分布図……150
第82図　前期土壙分布図……152
第83図　縄文時代前期末葉の土器……155
第1表　遺跡地名表……2
第2表　石器属性表（旧石器時代）……33
第3表　石核属性表（旧石器時代）……33
第4表　ピット計測表……73
第5表　遺構・区別土器集計表……74
第6表　9号住居跡柱穴一覧表……113
第7表　10号住居跡柱穴一覧表……113
第8表　古銭一覧表……137
第9表　土壙分類表……153
第10表　住居跡・工房跡・竪穴遺構・溝一覧表
江戸時代以降の遺物……158
第11表　土壙一覧表(1)、(2)……159
第12表　縄文時代の石器集計表……161
第13表　縄文時代の石器属性表……164

写　真　目　次

写真1　遺跡全景・旧石器時代の石器出土状況…169
写真2　縄文時代早期の住居跡……170
写真3　縄文時代早期の土壙……171
写真4　縄文時代前期末葉の土壙(1)……172
写真5　縄文時代前期末葉の土壙(2)……173
写真6　縄文時代前期末葉の土壙(3)……174
写真7　縄文時代中期の住居跡……175
写真8a　縄文時代中期の竪穴遺構他
8b　平安時代の住居跡・土壙……176
写真9　江戸時代の溝、土壙(1)……177
写真10a　江戸時代の土壙(2)
10b　時期不明の土壙(1)……178
写真11　時期不明の土壙(2)……179
写真12　時期不明の土壙(3)・調査風景……180
写真13　旧石器時代の石器(1)……181
写真14　旧石器時代の石器(2)……182
写真15　旧石器時代の石器(3)……183
写真16　縄文時代早期の土器……184
写真17　縄文時代前期末葉の土器(1)……185
写真18　縄文時代前期末葉の土器(2)……186
写真19　縄文時代前期末葉の土器(3)
中期の土器(1)……187
写真20　縄文時代中期の土器(2)……188
写真21　縄文時代の石器(1)……189
写真22　縄文時代の石器(2)……190
写真23　縄文時代の石器(3)……191
写真24　縄文時代の石器(4)……192
写真25　縄文時代の石器(5)……193
写真26　縄文時代の石器(6)……194
写真27a　平安時代の土器（土師器）
27b　江戸時代の土師質土器……195
写真28　江戸時代及び江戸時代以降の遺物……196

例　　言

1．本書は、農地改良に先立って行った、北前(きたまえ)遺跡の発掘調査の本報告書である。すでに公表された現地説明会資料等に優先するものである。

2．報告書作成のための整理は、佐藤洋・斎野裕彦が担当し、田中則和・吉岡恭平・荒井格・主浜光朗がこれを補佐した。また、直接整理に参加しなかった職員にも全面的な協力をいただいた。

また、編集は、整理参加職員の協力を得て、佐藤洋・斎野裕彦が行った。

3．本文の執筆は、佐藤洋・斎野裕彦・吉岡恭平・荒井格が分担し、本文目次に示した。

4．作図・写真撮影等については、下記の通り分担した。

遺構トレース：大場拓俊・斎藤秀寿・石黒伸一朗・松木仁・大友透・内藤隆史

遺構写真：佐藤洋・斎野裕彦・大場拓俊

遺物実測〈土器〉田中則和・主浜光朗・斎藤秀寿・石黒伸一朗・柿沼敏朗・古屋敷則雄・佐藤幸子・松岡敦子・藤沢敦

〈石器〉梶原洋・阿部朝衛・小川出・山田晃弘・横山裕平・藤田淳・吉岡恭平・荒井格

遺物トレース〈土器〉田中則和・主浜光朗・斎藤秀寿・藤沢敦・石黒伸一朗

〈石器〉阿部朝衛・山田晃弘・小川出・鈴木博子

遺物拓影：相沢史子・石黒伸一朗・古屋敷則雄・柿沼敏朗・古川陸子・佐藤幸子・吉田康子・松岡敦子

遺物復原：森剛男

遺物写真：田中則和・吉岡恭平・荒井格・主浜光朗・佐藤甲二・阿部朝衛

版組：田中則和・吉岡恭平・荒井格・主浜光朗・横山裕平・佐藤洋・斎野裕彦

地形・地質については豊島正幸氏、石材鑑定は佐々木隆氏に御教示を願った。

5．発掘調査及び遺物整理において、下記の方々に助言・協力を賜った。

伊東信雄（東北学院大学教授）、藤沼邦彦・岡村道雄（東北歴史資料館）、鎌田俊昭・藤村新一・梶原洋・阿部朝衛・小川出・山田晃弘・横山裕平・鈴木博子（石器文化談話会）、豊島正幸（東北大学院生）、佐々木隆（仙台市科学館）

以上敬称略

凡　　例

○本書中の土色については、「新版標準土色帳」(小山、竹原1973) を使用した。

○図版中の水糸レベルは海抜高を示す。

○本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の２万５千分の１「仙台南西部」を使用した。

○基本層序には「第」を付し、他の埋土や層の対比のできないものには付していない。

○遺構の名称は、時代・種類毎に通し番号を付し、時期不明の土壙は最後に扱った。

○本書で使用している「ローム」は、単に火山灰を示し、粒土区分した表現ではない。

○「埋土」という用語は、覆土、堆積土と同一の意味で用いている。

○土壙の埋土が単層の場合は、文章中で述べただけのものもある。

○写真図版のうち、縄文早期の土器については、外面、内面を上下で示した。

○ ▒ 印は図版中焼土を示す。

○ ▒ 印は図版中炭化物を示す。

○北前遺跡の出土遺物は、仙台市教育委員会が一括保管している。

調　査　要　項

遺 跡 名 称　北前遺跡（Ｃ－131）

所　在　地　仙台市山田字北前46－12

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担 当 職 員　佐藤洋・斎野裕彦

調 査 期 間　昭和56年９月１日～12月28日

調査対象面積　2,500㎡

調 査 面 積　1,320㎡

調査参加者　大場拓俊、大友透、松木仁、長谷川徹、内藤隆史、五十嵐康洋、高橋建一、樋口賢一、諸沢暁、古川睦子、小野正康、八島浩一郎、阿部正規、真壁三郎、三品雄一、石川俊英、木戸春夫、小原ミツヨ、阿達成子、大里ちよし、沼田和子、阿部とよ子、沼田スエノ、菅井マツ子、沼田すい子、阿部とめよ、千葉時子、目黒和子、阿部貞子、柴崎清子、阿部あき子、阿部いしよ、阿部武志、阿部高子、阿部とめよ、太田かつ子、大里美恵子、大久節子、小野俊子、小沼ちえ子、加藤けい子、川村玲子、甲山静子、佐伯千圭子、佐藤ふみ子、佐藤よし江、庄司よしみ、鈴木つや子、西村日出子、早坂みつえ、曳地いな子、沼田廣子、沼田絹子、嶺岸光子、梶原洋、阿部朝衛、小川出、山田晃弘、石黒伸一朗、柿沼敏朗、佐藤政人、山田しょう

第Ⅰ章　調査の概要

1．調査に至る経過

仙台市西部の山田地区は、近年まで畑地等に利用され遺跡も比較的良好な保存状況を示していた。しかし最近の団地や宅地の造成に伴ない畑地も急速に姿を消しつつあり、それと並行して遺跡の破壊が進行している。

今回の調査は、団地や宅地などの造成工事等によるものではなく、農地改良により遺跡が破壊される危険が生じたためによるものである。当地区は畑として使用されていたが、天地返しにより地表下１ｍまで攪乱される事になったため、仙台市教育委員会では昭和54年２月に試掘調査を行なった。その結果地表下20～30cmで遺構面となり縄文時代の遺物を出土し、また遺構のプランも確認した。その後、本調査区南約200m位置する山田上ノ台遺跡が昭和55年度に調査され、旧石器時代・縄文時代・平安時代にわたる複合遺跡であることがわかり、同じ丘陵上に位置する北前遺跡はその関連性において重要視されてきた中で調査を行なうに至った。

2．遺跡の位置と環境

仙台市内には、名取川およびその支流である広瀬川が東流している。この河間の丘陵は蕃山丘陵と呼ばれ、残丘の多い、起伏に富む丘陵（370～100ｍ）である。この丘陵の南部には、岩頚と呼ばれる太白山（標高320.8ｍ）が存在し、仙台駅の南西約7.5kmに位置している。

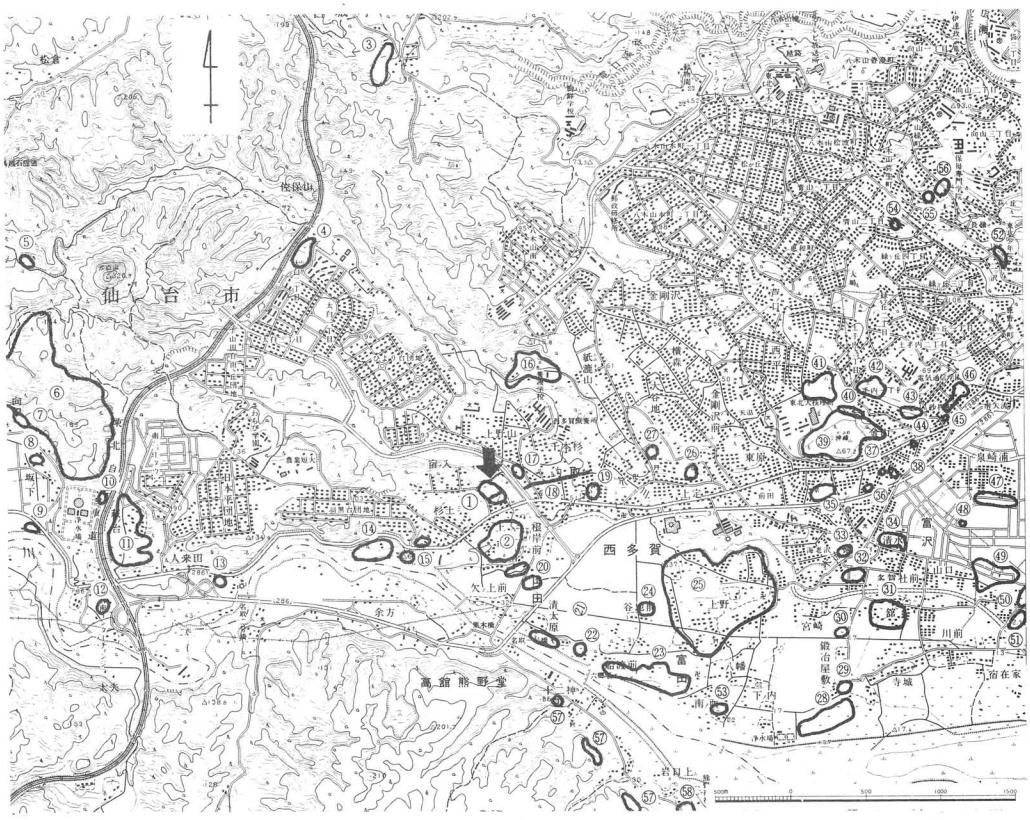
この太白山から南東に丘陵が伸び、この丘陵上には太白団地や日本平団地などの団地群が所在している。また、この丘陵は、名取川および太白山周辺に源を発する笊川の河間にあり、さらに名取川の支流によって２つに分離されている。２つの丘陵には、それぞれ山田・鈎取付近で段丘が連なる。

このうち、北前遺跡は西側の丘陵に連なる山田付近の段丘面上（山田面）にのっている。また、昭和53年度に調査し、前期旧石器時代の石器などが発見された山田上ノ台遺跡も同一面上に存在する。しかし、この段丘面が地形学上、台ノ原段丘・上町（かみまち）段丘（注）のどちらに属するかはまだ決着をみていない。

歴史的環境

仙台市南部には、名取川が形成した扇状地および名取川左岸の青葉山段丘南側などに、多くの遺跡群が散在している。これらの遺跡群については、先に山口遺跡の報告書において指摘したところである（佐藤洋：1981）。ここでは、北前遺跡周辺に限って述べることにする。

北前遺跡の南約200ｍには、前期旧石器時代の文化層や縄文時代中期の集落跡などが検出された山田上ノ台遺跡（第１図２）があり、さらに南側には名取川が形成した自然堤防上に清太



第１図　北前遺跡と周辺の遺跡分布図

遺跡番号	遺跡名	所属時期	遺跡番号	遺跡名	所属時期
1	北前遺跡	旧石器（前、後）、縄文（早、前、中）、平安、江戸	30	鍛冶屋敷Ａ遺跡	奈良、平安
2	山田上ノ台遺跡	旧石器（前、後）、縄文（早、中、後）、平安、江戸	31	富沢館跡	奈良、平安、中世
3	青葉山遺跡	旧石器	32	掘ノ内遺跡	奈良、平安
4	佐保山東遺跡	縄文、平安	33	富沢上ノ台遺跡	奈良、平安
5	梨野横穴群	縄文、奈良、平安（？）	34	富沢清水遺跡	縄文、奈良、平安
6	茂庭東館	中世（けんとう城）	35	原遺跡	古墳、奈良、平安
7	向根横穴群	古墳	36	原東遺跡	古墳、奈良、平安
8	坂ノ下遺跡	弥生、古墳、平安	37	裏町古墳	古墳
9	中ノ瀬遺跡	縄文、奈良（末）、平安	38	裏町東遺跡	古墳
10	人来田Ａ遺跡	縄文（中）、弥生（中）	39	三神峯遺跡	旧石器、縄文（早、前、中）
11	人来田遺跡	縄文（中）、弥生	40	土手内横穴群	奈良、平安（？）
12	人来田Ｂ遺跡	縄文、古墳、平安	41	芦ノ口遺跡	平安
13	人来田Ｃ遺跡	縄文、古墳、平安	42	土手内遺跡	縄文、奈良、平安
14	羽黒台遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	43	土手内窯跡	奈良、平安
15	羽黒堂遺跡	縄文、古墳、平安	44	金洗沢古墳	古墳
16	御堂平遺跡	縄文、奈良、平安	45	砂押古墳	古墳
17	上野山遺跡	縄文	46	砂押屋敷遺跡	奈良、平安
18	杉土手	江戸	47	泉崎浦遺跡	縄文（後）、古墳、奈良、平安
19	町遺跡	縄文、古墳、平安	48	教塚古墳	古墳
20	汚田通遺跡	縄文、奈良、平安	49	山口遺跡	縄文（中、後）、弥生、古墳、奈良、平安
21	清太原西遺跡	縄文（中）、奈良、平安	50	六反田遺跡	縄文（中、後、晩）、弥生、古墳、奈良、平安
22	清太原東遺跡	縄文（中）、奈良、平安	51	伊古田遺跡	奈良、平安
23	船波前遺跡	縄文（中、後）、弥生、奈良、平安	52	二ッ沢横穴群	奈良
24	谷地前遺跡	奈良、平安	53	富田南西遺跡	奈良、平安（？）
25	上野遺跡	縄文（中、後）、奈良、平安	54	青山二丁目遺跡	奈良、平安
26	八幡遺跡	古墳、奈良、平安	55	二ツ沢遺跡	縄文
27	後田遺跡	奈良、平安（？）	56	八木山緑町遺跡	縄文（中）
28	六本松遺跡	奈良、平安	57	熊野堂横穴群	古墳、奈良
29	鍛冶屋敷Ｂ遺跡	奈良、平安	58	岩口上遺跡	古墳、奈良、平安

第１表　北前遺跡と周辺の遺跡地名表

原西遺跡（第１図21)、清太原東（第１図22)、船渡前遺跡（第１図23）など縄文時代中期および奈良、平安時代の遺跡が散在している。また、先の船渡前遺跡では、弥生時代の包含層が確認されている。東側では、裏町古墳（第１図37)、町遺跡（第１図19)、原遺跡（第１図35）などの縄文、古墳～平安時代に属する遺跡や縄文時代前期の集落跡として知られる三神峯遺跡（第１図39）が散在している。また、北側には、古くより旧石器時代の遺跡として知られる青葉山遺跡（第１図３）や今年度宮城県教育委員会が調査を行った御堂平遺跡（第１図16）などがある。さらに、西側には先に指摘した山田上ノ台遺跡や上野遺跡（第１図25）などと同様に広大の面積をもつ、縄文時代が主体の人来田遺跡（第１図11)、さらに平安時代を主体とする羽黒台遺跡（第１図14）などがある。しかし、その内容が十分に把握されている遺跡は数少ない。また、歴史的変遷をたどる場合、空白となる時期も数多く存在する。こうした状況の中で、今回の北前遺跡の調査は極めて意義深いものがある。すなわち、山田上ノ台遺跡の旧石器時代の文化層を追認したこと、ほとんど不明であった早期の住居跡（集落跡）や前期末の土壙群などを検出した。しかも、今回北前遺跡の調査において検出された、縄文時代以後の各時期に渡る遺構は山田上ノ台遺跡（仙台市教育委員会：1980）より検出された遺構と相互補完的な状況を示している。段丘上における人間活動の変遷を知る上で貴重な発見になったといえるだろう。

注　仙台市内には、高位から青葉山段丘・台ノ原段丘・上野段丘・中町段丘・下町段丘の大きく５つの段丘に分類されている。このうち、台ノ原段丘は南関東の下末吉段丘・武蔵野段丘に対比され、また、中町段丘は立川段丘に対比されている。（地団研仙台支部編：1980）

3. 調 査 の 概 要

調査は９月１日より開始され、方位に合わせて調査区に６ｍグリッドを設定した。東西ラインを東から１～11、南北ラインは北からＡ～Ｊとし、北東杭をグリッド名とした。グリッドはさらに四分割し北東区をａとし、時計まわりに以下をｂ・ｃ・ｄとした。南東部は当初から攪乱が及んでいたことが知られていたため、調査区Ｆライン以南、７ライン以東に幅50cmのトレンチを入れ攪乱の範囲を確認し土捨て場とした。攪乱の及んでいない他の調査区については各グリッドのａ区及びｃ区をあけて遺構確認を行ない、状況に応じて拡張した。また調査区が、昭和54年度の調査で旧石器時代の文化層の存在が確認された山田上ノ台遺跡と同じ段丘上にあることから、本調査区においても旧石器時代の文化層の存在が予測された。このため調査区南東部の各地形の縁辺に計６ケ所の探掘りトレンチを設定し調査を行なった。

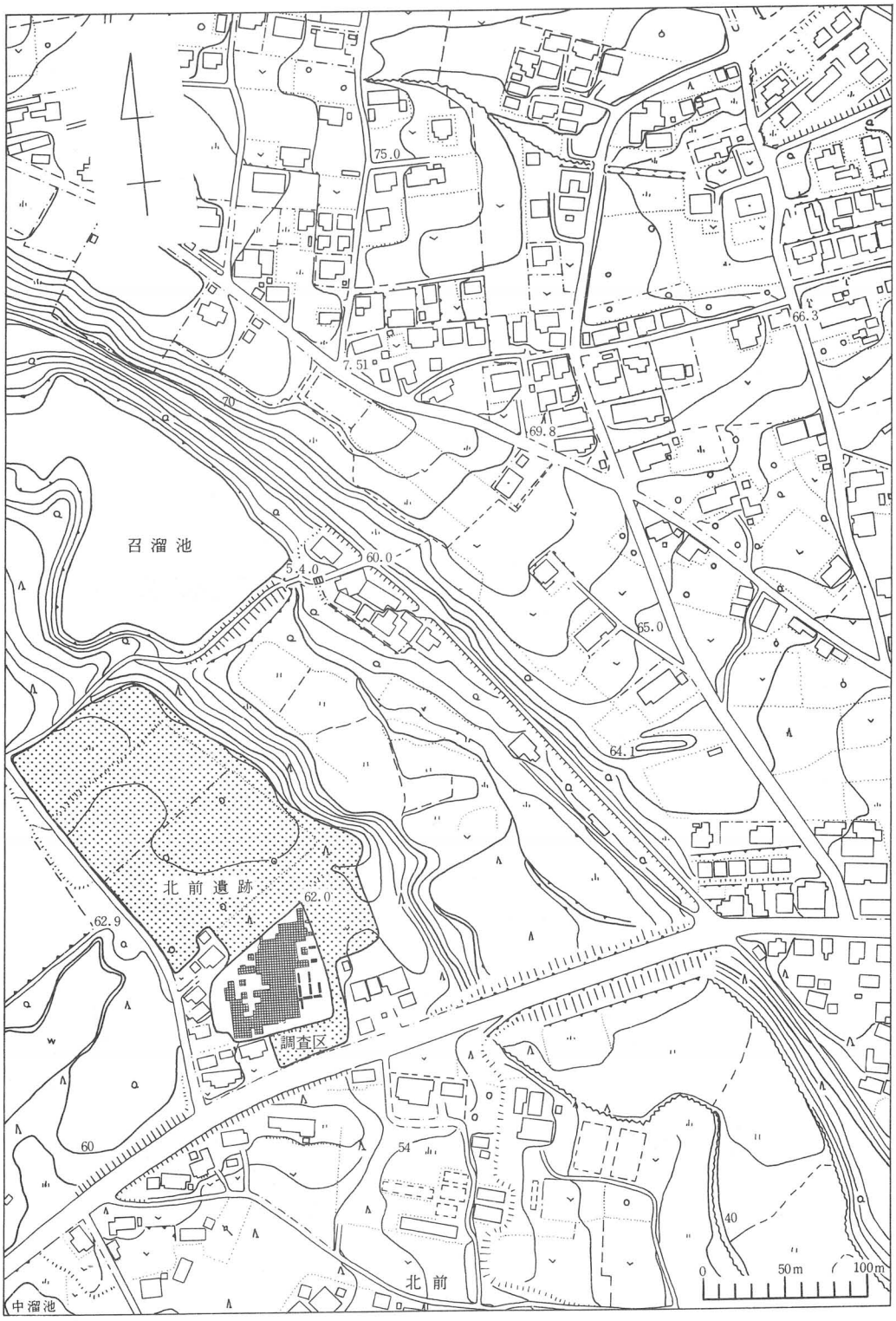
また、耕作土中に遺物が散乱していること、耕作土下20～40cmで火山灰層に到達することから、全て手掘りで行なった。

検出された遺構は竪穴住居跡12棟・竪穴遺構１基・埋設土器１基・土壙69基・溝跡８条・工房跡１棟であった。時代は縄文時代早期後葉、縄文時代前期末、縄文時代中期中葉、平安時代江戸時代後半と各時代にわたる。さらに旧石器時代の文化層も確認された。

特に山田上ノ台遺跡と同様に旧石器時代の文化層が２～３枚確認され、２万数千年～３万数千年前より以前の石器が20数点出土している。旧石器時代に関しては今回は文化層の確認の域にとどまった。また縄文時代早期後葉の竪穴住居跡が８棟、土壙が10基確認され、志津川町の大平館跡に次いで県内では２番目の集落跡の発見となった。竪穴住居跡１棟を除きほとんどの遺構は調査区南側に集中する。中に１棟だけ大型の住居跡も見られる。縄文時代前期末に属する遺構は土壙だけであるが、北半部から西半部に分布し、調査区北側中央に集中する傾向が見られる。縄文時代中期では、長軸約7.5m程の大型の住居跡が検出された。他に平安時代の竪穴住居跡、江戸時代後半の墓壙などが検出されている。遺物も各時期にわたり多量に出土した。

調査は４ケ月間に及び、その間、11月20日には現地説明会を開き一般市民への公開の場とした。また、現地説明会の時点では旧石器時代の文化層は確認されていなかったため、新聞・テレビの報道により一般公開の場とした。

調査終了は12月28日、埋戻しは１月25～27日に行なった。


召溜池
北前遺跡
調査区
北前
中溜池
75.0
7.51
69.8
66.3
60.0
5.4.0
65.0
64.1
62.0
62.9
70
60
54
40
0
50m
100m

第2図 調査区設定図

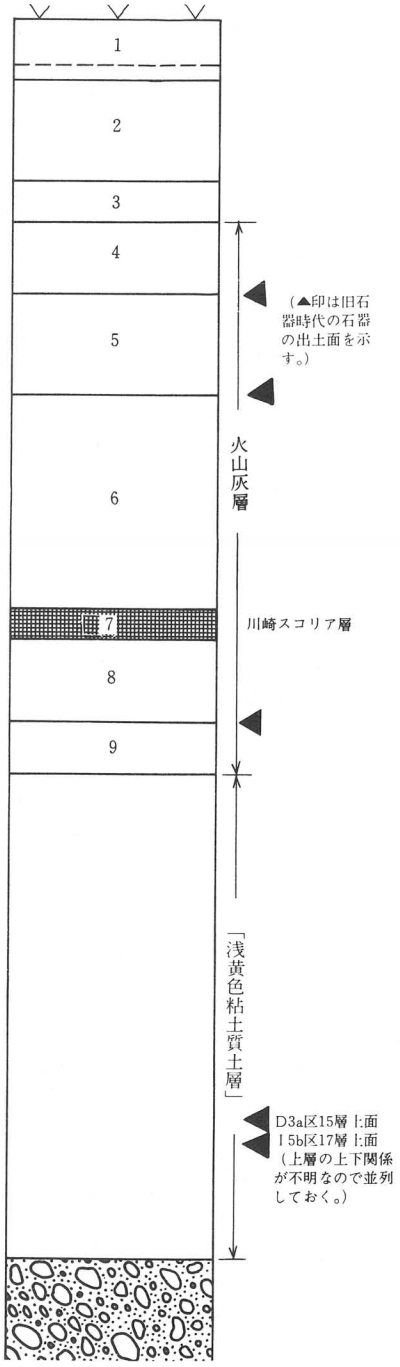
第Ⅱ章　層　　序

Ｄ－３ａ区の層位を基本として各層の概略とその成因について述べることにする。調査区の基本的な層位は大きく４つに分けられる。第１層の耕作土、第２層・第３層のシルト質土層、第４層～第９層の火山灰層、10層～15層の砂～粘土層である。第１層は約20cmの厚さで調査区全域にみられるが、第２層・第３層は部分的な広がりを示す。特に調査区南東部は南に開く浅い谷地形を呈し、第３層はこの谷部にしかみられない。第４層～第９層の火山灰層は調査区全域にわたってみられるが、第７層は部分的にしかみられない。10層～15層の各層は、土色は明黄褐色、浅黄色、灰黄褐色を呈するが、浅黄色が多く、土性は砂～粘土とさまざまであるが、粘土質シルトと粘土が大半を占める。ここではこの10層～15層を一括して「浅黄色粘土質土層」とよぶ。「浅黄色粘土質土層」は調査区全域にみられる。以上の層の基盤は段丘礫層である。

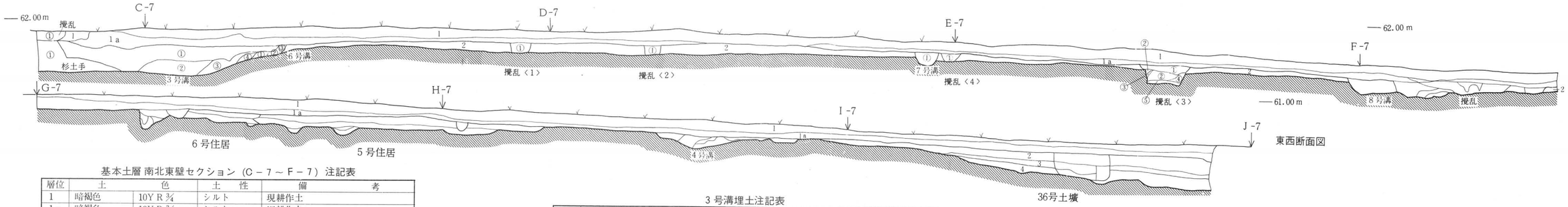
当地区は名取川の旧河床面でありその時に堆積したものが上述の段丘礫層である。名取川が下刻（かこく）（注１）に転じ河床面が離水する（段丘化する）と、当地区は支谷からの供給物質（主に砂・シルト・粘土）の堆積の場となる。この時堆積した支谷起源の堆積物が「浅黄色粘土質土層」である。この層の起源となっているものは層相から判断して当地区の北側に分布している軽石質凝灰岩（旗立（はたたて）層）（地学団体研究会仙台支部編：1980）である。この層の堆積には支谷の流水が関与してはいたものの、主な堆積はある降水強度（注２）以上の降雨があった時に生じやすかったと考えられる。従って当地区が当時常に水の影響を受けていたわけではなく、十分に生活面になり得る状態であったと判断される。

第４層～第９層の火山灰層は降下火山灰層である。

第１層の耕作土・第２層・第３層のシルト質土層も「浅黄色粘土質土層」同様に支谷起源の堆積物と考えられる。



第３図　基本層序模式図



東西断面図

基本土層 南北東壁セクション（C－7～F－7）注記表

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	現耕作土
1a	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	旧耕作土
2	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	
3	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	
4	明褐色	7.5 Y R 5/8	シルト	ローム漸移層

3号溝埋土注記表

1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
3	褐　色	10Y R 3/4	シルト	
4	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	

6号溝埋土注記表

1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物を少量含む。
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
3	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	

3号溝を切る撹乱

1	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	炭化物を少量含む。

杉土手

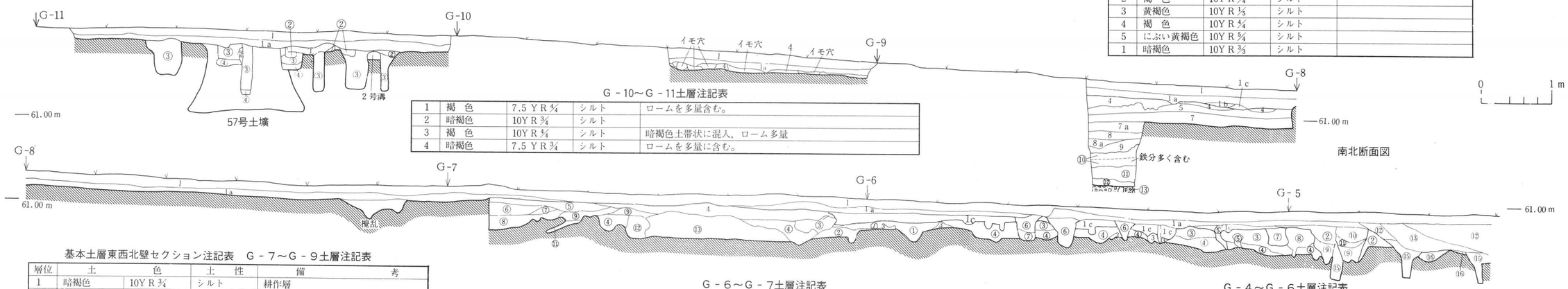
1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	

7号溝埋土注記表

1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	ロームを含む。

撹乱注記表

1	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	
1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
2	褐　色	10Y R 4/4	シルト	
3	黄褐色	10Y R 1/8	シルト	
4	褐　色	10Y R 4/4	シルト	
5	にぶい黄褐色	10Y R 5/4	シルト	
1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	



南北断面図

G－10～G－11土層注記表

1	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	ロームを多量含む。
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
3	褐　色	10Y R 4/4	シルト	暗褐色土帯状に混入，ローム多量
4	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	ロームを多量に含む。

基本土層東西北壁セクション注記表　G－7～G－9土層注記表

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	耕作層
1a	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	旧耕作層
1b	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
1c	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	
3	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	
4	褐　色	10Y R 4/4～4/6	シルト	ローム漸移層
5	黄褐色	10Y R 5/8	シルト	軟質ローム
7	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	硬質ローム
7a	黄褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	スコリア，小円礫をわずかに含む。
8	明黄褐色	10Y R 6/6	シルト	細砂を多量含む。
8a	明黄褐色	10Y R 7/6	砂質シルト	黒色粒子（マンガン？）を少量含む。
9	にぶい黄色	2.5 Y 6/3	粘土質シルト	白色粒（軽石？）を少量含む。
10	にぶい黄色	2.5 Y 6/4	粘　土	白色礫をわずかに含む。
11	浅黄色	2.5 Y 7/3～7/4	粘土質シルト	細砂を多量含む。
12	浅黄色	2.5 Y 7/3～7/4	シルト質砂	わずかに小円礫を含む。
13	浅黄色	2.5 Y 7/3～7/4	シルト質砂	砂礫層

G－6～G－7土層注記表

1	褐　色	10Y R 4/4	シルト	明黄褐色ブロック・粒子を含む。
2	褐　色	10Y R 4/4	シルト	明黄褐色ブロック・粒子を全体に含む。
3	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	明黄褐色粒子を多量に含む。
4	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	層下部に明黄褐色ブロック・粒子を含む。
5	褐　色	10Y R 4/4	シルト	全体に明黄褐色ブロック・粒子を含む。
6	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	全体に明黄褐色ブロック・粒子を含む。
7	黄褐色	10Y R 5/8	シルト	暗褐色ブロックを含む。
8	暗褐色	10Y R 5	シルト	明黄褐色ブロック・粒子を少量含む。
9	暗褐色	10Y R 2/4	シルト	明黄褐色ブロック・粒子を全体に含む。
10	暗褐色	10Y R 3	シルト	明黄褐色ブロック・粒子を少量含む。
11	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	明黄褐色ブロックを少量含む。
12	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	明黄褐色ブロックを少量含む。
13	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	明黄褐色粒子を微量含む。

G－4～G－6土層注記表

1	褐　色	10Y R 4/4	シルト	明黄褐色土粒子を含む。
2	褐　色	7.5 Y R 3/3	シルト	
3	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	
4	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	
5	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	
6	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
7	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	
8	褐　色	10Y R 4/6	シルト	
9	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	明黄褐色土ブロックを少量含む。
10	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	明黄褐色土を少量含む。
11	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
12	暗褐色	10Y R 4/6	シルト	明黄褐色土ブロックを多量含む。
13	明褐色	7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	ほとんどロームブロック
14	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	明赤褐色土粒子を多量に含む。
15	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	黄褐色土粒子を多量に含む。
16	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	明褐色土ブロックを少量含む。

第４図　調査区基本層位（東西・南北断面図）

なお昭和55年度に調査された山田上ノ台遺跡で段丘礫層上に堆積する第13層、第15層～第32層（仙台市教委：1981）は、当地区の「浅黄色粘土質土層」と同一起源の層と判断される。また、当地区ののる段丘面については上町段丘に比定する説（田山：1933・中川：1960・1961）と台ノ原段丘に比定する説（中田他：1976）の両説がある。山田上ノ台遺跡では段丘礫層の標高が50～55m、当地区では59～60mと、5～10mの標高差があるが両者間に明瞭な段丘崖は認められないため両者は同一段丘にのるものとして捉えられる。

以下各層について記述するが、「浅黄色粘土質土層」の各層は層相変化が顕著であると見られるので、これらの各層をトレンチ間で対比を行なうのは困難である。このため10層以下は各トレンチごとにそれぞれ記述した。

第1層　10YR3/3暗褐色シルト。耕作土である。この層は、さらに2層に細分される。上部の層は現在の耕作土であり、下部の層は堅緻で小礫や磁器等を含む。この下部の層は、およそ江戸時代以降に形成されたものである。また、調査区のほぼ全域にわたって、2層以下まで芋穴が穿たれている。また、Eライン以南、4ライン以東は削平を受けている。

第2層　10YR2/2黒褐色シルト。この層は、調査区東部に存在し、北部の土壙が密集する地区から、調査区東南部にかけてみられる。縄文時代早期～中期にかけての遺物が出土している。平安時代以降の遺構は、この層を掘り込んでいる。また、極めて狭い範囲ではあるが、F－4区からG－5区にかけての一部とB－4区に黒色砂質シルト（7.5YR1.7/1）が認められた。この黒色土中から、土師質土器（江戸時代）が出土している。

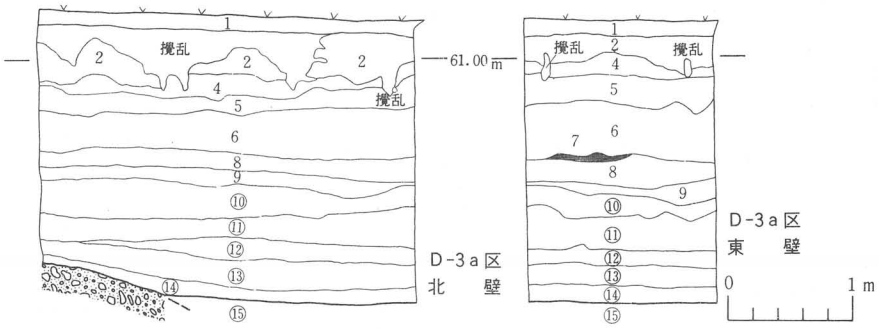
第3層　10YR3/4暗褐色シルト。円礫、亜角礫、炭化物を含む。この層は、調査区南東部の縄文時代早期の住居群の分布範囲に限られる。早期の土器、石器等が出土することから、縄文時代早期の包含層である。

第4層　10YR4/6褐色シルト質粘土（火山灰層）比較的軟質で、粘性は弱い。径約1cmの硬質ロームブロックを含む。木の根の攪乱が多い。

第5層　10YR5/6黄褐色シルト質粘土（火山灰層）。しまりがあり、粒子は細かく、白色の微粒子やパミス（2～3cm）をわずかに含み、粘性は弱い。この層の上面からは旧石器時代の石器が出土している。

第6層　10YR5/6黄褐色シルト質粘土（火山灰層）。第5層と比較すると、しまりはさらにあり、白色微粒子や岩片（0.5～1.0cm）をわずかに含む。この層の上面からは旧石器時代の石器が出土している。

第7層　10YR6/8明黄褐色砂質シルト（火山灰層）。この層は「川崎スコリア層」を含む固結

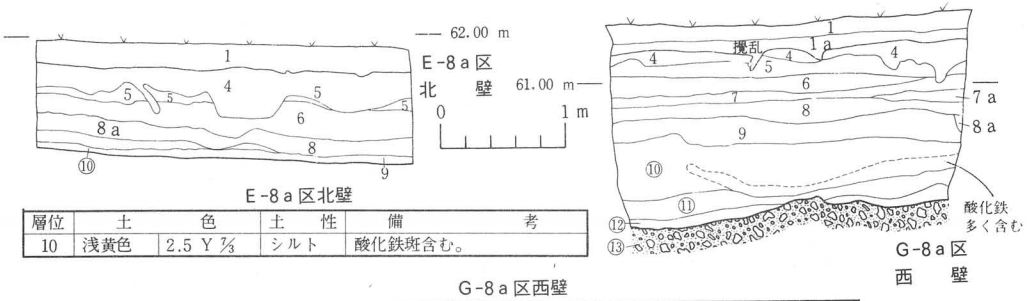


D-3a区北壁

層位	土　色		土　性	備　考
10	明黄褐色	10YR 6/6	シルト質粘土	マンガン斑が明瞭に見られる。
11	明黄褐色	10YR 7/6	シルト質粘土	マンガン斑・酸化鉄斑入る。
12	浅黄色	2.5 Y 7/4	粘　土	マンガン斑若干入る。
13	浅黄色	2.5 Y 7/4	粘　土	マンガン斑を13より多く含む。
14	浅黄色	2.5 Y 7/4	粘　土	砂っぽい粘土。
15	浅黄色	2.5 Y 7/4	砂質シルト	マンガン斑・小礫を若干含む。

D-3a区東壁

層位	土　色		土　性	備　考
10	明黄褐色	10YR 6/6	シルト質粘土	マンガン斑が明瞭に見られる。
11	明黄褐色	10YR 7/6	シルト質粘土	マンガン斑・酸化鉄斑入る。
12	浅黄色	2.5 Y 7/4	粘　土	マンガン斑若干入る。
13	浅黄色	2.5 Y 7/4	粘　土	マンガン斑を13より多く含む。
14	浅黄色	2.5 Y 7/4	粘　土	砂っぽい粘土
15	浅黄色	10YR 7/4	砂質シルト	マンガン斑，小礫を若干含む。

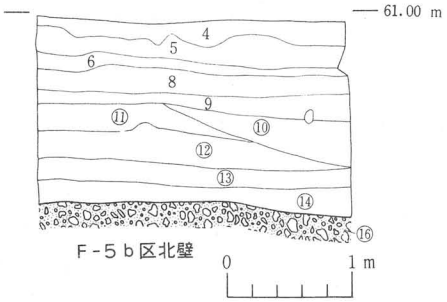


E-8a区北壁

層位	土　色		土　性	備　考
10	浅黄色	2.5 Y 7/3	シルト	酸化鉄斑含む。

G-8a区西壁

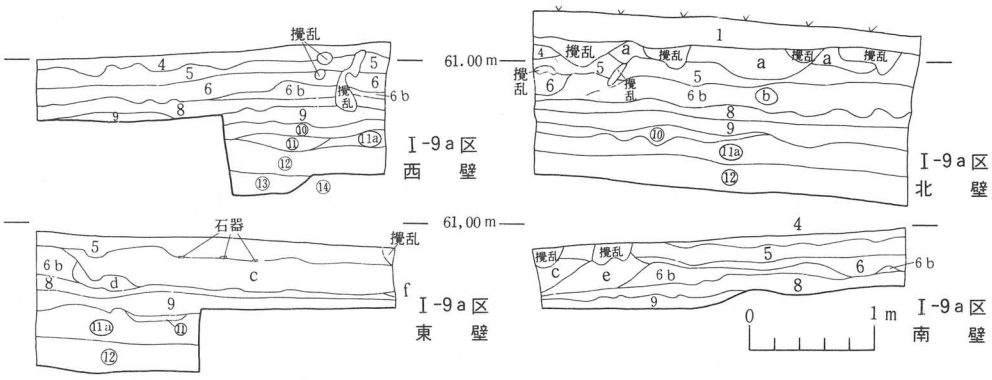
層位	土　色		土　性	備　考
10	にぶい黄色	2.5 Y 6/4	粘　土	白色粒をわずかに含む。
11	浅黄色	2.5 Y 7/3	粘土質シルト	細砂を多量含む。
12	浅黄色	2.5 Y 7/3	シルト質砂	わずかに小円礫を含む。
13	浅黄色	2.5 Y 7/3	砂　礫	



F-5b区北壁

層位	土　色		土 性
10	浅黄色	2.5 Y 7/3	粘土
	岩片，マンガン斑含む。一部酸		
11	明黄褐色	10YR 7/6	シルト
	マンガン斑多量に含む。		
12	浅黄色	2.5 Y 7/4	粘土
	岩片，マンガン斑含む。一部酸化		
13	浅黄色	2.5 Y 7/4	粘土
	小礫少量含む。マンガン斑含む。		
14	灰黄色	2.5 Y 7/2	シルト
	酸化部分層状に入る。		
15	浅黄色	2.5 Y 7/4	砂
	小礫，マンガン斑含む。		
16	浅黄色	2.5 Y 7/4	砂
	礫多量含む。		

第５図　深掘りトレンチ断面図(1)



Ⅰ-9a区西壁

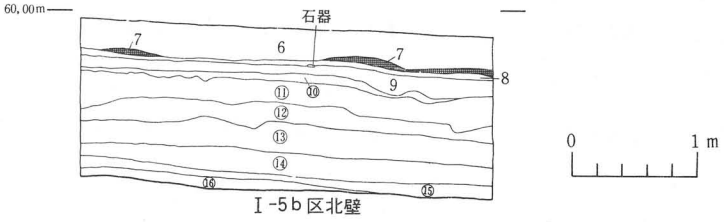
層位	土	色	土　性	備　　考
10	明黄褐色	10YR 6/6	シルト	酸化鉄斑若干含む。
11	にぶい黄燈色	10YR 6/6	シルト質粘土	白色粒子・酸化鉄斑多量含む。
11a	浅黄色	2.5Y 7/3	粘　土	マンガン斑若干含む。酸化鉄斑多量含む。
12	浅黄色	10YR 7/4	粘　土	小礫含む。 縞状に酸化鉄含む。
13	浅黄色	2.5Y 7/3	粘　土	白色粒子若干含む。
14	浅黄色	2.5Y 7/3	粘土質シルト	礫多量含む。

Ⅰ-9a区北壁

層位	土	色	土　性	備　　考
10	明黄褐色	10YR 6/6	シルト	酸化鉄斑若干含む。
11a	浅黄色	2.5Y 7/3	粘　土	マンガン斑若干含む。酸化鉄斑多量含む。
12	浅黄色	10YR 7/4	粘　土	小礫含む。しま状に酸化鉄含む。
14	浅黄色	2.5Y 7/3	粘土質シルト	礫多量含む。

Ⅰ-9a区東壁

層位	土	色	土　性	備　　考
11	にぶい黄褐色	10YR 6/4	シルト質粘土	白色粒子・酸化鉄斑多量含む。
11a	浅黄色	2.5Y 7/3	粘　土	マンガン斑若干含む。酸化鉄斑多量含む。
12	浅黄色	10YR 7/4	粘　土	小礫含む。しま状に酸化鉄含む。
a	褐　色	7.5YR 4/4	粘土質シルト	カーボン粒・白色粒子をまばらに含む。
b	褐　色	10YR 4/6	ローム	小礫・白色粒子をまばらに含む。
c	黄褐色	10YR 5/8	粘土質シルト	マンガン斑・黄燈色土粒を多量に含含。
d	黄褐色	10YR 5/8	粘土質シルト	マンガン斑を多量に，黄色土粒をまばらに含む。
e	褐　色	10YR 4/6	粘土質シルト	マンガン斑・黄燈色土粒を多量に含む。



Ⅰ-5b区北壁

Ⅰ-9a区北壁

層位	土	色	土　性	備　　考
10	明黄色	10YR 6/6	シルト	白色粘土を多量に含む。
11	浅黄色	2.5Y 7/4	シルト質粘土	砂・酸化鉄を含む。
12	浅黄色	2.5Y 7/3	粘　土	酸化鉄を含む。
13	浅黄色	5Y 7/3	粘　土	12層より砂っぽい。
14	橙　色	7.5YR 6/6	粘　土	酸化鉄を含む。
15	灰白色	5Y 7/2	粘　土	円礫を多量に含む。
16	浅黄色	2.5Y 7/4	シルト質砂	マンガンを微量含む。
17	明黄褐	2.5Y 7/6	シルト質砂	小礫を含む。

第６図　深掘りトレンチ断面図(2)

部に相当する。「川崎スコリア層」は、蔵王起源と推定され、その噴出年代は^{14}C 年代で$31,500^{+2,610}_{-1,970}$年B.P.(TH−365) から$26,240^{+1,360}_{-1,160}$年B.P.(TH−309) の間のある時期とされる(板垣他：1981)。この層は発掘区毎に異っており、まったく存在しない場所、層厚約4cmのスコリア層を伴なっている場所、スコリア層が痕跡的に残っている場所など様相を異にしている。なお、この層は永野火山灰層（中川他：1960）の基底部に相当する。

第8層　10YR4/6褐色シルト質粘土（火山灰層)。粘土化が進み堅緻である。クラックが発達している。岩片（0.5〜1.0cm）を多量に、マンガン斑をわずかに含む。この層の上面には明瞭な風化帯が形成されている。

第9層　10YR5/8黄褐色シルト質粘土（火山灰層)。粘土化が進み第8層よりさらに堅緻である。第8層と同様の岩片およびマンガン斑を多量に含む。この層の上面からは旧石器時代の石器が出土している。

〈D−3 a区〉

10層　10YR6/6明黄褐色シルト質粘土。しまりがあり、0.2〜5.0cmの風化礫を多量に含む。マンガン斑が多量に含まれ、部分的に砂を含む。

11層　10YR7/6明黄褐色粘土質シルト。しまりがあり、粘性が強く、部分的に砂が入る。マンガン斑、酸化鉄斑を含み、小円礫（0.1〜2.0cm）もわずかに含まれる。

12層　2.5Y7/4浅黄色粘土。しまりが非常にある。堅緻である。明黄褐色土(2.5Y6/6)が斑状に混入し、マンガン斑をわずかに含む。

13層　2.5Y7/4浅黄色粘土。しまりが非常にある。堅緻である。明黄褐色土(2.5Y6/8)が全体的に含まれ、細砂、マンガン斑を多量に含む。

14層　2.5Y7/4浅黄色粘土。しまりがあり、黄色粘土（2.5Y7/8）を一部に含む。13層に比較すると、かなり砂質となる。

15層　10YR7/4浅黄色砂質シルト。しまりが非常にあり、黄橙色砂（10YR7/8）を含み、マンガン斑、小礫（0.2〜2.0cm）をわずかに含む。この層の上面より、旧石器時代の石器が出土している。

〈E−8 a区〉

10層　2.5Y7/3浅黄色シルト。しまりがあり、粘性は弱い。明黄褐色土（10YR7/6）を一部に含み、マンガン斑、酸化鉄斑、石英粒がわずかに含まれる。

〈G−8 a区〉

10層　2.5Y6/4にぶい黄色粘土。しまりが非常にある。白色の粒子、小礫（約1.0cm）がわずかに含まれる。

11層　2.5Y7/3浅黄色粘土質シルト。しまりが非常にあり、粘性は弱い。細砂を多量に含み、マンガン、白色の小礫(0.5～1.0cm)がわずかに含まれる。

12層　2.5Y7/3浅黄色シルト質砂。11層に比較すると、砂粒は粗くなる。小円礫がわずかに含まれる。

13層　砂礫層。マトリックスは、12層と共通するシルト質砂である。礫はかなり風化を受けた最大約20cmの円礫・亜角礫である。

〈F－5 b区〉

10層　2.5Y7/3 浅黄色粘土。しまりが非常にある。一部に酸化鉄斑（10YR7/8）が含まれ、下部においては帯状となってみられる。マンガン斑を含み、岩片（1～2mm）が多量に含まれる。

11層　10YR7/6明黄褐色シルト。しまりがあり、粘性は弱い。一部に明黄褐色粘土（2.5Y6/6）を含み、マンガン斑（0.2～0.3cm）が多量に含まれる。

12層　2.5Y7/4浅黄色粘土。しまりが非常にある。マンガン斑（0.5～1.0cm）を縞状に多量に含み、岩片が少量含まれる。

13層　2.5Y7/4浅黄色粘土。しまりが非常にある。一部に黄橙色砂（10YR7/8）を含み、マンガン斑、小礫（約1.0cm）がわずかに含まれる。

14層　2.5Y7/2灰黄褐色粘土。しまりがあり、上下に黄橙色酸化鉄（10YR7/8）が帯状に入る。

15層　2.5Y7/4浅黄色砂。しまりはあるが、粘性なし、小礫、マンガン斑をわずかに含む。15層は西壁で14層と16層の間に一部みられる層である。

16層　2.5Y7/4浅黄色砂。しまりはあるが、粘性なし。一部に黄橙色酸化鉄（2.5Y7/8）を含み、礫（1.0～15.0cm）が多量に含まれる。

〈I－9 a区〉

10層　10YR6/6明黄褐色シルト。しまりはあるが、粘性は弱い。酸化鉄斑がわずかに含まれる。

11層　10YR6/4にぶい黄橙色シルト質粘土。しまりがある。堅緻である。白色の粒子、酸化鉄斑が多量に含まれる。

11 a層　2.5Y7/3浅黄色粘土。しまりがある。堅緻である。マンガン斑、白色粒子をわずかに含み、酸化鉄斑を多量に含む。

12層　10YR7/4浅黄色粘土質シルト。しまりがあり、粘性が強い。小礫（1～3cm）を含み、一部に酸化鉄斑を含む。

13層　2.5Y7/3浅黄色粘土。しまりは良好である。白色の粒子（0.5cm）をわずかに含む。

14層　2.5Y7/3浅黄色粘土質シルト。しまりがあり、粘性が強い。円礫（1～15cm）が多量に含まれる。

〈Ⅰ－5 b区〉

10層　10ＹＲ6/6明黄褐色シルト。しまりはなく粘性は強い。白色の粘土を多く含む。

11層　2.5Ｙ7/4浅黄色シルト質粘土。しまりがあり、粘性が強い。砂粒、酸化鉄、白色の岩片を混入する。

12層　2.5Ｙ7/3浅黄色粘土。しまりがあり、粘性が強い。砂粒、酸化鉄が混入するものの11層よりは少ない。

13層　5Ｙ7/3浅黄色粘土。しまりがあり、12層より砂質である。

14層　7.5ＹＲ6/8橙色粘土。しまりがあり、酸化鉄を縞状に含む。

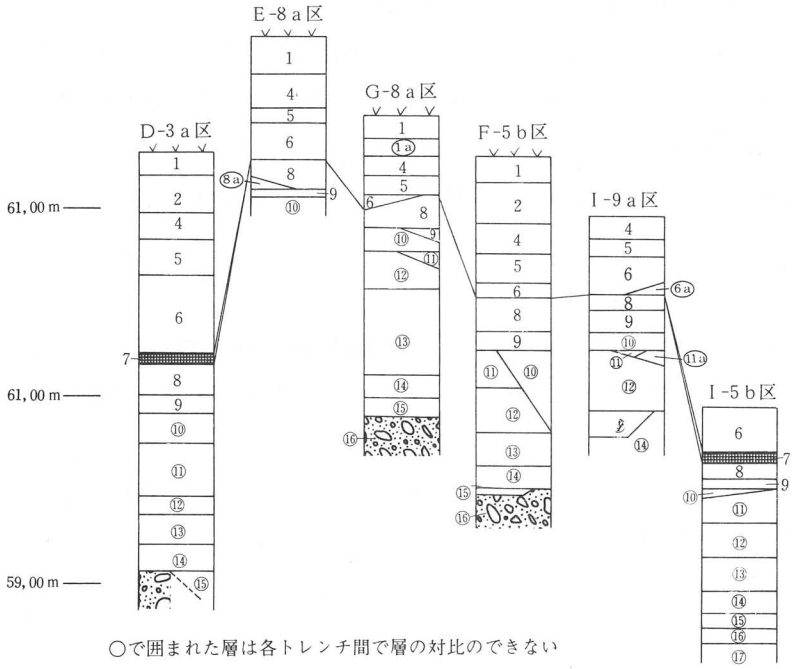
15層　5Ｙ7/2灰白色粘土。円礫（3.0～5.0cm）を多量に含む。

16層　2.5Ｙ7/4浅黄色シルト質粘土。しまりがあり、粘性は強い。風化礫（約3.0cm）をわずかに含み、マンガンが含まれる。

17層　2.5Ｙ7/6明黄褐色シルト質砂。しまりはあり、粘性は16層より弱い。風化礫（3～5cm）がわずかに含まれ、この層の上面からは旧石器時代の石器が出土している。

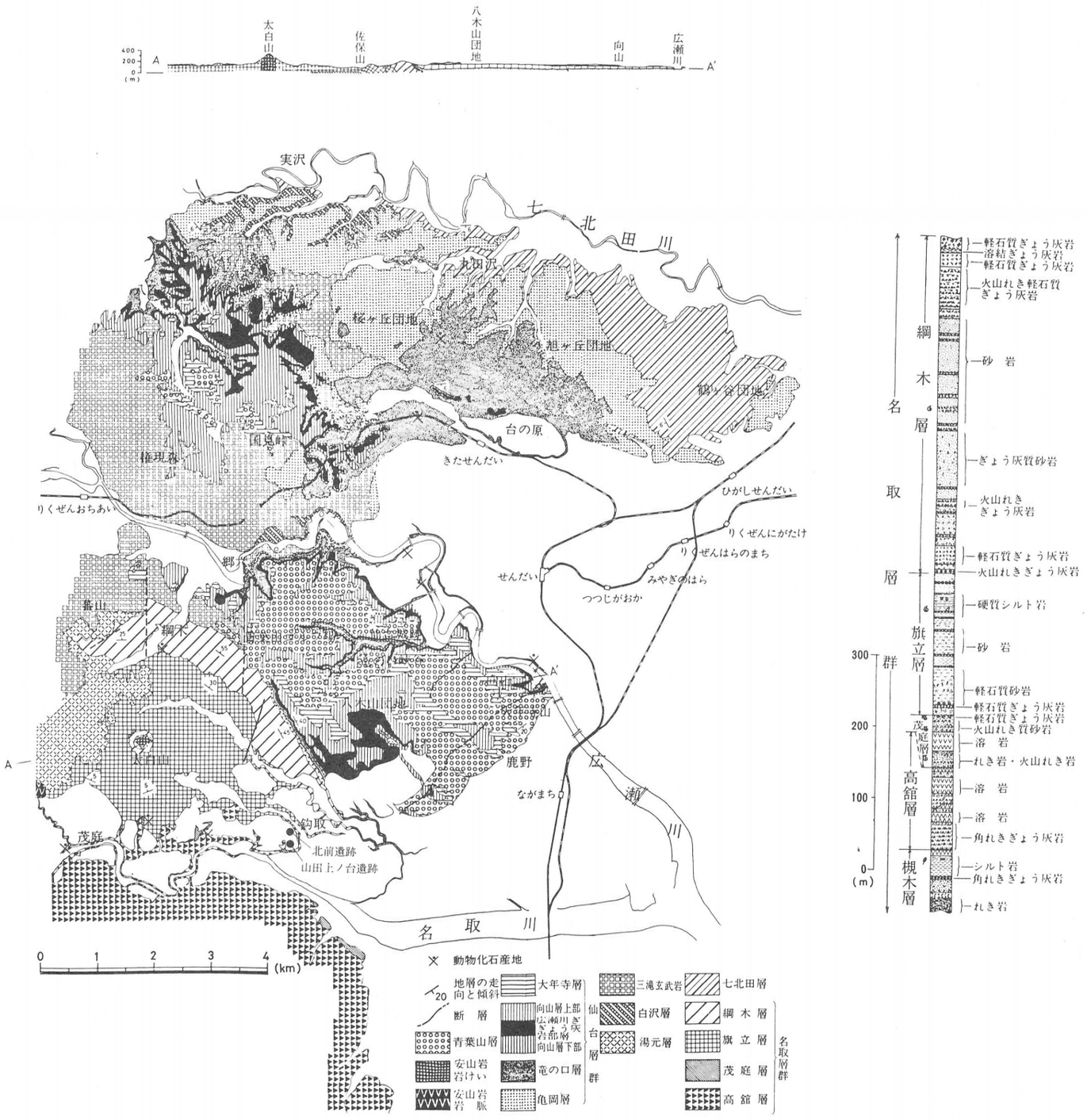
注1．下刻：河流がその底面を低下させるような垂直下方に向かって働きかける侵食作用

注2．降水強度：単位時間当りの降水量　　（町田他編：1981による）



○で囲まれた層は各トレンチ間で層の対比のできないものを示した

第7図　深掘りトレンチ柱状図



第８図　仙台付近の地質図（地学団体研究会仙台支部編：1980「仙台の地学」による）

第9図 遺構全体図

⟷ 深掘トレンチ断面図位置

第Ⅲ章　遺構と遺物

1．遺物の分類基準

遺物の分類基準は、遺跡から出土した遺物が、旧石器時代から江戸時代の各時代にまたがっているため、同一基準で分類するのは不可能である。したがって、各時代毎に遺物の性質によって分類した。縄文時代以後の遺物に関しては、縄文時代は型式毎に「群」として扱い、平安時代以降については、時代別に「群」として分類している。また、江戸時代に関しては、そうした表現はとっていない。

第１群土器

本群は、貝殻腹縁文および沈線文を合わせ持つものを扱った。しかし、本群に属する土器はわずかに口縁部破片２点であるため、類型化は困難である。

第２群土器

本群は、いわゆる縄文条痕土器を一括して扱った。本群土器は、すべて破片であるため、全体の器形を知り得るものがない。しかし、各部位毎の破片から判断すれば、およそ口唇部付近がやや外反し、体部がやや張る砲弾形の尖底深鉢形が基本になると推定される。口縁部は、口唇部に刻目や縄文等を施すものがあるが、平縁が基本となり、わずかに波状口縁のものが１点存在する。また、底部は尖底以外に、平底（揚底）が１点存在する。すでに述べた通り、すべてが破片であるため、土器の部位毎に分類を行った。すなわち、口縁部・体部・底部付近のものを、それぞれ１類、２類、３類とした。土器全体の属性は、これら１～３類の組合せによって構成されるものと考えられるが、今回の出土土器では、それらを明確にすることはできなかった。

１類、本類は、口縁部破片を一括して扱った。

ａ．口唇部に刻目あるいは刺突が施され、口唇部直下に刺突のある隆帯をめぐらし、隆帯の下位に幾何学的な沈線文を施文するもの。

ｂ．ａと基本的には同一であるが、口縁部文様帯の地文として条痕文が施されるもの。

ｃ．ａと基本的には同一であるが、口縁部文様帯の地文として縄文を施文するもの。

ｄ．口唇部に刺突を施し、口縁部文様帯に幾何学的な沈線文を施文するもの。口縁部文様帯以下は縄文が施文され、文様帯と体部文様は側面圧痕によって区画されている。口唇部直下には、隆帯が認められない。

ｅ．口唇部に縄文を施し、口縁部は地文に条痕文、さらに幾何学的な沈線文を施

文するもの。

f．地文に条痕文を施文し、さらに幾何学的な沈線を施文するもの。

口唇部には、特徴を持たないものや、欠損していて特徴の不明なものも扱っている。

g．口縁部文様帯と体部文様を細隆帯で区画するもの。

h．口縁部の内外に縄文が施文されるもの。

口唇部に刺突をもつものもある。

i．羽状縄文を施文するもの。

j．内外ともに無文のもの。

2類．本類は、体部破片を一括して扱った。

a．外面に縄文、内面に条痕文を施文するもの。

b．外面に縄文、内面に無文あるいは擦痕の認められるもの。

c．外面に縄文、条痕文、内面に条痕文が施文されるもの。

d．内外面に縄文が施文されるもの。(1類hの可能性も考えられるが、便宜上区別して扱った。

e．外面に羽状縄文が施文され、内面は無文となるもの。

f．外面に幾何学的な沈線文を施文するもの。

g．地文に条痕文を施し、幾何学的な沈線文を施文するもの。

h．半截竹管による連続刺突文と斜格子状沈線文を施文するもの。

i．内外面ともに条痕文を施文するもの。

j．内外面ともに無文のもの。

3類．本類は、底部付近のものを一括して扱った。本類には、尖底のものと平底（揚底）の2形態が存在する。このうち平底のものは、わずか1点だけである。

a．外面に縄文を施文する尖底のもの。

内面は無文であるが、中には擦痕のつくものも存在する。

b．外面に縄文、内面に条痕文を施文する尖底のもの。

内面の条痕文は縦方向となる。

c．外面に縄文、内面は無文となる平底のもの。

底面に条痕文が施文されている。

第３群土器～第５群土器は器形により類別、さらに分類可能なものについては文様帯、文様施文要素、文様要素により種別した。文様は器面に施される装飾性のすべてであり、文様要素とは文様を構成する基本的要素とし、文様施文の際に器面に対してなされる断面形態要素を文様施文要素とした。また文様帯は一定の上下幅をもち器面を全周する文様構成帯として把え、頚部に文様が全周するものは特に頚部文様として扱った。

口縁部文様帯をＡ、頚部文様をＢ、胴部文様帯をＣとし、文様施文要素は1.沈線文、2.貼付文、3.刺突文、4.隆帯、5.隆帯＋沈線文、6.隆帯＋刺突文、7.圧痕文とした。各種文様要素を以下に示す。

1.沈線文　1.山形沈線文、2.斜行沈線文、3.横位沈線文、5.馬蹄形沈線文、6.連続弧状沈線文、7.弧状沈線文、8.直曲沈線文、9.棘状文、10. 楕円文、11. 懸垂文、12. 逆「U」字文、13.「C」字文、

2.貼付文　1.コブ状貼付文、2.ボタン状貼付文、3.棒状貼付文、4.細い粘土紐による渦巻文、5.細い粘土紐による弧状文、6.細い粘土紐による幾何学貼付文

3.刺突文　1.円形刺突文、2.連続刺突文、3.連続押し引き刺突文

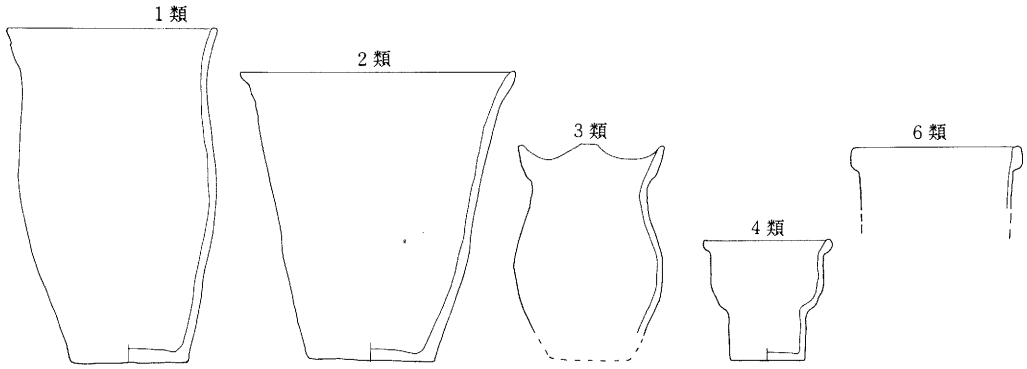
4.隆　帯　1.横位隆帯、2.弧状隆帯

5.隆帯＋沈線文　1.隆帯＋山形沈線文、2.隆帯と沈線による渦巻文、3.隆帯と沈線による曲線文、4.隆帯と沈線による直線文

6.隆帯＋刺突文　1.隆帯＋連続刺突文、2.隆帯＋連続押し引き刺突文

7.圧痕文　1.縄文原体による側面圧痕文

第３群土器



第10図　縄文土器器形模式図

１類　　Ａタイプ

口縁部が外反し胴部がややふくらむ深鉢形土器である。最大径は口縁にある。口縁は波状をなすものもあるが、平縁の方が多く突起をもつものがある。口縁部は肥厚するものが多くまた複合口縁をなすものもある。口縁部文様帯の上下幅が狭く頚部に段を有するものもある。

1種

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分される。頚部文様をもつものがある。さらに文様帯が貼付文や縦位沈線文により口縁部・胴部共に4区画されるものがあるが胴部に文様帯をもつものは少ない。口縁部は無文であり、地文は胴部には横位綾絡文・単節斜行縄文が施され薄く撫で消してあるものもある。地文の不明なものが多い。文様は縦位・横位・斜めの沈線文を基調として構成されている。山形沈線文により特徴づけられる。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。

2種

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分されるが、頚部文様は認められない。口縁部は無文であり、地文は胴部には単節斜行縄文が施文されるが薄い撫で消しについては不明である。

口縁部文様帯は横位沈線文と連続縦位弧状沈線文を基調とする。胴部下半の文様は不明である。胎土は極めて粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。

2類

器形は口縁部が外傾し頚部でわずかに屈曲、胴部はほぼ直線的に外傾する深鉢形土器である。最大径は口縁にある。第50図1、1点である。口縁は平縁であり口縁部は肥厚していない。

文様帯は頚部で区画されるが口縁部文様帯だけであり胴部に文様帯はない。口縁部は無文であり、地文は胴部には単節斜行縄文が施文されている。薄い撫で消しが行なわれている。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。

3類

器形は口縁部が外反し頚部で屈曲、あるいはくびれ、胴部でふくらむ深鉢形土器である。最大径は胴部にある。口縁は波状と平縁がある。口縁部は肥厚するものが多く複合口縁も認められる。口縁端内面に段をもつものがある。第2種には四波状口縁を呈するものが多い。

1種

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分される。頚部文様をもつものがある。さらに文様帯が貼付文や縦位沈線文により口縁部・胴部共に4区画されるものがあるが胴部に文様帯をもたないものもある。口縁部は無文であり、地文は胴部には横位綾絡文・単節斜行縄文が施文され、薄く撫で消してあるものが多い。文様は縦位・横位・斜めの沈線文を基調として構成される。山形沈線文により特徴づけられる。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。1類1種にほぼ共通する文様帯をもつ。

2種

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分される。第54図2、1点だけである。頚部文様は認められない。器面の剝落が著しく地文は不明である。口縁部文様は横位沈線文を基調として

いる。

4類

器形は口縁部が外反し頚部でくびれ胴部は上半がややふくらみをもつが中位でくびれ下半が円筒状を呈す深鉢形土器である。胴部下半はやや内弯気味に立ち上がる。最大径は口縁部にある。口縁は平縁で口縁部の肥厚は顕著ではない。

文様帯は胴部上半に認められるが、地文だけのものもある。地文は横位綾絡文・単節斜行縄文が施文され薄い撫で消しのなされるものもある。文様は山形沈線文・山形連続刺突文が施文されているものがある。胎土はやや緻密であり角礫凝灰岩粒の混入は少ない。

5類

器形は口縁部が内弯気味に外傾し頚部で屈曲し胴部上半がふくらむ深鉢形土器と考えられる。胴部下半については不明であるが、球形の胴部が底部へむけてしだいにすぼまっていくものと3類のように円筒状を呈する2形態があると考えられる。最大径は口縁あるいは胴部にある。口縁は平縁であるが突起をもつものもある。口縁部の肥厚するものが多い。

1種

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分されるが、口縁部が無文帯のもの、胴部に文様帯をもたないものがある。地文は口縁は無文であるが単節斜行縄文が施される場合もある。胴部には横位綾絡文・単節斜行縄文が施文され、薄い撫で消しがなされるものが多い。文様は縦位・横位・斜めの沈線文を基調としている。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。

2種

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分されるが、口縁部と胴部上半の文様要素が同一である。細い粘土紐による幾何学貼付文を施文しているものである。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒の混入が顕著であるが砂粒はほとんど含まれない。第55図9、1点だけである。

6類

器形は口縁から底部までわずかに外傾する円筒形の深鉢形土器と考えられる。第52図1、1点だけである。胴部上半が残存している。最大径は口縁にあり、平縁である。地文は無節斜行縄文である。文様帯はなく、口唇に隆帯をめぐらせ口縁部を肥厚させ、隆帯上に4ケ所コブ状貼付文を配してある。胎土は緻密で、砂粒の混入は少ない。

7類

器形は口縁部がやや内弯し、胴部上半は外傾する深鉢形と考えられる。第55図12、1点だけである。胴部下半については不明である。口縁は平縁であるが山形突起を有する。最大径は胴部上半にあると考えられる。

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分されるが、隆帯＋連続押し引き刺突文という文様要素は口縁部・胴部に共通する。胎土は緻密で、砂粒の混入は顕著ではない。

8類

類別が困難な土器破片である。

第4群土器

1類

器形は口縁部が強く内弯し頚部でくびれ胴部がややふくらむ深鉢形土器である。復原はできなかったが第56図1～6の一括出土遺物である。最大径は口縁にあり、平縁である。

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分される。地文は口縁部・胴部共に単節斜行縄文が施文される。文様は口縁部には隆帯と沈線による渦巻文・曲線文が、胴部には直曲沈線文が施文される。胎土は緻密であり砂粒の混入は顕著でない。

2類

類別が困難な土器破片である。

第5群土器

1類

器形は第4群1類土器とほぼ同形である。第62図1、1点だけである。最大径は口縁にあり、平縁である。

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分される。頚部文様が認められる。地文は口縁部は楕円形の中に単節斜行縄文が施文される。胴部は不明である。文様は口縁部・胴部共に隆帯と沈線による渦巻文・曲線文を基調としている。胎土は粗く、砂粒の混入は少ない。

2類

器形は口縁部が外反し頚部でくびれ胴部がややふくらむ深鉢形土器である。頚部文様をもつものがある。最大径は口縁にある。口縁は平縁が多く突起をもつものもある。

1種

文様帯は頚部で区画され口縁部と胴部に二分される。地文は単節斜行縄文が施文されるが、胴部の沈線区画内に認められるにすぎない。文様は口縁部が隆帯と沈線による渦巻文・曲線文・胴部には沈線による楕円文・縣垂文・逆「U」字文などが施文される。胎土は緻密で砂粒の混入は少ない。

2種

文様帯は胴部に認められる。口縁部は無文である。地文は1種に同じである。文様は沈線による楕円文・縣垂文などが施文される。胎土は緻密で砂粒の混入は少ない。

3種

地文だけのものである。第61図1である。単節斜行縄文が施文される。胎土はやや粗く砂粒の混入は少ない。

3類

類別が困難な土器破片である。

第6群土器

1類

土師器坏である。平底である。体部から口縁にかけてはやや内弯気味に外傾するものと直線的に外傾するものがある。ロクロ成形であり、回転糸切りによる切り離し後底部に回転ヘラ調整が施されるが糸切り痕はほとんど残っていない。

外面にはナデ、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。胎土は緻密である。

2類

土師器甕である。口縁部破片のため全体の器形は知り得ない。頸部で強く外反、口縁端で上方へ立ち上がる。胴部は長胴形をなすものと考えられる。ロクロ成形であり、内外面ともナデが施される。

なお、ここでの半截竹管は半截竹管そのものではなく、半截竹管状の工具をいう。

2）縄文時代の石器

石器の分類は本来、形態的・技術的な属性を抽出し詳細な分析を経た後に行なわれるべきである。しかし本報告書では、時間的制約によりその検討を加えることができなかったので、不充分ではあるが、とりあえず以下の定義に基づき分類し、集計を行なった。

石鏃：尖端部の作出が明確で、基部及び両側縁の整形がなされた小形の三角形を基本とする打製石器

尖頭器：一ないし二尖端を作出した長く細身の左右対称の打製石器

石匙：ノッチを入れることによって作出されたつまみを有し、それ以外の部位に連続する二次加工を施し刃部を形成した打製石器

ヘラ状石器：基部が狭く刃部の広い、ほぼ左右対称に整形した縦長の打製石器

スクレイパー：縁辺に連続的な二次加工を施すことによって刃部を形成した打製石器

石錐：錐状の尖端部を作出し、石鏃・尖頭器・石匙の定義にあてはまらない打製石器

ピエス・エスキーユ：両極加撃の痕跡を有し、二ケ一対の潰れ状の刃部を有する打製石器

打製石斧：ヘラ状石器より大型でやや細身の、ほぼ左右対称に整形した打製石器

釣針形石器：釣針の形をした打製石器

二次加工のある剥片：二次加工が部分的に施された剥片

微細剥離痕のある剥片：縁辺に沿って連続もしくは非連続な微細剥離痕を有する剥片

剥片：剥片と砕片とは本来分離されるべきであるが、その基準を明確に設定しえなかったのでここでは両者を分離せずに剥片として分類した。

礫石器：礫を素材とした、使用によると考えられる痕跡を有する石器の総称。その痕跡の種類・形状・程度によって細別される。

凹石：凹部のみのある礫石器

磨石：磨面のみが認められる礫石器

敲石：敲打による損傷を有する礫石器

上記の三種の痕跡が複合している礫石器については「凹＋磨」、「磨＋敲」等のように表現した。

板状磨石：板状の礫を素材とした、磨面が広く認められる礫石器

石皿：一般に扁平な礫を素材とし、ややくぼんだ磨面が広く認められる礫石器

砥石：磨面が完全に磨滅し、小さな凹凸さえなくなった礫石器

いわゆる「折断調整石器」については、その認定方法についての充分な検討を成し得なかったので分類は行なっていない。従って二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片・剥片の中に含まれる。

2．旧石器時代の遺物

本遺跡では、基本層序の第５層・第６層・第９層、Ｄ－３ａ区での15層、Ｉ－５ｂ区での17層の各層上面から旧石器時代の石器が出土している。さらに、Ｉ－９ｂ区東壁に確認された第６層上面からの落ちこみ内埋土上面からも旧石器時代の遺物が出土している。また縄文時代の包含層・遺構埋土・表土等から出土した石器の中にも旧石器時代に属すると考えられるものが存在する。以下、各石器群について層位的に古い順に出土状況を説明する。

(1) 出土状況

Ｄ－３ａ区15層とＩ－５ｂ区17層の層位的上下関係は、基本層序の項で述べたように対比が困難な状況のため、便宜的にＤ－３ａ区から記載する。

Ｄ－３ａ区15層上面出土の石器群（第11図、第13図、第14図、写真１－３～７）

Ｄ－３ａ区の北半部1.5×3m の範囲を深掘区とした。径約１ｍの円内のしかも円周寄りに並ぶ状態で石器が５点出土している。いずれも層理面である15層上面に貼り付く状態で、かつほとんどレベル差をもたずに出土している。段丘礫層は、西壁付近から南東方向に傾斜しながら深掘区の約⅓に広がり15層の下へもぐり込む。15層は残りの約⅔にほぼ水平に広がる。石器は石斧１点、スクレイパー３点、剥片１点の計５点で狭義の石器（Tool）が多い。石器以外に炭化物等の遺物は出土していない。なお、スクレイパー１点が北壁にかかっており、石器の分布の広がりが北側へ伸びる可能性がある。

Ｉ－５ｂ区17層上面出土の石器群（第11図、第15～19図、写真１－８、９）

Ｉ－５ｂ区の南半部1.5×3m の範囲を深掘区とした。約1.3×1.5m の楕円状の範囲に石器が15点出土した。いずれも層理面である17層上面に貼り付くか、若干17層にくい込んで出土している。17層は南東方向へ緩く傾斜している。石器は、スクレイパー７点、エンド・スクレイパー１点、石核３点、剥片３点、両極剥離痕ある石器１点の計15点である。石器以外に、土層中にある自然石とは石質の異なる礫や礫片が３点出土している。炭化物は検出されていない。なお石器５点が北壁にくい込んでおり、石器の分布の広がりは北側へ伸びる可能性が高い。

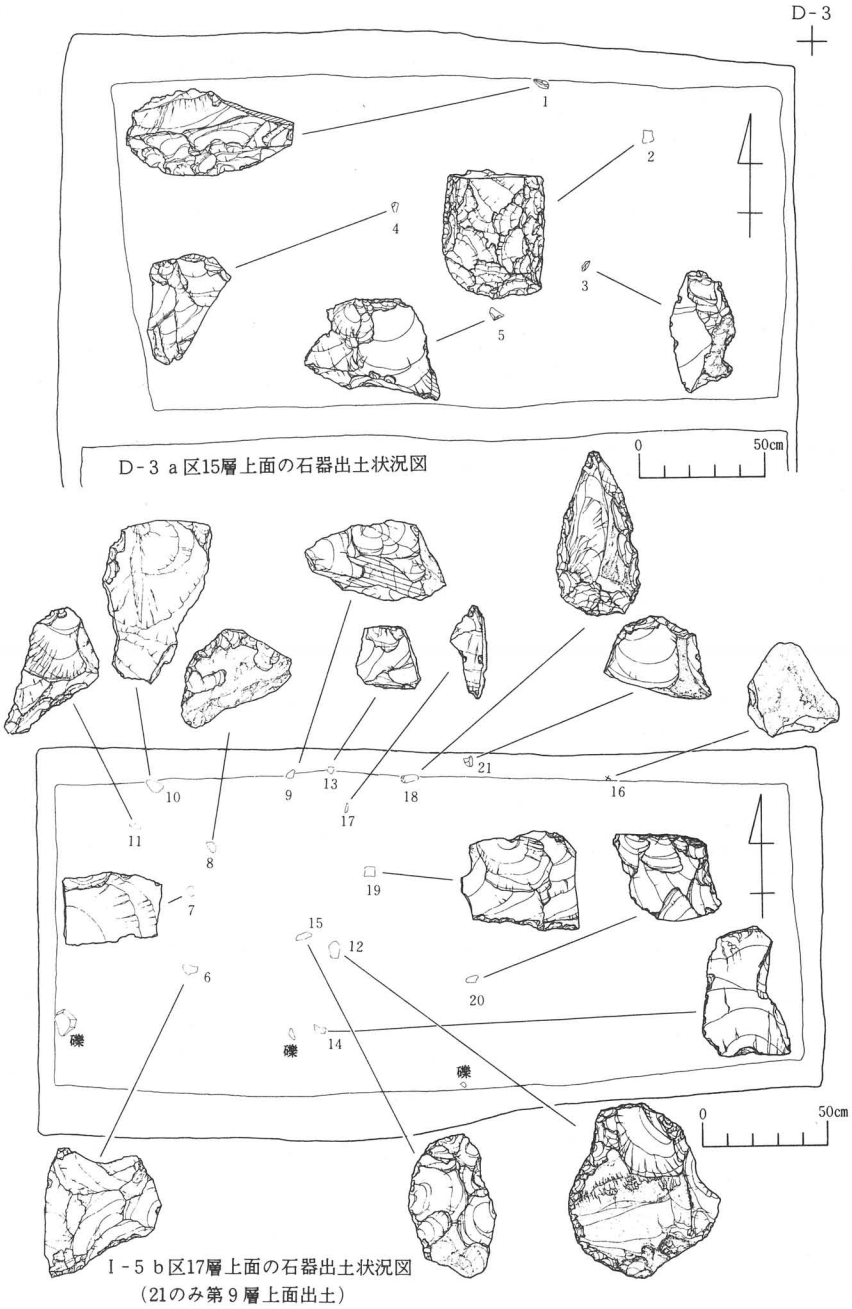
第９層上面出土石器（第20図21図、写真15－21）

Ｉ－５ｂ区の北壁から二次加工ある剥片が１点出土している。石器は層理面である第９層上面にのった状態で出土している。

第６層上面出土石器群

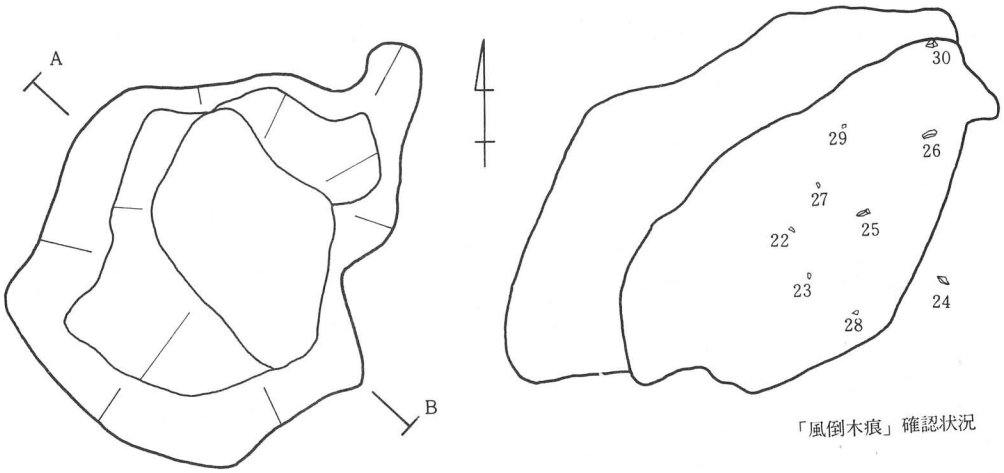
23号土壙の壁面から剥片が３点出土している。また、Ｉ－９ａ区の東壁に確認された第６層上面からの落ち込みの埋土上面から、スクレイパー１点、剥片２点の計３点が出土している。落ち込みの埋土は第５層堆積以前の堆積層であるから、第６層上面の時期に近いと考えられる。

第５層上面出土の石器群（第12図、第20図22～25、第21図、写真１－10）

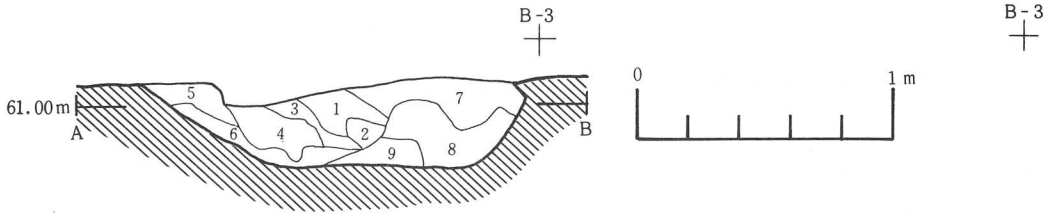


第11図　旧石器時代の石器出土状況図(1)

Ａ－３ｄ区の東半部において、約1.5×2.3m の不整楕円形のプランが確認された。プラン内の南東部分には第５層起源のロームの盛り上がりが、北西部分には黒色土がある。この不整形のプランは調査の結果落ち込みを形成しており、プランが不整形であること、底面の凹凸が激しいこと、黒色土がロームの盛り上がりの下にもぐり込むことなどの特徴があげられる。これらの特徴は「風倒木痕」にみられる特徴と一致する（石器文化談話会：1981)。形成時期は、流れこんだ黒色土中の土器より、縄文時代前期以降と考えられる。埋土が比較的水平であることや、ロームの盛り上がりを形成している第５層が黒色土による激しい攪乱を受けていないこと、石器が面的まとまりをもつことなどから、石器をのせた状態の第５層が根により若干隆起ないしずれを生じた程度の「風倒木痕」と判断される。したがってロームの盛り上がりの上にのっていた石器群は、厳密な意味での原位置は保っていないが、一括性を保っていると判断される。



「風倒木痕」確認状況



埋　土

層位	土　色		土　性	備　考
1	黄褐色	10Y R 5/8	シルト	炭化物少量含む。暗褐色土粒多量含む。
2	黄褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	マンガン斑少量含む。
3	黒褐色	10Y R 3/3	シルト	ロームブロック多量含む。
4	褐　色	10Y R 4/4	シルト	ローム粒少量含む。
5	黒褐色	10Y R 3/3	シルト	ロームブロック多量含む。
6	明黄褐色	10Y R 6/8	粘土質シルト	黒褐色土ブロック少量含む。
7	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	マンガン斑少量含む。黒褐色土ブロック含む。
8	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	
9	黄褐色	10Y R 5/8	シルト	ロームブロック部分的に含む。

第12図　旧石器時代の石器出土状況図(2)

このことより第５層上面出土のものに相当すると考えられる。石器は、スクレイパー５点、ノッチ１点、二次加工ある剝片１点、石刃[注1]２点の計９点出土している。

縄文時代の包含層等より出土した石器

縄文時代の包含層、遺構の埋土、表土等から、ナイフ形石器など旧石器時代の石器の可能性のあるものが計14点出土している。

(2) 石器群について

ここでは、属性表との重複を避けるため個々の石器の説明は省き、各石器群の特徴を述べることとする。ただし、Ｉ－５ｂ区第９層上面出土の石器は１点のみである。また23号土壙の壁面、Ｉ-9ｂ区東壁より出土した石器は面的広がりを調査し得なかった。従って、石器群としての特徴を充分に把握しかねたため、上記の石器群については言及しない。よって、それ以外の石器群の特徴について述べる。なお、石器の属性表は33・34頁の第２・３表である。

Ｄ－３ａ区15層上面出土の石器群（第11図、第13図、第14図、写真13－１～５）

出土石器点数は15点のみである。その特徴は次のようにまとめることができる。

①同一母岩の資料はない。

②厚い剝片を素材としている。

③バルブはよく発達している。

④背面[注2]の面構成は、腹面[注3]の剝離方向と同方向からの剝離面を主体とし、その中でさらに横方向からの剝離面を含むものが１点ある（第14図４）。

⑤錯向剝離が施されているものがある（第13図１）。

⑥二次加工が施された２縁辺が鋭角に互いに交わるスクレイパーがある[注4]（第14図５）。

⑦両面加工の石器がある（第13図２）。

Ｉ－５ｂ区17層上面出土の石器群（第11図、第15～19図、写真13－６～９、写真14、写真15－19・20）

出土石器点数は15点で、石核が３点含まれる。以下に述べる特徴は、ことわりのない限り石核３点を除く。

①同一母岩の資料はない。

②やや薄い剝片を素材としている。

③バルブの発達しているものが多い。

④自然面を打面としているものが多い（９点中６点）。

⑤背面の面構成は、腹面の剝離方向に対して横方向からの剝離面を含むものが多い（12点中７点）。（第15図６・７、第16図11、第17図12・13、第18図17、第19図20）

⑥二次加工が施された２縁辺が鋭角に互いに交わるスクレイパーがある。(第15図８、第16図

11)。

⑦両極剥離痕のある石器(注5)（第15図６)、両極打法により剥離された、あるいはその可能性のある剥片を素材とした石器（第16図10、第17図14、第19図20)、両極剥離痕のある石核（第18図16）が存在する。

以上、Ｄ－３ａ区15層上面出土の石器群とＩ－５ｂ区17層上面出土の石器群についてそれぞれ特徴をあげたが、前述のように両者は層位的対比が困難である。しかし、石器の特徴に次のような共通点がみられ、両者にはそれ程の時間差はないと考えられる。

①錯向剥離が施されている石器がある。

②二次加工を施された２縁辺が鋭角に互いに交わるスクレイパーがある。

③石質は堆積岩系の珪質岩が多い。

ただし、Ｉ－５ｂ区17層出土の石器群には両極打法の存在が認められるのに対して、Ｄ－３ａ区15層上面出土の石器群にはそれが認められない。これは、技術の差を反映するものかもしれない。しかし、両石器群のまとまりがさらに面的に拡大するのか、或いは完結するのかについては未調査であるため、その結論を出すことはできない。

Ａ－３ｄ区第５層上面出土の石器群（第12図、第20図22～25、第21図、写真15－20～30）

この石器群の特徴は次のようにまとめられる。

①同一母岩の資料はない。

②薄い小さな剥片を素材としている。

③石刃が２点存在する（第20図24、第21図26)。

④折れ面をもつものが多い（９点中５点)。（第20図23、第21図26・28～30）

⑤背面の面構成は、腹面の剥離方向と同方向からの剥離を主体とする。

本石器群はその内容を把握するに足る充分な資料ではないが、おそらく石刃技法の存在した時期のものであろう。

(3)　まとめ

Ｄ－３ａ区15層出土の石器群とＩ－５ｂ区17層出土の石器群の年代的位置付けをする上で重要となる点は以下の３点である。

①　仙台とその周辺地域における火山灰の年代を考える上で鍵層となる川崎スコリア層は、３万数千年前より新しく２万数千年前より古いと推定されている（板垣他：1981)。両石器群はこの川崎スコリア層より約1.1m程下位から出土しているので、その年代をさらに遡ることは確実である。

②　両石器群に、二次加工が施された２縁辺が互いに交わるスクレイパーが存在する。これらは従来“斜軸尖頭器”と呼ばれていたものである。

③　両石器群には、後期旧石器時代の様相を示すような特徴がみられない。

一方、日本の旧石器時代の時代区分において、約３万年ＢＰを境にそれ以前を前期旧石器時代、以後を後期旧石器時代とされている（芹沢：1979）。

以上のことから、Ｄ－３ａ区15層上面出土の石器群とＩ－５ｂを17層上面出土の石器群は、前期旧石器時代に属すると考えられる。

第５層上面出土の石器群の年代的位置付けは、川崎スコリア層より上位であること、石刃技法の存在した時期にほぼ比定されることから、後期旧石器時代に属すると考えられる。

尚、第９層・第６層上面出土石器については、資料が不十分なのでここでは言及しない。

段丘礫層の上位にある「浅黄色粘土質土層」の形成過程は基本層序の項で詳述した（６頁）。つまり、各層は、直上の層が形成されるまでの期間地表面として人間の生活圏に組み込まれていたことが十分に考え得るのである。石器群が層理面に貼り付く状態で、しかも集中地点を形成して出土していることは、このことを裏付けるものである。

本遺跡から約200m南に位置する山田上ノ台遺跡（仙台市教委：1981）では、旧石器時代の遺物が層位的に出土しており、大まかに段丘礫層・浅黄色の粘土質の層（山田上ノ台遺跡の15層以下に相当）・火山灰層と捉えられる層序も本遺跡と共通している。本報告においては時間的制約により、両遺跡の石器群の比較検討は成し得なかったが、山田上ノ台遺跡・北前遺跡と相次いだ成果は、名取川の形成する段丘上に同様の遺跡が多数存在することを予想させ、宮城県北部の座散乱木遺跡等の成果と共に日本の旧石器文化、特に前期旧石器文化を考える上で重要かつ貴重な資料を提供するものといえる。しかし、これらの前期旧石器時代の資料の増加により必然的に生ずる問題――周知の資料の再検討や、前期旧石器時代の細分、石器群の内容把握等――は、今後の研究の進展に待たなければならない。

（注１）便宜的にボルド（芹沢他訳：1971）の定義に従っておく。

（注２）背面とは、主要剥離面の反対側の面である。

（注３）腹面とは、主要剥離面である。

（注４）この連続した二次加工は尖端部を作出している調整ではないので、あえて「斜軸尖頭器」という名称は用いない。

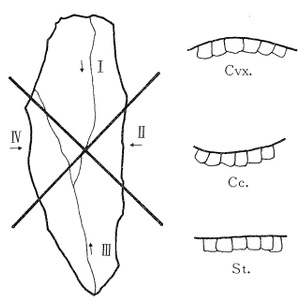
（注５）この石器群の中には、石器の素材となっているものに両極剥離の痕跡が認められることから、剥片剥離技術としての両極剥離の存在が十分に考えられる。従来ピエス・エスキーユとして認定されてきた１群の中には、この剥片剥離技術によって生じたものも含まれるであろう。従って、ここで聖山遺跡（阿部：1979）や碁石遺跡（芹沢他：1974）で捉えられたピエス・エスキーユと同じ特徴を有するものをピエス・エスキーユとすることは必ずしも意味をもたない。故にここではこの名を用いておく。なお、本遺跡の縄文時代の石器では、剥片剥離技術としての両極剥離の存在がうかがえるものが確認されていないので、ピエス・エスキーユというまとまりを捉えておく。

第２表　石器属性表（旧石器時代）

No	区	層	器種	標高(m)	石質	長さ(mm)	幅(mm)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(角度)	打面の状態	打面幅(mm)	打面厚(mm)	打点位置	バルブの形状	末端の形状	素材	背面の面構成	二次加工部の形態	二次加工部の方向	備考
1	D－3 a	15 層上面	スクレイパー	59.07	珪質頁岩			(66.3)	34.3	14.8	34.0								剥片	1＋?	全てCvx.	左、背→腹 右、腹→背	錯向剥離
2	〃	〃	石斧	59.08	シルト岩（玉髄含む）			(51.2)	40.5	16.5	41.8										下Cvx. 左右St.	両面加工	半欠
3	〃	〃	スクレイパー	59.08	チャート	(47.9)	28.5	48.5	26.5	11.9	11.4							F	剥片	Ⅰ＋自	左Cvx.	左、背→腹	両面にタール状付着物、打点破損
4	〃	〃	剥片	59.08	チャート	(39.3)	(35.8)	(46.6)	(31.9)	12.6	15.9		調(4)	24.6	12.2	R	・S	F?		Ⅰ＋Ⅳ			背面にタール状付着物
5	〃	〃	スクレイパー	59.08	珪質頁岩	(40.0)	(53.7)	57.1	41.7	15.8	34.2		自1	(29.4)	16.0	M	S		剥片	Ⅰ	下Cc. 右Cvx.	下、打面→腹 右、背→腹	二次加工のある２縁辺が交わる。折れ面から加工あり。
6	Ⅰ－5 b	17 層上面	両極剥離痕ある剥片	58.50	石英安山岩			(58.4)	(51.0)	(16.2)	38.8								剥片	Ⅱ＋Ⅲ	上Cc. 下Cc.＋Cvx.	両面加工	両極剥離が多くみられる。
7	〃	〃	剥片	58.60	玉髄	28.4	38.9			11.1	9.6	110°	自1＋調(4)	39.6	11.2	M	d	F		Ⅳ			背面は自然面の可能性あり。
8	〃	〃	スクレイパー	58.58	ウッドオパール	(33.7)	(44.8)	48.4	34.2	12.3	16.7		自1				Sかd		剥片	自	下Cc. 左Cvx.	右、腹→背 左上、両面 下、背→腹	錯向剥離、二次加工のある２縁辺が交わる。
10	〃	〃	スクレイパー	58.63	石英安山岩	(65.8)	(42.9)	(70.0)	(39.6)	12.3	32.5		1		8.3	Re	S		剥片	Ⅰ		左、腹→背	両極剥離による剥片
11	〃	〃	スクレイパー	58.59	珪質頁岩	(47.8)	(38.0)	(55.9)	(31.8)	10.9	16.6		自1				S		剥片	Ⅰ＋Ⅱ	右Cc. 左Cvx.＋Cc.	右、腹→背 左、背→腹	錯向剥離。二次加工ある２縁辺が交わる
12	〃	〃	スクレイパー	58.55	チャート	68.9	60.0	68.9	60.0	16.0	57.5	108°	調(4)	17.7	7.3	M	S	F	剥片	自＋Ⅰ＋Ⅱ	左Cvx.＋Cc.	左、腹→背	腹面にタール状付着物
13	〃	〃	スクレイパー	58.55	珪質岩（堆積岩）	(23.0)	(25.7)	31.2	26.1	5.5	4.3		自1	16.3	4.7	M	d	F		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	下St. 左Cc.	左、背→腹 下、背→腹 （一部腹→背）	
14	〃	〃	二次加工ある剥片	58.55	珪質岩	51.9	34.6			16.5	24.2	84°	自1	17.5	15.3	Le	S	F		Ⅲ			両極剥離による剥片、凝灰岩が珪化したもの？
17	〃	〃	剥片	58.54	珪質岩（堆積岩系）			36.8	14.0	4.2	2.0							F		自＋Ⅰ＋Ⅳ			打面欠損
18	〃	〃	エンド・スクレイパー	58.56				66.2	32.6	13.7	27.0								剥片	自＋Ⅰ＋Ⅲ	全部Cvx.	腹→背 右一部背→腹	
19	〃	〃	スクレイパー	58.53	珪質頁岩	(40.8)	(47.8)	54.3	41.6	6.7	14.3		自	27.0	5.0	M	S	?	剥片	Ⅰ	下St.	腹→背 一部背→腹	両側辺に折れ面あり
20	〃	〃	スクレイパー	58.46	珪質頁岩	34.3	(43.1)	50.0	35.0	14.4	15.9	82°	自	37.1	14.4	R	S	H.f.	剥片	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	左Dn. 右Cc.	左、背→腹 右、両面	
21	〃	第9層上面	二次加工ある剥片	59.56	珪質頁岩	33.4	41.7	43.8	29.0	7.8	10.8	96°	6	23.2	6.4	R	S	H.f.		自＋Ⅰ＋Ⅱ	右Cc.	右、背→腹 一部腹→背	二次加工部は一部交互剥離を呈する。
22	A－3 d	第5層上面	スクレイパー	61.12	珪質頁岩			25.9	23.4	3.9	2.4	98°	1	5.2	1.2	M	d	S.f.	剥片	Ⅰ	左Cc. 右St.	左、背→腹 右、腹→背	
23	〃	〃	スクレイパー	61.12	珪質頁岩			26.7	15.9	5.1	1.8								剥片	Ⅰ	左 右Cvx.		右側辺に折れ面あり
24	〃	〃	石刃	61.12	珪質頁岩	57.0	22.9	57.0	22.9	9.2	8.9	108°	1	3.9	3.2	M	S	F	剥片	Ⅰ			
25	〃	〃	ノッチ	61.18	珪質頁岩	39.3	18.4	39.3	18.4	7.0	4.3	103°	2	12.2	3.5	R	S	F	剥片	Ⅰ	右Cc.	右、背→腹	
26	〃	〃	石刃	61.19	珪質頁岩		21.4	48.8	21.4	7.7	7.1								剥片	Ⅰ			上下両端に折れ面あり。
27	〃	〃	二次加工ある剥片	61.19	珪質頁岩	26.0	(21.6)	27.0	15.6	2.4	1.1	100°	(4)	(5.2)	2.0	?	S	S.f.	剥片	Ⅰ	打面右Cvx.	背→腹	
28	〃	〃	スクレイパー	61.13	珪質頁岩			23.9	16.5	3.2	1.2								剥片	Ⅰ	右Cvx.	右、腹→背 一部背→腹	左側辺と上端からの折れ面を持つ
29	〃	〃	スクレイパー	61.10	珪質頁岩			(18.9)	(18.9)	4.5	1.3								剥片	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	下Cvx. 左St. 右Cvx.	腹→背	上端に折れ面あり
30	〃	〃	スクレイパー	61.16	珪質頁岩			39.4	35.3	9.8	10.9		1	(12.4)	4.5	M	S	?	剥片	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	左Cc＋St 右Cc＋Cvx	左、腹→背 一部背→腹 右、背→腹	錯向剥離あり、下端折れ面あり

〈凡　例〉

1．Noの番号は石器の実測図・写真に付された番号と一致する。
2．欄中で（　）内の数字は、残存部位で計測した値を示す。
3．この表での「長さ」「幅」は素材である剥片の最大長・最大幅である。
4．「長さ」「幅」「打角」「打面幅」の計測法は林謙作（芹沢他　1970）の方法に準ずる。
5．「最大長」は石器の最長部分を計測した。ただし左右対称の場合は最長中軸線を計測。
6．「最大幅」は最大長計測点間を結んだ直線と直交する方向での最大幅である。
7．「最大厚」はその個体で最も厚い部分である。
8．「打面の状態」では自然面打面を「自」調整打面を「調」と表し「調」の後の数字は調整面の数を示す。
9．「打面厚」は打面の両極を結ぶ直線と直交する方向での最大値である。
10．「打点位置」は腹面を正面とした場合の打面を３等分し右からR、M、Lとし、左右両端の場合はRe、Leと表わす。
11．「バルブの形状」はdifused bulb（不明瞭なバルブ）、salient bulb（明瞭なバルブ）とに区別し、それぞれをd、sで表わす。
12．「末端の形状」はフェザーエンドをF、ヒンジフラクチャーをH.f.、ステップフラクチャーをS.f.と表わす。
13．「背面の面構成」は図のように４分割して表わす。
14．「二次加工の形態」は二次加工が施された縁辺の形状を表わし、次のように表示する。凸形（Convex）＝Cvx.
凹形（Concave）＝Cc.
鋸歯縁(Denticulate)＝Dn.
直線的（Straight）＝St.
15．「二次加工の方向」では二次加工が背面の縁辺から腹面に施されている場合は背→腹、逆を腹→背と示す。
16．「二次加工の形態」「二次加工の方向」に表示される「上、下、左、右」は実測図での「a」の図での上下左右の縁辺を示す。

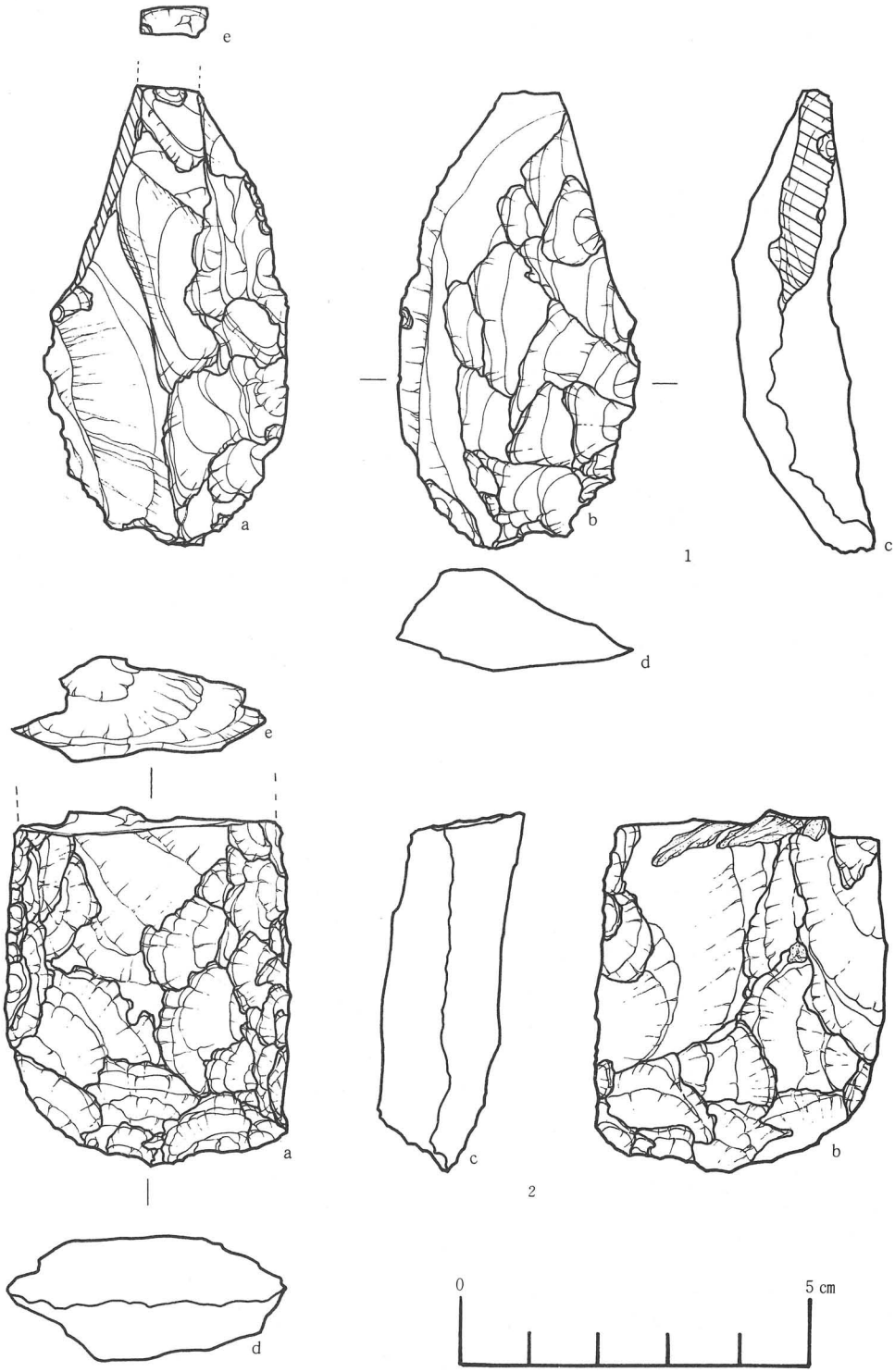


第３表　石核属性表（旧石器時代）

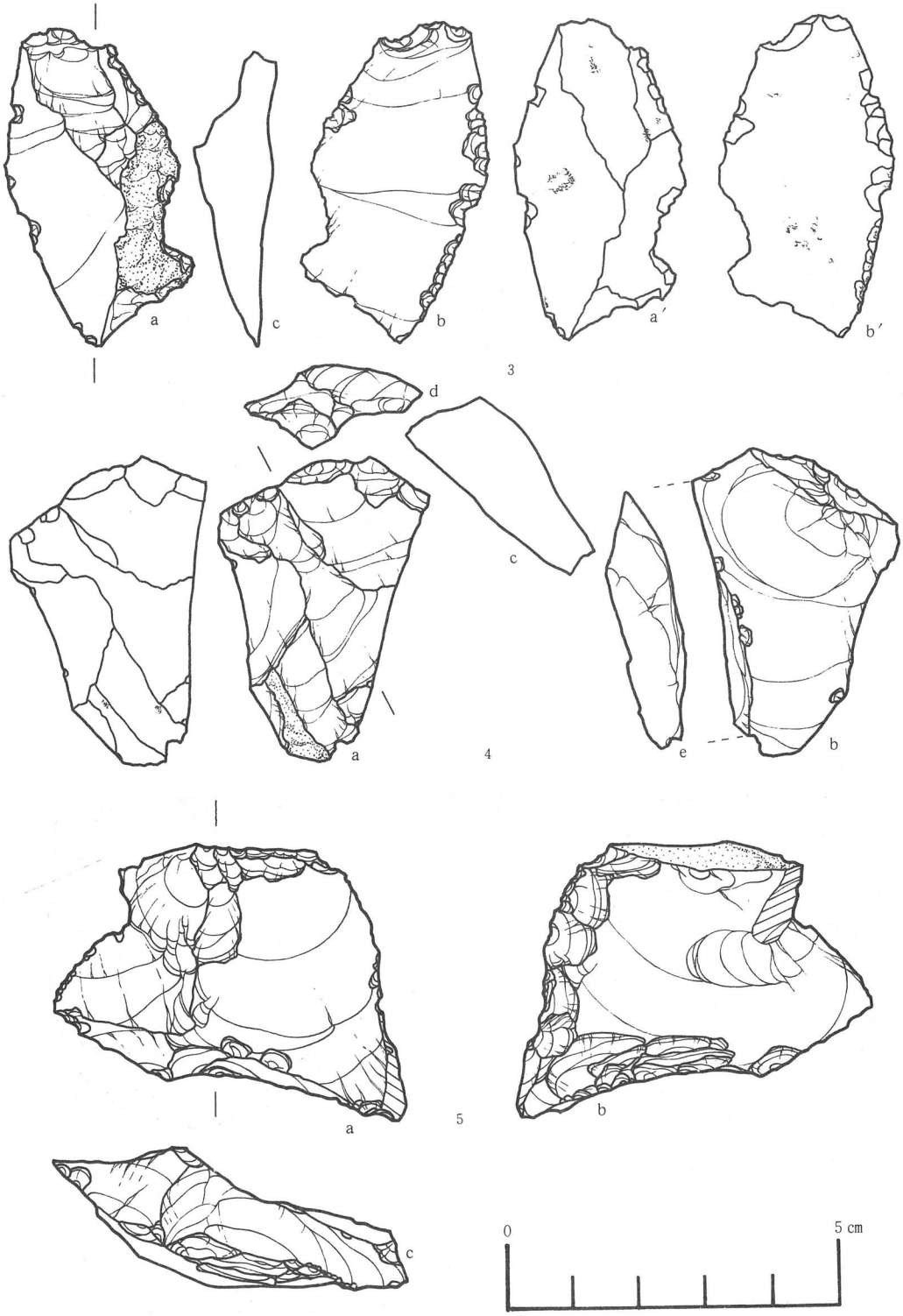
No	区	層	標高(m)	石質	素材	作業面 数	作業面 位置関係	作業面 加撃方向	作業面 打面の状態	作業面 大きさ（mm）	最終剥離面(mm)	剥離角(5°単位)	備考
9	Ⅰ－5 b	17層上面	58.62	珪質岩（堆積岩系）	粗割り片	1		a．→↓	自然面打面	57.2×33.9×25.0	18.0×42.0	85°、75°	節理に沿って粗割り。
15	Ⅰ－5 b	17層上面	58.55	珪質極細粒砂岩	剥片	2	表裏	a．→ b．↑	相互に打面	a．57.0×35.0×20.0 b．57.0×35.0×20.0	16.6×12.8	60°	
16	Ⅰ－5 b	17層上面	58.56	珪化した凝灰岩	扁平亜角礫	2	表裏	c．→ b．↗	自然面打面 自然面打面	c．37.0×17.0×37.0 b．39.0×28.0×26.0	13.0×16.0	90°	両極剥離がみられる。

〈凡　例〉

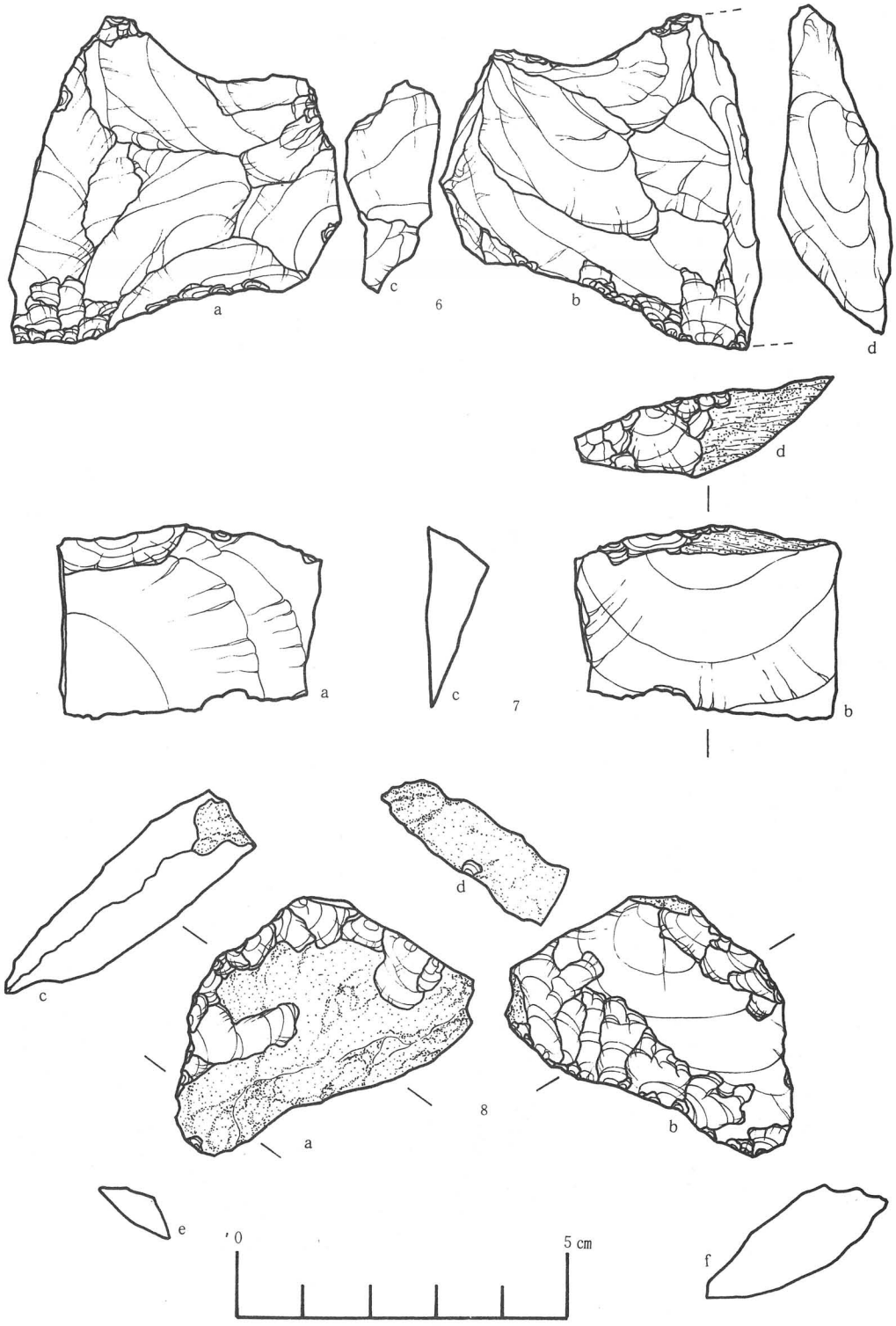
1．加撃方向の欄のa、b、cは石器実測図で使用しているa、b、cである。
2．　〃　　矢印は、石器実測図の位置でみた場合の方向である。



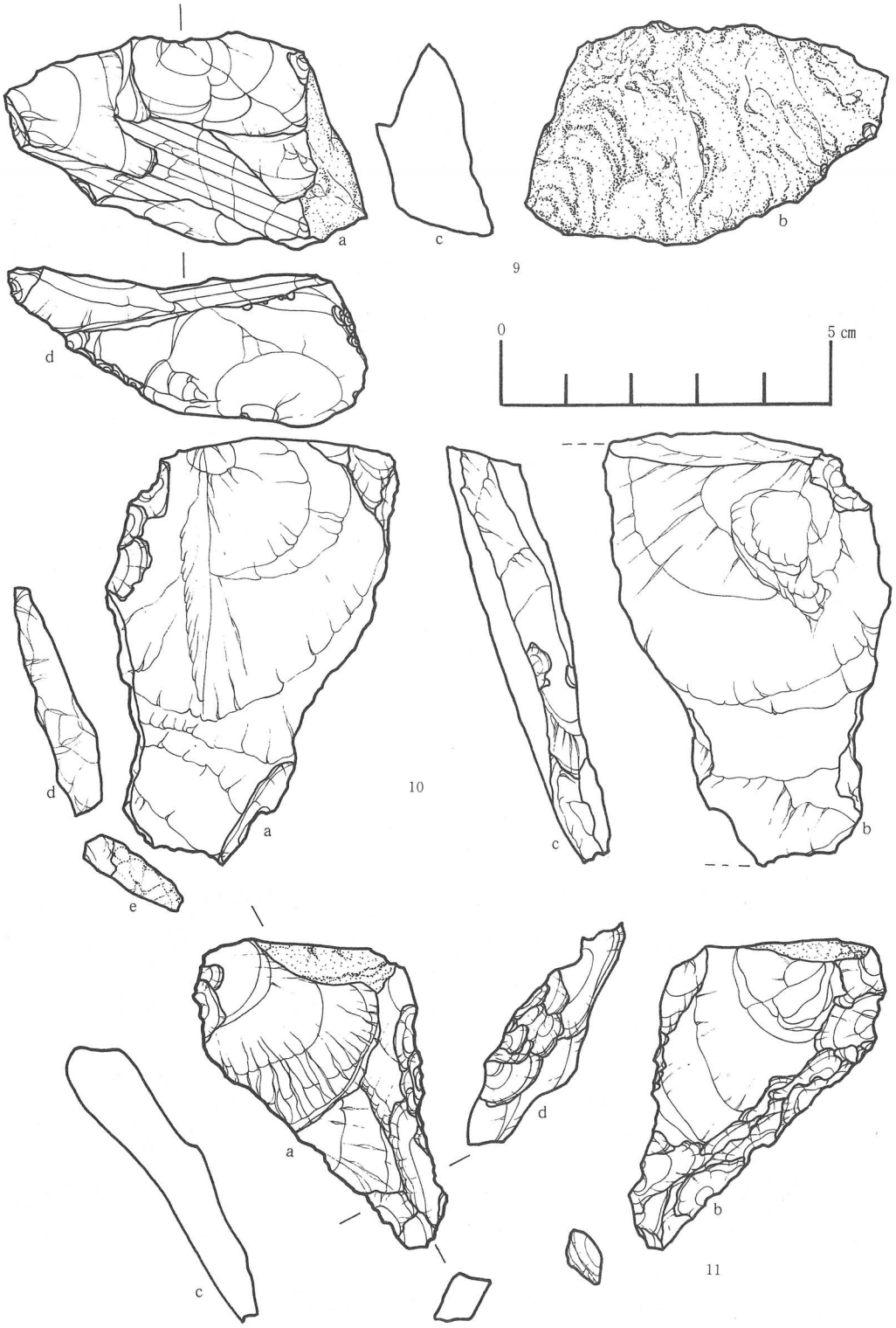
第13図　D－３ａ区15層上面出土石器（旧石器時代）



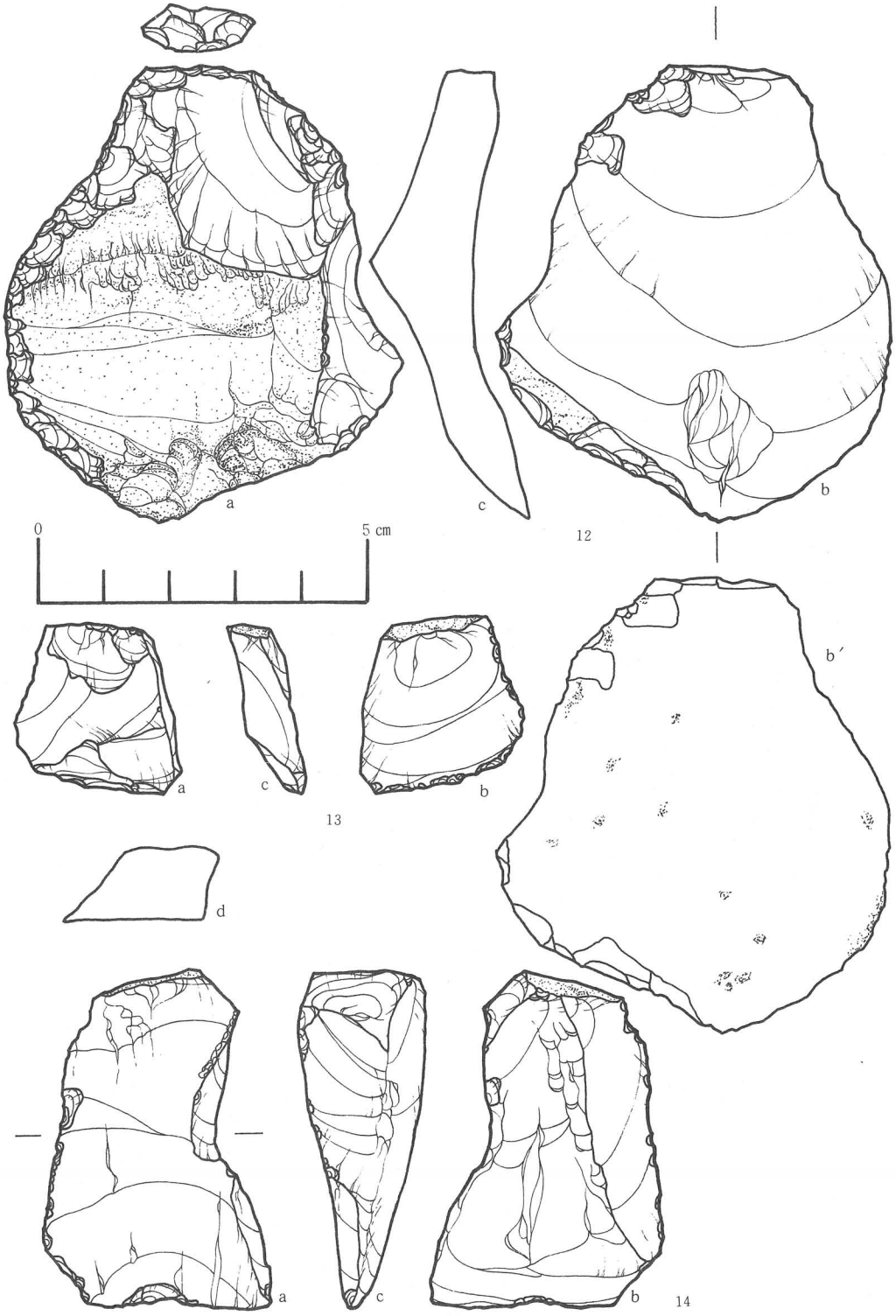
第14図　D－３ａ区15層上面出土石器（旧石器時代）



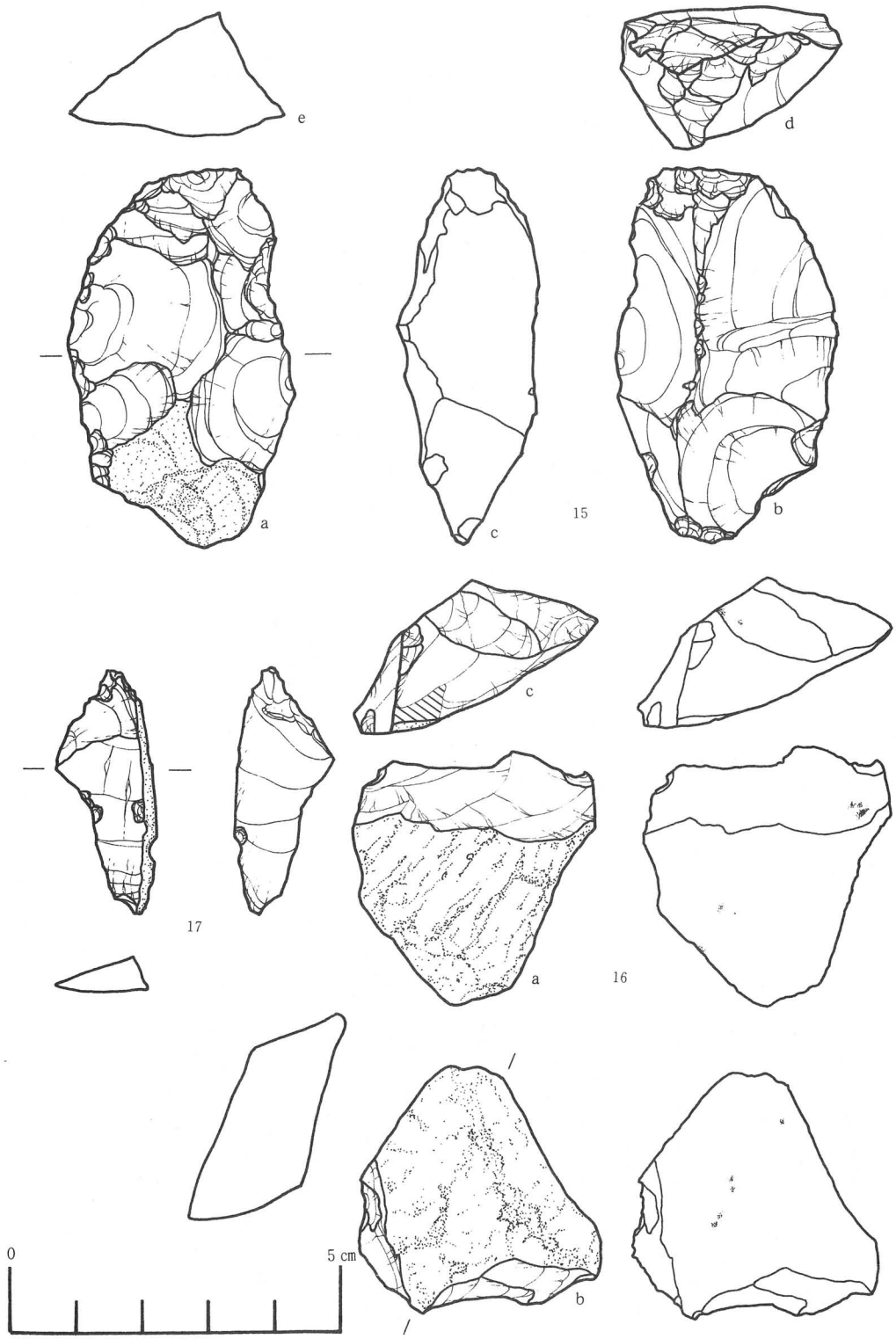
第15図　Ⅰ-５ｂ区17層上面出土石器（旧石器時代）



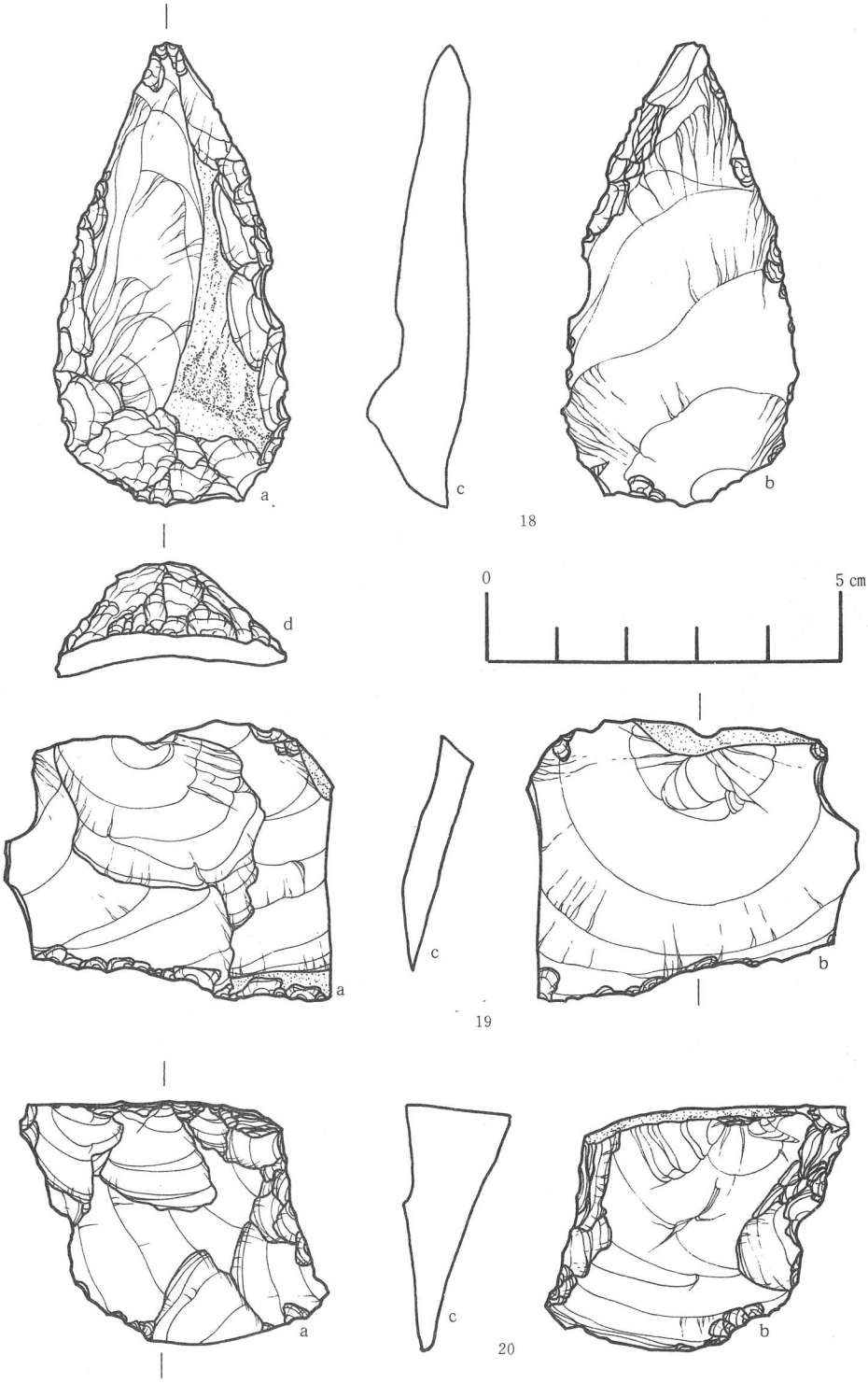
第16図　Ⅰ-５ｂ区17層上面出土石器（旧石器時代）



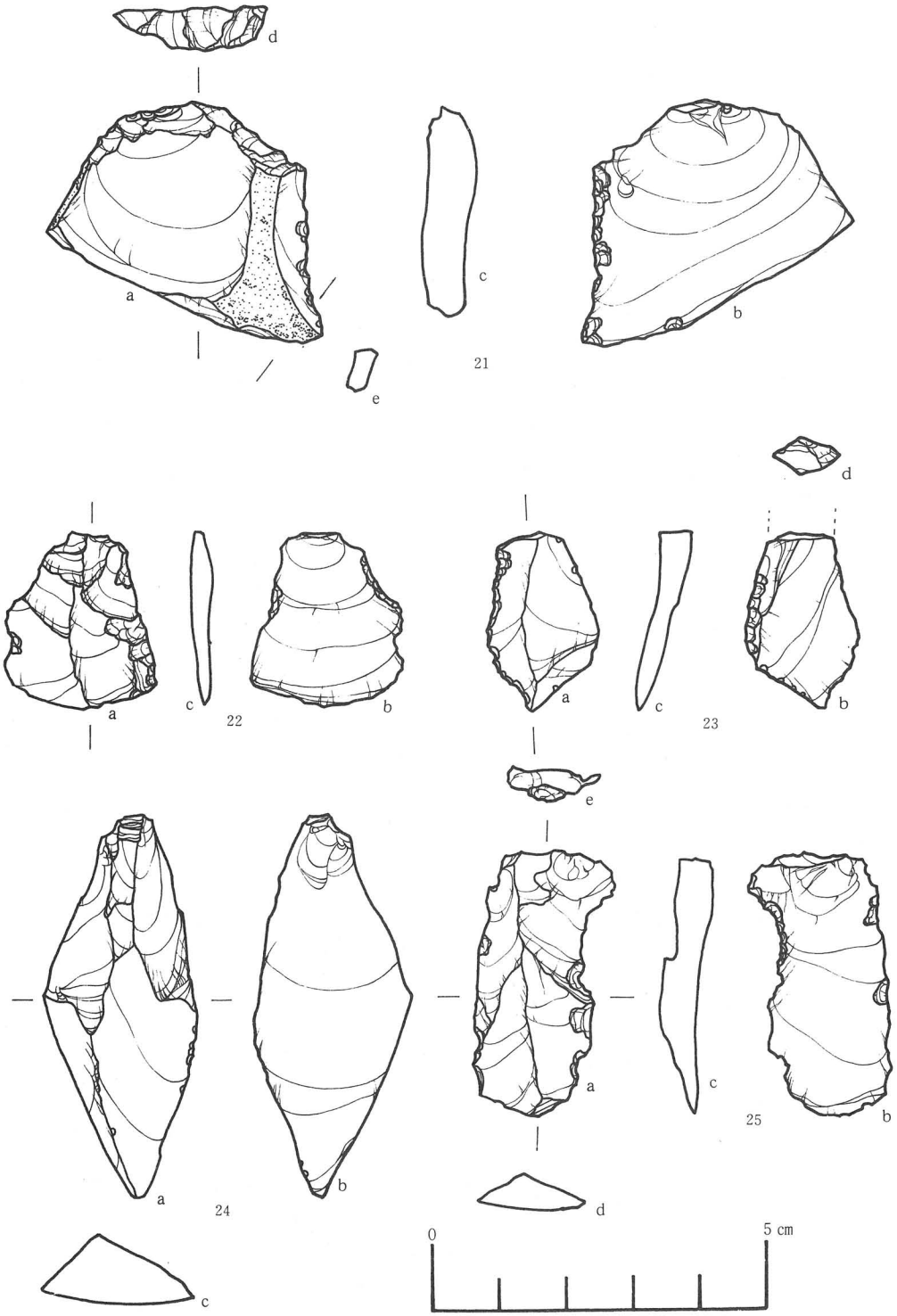
第17図　Ⅰ-５ｂ区17層上面出土石器（旧石器時代）



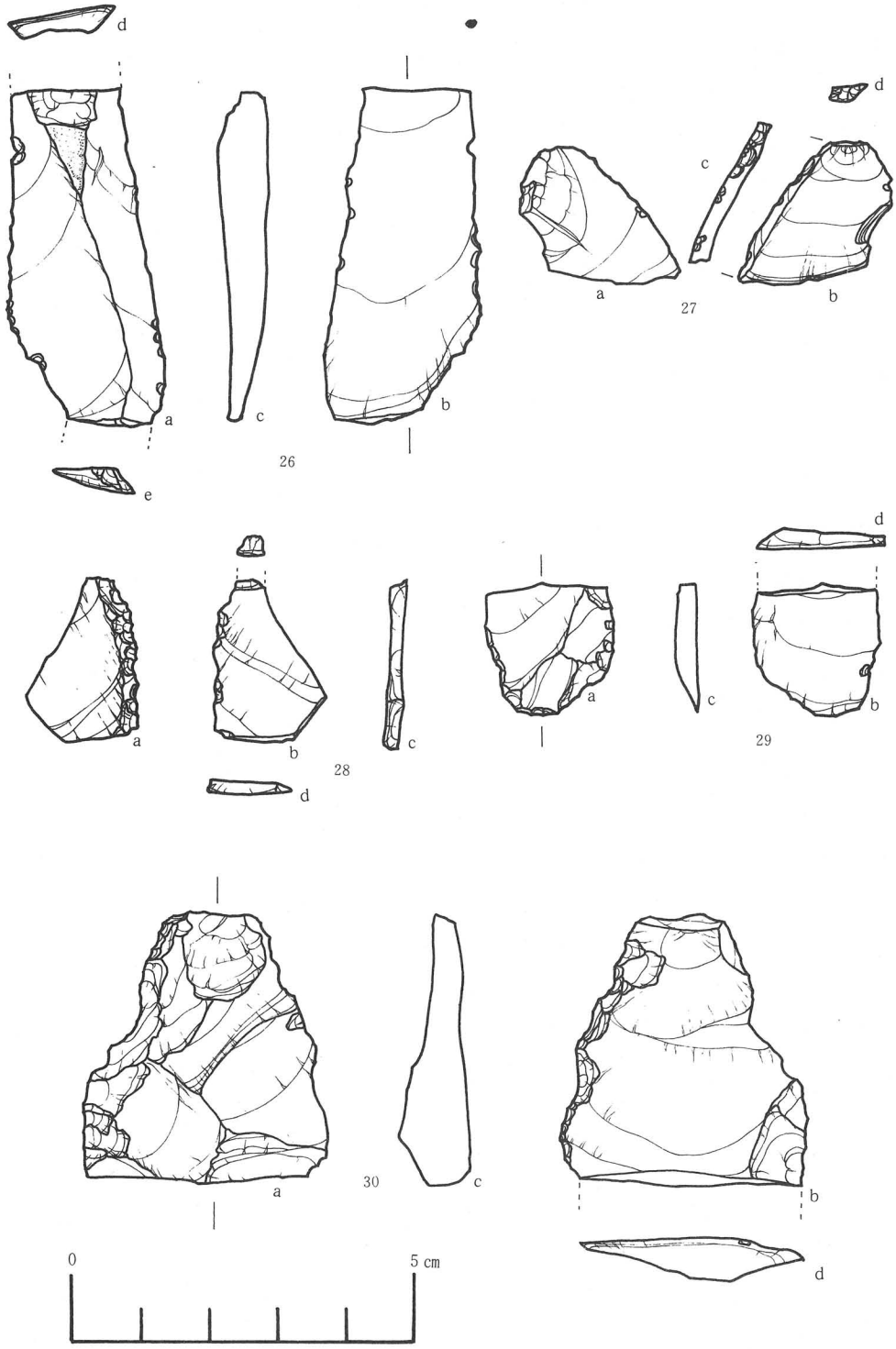
第18図　Ⅰ-５ｂ区17層上面出土石器（旧石器時代）



第19図　Ⅰ-５ｂ区17層上面出土石器（旧石器時代）



第20図　Ⅰ-５ｂ区第９層上面出土石器（21・旧石器時代）
Ａ-３ｄ区第５層上面出土石器（22～25旧石器時代）



第21図　A－３ｄ区第５層上面出土の石器（旧石器時代）

3．縄文時代早期の遺構と遺物

1号住居跡（第22図、写真2－1）

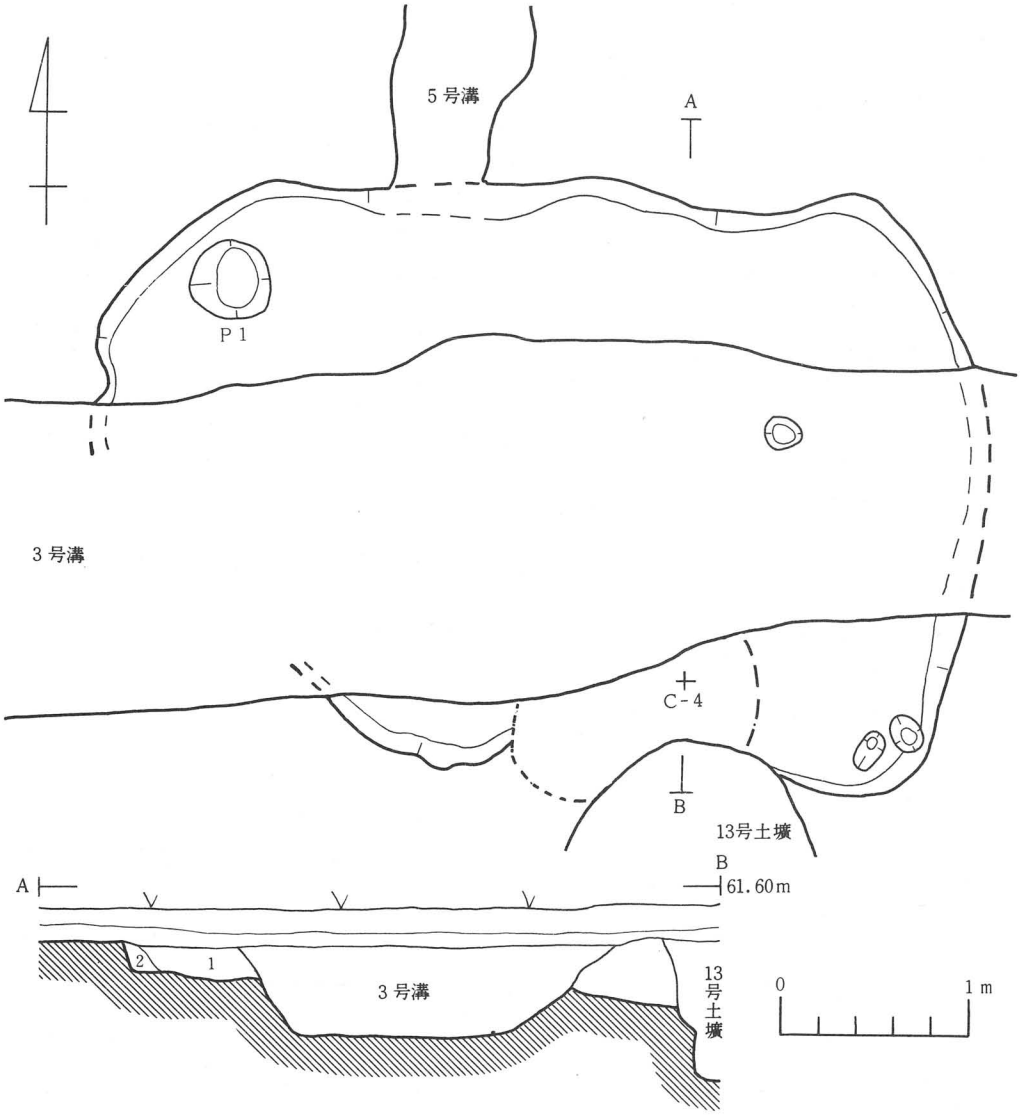
本住居跡は、調査区の北東部B－3・4区、C－3・4区に位置する。住居プランは4層上面で確認された。本住居跡は、3号溝、5号溝、13号土壙に切られている。したがって、住居跡中央部はまったく不明である。規模および形態は、明確な計測はできないが、長軸4.60m、短軸3.14m、深さ22cmの不整の隅丸長方形である。埋土は、少なくとも2層あるいはそれ以上の土層によって構成されていたと考えられる。床面は、残存部分ではほぼ平坦であり、壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面上にはピットが3個検出されているが、このうち住居跡に伴うものはP_1であり、他は後世のものである。出土遺物は、早期末の土器片40点、石器は剝片4点（第表）である。出土土器などから判断して本住居跡は、縄文時代早期末のものである。

図示し得た土器は第22図1・2である。他はいずれも細片である。1は、第2群2類bで、内面に擦痕が認められる。胎土には繊維をわずかに含む。2は、第2群2類aで、内面に極めて不明瞭な条痕文が認められる。

2号住居跡（第23図、写真2－2）

本住居跡は、調査区南東部のG－4・5区に位置する。住居プランは5層上面で確認された。明確な切り合い関係をとらえることはできなかったが、1号土壙や3号住居跡、そして本住居跡と3号住居跡との間に存在する落ち込みと切り合っている。このうち、3号住居跡については、土層の観察から本住居より古い住居と考えられる。また、南東部は削平のため、明確なプランをおさえることができなかった。規模および形態は、長軸約3.90m、短軸3.60m、深さ23cmの不整の隅丸方形、あるいは楕円形を呈する。埋土は、4層で構成されている。断面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。床面上には、ピットが16個検出されている。このうち、P_1は比較的しっかりしており主柱穴と考えられるが、他は明確にしがたい。壁際のピットは、壁柱穴と考えられる。プランの西寄りに土壙が1基検出されている。この土壙は、規模が長軸95cm、短軸約65cm、深さ15cmの楕円形を呈する。本住居跡の出土遺物は、早期末の土器片53点、礫石器1点（第24表）である。出土遺物などから判断して本住居跡は、縄文時代早期末の住居跡である。

図示し得た土器は、第23図1～6である。1は、3層より出土し、第2群1類cである。本例のような菱形の沈線モチーフは、本遺跡では他に例がない。繊維・砂粒ともに少なく、焼成良好である。2は、1層より出土し、第2群2類aに属す。繊維は少なく、変って砂粒が目立つ。3は、床面下の土壙の1層から出土し、第2群1類bに属する。内面は単節多条文を施文する。胎土には白色針状物質を含む。4は、3層より出土し、第2群1類cに属する。1部に半截竹管により沈線文が施されている。刺突のある隆帯がみられることから、Ⅰ類gとも共通

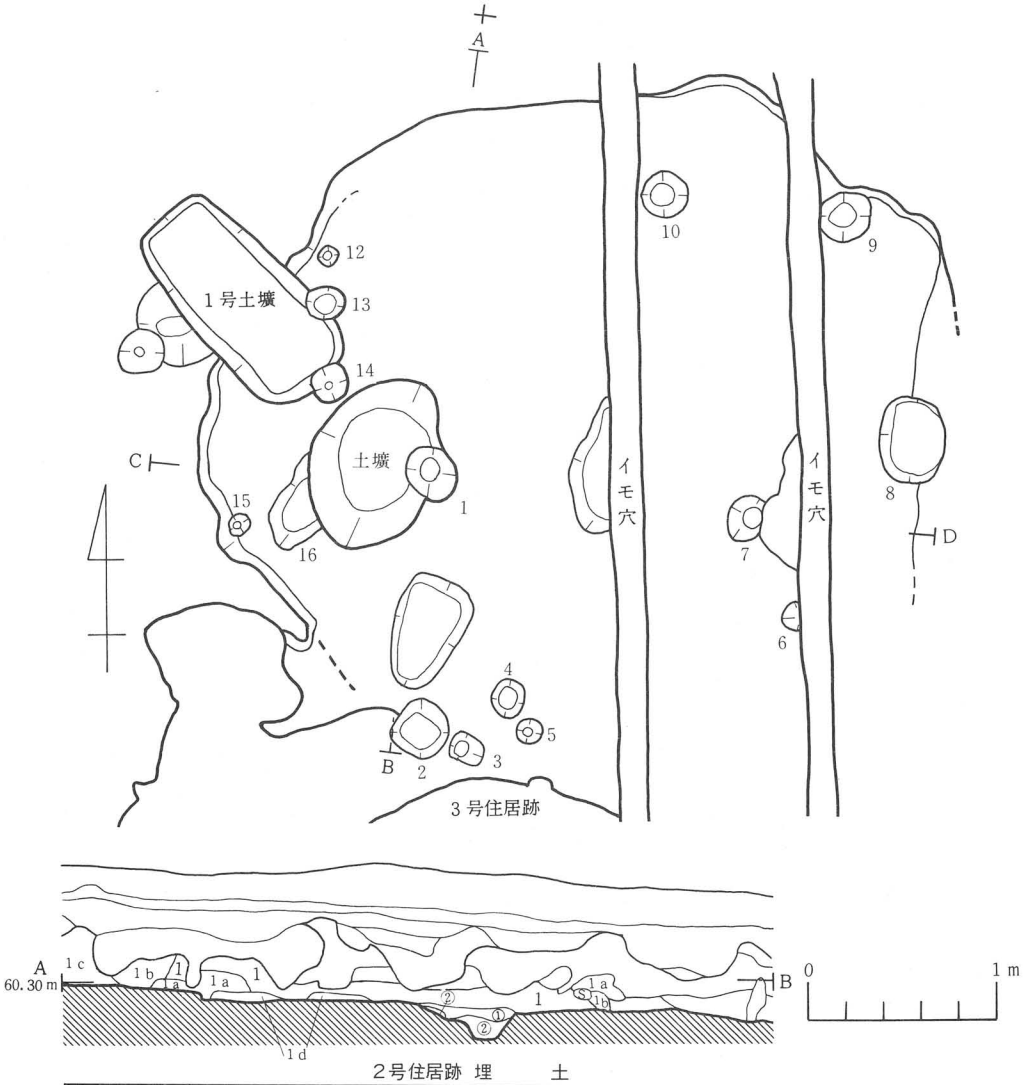


1号住居跡埋土

埋　　土

層位	土　　色		土　性
1	明褐色	7.5 YR 5/8	シルト
2	褐　色	10YR 4/6	シルト

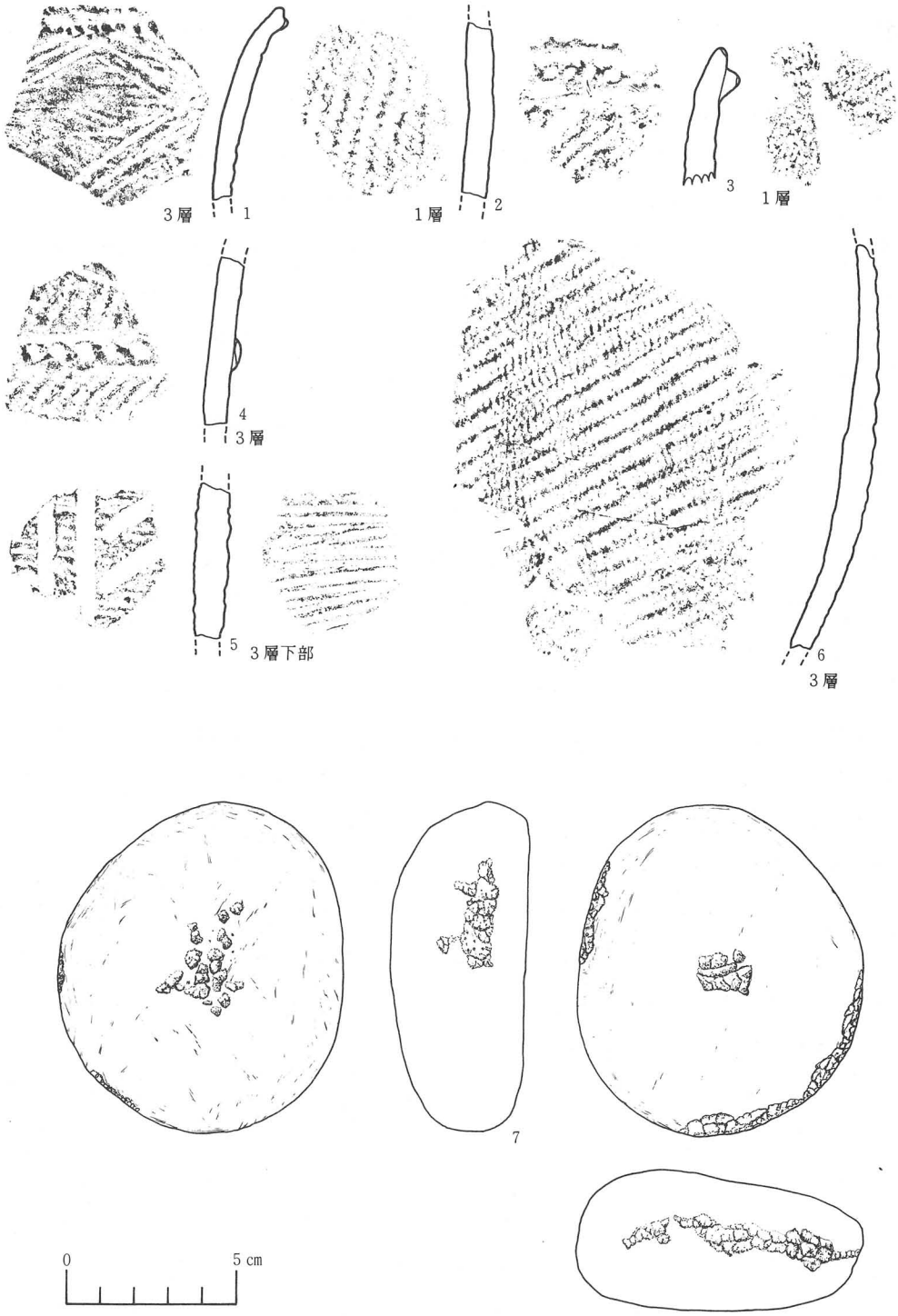
第22図　1 号 住 居 跡



2号住居跡 埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物を含む。
1a	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
1b	褐　色	10Y R 4/6	シルト	ロームを多量に含む。
1c	褐　色	10Y R 4/4	シルト	ロームを少量含む。
1d	褐　色	10Y R 4/4	シルト	ロームを部分的に含む。
1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物をまばらに含む。
2	褐　色	10Y R 4/4	シルト	黄褐色ブロックを含む。

第23図　2 号 住 居 跡



第24図　２号住居跡出土遺物

する。焼成良好。5は、3層より出土し、第2群2類gに属する。内面には条痕文が施される。繊維は比較的多い。6は、3層より出土し、第2群2類aに属する。外面の縄文は単節多条文である。焼成良好。

3号住居跡（第25図、写真2－3）

本住居跡は、調査区南東部G－4・5区、H－4・5区に位置する。住居プランは5層上面で確認された。切り合い関係は、2号住居跡の南東部が不明瞭なため不明な点が多いが、土層の観察によれば、2号住居跡より古いものと考えられる。規模および形態は、長軸3.56m、短軸3.49m、深さ33cmの不整の隅丸方形あるいは楕円形を呈する。埋土は、4層で構成されている。断面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは25個検出されているが、このうち主柱穴と考えられるのは、P_1～P_3、P_5～P_7の6個である。壁際に位置するものは、壁柱穴と考えられる。住居内の南側に、土壙が検出された。この土壙の規模は、長軸1.3m以上、短軸約1.05m、深さ11cmで、形態は楕円形を呈するが、北側では床面と区別がつかない。出土遺物は、早期末の土器片110点、石器は、石鏃、ポイント、敲石各1点、ピエス・エスキーユ3点、ヘラ状石器1点、二次加工のある剥片3点、微細剥離痕のある剥片14点、剥片27点、チップ11点、破損礫2点（第12・13表）である。本住居跡は、出土遺物などから判断して、縄文時代早期末のものである。

図示し得た土器は、第26図1～6である。1は1層より出土し、第2群1類bに属する。内面は無文である。胎土は砂粒が目立つ。2は、1層より出土し、第2群1類bに属する。単節縄文が施文され、内面はこれが横位に施文されている。繊維は少なく、砂粒が目立つ。3は第2群2類aに属する。原体はLRである。4は、1層より出土し、第2群1類bに属する。本例は唯一の波状口縁である。内面には単節多条文を施文する。5は、2層より出土し、第2群2類cに属する。縄文原体は単節多条文のようである。内面の先端に縄文の施文が認められることから、口縁部に近い資料であろう。繊維は多い。6は、2層より出土し、第2群2類dに属する。原体は内外ともにLRである。

4号住居跡（第27図、写真2－5）

本住居跡は、南東部H－4・5区、I－4・5区に位置する。住居プランは5層上面で確認された。明確な切り合い関係はなく、北側で4号溝と接し、南半は床面付近まで削平されている。規模および形態は、長軸3.48m、短軸3.32m、深さ22cmの不整の隅丸方形を呈する。埋土は、8層で構成されるが、4層～8層は木の根の影響で形成された層と考えられる。床面は、比較的平坦であるが、壁に近づくにしたがってゆるく立ち上がってゆく。また、北西部では、床面に段差が生じている。床面上には、28個のピットが検出されているが、主柱穴と考えられるものは掘り込みのしっかりしたP_1、P_4、P_{10}である。また、住居跡との関連が明確でないも

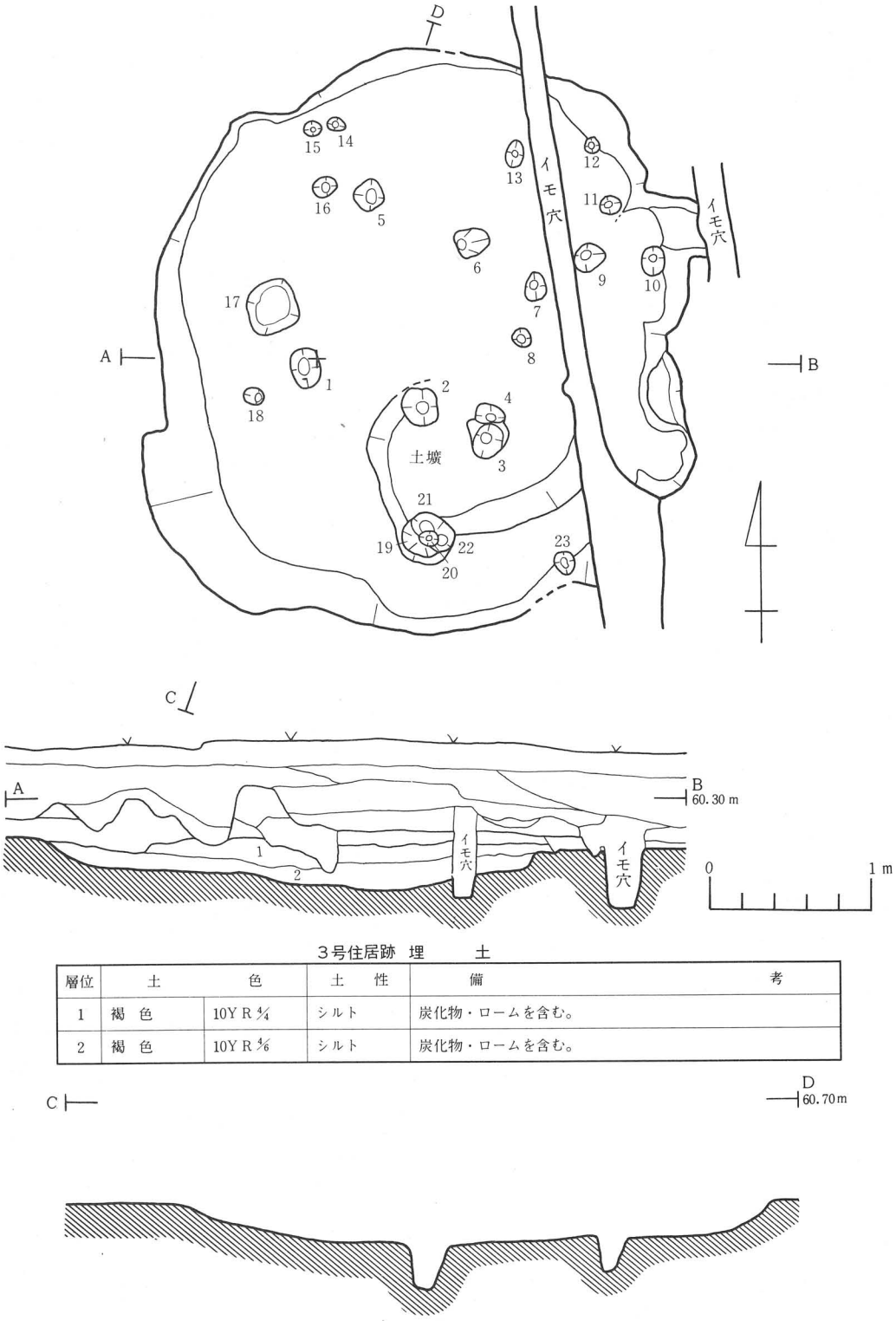
のは、P_5、P_6、P_{13}～P_{16}、P_{20}である。壁際のピットは、壁柱穴と考えられる。床面には、2号、3号住居跡同様に、南東部に浅い土壙が検出された。規模は長軸90cm、短軸81cm、深さ8cmで、形態は、不整楕円形を呈する。遺物は、早期末の土器片64点、石器は、石鏃、ポイント、スクレイパー各1点、ヘラ状石器2点、ピエスエスキーユ2点、石核1点、二次加工のある剥片3点、微細剥離痕のある剥片2点、剥片19点、チップ1点(第12・13表)が出土している。出土遺物などから判断して、本住居跡は縄文時代早期末のものである。

図示し得た土器は第28図1・2である。1は、1層より出土し、第2群3類bに属する。単節斜縄文を施文する。内面には、貝殻腹縁の圧痕が1条認められる。胎土に白色針状物質を含む。2は、1層より出土し、第2群2類fに属する。内面は条痕文が施文される。胎土には、白色針状物を含み、砂粒が多い。

5号住居跡（第29図、写真2－7）

本住居跡は、調査区中央からやや南寄りのG－6・7区、H－6・7区に位置する。住居プランは5層上面で確認された。切り合い関係は、6号住居跡を切っている。規模および形態は、長軸6.28m、短軸3.60m、深さ13cmの不整の隅丸長方形を呈する。埋土は、3層で構成されている。床面は、地形面と平行してやや南側に傾斜しているが、平坦である。ピットは、床面上や住居跡周辺部合わせて133個検出されている。このうち、P_1～P_6、P_9～P_{14}が主柱穴と考えられ、また、P_7、P_8、P_{15}～P_{18}もその可能性がある。P_{19}～P_{58}は、壁柱穴と考えられる。その他のピットについては、その性格を明確にできない。北壁中央部のやや東寄りの床面に、焼土が検出され、断面観察では、掘り込んでいる部分が2ケ所確認された。したがって、この2ケ所の濃い焼土部分は、炉であると判断される。P_{45}とP_{44}の間でP_{65}の周辺には、床面上にロームブロックが散見された。本住居跡は、部分的に主柱穴の位置変えか、北西部の壁柱穴の配置から部分的に改築を行っているようである。出土遺物は、早期末の土器片129点、石鏃9点、ポイント2点、スクレイパー3点、ヘラ状石器1点、ピエスエスキーユ7点、石核1点、二次加工のある剥片17点、微細剥離痕のある剥片13点、剥片111点、磨石3点、チップ113点(第12・13表)がある。特に、P_5の北側の床面上には、ピエスエスキーユ2点、剥片26点の集中地点が1ケ所確認された。石器の出土点数が極めて多い。本住居跡は、出土遺物などから判断して縄文時代早期末の住居跡である。他の住居跡と比較した場合に、形態が異なること、面積比も約2倍近くあること、炉跡を持つこと、そして、早期の総石器数の約5割を占めることなどから、他の住居跡とは異なる性格が想定されよう。

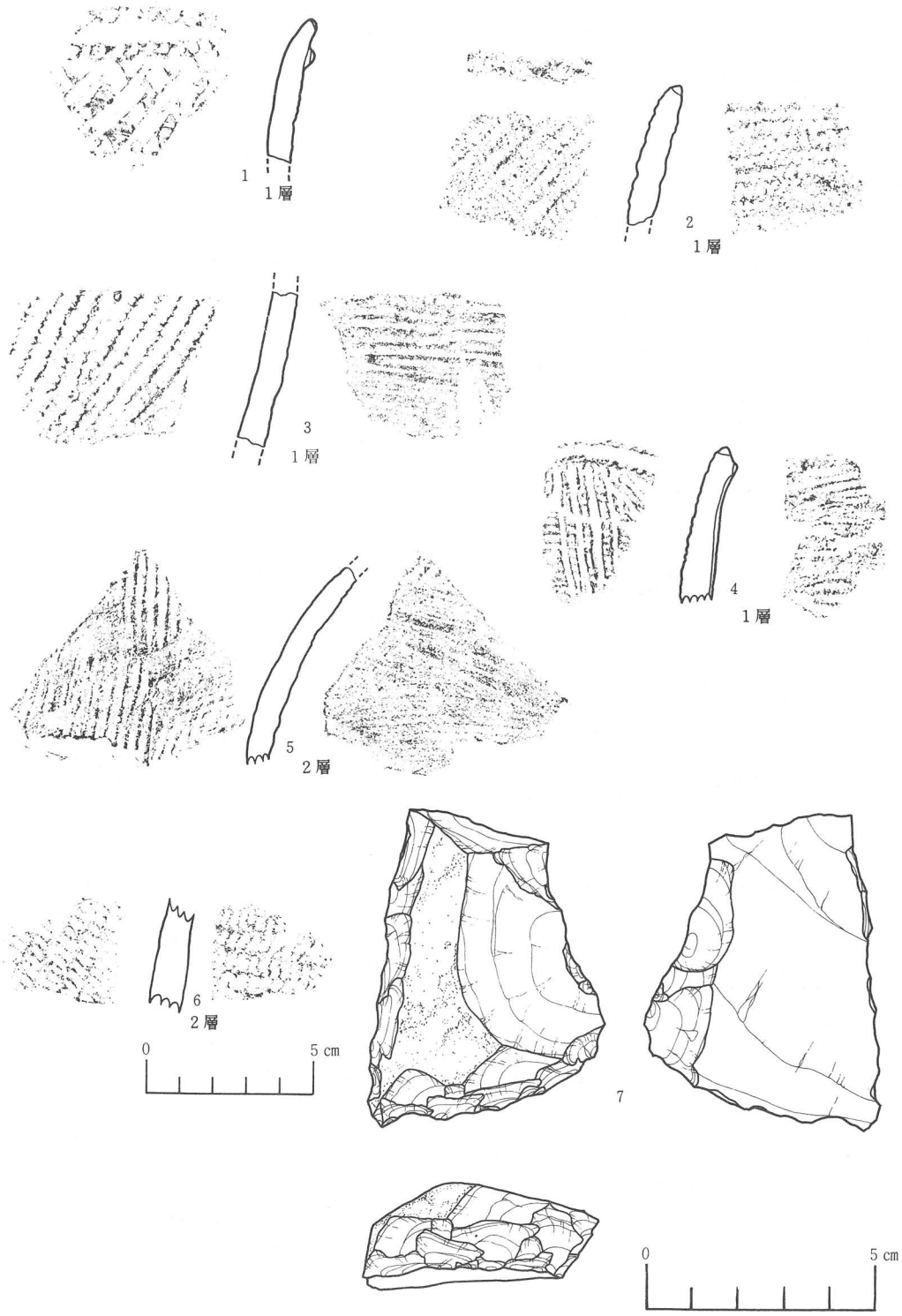
図示し得た土器は、第30図1～5である。1はNo.73ピットより出土し、第2群3類aに属する。砂粒が多い。2は1層より出土し、第2群2類bに属する。原体は単節多条文である。3は、1層より出土し、第2群1類eに属すると考えられる。繊維は少ない。4は、No.42ピット



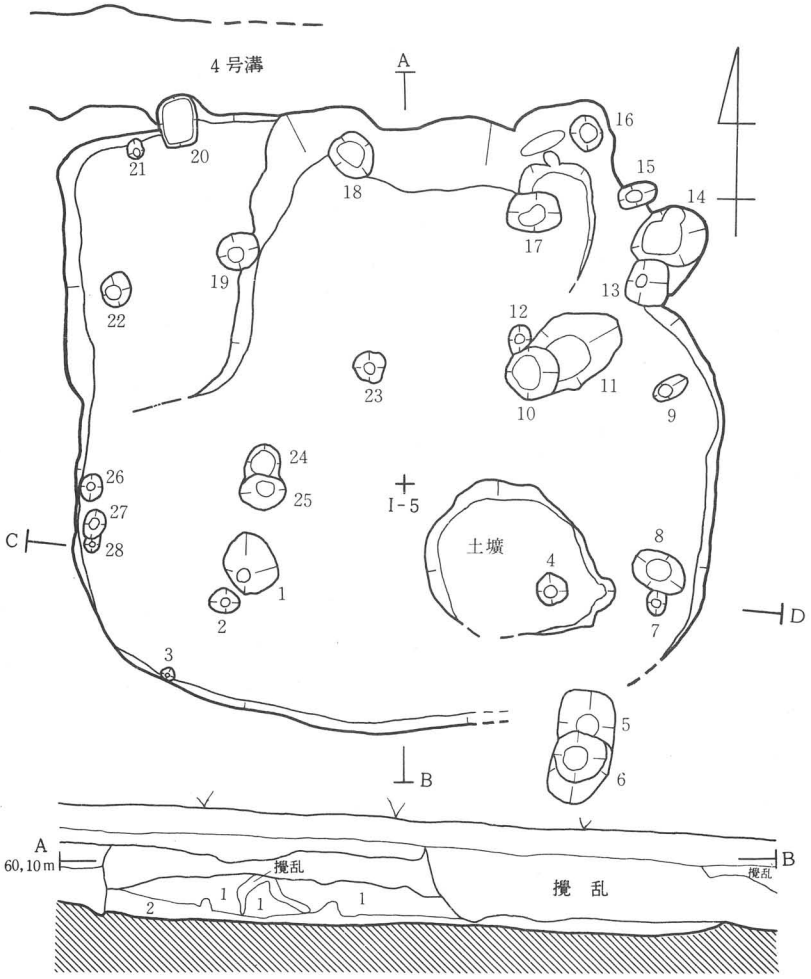
3号住居跡 埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	褐　色	10Y R 4/4	シルト	炭化物・ロームを含む。
2	褐　色	10Y R 4/6	シルト	炭化物・ロームを含む。

第25図　3 号 住 居 跡

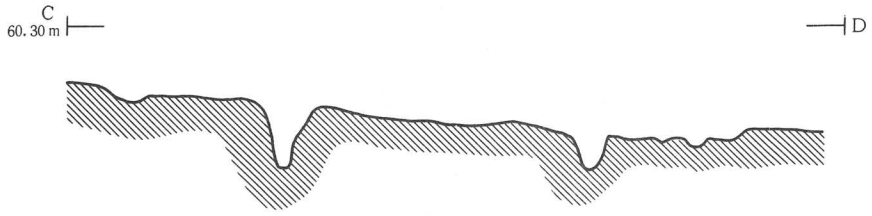


第26図　３号住居跡出土遺物

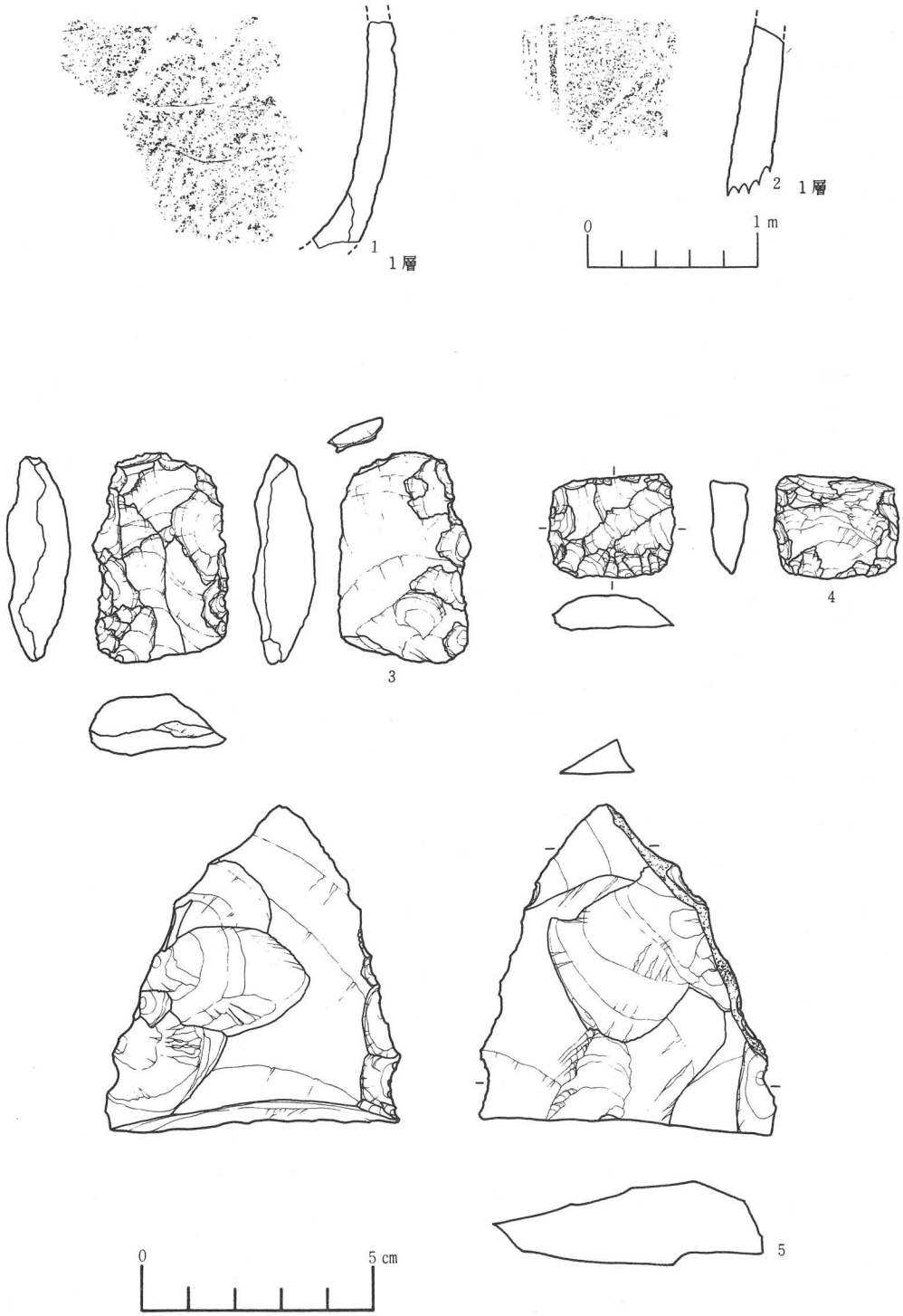


埋　土

層位	土　色		土　性	備　考
1	暗褐色	10YR 3/4	シルト	ローム粒子・円礫（約5cm）を含む。
2	褐　色	10YR 4/4	シルト	ロームブロック・炭化物を少し含む。



第27図　4号住居跡



第28図　４号住居跡出土遺物

より出土し、第２群１類ｅに属する。胎土は白色砂粒を多量に含む。５は、２層より出土し、第２群１類ａに属する。内面の原体は単節多条文であろう。

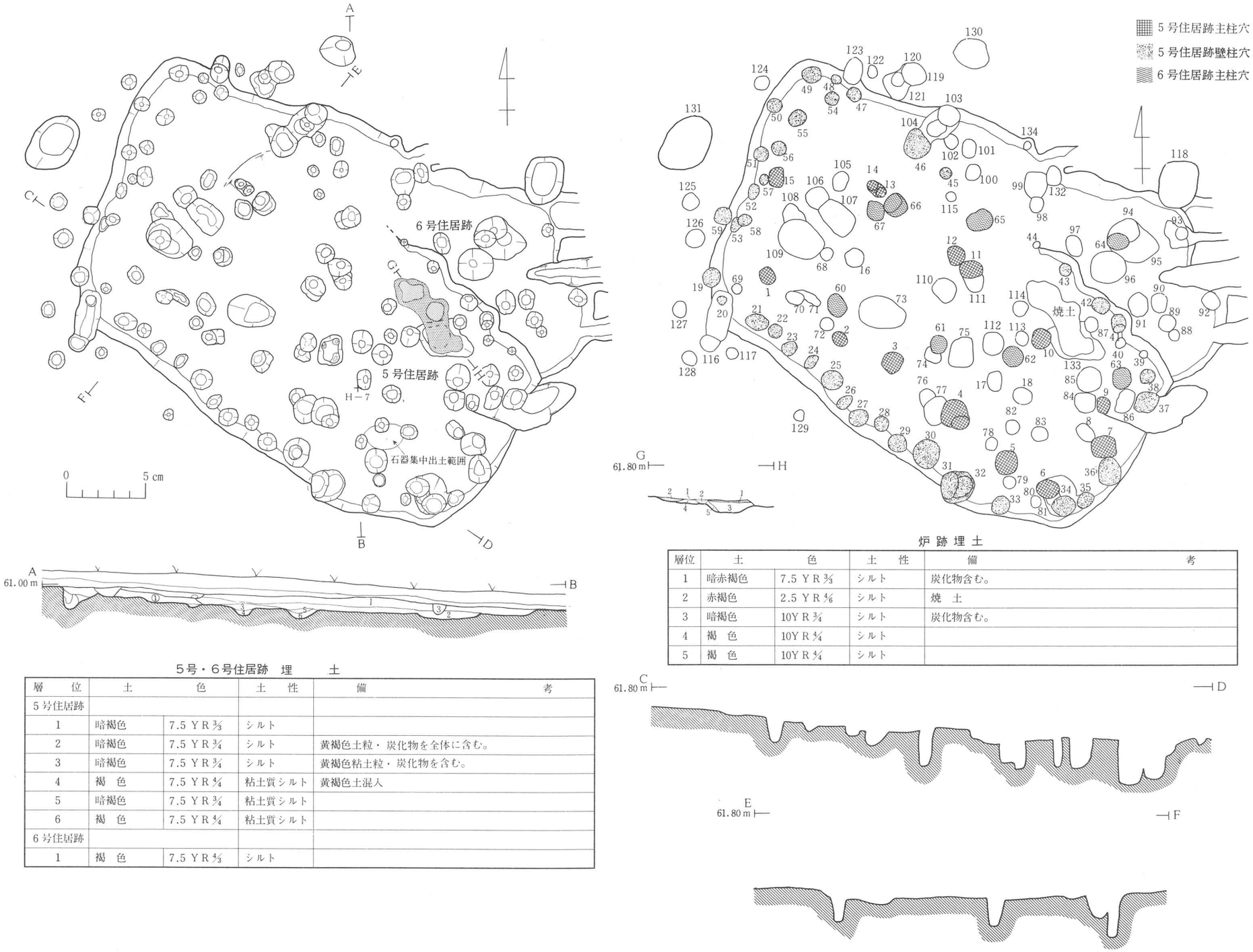
６号住居跡（第29図、写真２－７）

本住居跡は、調査区中央からやや南寄りのＧ－６・７区に位置している。住居跡の検出面は、第５層上面である。本住居跡は、５号住居跡によって南側⅔以上を切られている。規模および形態は、明確なプランがつかめないが、５号住居の北西部床面上にゆるい段差が認められることから、長軸約5.00m、短軸約3.50m、深さ10cmの不整の隅丸長方形を呈すると考えられる。埋土は、明確ではないが、残存部分では１層で構成されている。床面は、やや南側に傾斜しているものの、ほぼ平坦である。壁はゆるく立ち上がる。主柱穴は明確ではないが、P_{60}～P_{67}が最も可能性があると考えられる。P_{46}からP_{14}付近にかけてゆるい段差があり、本住居のプランの可能性が強い。出土遺物は、早期末の土器片25点・石鏃１点・石核１点・二次加工のある剥片２点・微細剥離痕のある剥片１点・剥片７点（第12・13表）である。出土遺物などから判断して縄文時代早期末の住居跡である。土器は細片のみで図示できない。

７号住居跡（第31図、写真２－６）

本住居跡は、調査区南部Ｉ－７・８区を中心に位置する。住居跡の検出面は、第５層中である。この検出面については、４号溝に囲まれた南側の部分で４層・５層が確認できなかったことから、４号溝の構築時かあるいはその前後の時期に削平を受けた結果と考えられる。したがって、本住居跡ではほとんど床面のみが検出された。江戸時代以降のピットに切られ、また、10号土壙と切り合い関係にあるが、新旧は不明である。規模および形態は、長軸4.27m、短軸3.01m、深さ17cmの不整の隅丸長方形を呈する。埋土は、４層で構成されている。壁の立ち上がりは不明である。床面は皿状を呈し、17個のピットが確認された。このうち、P_3、P_5、P_6、P_{11}、P_{12}が主柱穴と考えられ、さらに、P_1、P_8についてもその可能性が認められる。床面中央の西側に、土壙が１基検出された。規模および形態は、長軸1.21m、短軸0.82m、深さ22cmの楕円形を呈し、その位置は、１号住居跡と共通する。土壙の底は、さらに段差がある。本住居跡の出土遺物は、早期末の土器片99点、ピエスエスキーユ２点、石核１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片７点、凹石１点、磨石2点（第12・13表）などである。これらのことから判断して、本住居跡は縄文時代早期末のものである。

図示し得た土器は、第32図２～５である。２は、１層より出土し、第２群２類ａに属する。繊維を多く含む。３は、１層より出土し、第２群１類ａに属する。幾何学的な文様がくずれて曲線文となる。繊維を多く含む。４は、１層より出土し、第２群１類ｂに属する。胴部文様の原体は単節多条文と考えられる。５は、４層より出土し、第２群２類ｂの土器を利用した円盤状土製品である。全周の約半分を研磨している。



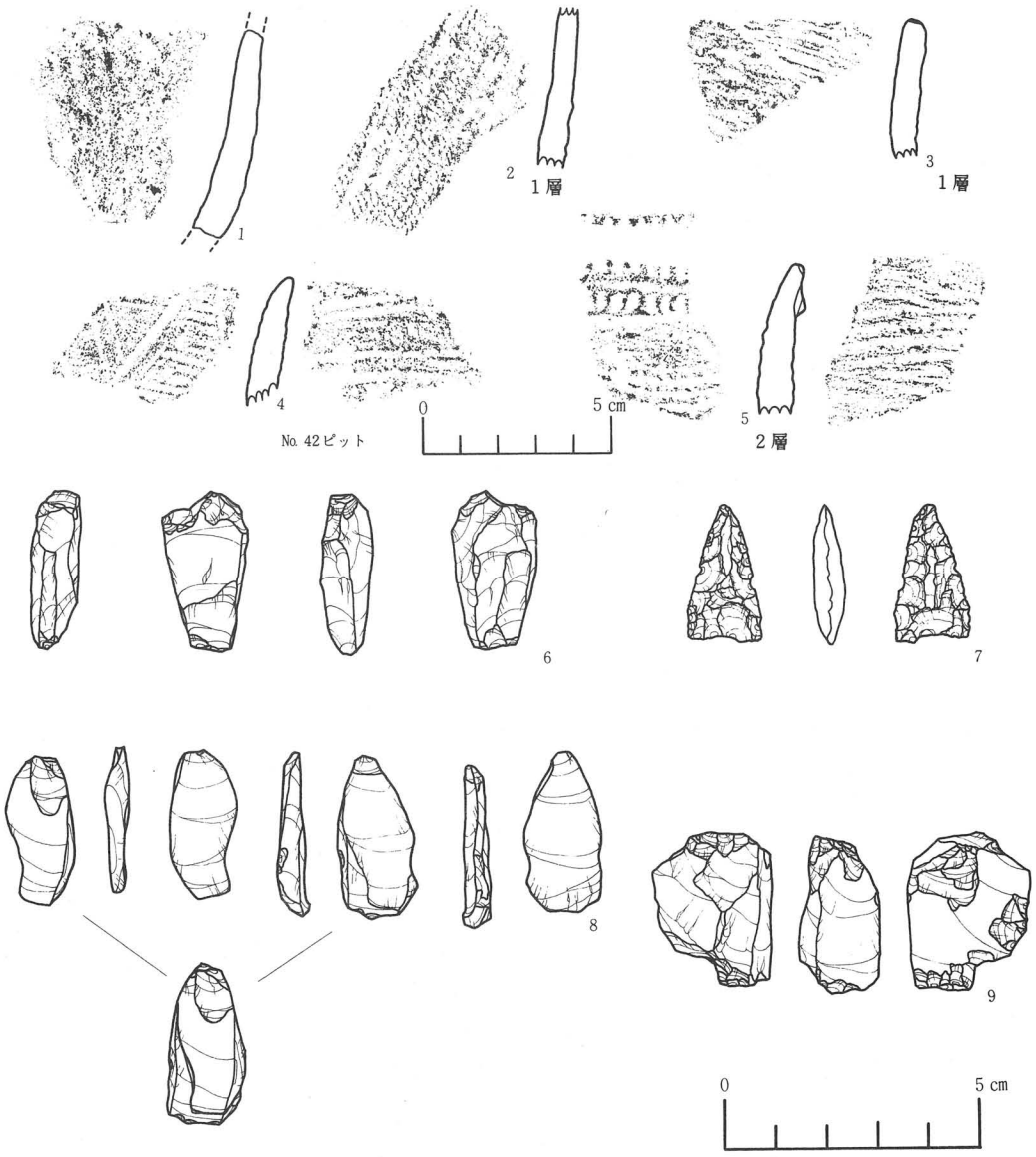
炉跡埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗赤褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	炭化物含む。
2	赤褐色	2.5 Y R 4/6	シルト	焼土
3	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物含む。
4	褐色	10Y R 4/4	シルト	
5	褐色	10Y R 4/4	シルト	

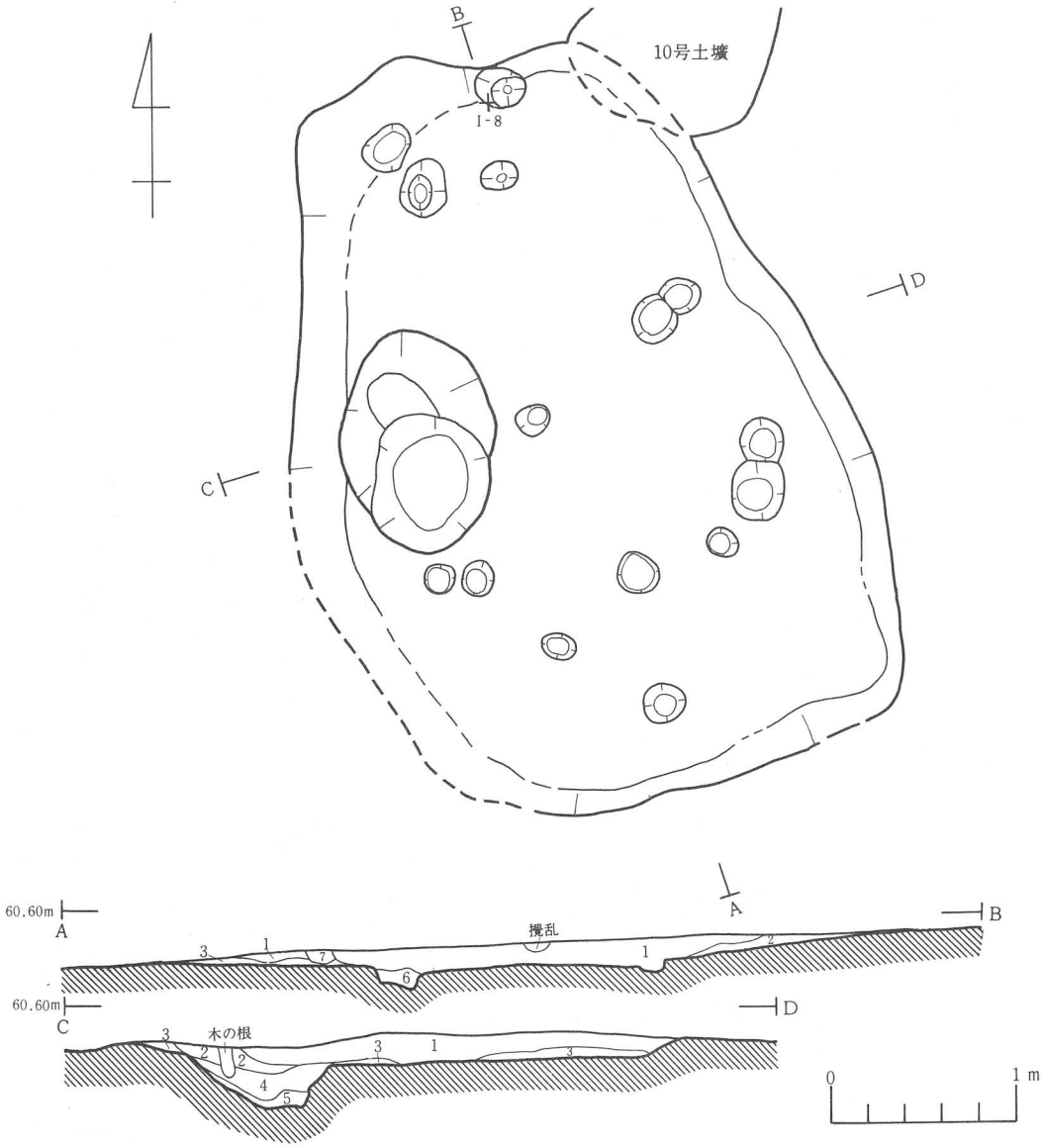
5号・6号住居跡 埋土

層位	土色		土性	備考
5号住居跡				
1	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	
2	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	黄褐色土粒・炭化物を全体に含む。
3	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	黄褐色粘土粒・炭化物を含む。
4	褐色	7.5 Y R 4/4	粘土質シルト	黄褐色土混入
5	暗褐色	7.5 Y R 3/4	粘土質シルト	
6	褐色	7.5 Y R 4/4	粘土質シルト	
6号住居跡				
1	褐色	7.5 Y R 4/3	シルト	

第29図　5号住居跡・6号住居跡



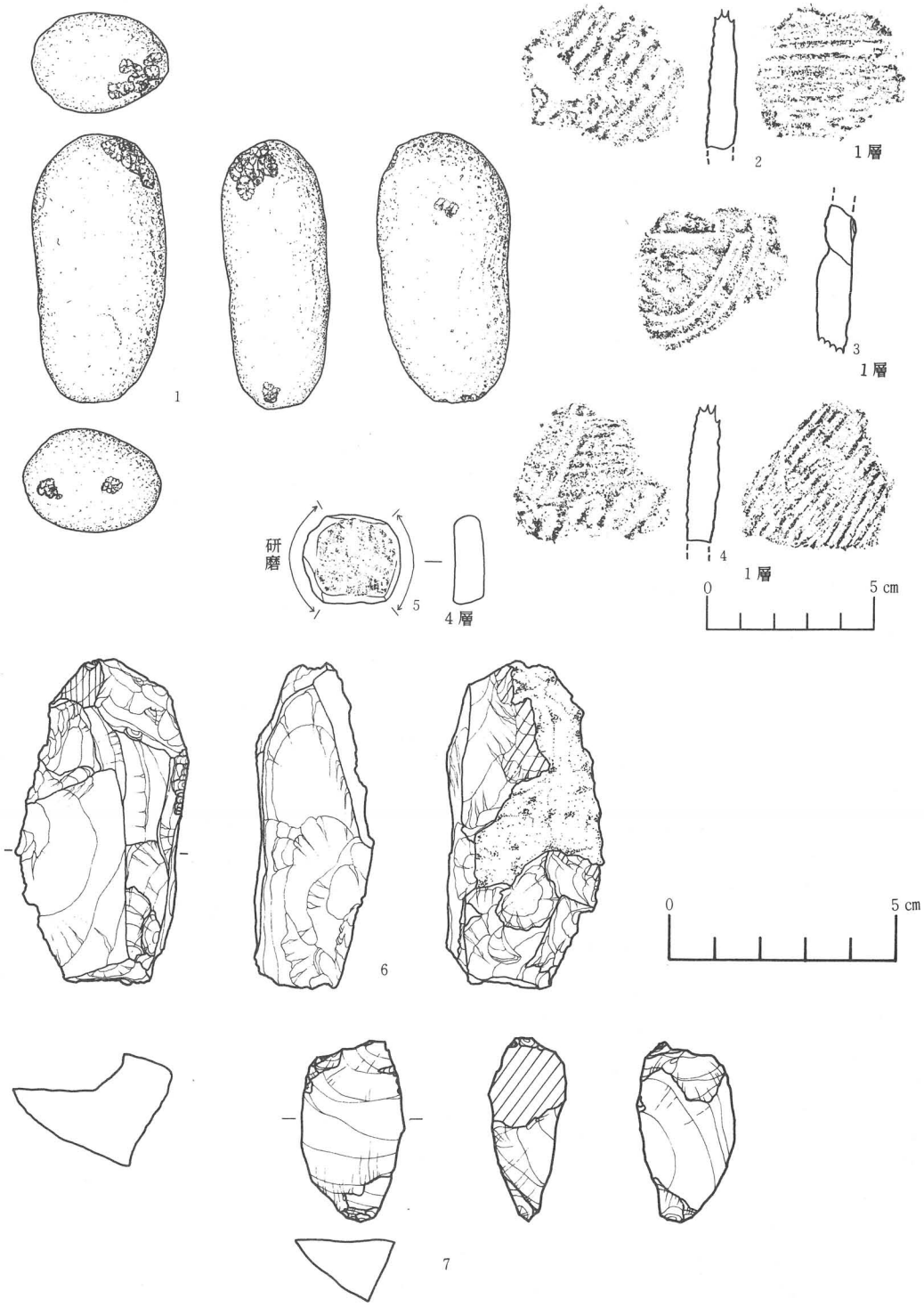
第30図　５号住居跡出土遺物



7号住居跡埋土 埋　　土

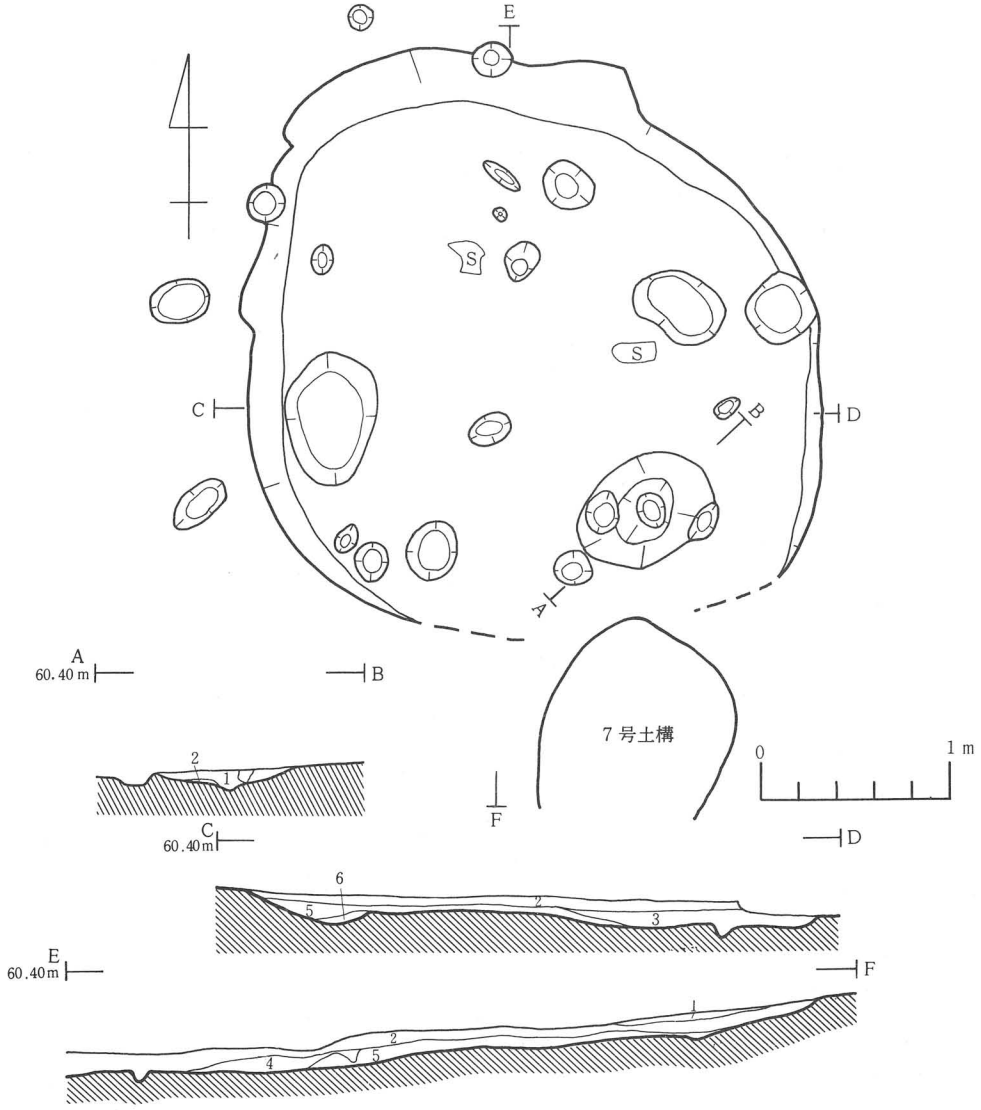
層位	土	色	土　性	備　　考
1	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	炭化物（5～1mm）を少量含む。
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	焼土（1mm）を微量含む。
3	褐　色	10Y R 5/4	シルト	ロームをブロック状に含む。
4	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	ローム・焼土・炭化物を含む。
5	明黄褐色	2.5 Y R 6/8	粘土質シルト	暗褐色土をブロック状に少量含む。
6	黄褐色	10Y R 5/8	粘土質シルト	
7	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	

第31図　7 号 住 居 跡



第32図　6・7号住居跡出土遺物

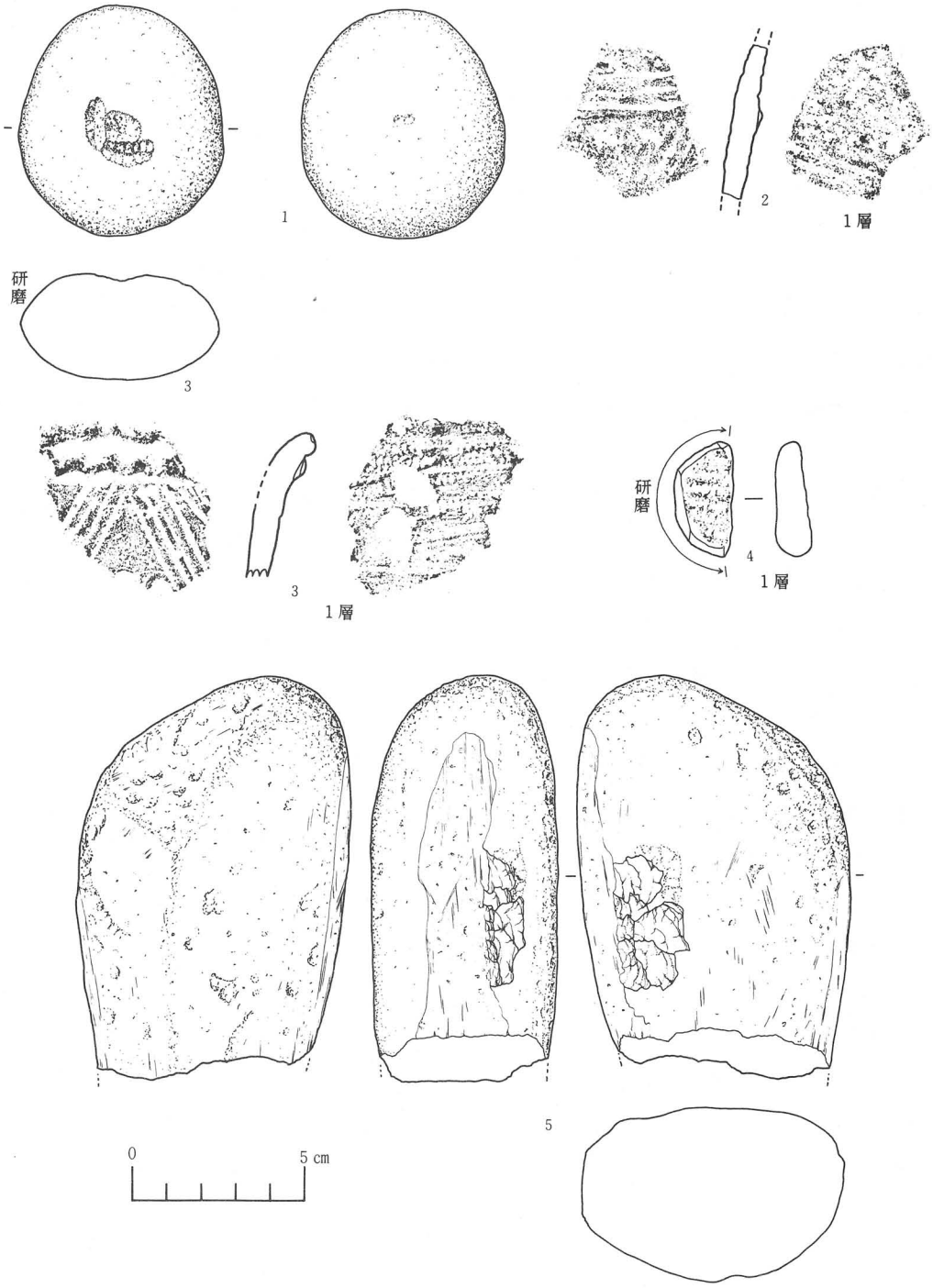
（1．6号住居跡、2～7．7号住居跡）



8号住居跡　埋　　土

層位	土	色	土　性	備　　考
1	暗褐色	7.5 YR ¾7.5	YR ¾	基本層位3層に相当する可能性あり。
2	褐　色	7.5 YR ¾	シルト	
3	褐　色	10YR ⅚	シルト	
4	暗褐色	7.5 YR ¾	シルト	
5	褐　色	7.5 YR ¾	シルト	
6	褐　色	10YR ⅚	シルト	土壙埋土
南側土壙				
1	暗褐色	7.5 YR ¾	シルト	
2	暗褐色	7.5 YR ¾	粘土質シルト	

第33図　8 号 住 居 跡



第34図　7・8号住居跡出土遺物（1．7号住居跡、2～4．8号住居跡）

８号住居跡（第33図）

本住居跡は、調査区南部の中央Ｉ－６・７区に位置する。住居跡の検出面は、７号住居跡と同様に上部が削平されているため明確な判断はできないが、第５層中である。本来は、第５層上面であろう。本住居跡は、36号土壙に切られ、７号土壙と切り合っている。しかし、この７号土壙との新旧関係は不明である。規模および形態は、長軸約3.30m、短軸3.06m、深さ17cmの不整楕円形、あるいは隅丸方形と考えられる。埋土は４層で構成されている。床面は、皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。また、床面上にはピットが13個確認された。このうち、P_1、P_4、P_7、P_{11}に主柱穴の可能性が認められる。また、住居の西側および南側に、土壙が１基ずつ確認された。西側の土壙は、長軸70cm、短軸49cm、深さ11cmの楕円形を呈する。南側の土壙は、長軸73cm、短軸53cm、深さ９cmの楕円形を呈する。土壙底にはピットが１個検出されている。本住居跡の出土遺物は、早期末の土器片61点(第５表)である。石器は出土していない。出土遺物などから判断して、縄文時代早期末の住居跡である。

図示し得た土器は、第34図２～４である。２は、１層より出土し、第２群２類ｇに属する。内面はわずかに条痕文の痕跡を留める。隆帯下に縄文が施文されている。３は、１層より出土し、第２群１類ａに属する。繊維を多く含み、もろい。内面は、条痕文の上にさらに縄文を施文している。４は、１層より出土し、第２群２類ｂの土器を利用した円盤状土製品である。原体は単節多条文である。残存部は全面研磨されている。

１号土壙（第35図、写真３－１）

本土壙は、調査区南東部Ｇ－５区に位置している。確認面は第４層上面である。本土壙は、上部が耕作によって部分的に攪乱を受け、また、２号住居跡と切り合っているが、新旧関係は不明である。規模および形態は、長軸1.23m、短軸0.61m、深さ39.6cmの隅丸方形を呈する。埋土は４層で構成されている。底面は、若干皿状に窪み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は、早期末の土器片11点、ヘラ状石器１点が検出されている。出土遺物などから判断して、本土壙は縄文時代早期末の土壙である。

２号土壙（第36図、写真３－２）

本土壙は、調査区南東部Ｇ－５区に位置している。確認面は第４層上面である。本土壙は、南側が耕作によって攪乱を受けている。また、３号土壙を切っている。規模および形態は、長軸約1.2m、短軸0.69m、深さ34.2cmの隅丸形を呈する。埋土は６層で構成されている。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。遺物は、早期末の土器片が９点出土している。出土遺物から判断して、本土壙は縄文時代早期末の土壙である。第36図の土器は第２群ｂである。

３号土壙（第36図）

本土壙は、調査区南東部Ｇ－５区に位置している。確認面は第４層上面である。本土壙は、

東側を２号土壙によって切られている。規模および形態は、長軸1.72m、短軸1.43m、深さ21.6cmで楕円形を呈する。埋土は、４層で構成されている。底面は平坦であり、壁はゆるく立ち上がる。また、底面のやや北寄りに、深さ5.8cmのピット１個が存在する。遺物は、早期末の土器片８点、スクレイパー１点、剥片１点が出土している。これらのことから、本土壙の時期は縄文時代早期末である。

４号土壙（第37図、写真３－３）

本土壙は、調査区南東部Ｇ－５区、Ｈ－５区にかけて位置する。確認面は、第４層上面である。規模および形態は、長軸1.75m、短軸1.53m、深さ16cmで、長方形が基調と考えられる不整形を呈する。埋土は、３層で構成されている。底面は、やや起伏があり、皿状を呈している。壁はゆるく立ち上がる。遺物は、早期末の土器片８点が出土している。これらのことから、本土壙の時期は、縄文時代早期末である。

５号土壙（第37図、写真３－４）

本土壙は、調査区南東部Ｈ－５区に位置する。確認面は、第４層上面である。規模および形態は、長軸1.88m、短軸1.85m、深さ15cmで楕円形を呈する。埋土は２層で構成されている。底面はやや起伏があり、皿状を呈している。壁はゆるく立ち上がる。遺物は、早期末の土器片18点、石鏃１点、二次加工のある剥片８点、微細剥離痕のある剥片２点、剥片17点が出土している。これらのことから、本土壙の時期は、縄文時代早期末である。第37図１は第２群２類ｂに属し、胴部の縄文は単節多条文が施文される。２は第２群２類ｈに属する。

６号土壙（第38図）

本土壙は、調査区南部Ｉ－７区に位置する。確認面は、５層上面である。本土壙は、江戸時代以後と考えられるピットに切られている。規模および形態は、長軸1.35m、短軸約1.00m、深さ10cmで、楕円形を呈する。埋土は、中に炭化物や礫を含む、暗褐色シルト（7.5ＹＲ3/4）の単層である。底面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、早期末の土器片１点が出土している。このことから、本土壙の時期は、縄文時代早期末である。

７号土壙（第39図、写真３－５）

本土壙は、調査区南端Ｉ－６・７区にかけて位置する。確認面は、５層上面である。本土壙は、長軸1.00m以上（南端は未調査）、短軸0.97m、深さ16cmで、楕円形を呈する。埋土は、暗褐色シルト（7.5ＹＲ3/4）の単層である。底面は、起伏があるがほぼ皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。西壁際に、深さ10cmのピット１個が検出されている。遺物は、皆無である。本土壙の時期は、層位的判断や埋土の観察によれば、縄文時代早期末と考えられる。

８号土壙（第39図）

本土壙は、調査区中央やや東寄り、Ｆ－５区に位置する。確認面は、４層上面である。本土

壙は、耕作による攪乱を受けている。規模および形態は、長軸推定2.45m、短軸0.95m、深さ cmの隅丸長方形を呈する。埋土は、暗褐色シルト（10ＹＲ3/3）の単層で構成されている。断面形は、ほぼ皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。底面は、やや起伏はあるもののほぼ平坦である。出土遺物は皆無である。本土壙の時期は、４層上面で確認できたことから、縄文時代早期末の可能性が強いと考えられる。

９号土壙（第39図、写真３－６）

本土壙は、調査区南部Ｉ－６区に位置する。確認面は、６層中である。本土壙は、最近の土取りによって、６層中まで削平されている。したがって、掘り込み面はさらに上層にあったと考えられる。規模および形態は、長軸1.09m、短軸0.85m、深さ29cmで、楕円形を呈する。埋土は、２層で構成されている。底面はほぼ平坦で、壁はゆるく立ち上がる。遺物は、わずかに早期末の土器片１点である。本土壙の時期は、出土遺物や埋土から判断して、縄文時代早期末である。

10号土壙（第39図）

本土壙は、調査区南部Ｈ－６、Ｉ－７区に位置する。確認面は、５層中である。本土壙は、上部が削平されており、江戸以後のピットが７号住居跡と切り合っている。住居跡との新旧関係は不明である。規模および形態は、長軸約1.2m、短軸1.03m、深さ14cmの楕円形を呈する。埋土は、暗褐色シルト（7.5ＹＲ3/4）の単層で構成されている。底面は、やや西側に傾斜するが、ほぼ平坦である。遺物は、早期末の土器片１点、磨石１点が出土している。２号住居跡と新旧関係が不明であることや、早期末の土器が出土していることなどから、本土壙の時期は早期末と考えられる。

早期包含層

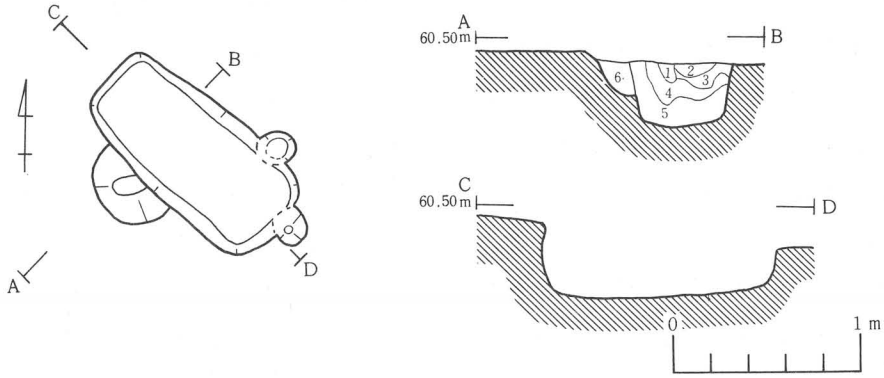
北前遺跡では、調査区のほぼ全面にわたって早期の遺物が出土しているが、明確に包含層として確認できた範囲は、およそ、２号住居跡、９号住居跡、８号住居跡を結ぶラインの南側である。この範囲の3層が、縄文時代早期末の包含層である。ただし、Ｉ－４・５区、さらに６区の東側は、５層～６層中まで削平を受けている。

包含層及び遺構外出土遺物（第40図１～23・第41図１～４）

第40図１は、Ｇ－５区より出土し、第２群１類ｃと考えられる。内面は縄文が施文される。２はＧ－４区より出土し、第２群１類ｂである。内面は無文である。３はＧ－４区より出土し、第２群１類ｂに属する。沈線文は、半截竹管を使用したものではない。内面は条痕文のみがみられる。４はＧ－５区より出土し、第２群１類ｄに属する。胴部の縄文は単節多条文である。

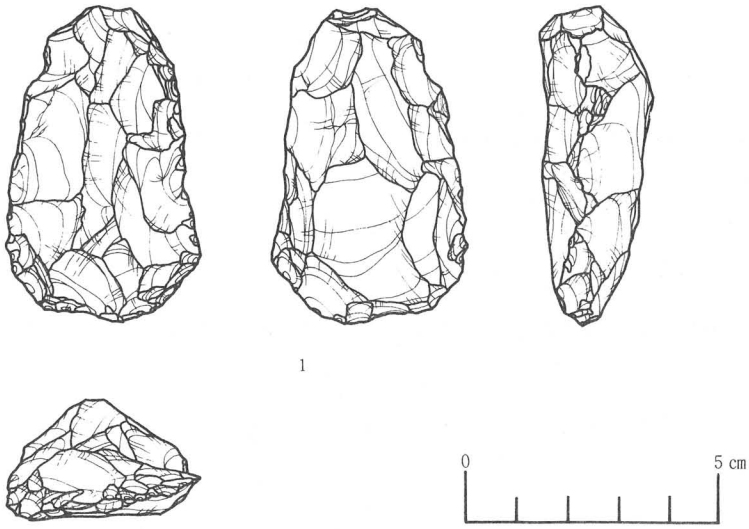
内面には擦痕が認められる。5は、H－5区より出土し、第2群2類bに属する。原体単節多条文である。6は、J－10区の耕作土より出土した第1群土器である。細砂を多く含むが焼成、胎土ともに良好である。7は、J－9区より出土した。第2群1類aに属する。内面は縄文が施文される。8は、19号土壙より出土した。第2群2類gに属する。内面は無文である。9も19号土壙より出土している。第2群1類bに属する。口唇部及び口唇部直下に刺突が施される。10・20・22は第2群1類iに属する。いずれも結束第1種である。20・22は単節多条文、10は無節のようである。20の胎土には金雲母を含む。11は20号土壙より出土した。第2群2類bに属する。8や9と類似する。12は、27号土壙より出土。第2群1類aに属する。胎土に白色砂粒を含む。内面は無文である。13は、C－4区より出土し、第2群1類hに属する。原体はLRである。14は、E－6区4層上より出土した。第2群2類hに属する。胎土には繊維は少なく、砂粒が多い。唯一の例である。15はD－5区の2層より出土した。第2群1類bに属する。内面は地文に条痕文、さらにその上に無節縄文（R）を施文する。16はG－5区より出土し、第2群1類eに属する。繊維・砂粒ともに多い。17は、H－6区より出土し、第2群2類gに属する。胎土に白色砂粒を多く含む。18はI－6区より出土し、第2群1類eに属する。内面には単節縄文LRを施文している。19はG－5区より出土し、第2群1類bに属する。繊維・砂粒ともに多い。21は、B－3区より出土し、第2群1類aに属するが、胴部文様との区画に刺突のある隆帯を施している。したがって、1類gとも共通する。23は、H－9区より出土し第2群3類aに属する。内面には縦位の擦痕をもつ。原体は不明であるが、横位の縄文が施文されている。

第41図1は、C－4区から出土し、第2群2類fに属する。2は、B－4区より出土し、第2群3類cに属する。底面にも条痕文の施文が認められる。胎土は砂粒が多い。3は、I－7区より出土し、第2群1類aの破片を利用した円盤状土製品である。胎土には白色砂粒を多く含む。約½を欠く。4は、H－5区より出土し、第2群2類bの破片を利用した有孔円盤である。有孔は、本例が唯一のものである。外面には、単節多条文が施されている。焼成は比較的良好である。

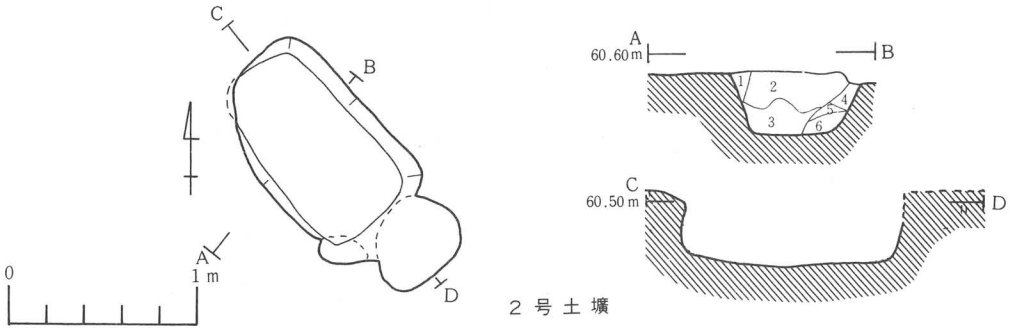


1号土壙　埋　　土

層位	土	色	土　性	備　　考
1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	カクラン
2	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	炭化物を微量含む。
3	暗褐色	10Y R 3/4	粘土質シルト	ロームを多量含む。
4	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	ロームを少量含む。
5	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	炭化物を少量含む。
6	褐　色	10Y R 4/4	シルト	



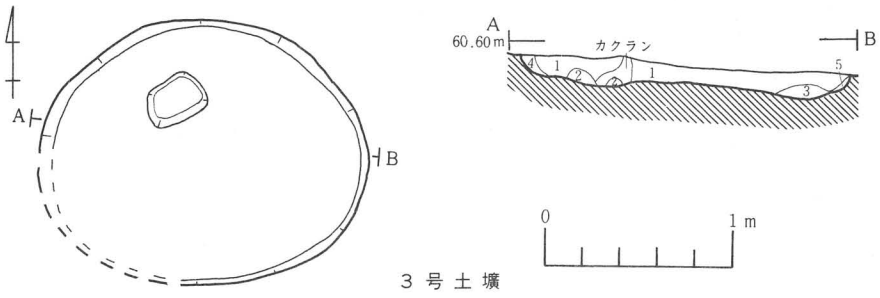
第35図　1　号　土　壙



2 号 土 壙

2号土壙 埋　　土

層位	土	色	土　性	備　　考
1	褐　色	10Y R 4/6	シルト	ロームブロックを少量，炭化物極少
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物粒極少、オレンジ色のスコリア少量
3	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	オレンジ色のスコリア（1～3m）を少量
4	褐　色	10Y R 4/4	シルト	明黄褐色土粒を少量含む。
5	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
6	褐　色	7.5 Y R 4/3	シルト	オレンジ色スコリアを極少含む。

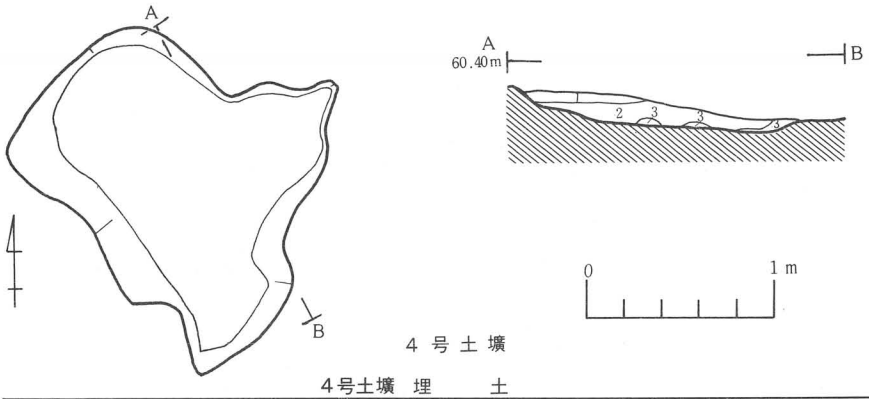


3 号 土 壙

3号土壙 埋　　土

層位	土	色	土　性	備　　考
1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物粒を少量含む。
2	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	
3	褐　色	10Y R 4/6	シルト	
4	褐　色	10Y R 4/4	シルト	
5	褐　色	10Y R 4/4	シルト	

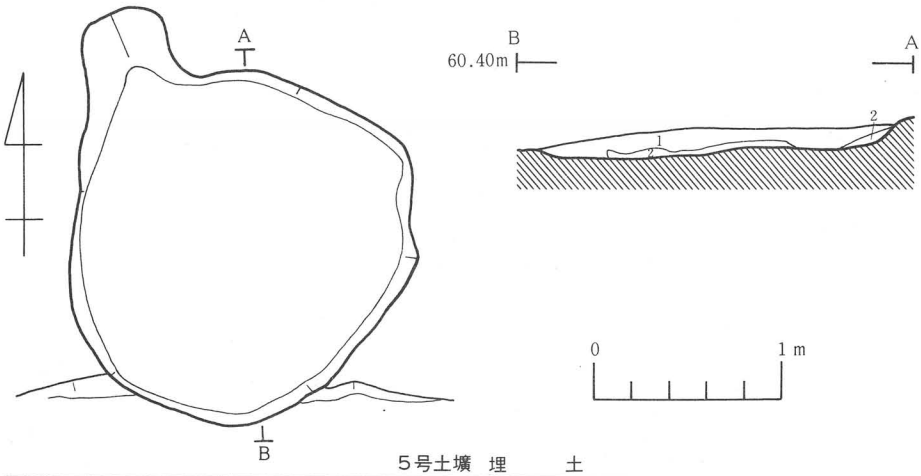
第36図　2・3号土壙



4 号 土 壙

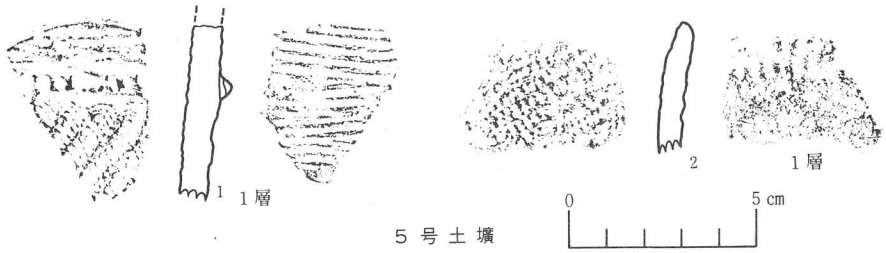
4号土壙　埋　　土

層位	土　色		土　性	備　考
1	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	ロームブロックを微量含む。
2	褐　色	10Y R 4/6	シルト	スコリアを一部含む。
3	褐　色	10Y R 4/6	シルト	スコリアを一部含む。



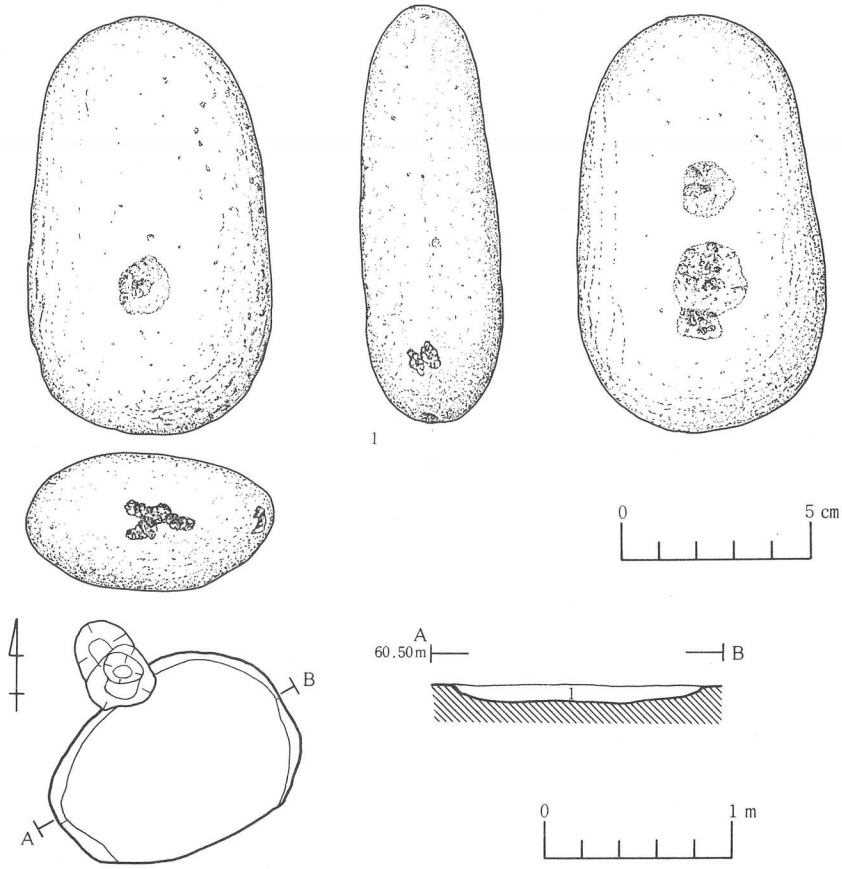
5号土壙　埋　　土

層位	土　色		土　性	備　考
1	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	ロームブロックを一部に含む。
2	黄褐色	10Y R 5/8	シルト	ロームブロックを全体的に含む。



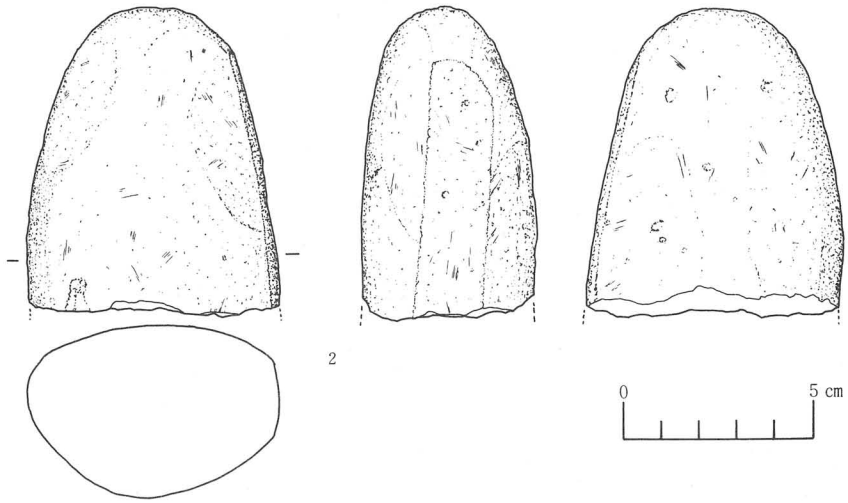
5 号 土 壙

第37図　4・5 号 土 壙

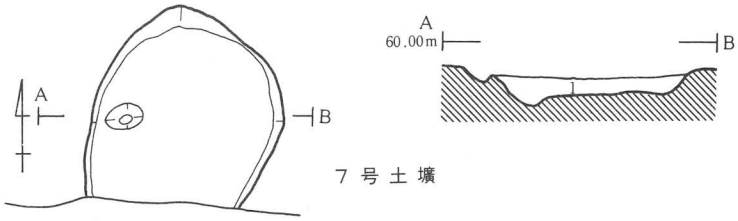


6号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	暗褐色	7.5 YR ¾	シルト	炭化物を少量含む。

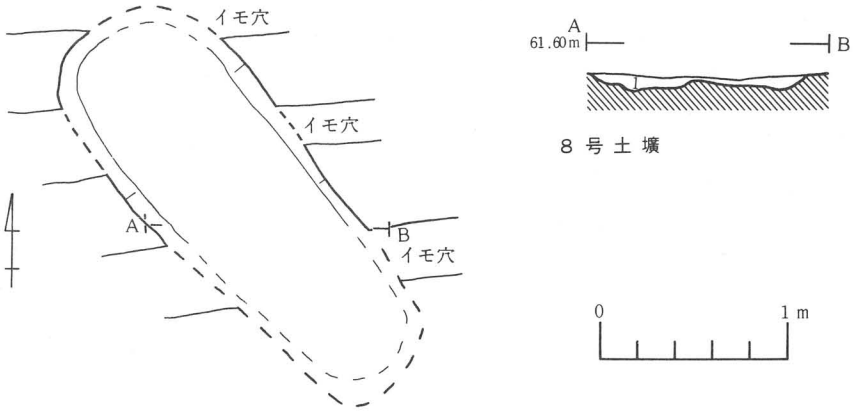


第38図　５号土壙出土遺物、６号土壙（１．５号土壙、２．６号土壙）



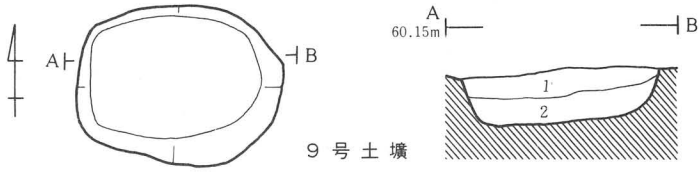
7号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	暗褐色	7.5 Y R ¾	粘土質シルト	明黄褐色ブロックを少量含む。



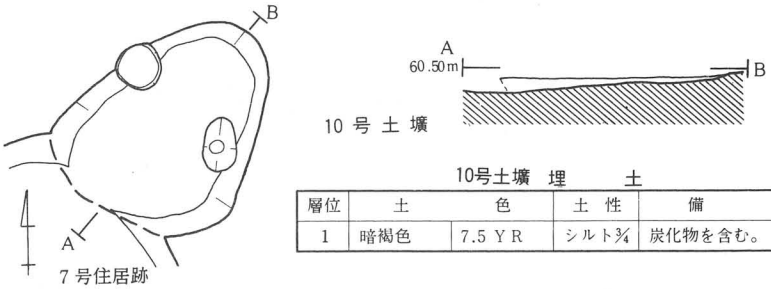
8号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	暗褐色	10Y R ⅔	シルト	



9号土壙　埋　　土

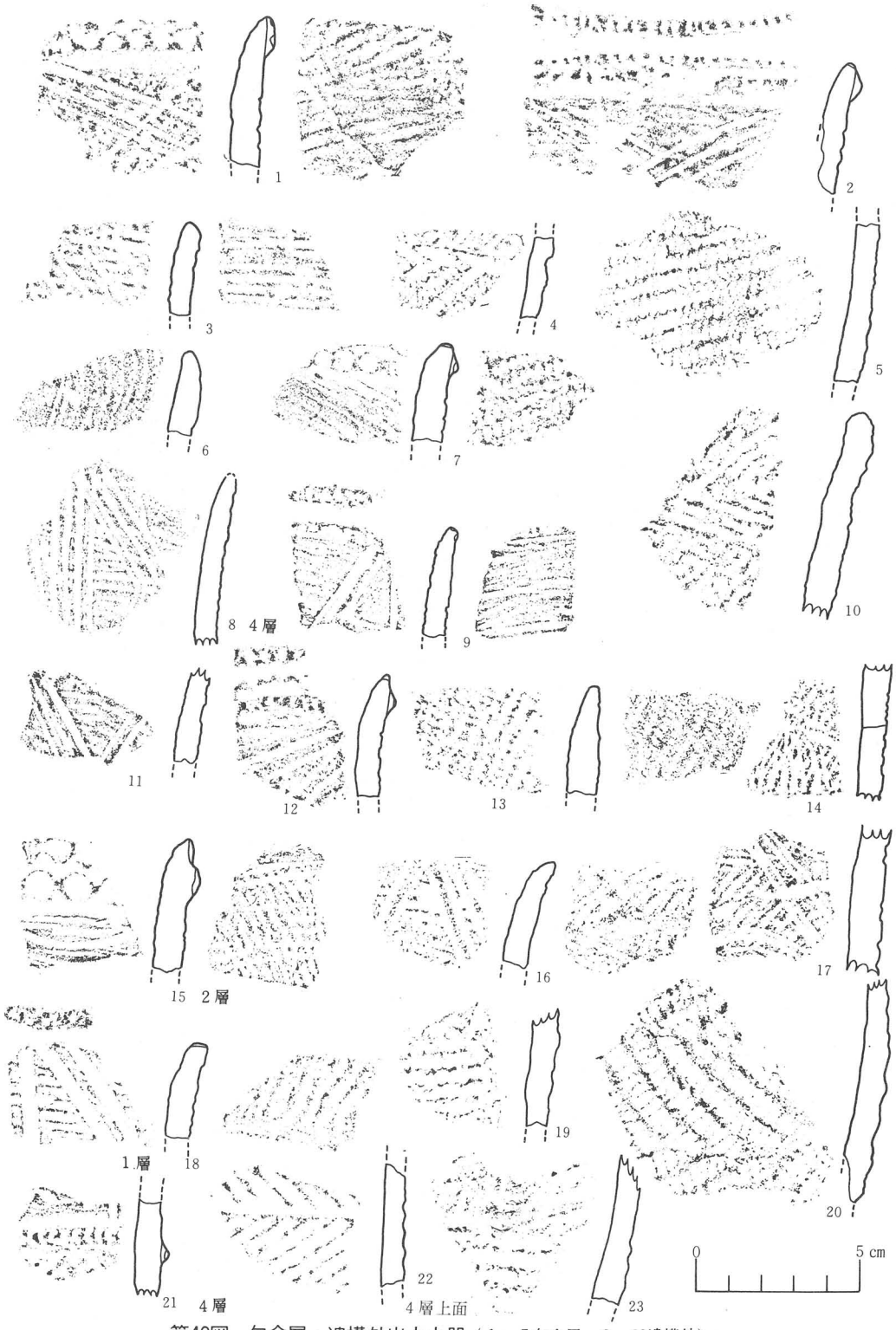
層位	土　　色		土　性	備　　考
1	褐　色	10Y R ¾	シルト	スコリア含む。
2	褐　色	10Y R ⅚	シルト	スコリア含む。



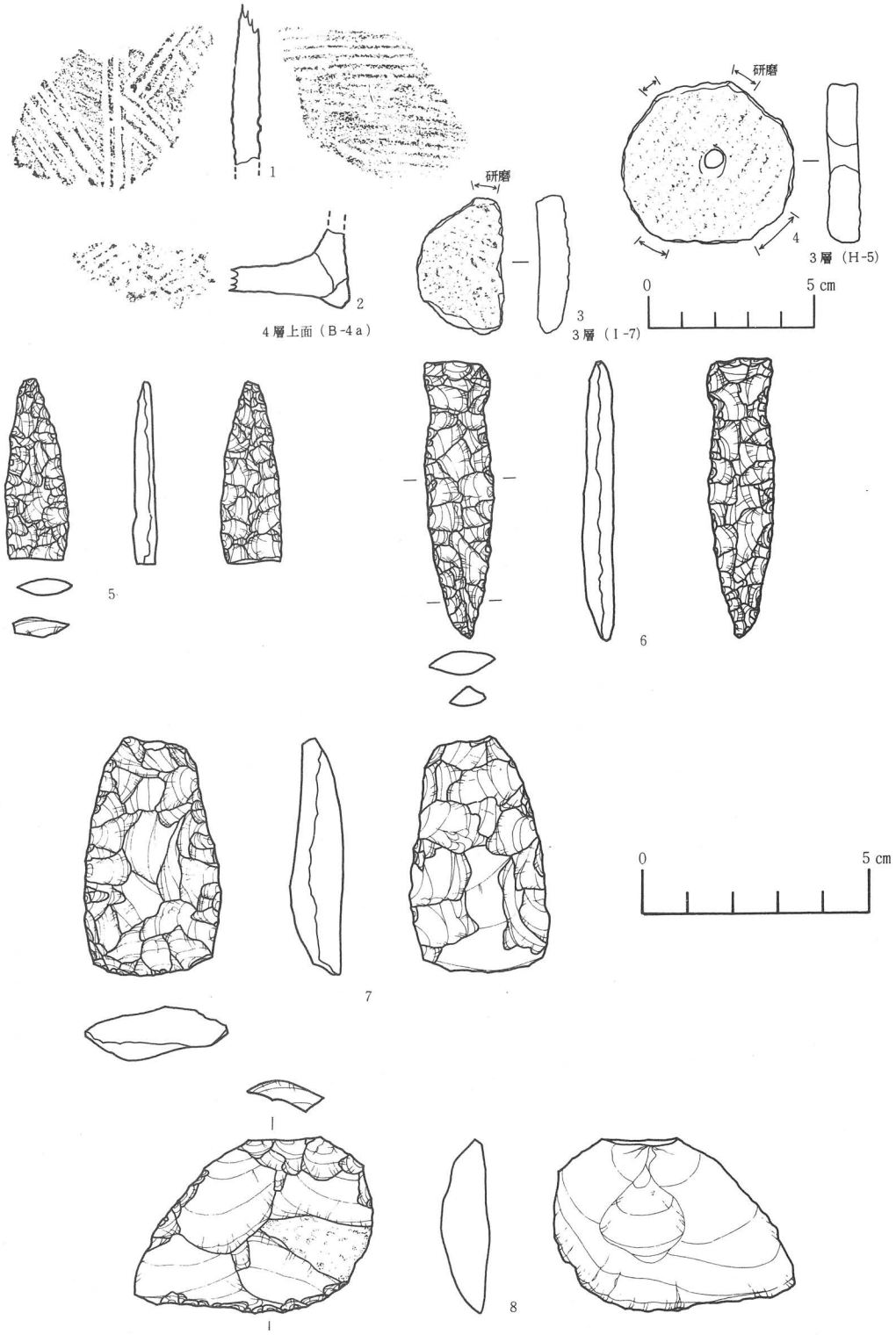
10号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	暗褐色	7.5 Y R	シルト¾	炭化物を含む。

第39図　7・8・9・10号土壙



第40図　包含層・遺構外出土土器（1～7包含層、8～23遺構外）



第41図　遺構外出土土器（1、2）早期包含層出土円盤状土製品（3、4）石器（7、8）

第4表　縄文早期住居跡内ピット計測表

第1号住居		
番号	規模(cm)	深さ(cm)
1	44×43	12

第2号住居		
番号	規模(cm)	深さ(cm)
1	30×25	22
2	30×28	6
3	24×19	6
4	22×18	5
5	18×13	9
6	16×—	9
7	24×—	7
8	47×36	11
9	30×25	15
10	24×23	13
11	63×—	13
12	12×10	7
13	19×—	11
14	18×—	6
15	12×11	10
16	40×—	7

第3号住居		
番号	規模(cm)	深さ(cm)
1	24×18	31
2	26×23	28
3	23×18	23
4	18×13	10
5	19×17	21
6	21×17	33
7	18×13	25
8	12×11	7
9	19×15	9
10	18×13	5
11	13×12	5
12	9×9	7
13	17×11	11
14	12×12	13
15	11×8	5
16	11×10	5
17	15×12	7
18	32×31	7
19	13×10	11
20	39×32	9
21	11×11	16
22	18×—	12
23	17×—	14
24	28×22	28
25	24×22	7

第4号住居		
番号	規模(cm)	深さ(cm)
1	31×26	33
2	16×14	8
3	7×7	4
4	18×17	16
5	31×—	10
6	38×31	28
7	10×—	7
8	30×20	9
9	20×11	13
10	28×28	18
11	38×—	10
12	13×—	8
13	26×22	11
14	35×—	11
15	21×13	7
16	18×16	7
17	29×21	11
18	25×24	9
19	18×18	19
20	23×20	9
21	28×20	7
22	10×9	6
23	16×15	27
24	18×16	18
25	17×16	14
26	18×—	7
27	24×19	12
28	14×12	5
29	14×11	5
30	9×—	5

第5・6号住居		
番号	規模(cm)	深さ(cm)
1	22×19	29
2	21×18	44
3	28×25	44
4	23×18 37×34	39 32
5	30×29	41
6	29×24	49
7	31×28	32
8	26×18	48
9	21×17	26
10	27×25	52
11	30×22	28
12	25×22	43
13	23×17	42
14	23×17	42
15	26×19	24
16	24×24 17×13	12 35
17	25×18	50
18	24×23	50
19	25×22	18
20	55×31	8 (12)
21	29×22	14
22	19×18	31
23	20×17	8
24	22×14	6
25	28×25	13
26	23×15	19
27	26×22	18
28	20×18	16
29	25×24	18
30	36×34	26
31	36×22	40
32	46×43	27
33	25×23	25
34	31×26	36
35	23×18	38
36	37×29	13
37	32×26	15
38	20×19	17
39	11×10	5
40	14×12	12
41	22×18 15×11	11 16
42	23×20	15
43	16×15	6
44	9×8	4
45	15×15	7
46	39×35	25
47	19×17	9
48	14×12	10
49	25×21	21
50	20×18	14
51	20×18	19
52	20×13	17
53	20×12	12
54	17×17	11
55	24×19	13
56	20×18	16
57	14×11	11
58	19×15	16
59	22×19	29
60	31×23	19
61	23×21	43
62	26×26	44
63	26×23	30
64	27×22	52
65	27×22	59
66	28×28 (24)×(17)	27 36
67	29×23	36
68	17×15	14
69	13×13	11
70	22×16	13
71	32×12	6
72	19×17	12
73	60×42	21
74	24×—	11
75	38×32	11
76	22×—	9
77	40×—	13
78	18×15	43
79	17×16	38
80	15×13	22
81	19×—	28
82	27×26	7
83	21×19	8
84	32×20	8
85	32×31	15
86	15×14	9
87	19×16	10
88	15×14	9
89	23×21	5
90	26×20	8
91	31×25	13
92	24×20	14
93	17×16	15
94	—×30	41
95	—×45	24
96	45×42	42
97	29×20	9
98	20×17	37
99	32×17	50
100	23×19	7
101	25×17	9
102	18×17	10
103	29×25	57
104	—×36 (19)×(13)	30
105	44×32	11
106	28×24	12
107	44×32	11
108	28×—	10
109	55×42 (29)×(25)	42
110	30×21	47
111	23×19	18
112	29×27	43
113	20×17	43
114	20×20	32
115	13×13	11
116	27×21	17
117	16×15	12
118	60×50	15
119	34×29	23
120	17×15	17
121	36×26	7
122	17×12	8
123	35×23	25
124	19×17	16
125	22×20	12
126	26×24	16
127	21×18	12
128	22×21	11
129	15×13	9
130	47×39	26
131	79×55	30
132	25×18	10
133	78×48	13
134	10×11	11

第7号住居		
番号	規模(cm)	深さ(cm)
1	20×16	16
2	28×18	9
3	31×22	17
4	18×15	15
5	16×16	17
6	20×17	16
7	18×15	5
8	22×20	10
9	24×—	7
10	17×15	9
11	33×31	9
12	25×24	8
13	25×23	7
14	22×19	5

第8号住居		
番号	規模(cm)	深さ(cm)
1	16×12	5
2	16×11	7
3	21×18	8
4	33×27	8
5	21×19	4
6	24×17	9
7	24×11	8
8	14×9	7
9	38×16	10
10	48×33	8
11	26×—	8
12	8×—	5
13	8×7	8

第5表　第1・2群土器集計表

		1号住居	2号住居	3号住居	4号住居	5号住居	6号住居	7号住居	8号住居	計	1号土壙	2号土壙	3号土壙	4号土壙	5号土壙	6号土壙	7号土壙	8号土壙	9号土壙	10号土壙	計	A−3
1	a	2	1	2	3	7		2	1	18					1						1	
	b		1	2	1	1				5		1			1						2	
	c		2	2						4												
	d																					
	e					1				1												
	f																					
	g																					
	h			3						3					1						1	
	i																					
	j																					
	不明			1			1		1	3												
2	a	6	16	31	20	21	3	15	5	117	4		3	1	4						12	1
	b	12	20	46	17	22	12	3	22	154	6	6	1	4	6						23	2
	c																					
	d			1	1					2												
	e			1						1												
	f	4			1				6	11												
	g	4	2							6												
	h																					
	i				1					1												
	j	2								2												
	不明	10	11	20	18	67	10	79	25	240	1	2	1		4	1			1	2	12	
3	a					3				3			3		1						4	
	b			1	1	1				3												
	c																					
	不明																					
円盤状土製品					1		1	1	1	3												
第1群土器							1			1												
計		40	53	110	64	123	27	100	61	578	11	9	8	5	18	1			1	2	55	3

		B−2	B−3	B−4	B−7	C−3	C−4	C−5	C−6	C−7	D−3	D−4	D−5	D−6	D−7	E−4	E−5	E−6	E−7	E−8	E−9	F−5
1	a		1	2			3						2							1		
	b		1	2			3		1		3		3				1				5	
	c																					
	d																					
	e										1											
	f												1									
	g																					
	h		2			1	1				1		1									
	i		1																			
	j			1																		
	不明		2								3		1									
2	a	2	5	7		1	7	3	1		10	1	18		3			2	1		2	
	b	1	12	20	1		16	6	2		6	1	18	5	2	1	1	2			4	1
	c																					
	d												1									
	e						2		1		1		1	1								
	f						1															
	g																					
	h			1									1					1				
	i			2																		
	j						1															
	不明						8	2			4	2	9	1				1	2		4	
3	a			1							1		1									
	b										1											
	c			1																		
	不明							1		1												
円盤状土製品																						
第1群土器																						
計		3	24	37	1	2	42	12	5	1	31	4	57	7	5	1	2	6	3	1	15	1

		F−6	G−4	G−5	G−6	G−8	G−10	H−4	H−5	H−6	H−7	H−8	H−9	I−6	I−7	I−8	I−9	I−10	J−8	J−9	計	
1	a	1		1				1	4											1	17	
	b		3	1						1				1							26	
	c			1				1	1												2	
	d													1							1	
	e			1										1							3	
	f																				1	
	g														1						1	
	h											1						1			8	
	i																				1	
	j																				1	
	不明		1						1					1		2					11	
2	a	1	5	7	1		2	3	26	1			1	15	7		1			9	143	
	b	2	17	20		3		18	48	3	1	1		11	9		7		1	3	245	
	c														1						1	
	d																				1	
	e																				6	
	f																				1	
	g									1											1	
	h																				3	
	i																				2	
	j	1																		1	3	
	不明	1	1	11	1	2	1	8	17					44	27		1	2		2	150	
3	a								2				1							1	7	
	b							1	1												3	
	c																				1	
	不明								1					1							5	
円盤状土製品									1 (有孔)						1						1	
第1群土器																				1	1	
計		6	27	42	2	5	3	32	101	6	1	2	2	75	46	2	9	3	1	18	646	1279

4．縄文時代前期末の遺構と遺物

11号土壙（第42図・写真４－１）

調査区北東部、Ｂ－４区に位置する。12号土壙と重複関係があり、12号土壙より新しい。第４層上面で確認、上端平面形は長軸1.77ｍ、短軸1.29ｍの楕円形である。深さ84㎝、底面は平坦であるが東壁際に56×46㎝、深さ20㎝の楕円形のピットを有する。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、オーバーハングする所もある。埋土は10層で構成され、第８層にはローム粒を多量に含む。

遺物は縄文土器片17点、石器は７点出土している。第42図は第３群８類に属する口縁部破片である。横位連続刺突文（Ａ－３－２）を２段に施文してある。１類か２類の口縁部と考えられる。また口唇に連続刻目を施したもの、地文が綾絡文の土器片も出土している。石器はスクレイパー１点、二次加工のある剝片１点、微細剝離痕のある剝片２点、剝片１点、磨石１点、凹痕と磨痕のある礫石器１点が出土している。

12号土壙（第42図）

調査区北東部、Ｂ－４区に位置する。11号土壙と重複関係にあり、北側４分の１を削平されている。11号土壙より古い。第４層上面で確認、上端平面形は長軸1.53ｍ、短軸1.26ｍの楕円形である。

遺物は皆無であったが12号土壙の埋土は早期の遺構の埋土と全く違い、また11号土壙より古いとしても、それほどの時期差があったとは考えられず、前期末の土壙とした。

13号土壙（第42図・写真４－２）

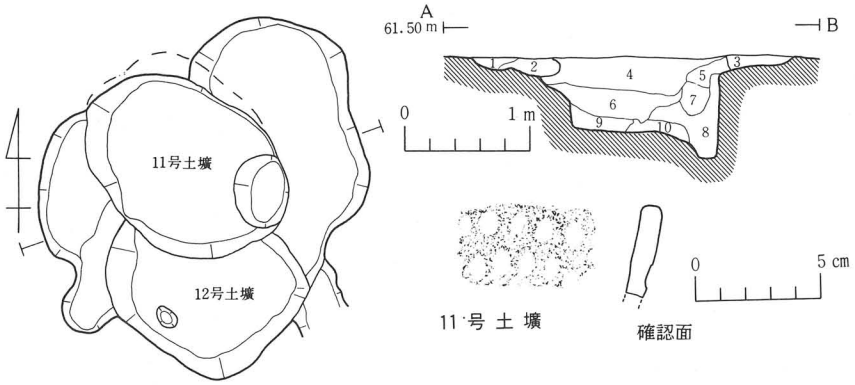
調査区北東部、Ｃ－４区に位置する。１号住居跡と重複関係にある。１号住居より新しい。上端平面形は長軸1.67ｍ、短軸1.38ｍの楕円形である。深さ74㎝、底面は平坦であり、壁面は直線的に内傾し壁中位上半から外傾するが北壁はほぼ直線的に立ち上がる。埋土は６層で構成され、２層と６層にロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片７点が出土した。第42図２は第３群８類に属する半截竹管による横位平行沈線文（Ａ－１－３）を施文した胴部破片である。３類の胴部破片であろうか。

14号土壙（第42図・写真４－３）

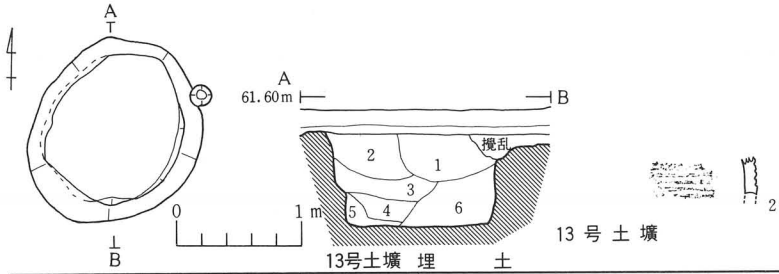
調査区北東部、Ｃ－５区に位置する。第４層上面で確認した。３号溝と重複関係にあり、３号溝より古い。上端平面形は長軸1.04ｍ、短軸1.02ｍの円形である。深さ108㎝、底面は平坦であり、断面形は袋状をなし、最大径は1.42ｍ×1.37ｍを測る。埋土は12層で構成され、全体的にローム粒子の混入が顕著であり、７層、10層中にロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片12点、礫１点を出土した。第42図３は第３群８類に属する二又で先端の尖った施文具による押しひき連続刺突文（Ｃ－３－３）を施した胴部破片である。胎土は緻密で焼成もよく、第



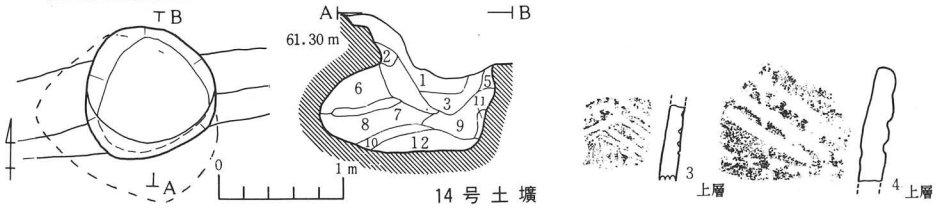
11号土壙　埋　　土

層位	土　色		土　性	備　考
1	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	攪　乱
2	明黄褐色	7.5 Y R 5/8	シルト	攪　乱
3	褐　色	10Y R 4/6	シルト	攪　乱
4	褐　色	10Y R 3/4	シルト	炭化物を微量とロームを全体に含む。
5	褐　色	7.5 Y R 4/6	シルト	ロームを少量含む。
6	褐　色	7.5 Y R 3/4	シルト	炭化物を微量とロームを全体的に含む。
7	褐　色	10Y R 4/6	シルト	炭化物を微量とロームを全体的に含む。
8	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	ロームを多量に含む。
9	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
10	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	暗褐色を少量含む。



13号土壙　埋　　土

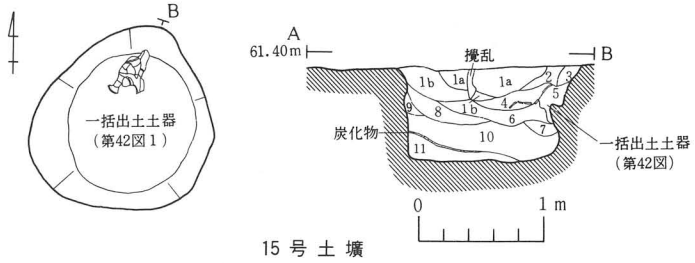
1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	
2	褐　色	10Y R 4/6	シルト	ロームブロック状に含む。
3	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物を少量含む。
4	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	炭化物を少量含む。
5	黒褐色	7.5 Y R 3/2	シルト	炭化物を少量含む。
6	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	ロームブロックを含む。



14号土壙　埋　　土

1	褐　色	10Y R 4/4	シルト	
2	明褐色	10Y R 5/8	粘土質シルト	ローム粒子を全体的に含む。
3	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	ローム粒子を全体的に含む。
4	褐　色	10Y R 4/6	シルト	
5	明褐色	10Y R 5/8	粘土質シルト	ローム粒子を全体的に含む。
6	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	ローム粒子を全体的に含む。
7	明黄褐色	2.5 Y R 6/6	粘土質シルト	ロームブロック
8	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	ローム粒子を全体的に含む。
9	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
10	明褐色	7.5 Y R 5/8	粘土質シルト	ロームブロック
11	明褐色	10Y R 5/8	粘土質シルト	ローム粒子を全体的に含む。
12	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	ローム粒子少量

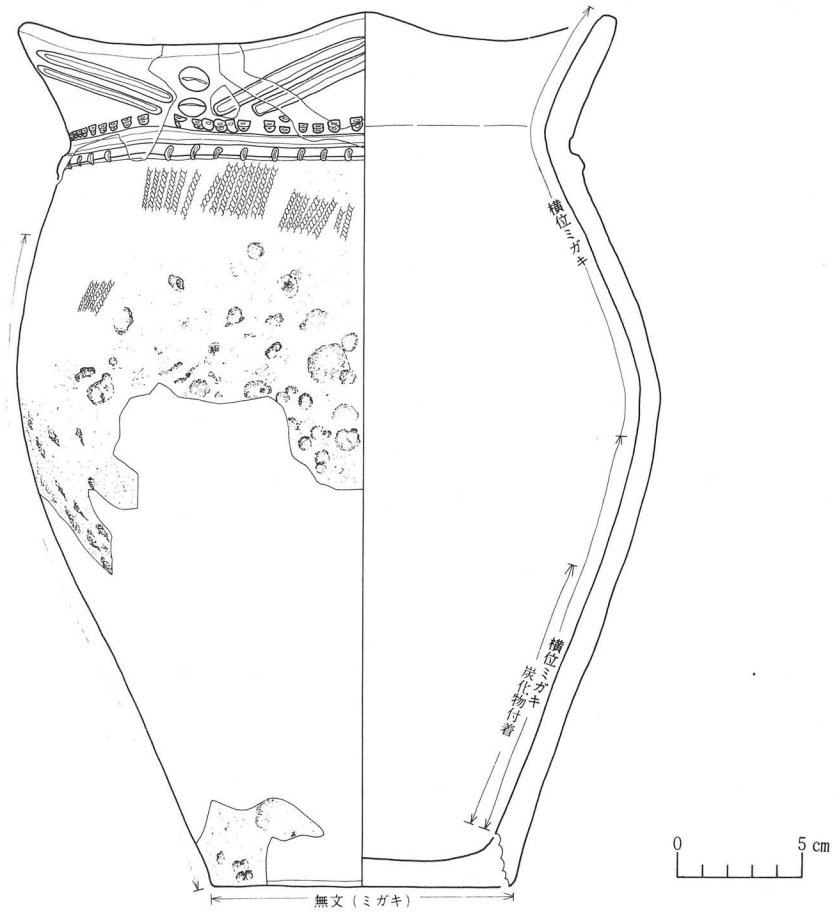
第42図　11・13・14号土壙（縄文時代前期末葉）



15 号 土 壙

15号土壙　埋　　土

層位	土	色	土　性	備　　考
1 a	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	
1 b	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	ローム粒少量含む。
2	褐色	7.5 Y R 4/4	シルト	
3	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	
4	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	炭化物微量含む。
5	褐色	7.5 Y R 4/6	シルト	
6	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	ローム粒少量含む。
7	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	ロームロックを含む。
8	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	ローム粒子少量含む。
9	褐色	10Y R 4/4	シルト	ローム粒子少量含む。
10	明黄褐色	10Y R 8/6	粘土質シルト	
11	明黄褐色	10Y R 8/6	粘土質シルト	



遺構名	層　位	出土状況	遺　存	法　量	施　文　・　調　整	備　　考
15号土壙（C－5）	8 層上面 6 層上面 4 層	一　括	口縁～胴部	器高34.8cm 口径23.8cm 底径12.1cm	・刺突文 → ・隆帯＋刺突文 → 沈線（頸部）	胴部，焼けはじけが著しい。

第43図　15号土壙（縄文時代前期末葉）

3群土器の中では異質である。第42図4は第3群1類1種に属する口縁部破片である。波状口縁を呈し、太い斜行平行沈線(A－1－2)を口縁に沿って平行に施文、また口縁下端には横位連続刺突文(A－3－2)が施される。

15号土壙（第43図・写真4－4）

調査区北東部、C－5区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.47m、短軸1.38mの円形である。深さ80cm、底面はほぼ平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は11層で構成されており、大別して2層に分かれる。下層の9、10層は粘土質シルト層で固くしまる。19層と11層の間に炭化物の層が入る。上層はほとんどの層がローム粒を含み、第4層中に炭化物が認められた。

遺物は第43図1が4層中から、5層、8層上面に乗るように一括出土した。他に礫が1点出土したのみであった。第43図1は第3群3類1種に属する3類の深鉢形土器である。器高34.8cm、口径23.8cm、底径12.1cm、最大径は胴部にあり25.6cmを測る。口縁は四波状を呈する。口縁部文様帯には太い2本1組の平行沈線が山形に施文(A－1－1)されるが山形頂部は連続せずそこに円形刺突文が1～2個配される。口縁部下端には半截竹管による半月形横位連続刺突文(A－2－2)が施文される。頚部には横位沈線文(B－1－3)と隆帯十連続刺突文が施文され口縁部と胴部を区画している。地文は単節斜行縄文が施文されており、薄い撫で消しが行なわれている。器面の剝落が激しい。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒を多く含む。砂粒の混入も多い。

16号土壙（第44、45図・写真4－5・6）

調査区北東部、C－5区に位置する。第4層上面で確認、17号土壙と重複関係があり、17号土壙より新らしい。上端平面形は長軸2.80m、短軸2.45mの楕円形である。深さ74cm、底面は中央がやや低くゆるやかな傾斜をもつ。壁面は内傾し壁中位上半から内弯気味に外傾する。埋土は13層で構成され、2、3a、3c層に多量のロームブロックを含む。

遺物は縄文土器1点（第45図）と縄文土器片4点、石核1点、剝片1点、桂化木1点が出土した。45図は北東部壁際の床面から一括出土した。第3群1類1種に属する深鉢形土器である。器高40.7cm、口頚25.5cm、底径14.3cm、最大径は口縁にある。平縁であり、口縁部は肥厚する。口縁部文様帯には第42図1同様太き2本1組の平行沈線が山形に施文され(A－1－1)、山形頂部は連続せず、そこに径1～1.5cmの円形刺突文(A－3－1)が1～2個配される。口縁部文様は第42図1と同じであるが45図は口縁部下端に段がつき半截竹管先端による連続刺突文(A－3－2)が施文される。頚部には隆帯十連続刺突文(B－6－1)が施文され、口縁部と胴部を区画している。胴部は剝落が激しいが、横位綾絡文が地文として施文され、薄い撫で消しが行なわれている。胎土は粗く角礫凝灰岩粒を多く混入している。砂粒の混入も多い。

17号土壙（第44図・写真４－７）

調査区北東部、Ｃ－５区に位置する。第４層上面で確認、16号土壙と１号竪穴遺構と重複関係にあり、両遺構より古い。上端平面形は、長軸1.26m・短軸0.96m以上の円形と考えられる。深さ90cm、底面は平坦であり壁面は内傾し壁中位上半で外傾する。埋土は８層で構成される。

遺物は縄文土器片22点、ヘラ状石器１点、剝片１点が出土している。第44図１は３群８類に属する破片である。細い沈線を２本１組にし山形に短く施文（C－1－1）、その下に横位平行沈線文（C－1－3）がめぐる。第44図２も３群８類に属する胴部破片（C－1－1）である。

18号土壙（第46図・写真４－８、５－１）

調査区北東部、Ｄ－４区に位置する。第４層上面で確認、39号土壙と40号土壙と重複関係にあり両遺構より古い。上端平面形は、長軸1.23m、短軸約0.85mの楕円形と考えられる。深さ82cm、底面は平坦であり、30cm×20cm程の円礫及び角礫を４個敷いてあり、底面中央に炭化物が認められた。壁面はほぼ直線的に垂直に立ち上がる。埋土は６層で構成されている。

遺物は縄文土器片30点、石器３点が出土した。第46図１～４は最下層から出土している。1・2は第３群１類１種に属する同一個体の口縁部破片である。山形突起を有する。口縁部の文様は第43図１、第45図と同じ山形沈線文（A－1－1）と円形刺突文（A－3－1）であるが、頸部には半截竹管による横位平行沈線（B－1－3）がめぐりボタン状貼付文（C－1－4）が並び、さらにボタン状貼付文から下に半截竹管による縦位平行沈線（C－1－4）が認められることから、文様帯の四区画が行なわれていると考えられる。第46図３、４は３群８類に属する口縁部破片である。１類か２類の口縁部破片と考えられる。３は斜行平行沈線文とコブ状貼付文（A－2－1）が施文され、４は山形突起を有する口縁部破片である。頸部に太い横位沈線文（B-1－3）が認められる。

19号土壙（第46図）

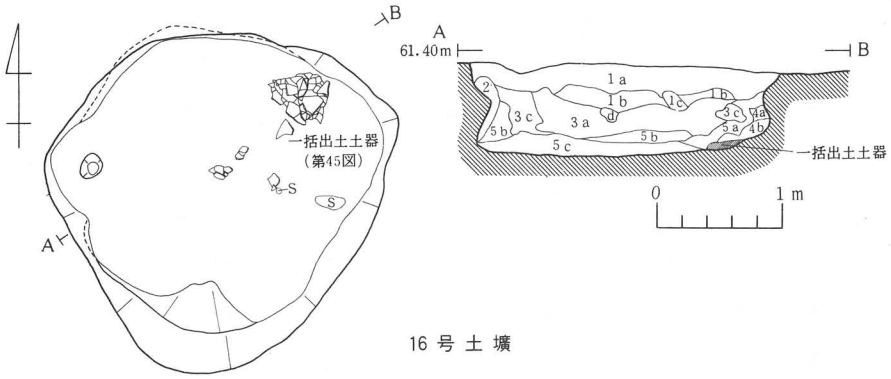
調査区北東部、Ｄ－５区に位置する。第４層上面で確認、上端平形は長軸0.85m、短軸0.64mの楕円形である。

遺物は（第４層から）縄文土器片７点出土した。第46図５は３群８類に属する胴部破片である。半截竹管による山形及び波形平行沈線（C－1－1）の下位に半截竹先岩端による横位連続刺突文（C－3－2）が２段に施される。第46図６は３群８類に属する肥厚する口縁部破片である。爪先による横位連続刺突文（A－3－2）を２段に施文してある。１類か２類の口縁部であろう。

20号土壙（第46図・写真５－３）

調査区北東部、Ｄ－５区に位置する。第４層上面で確認、上端平面形は長軸1.76m、短軸1.57mの楕円形である。深さ68cm、平面は平坦であり壁面は内傾し壁中位上半で外傾する。埋土は13層で構成される。９層10層にローム粒子を多量に含む。

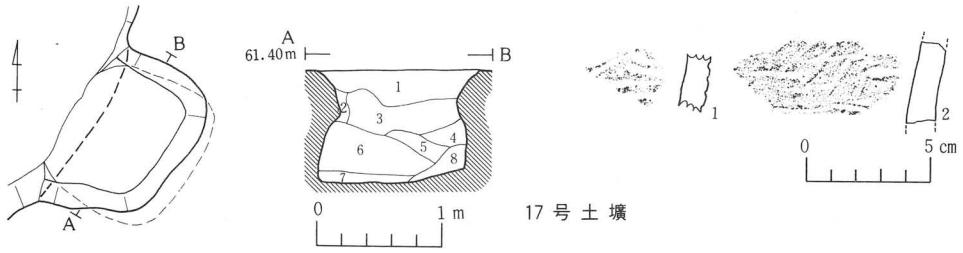
遺物は縄文土器１点（第46図12）、縄文土器片116点、石器８点出土した。縄文土器片はほと



16 号 土 壙

16号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1a	褐　色	10YR 4/4	シルト	炭化物（2mm）を少量含む。
1b	褐　色	7.5YR 4/3	シルト	炭化物とロームを少量含む。
1c	褐　色	10YR 4/6	シルト	ロームを少量含む。
1d	褐　色	10YR 4/6	シルト	
2	褐　色	10YR 4/4	シルト	ロームブロックを多量に含む。
3a	褐　色	7.5YR 4/3	シルト	ロームブロックを多量に含む。
3b	黄褐色	10YR 5/6	シルト	
3c	褐　色	7.5YR 4/3	シルト	暗褐色土ブロックを多量に含む。
4a	暗褐色	10YR 3/3	シルト	
4b	暗褐色	7.5YR 3/4	シルト	
5a	黒褐色	7.5YR 2/2	シルト	
5b	黒褐色	10YR 3/2	シルト	ロームを少量含む。　　ロ
5c	黒褐色	10YR 2/3	シルト	明黄褐色土少量を含む。

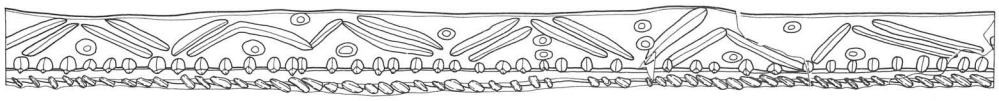


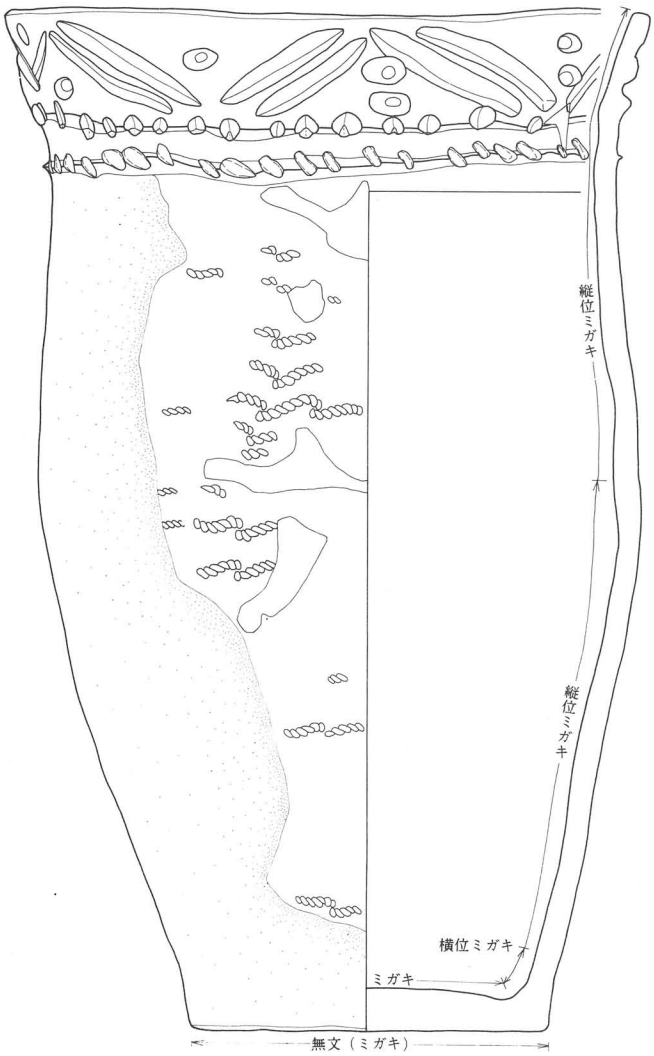
17 号 土 壙

17号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	暗褐色	10YR 3/4	シルト	明黄褐色土を全体に含む。
2	明褐色	7.5YR 5/6	シルト	
3	褐　色	10YR 4/4	シルト	炭化物を含む。明黄褐色土を全体に含む。
4	褐　色	7.5YR 4/4	シルト	明黄褐色土を少量含む。
5	暗褐色	7.5YR 3/4	シルト	
6	褐　色	10YR 5/6	シルト	炭化物を含まない。
7	褐　色	10YR 4/6	シルト	
8	褐　色	10YR 4/6	シルト	明黄褐色土をブロック状に含む。

第44図　16・17号土壙（縄文時代前期末葉）



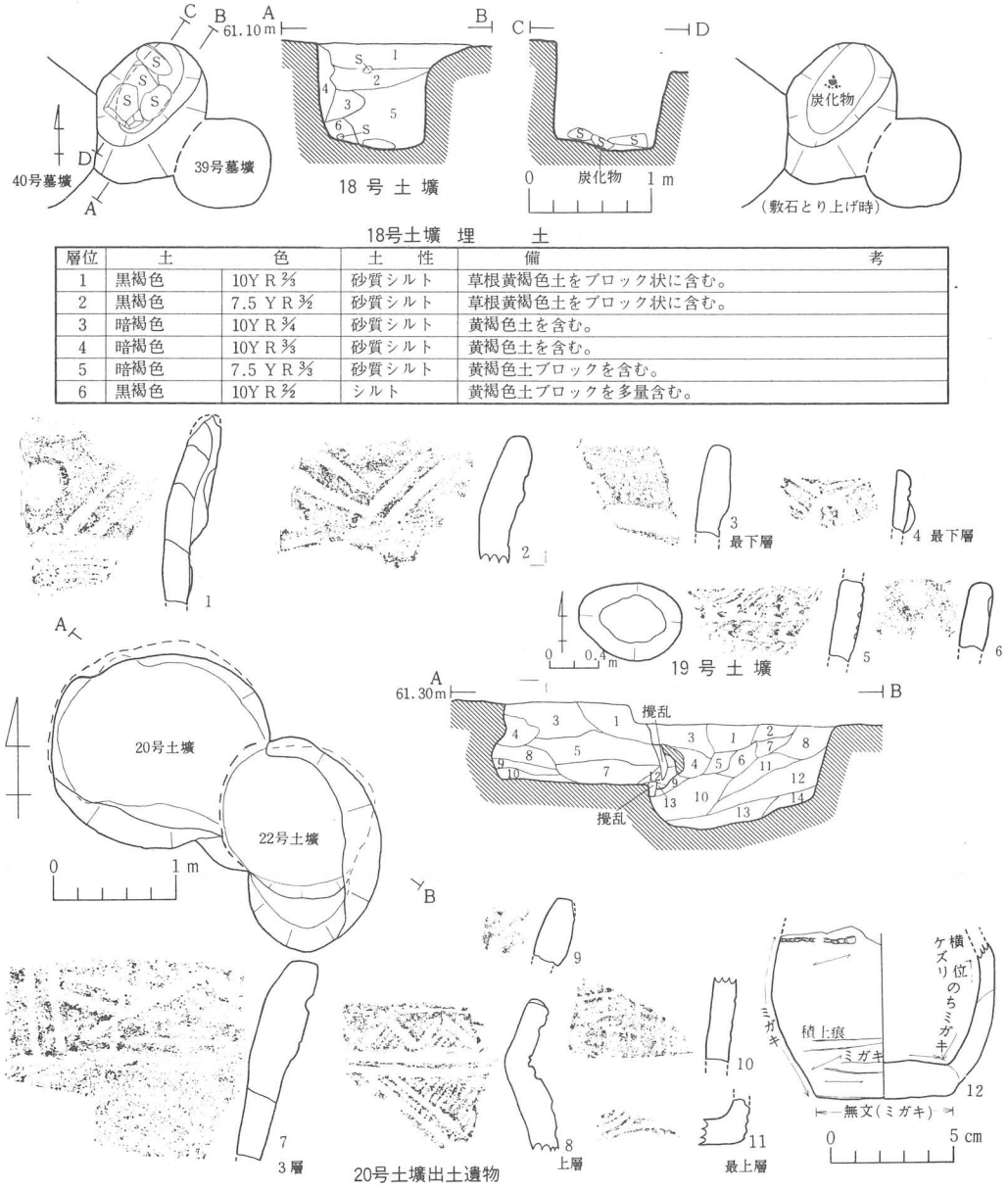


0　10cm

0　5 cm

遺構名	層位	出土状況	遺存	法量	施文・調整	備考
16号土壙 （C－5）	5C層 （底面直上）	一括	口縁部 ⅛欠損	器高40.7cm 口径25.5cm 底径14.3cm	・沈線文 → 凹孔 ・刺突文 → ・「隆線＋刺突」文 ・縄文（L縄文の結束の横位回転による綾絡文）	剥落が著しい。

第45図　16号土壙出土遺物（縄文時代末葉）



18号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	黒褐色	10Y R 2/3	砂質シルト	草根黄褐色土をブロック状に含む。
2	黒褐色	7.5 Y R 3/2	砂質シルト	草根黄褐色土をブロック状に含む。
3	暗褐色	10Y R 3/4	砂質シルト	黄褐色土を含む。
4	暗褐色	10Y R 3/3	砂質シルト	黄褐色土を含む。
5	暗褐色	7.5 Y R 3/3	砂質シルト	黄褐色土ブロックを含む。
6	黒褐色	10Y R 2/2	シルト	黄褐色土ブロックを多量含む。

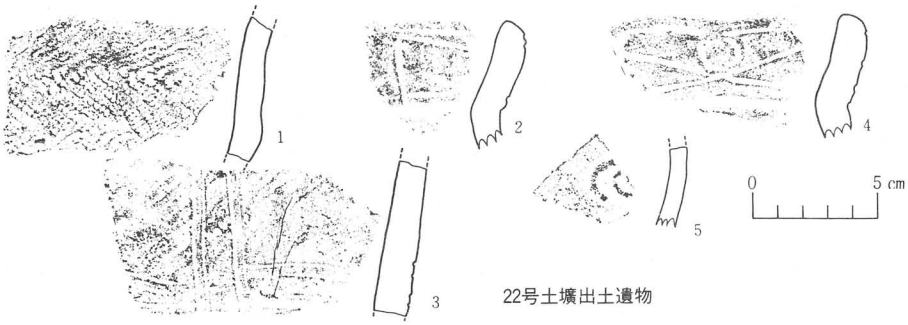
20号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	炭化物・黄褐色土粒少量含む。
2	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	黄褐色土量わずかに含む
3	褐　色	10Y R 4/4	シルト	炭化物・黄褐色土粒少量含む。
4	明黄褐色	10Y R 6/8	粘土質シルト	炭化物少量含む。黄褐色土粒多量含む。
5	褐　色	10Y R 4/4	シルト	
6	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	
7	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	
8	褐　色	7.5 Y R 4/3	シルト	黄褐色土粒含む。
9	褐　色	7.5 Y R 4/6	シルト	ローム粒多量含む。
10	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	ローム粒少量含む。
11	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
12	褐　色	10Y R 4/6	シルト	
13	明褐色	7.5 Y R 5/8	シルト	

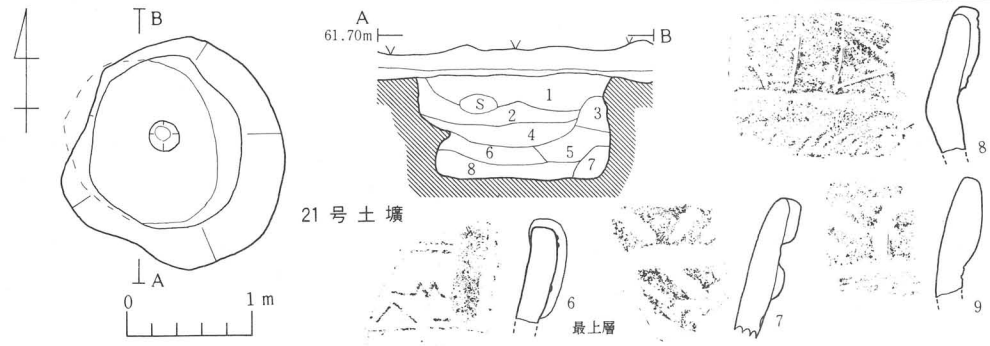
第46図　18・19・20・22号土壙（縄文時代前期末葉）

22号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	褐　色	7.5 Y R 4/6	シルト	明黄褐色土ブロック少量含む。
2	明黄褐色	10Y R 6/8	粘土質シルト	
3	褐　色	10Y R 4/6	シルト	
4	明褐色	7.5 Y R 5/8	シルト	
5	褐　色	7.5 Y R 4/6	シルト	
6	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	明黄褐色土粒少量含む。
7	明黄褐色	10Y R 6/8	粘土質シルト	暗褐色土ブロック含む。
8	暗褐色	7.5 Y R 4/6	シルト	炭化物少量含む。
9	褐　色	10Y R 4/6	シルト	明黄褐色土ブロック含む。
10	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	黄褐色土ブロック少量含む。
11	暗褐色	7.5 Y R 4/6	シルト	黄褐色土粒少量含む。
12	黒褐色	10Y R 2/2	シルト	
13	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	
14	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	



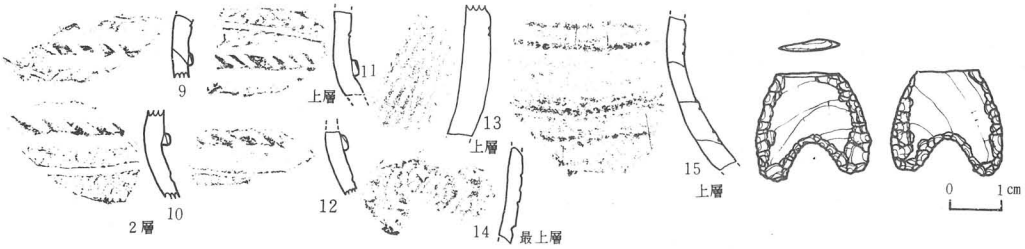
22号土壙出土遺物



21 号 土 壙

21号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	褐　色	10Y R 4/4	シルト	ローム粒子微量
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物少量
3	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	ロームブロック含む。
4	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	
5	褐　色	7.5 Y R 4/3	シルト	ローム粒子全体的に含む。
6	褐　色	10Y R 4/6	シルト	ローム粒子少量
7	明褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	
8	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物微量



第47図　22・21号土壙（縄文時代前期末葉）

んどが5層より上の層から出土した。一個体に復元できるものはなかった。第46図7は3群1類1種に属する肥厚する口縁部破片である。縦位平行沈線文(A－1－4)、斜行平行沈線文(A－1－2)、山形沈線文(A－1－1)が施文され、口縁下端に段を有する。第46図8は3群5類1種に属する口縁から胴部上半に及ぶ破片である。口縁部胴部共に地文として単節斜行縄文が施文され薄い撫で消ししてある。口唇部に小突起があり口縁部には横位沈線文(A－1－3)と山形沈線文(A－1－1)、頸部に横位平行沈線文(B－1－3)、胴部には斜行平行沈線文(C－1－2)が施文されている。第46図9－11は3群7類に属する。第46図11は底部近くまで曲線的な沈線文が施されている底部破片である。第46図9は爪先による横位連続刺突文(A－3－2)を2段に施した肥厚する口縁部破片である。第46図10は半截竹管による平行沈線を縦横に施した(C－1－3、C－1－4)胴部破片である。第46図12は3群8類に属する胴部上半を欠いた鉢形土器である。残存器高7cm、胴部最大径9cm、底径5.5cmである。地文は施文されていない。胴部上半に横位押し引き連続刺突文(C－3－3)が施文されている。内面にはすすが付着している。胎土は粗く、角礫凝岩粒が多く含まれる。石器は微細剥離痕のある剥片1点、剥片5点、磨石2点である。

21号土壙（第47図・写真5－2）

調査区北東部、D－5区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.80m、短軸1.69mの円形である。深さ86cm、底面は平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は8層で構成され、5層6層にローム粒、3層にロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片107点、石器7点、桂化木1点、礫4点が出土した。(石皿は2層上面に乗って出土した。)また縄文土器片のうち52点は最上層1層出土である。第47図6は3群8類に属する口縁部破片である。棒状貼付文(A－2－3)が口唇部まで及び小突起となっている。また細い粘土紐を貼り付け幾何学文(A－2－6)を展開させている。5類2種の口縁部と考えられる。第47図8は3群5類1種に属する口縁から胴部上半までの破片である。口縁は肥厚し頸部に段を有する。文様は縦位沈線文(A－1－4)、横位沈線文(A－1－3)、斜行沈線文(A－1－2)が施文される。胴部には単節斜行縄文が地文として施文され薄い撫で消しがなされている。第47図9～12は3群8類に属する頸部破片である。隆帯十斜めの連続刺突文(B－6－1)が施され、その上下を横位沈線文(A-1-3)(C-1-3)がめぐる。第47図7、9は3群1類1種に属する肥厚する平線の口縁部破片である。第47図7は隆帯＋2本1組の山形平行刺突文(A－6－1)を2段に施し、その下にさらに山形平行刺突文(A－6－1)を施文している。第47図9は口縁部に馬蹄形沈線文(A－1－5)と2本1組の太い斜行沈線文(A－1－2)が施文され、頸部には半截竹管による横位平行沈線(B－1－3)が施文される。第47図13、14は3群8類に属する胴部破片である。第47図13は半截竹管先端による押し引き連続刺突文(C－3－3)が施文されている。第47図15は横位の細い隆帯をまたいで半截竹管先端による連続刺突文(C－3－2)が施されている。第47図14は3群8類に属し弧状沈線2本による(A－1－7)( )文を施文してある。石器は石鏃1点、ヘラ状石器1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片1点、凹痕と磨痕のある礫1点、石皿1点である。

22号土壙（第46、47図・写真５－３）

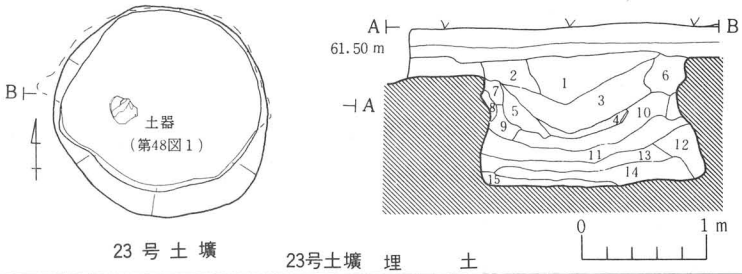
調査区北東部、Ｄ－５区に位置する。第４層上面で確認、20号土壙に西側を一部を切られている。上端平面形は長軸1.70ｍ、短軸1.25ｍの楕円形である。深さ84cm、底面は西北部が一段低くなっている。壁面はほぼ直線的にゆるやかに立ち上がる。埋土は14層で構成されており９層、11層にロームブロック及びローム粒を含む。

遺物は縄文土器片58点、剥片１点、磨石１点、礫１点が出土した。４層中からの出土が多い。第47図１～４は４層から出土している３群土器である。第47図２、４は第３群５類種に属する肥厚する口縁部破片である。第47図２は横位沈線文（A－1－3）、縦位沈線文（A－1－4）、斜行沈線か（A－1－2）、第47図４には横位沈線文（A－1－3）、斜行沈線によるＸ字状文（A－1－2）、弧状沈線２本による（A－1－7）文が口縁部に施文され、共に頸部に太い横位沈線文（A－1－3）が一条めぐる。第47図１は４類に属する胴部破片である。横位綾絡文が施文されている。第47図３は１類１種の胴部破片である。半截竹管による縦位及び横位の平行沈線文（C-1-3）が施文されている。第47図５は細い粘土紐隆帯（C－4－2）を弧状に貼りつけている。（C-1-4）

23号土壙（第48図・写真５－４・５・６）

調査区北東部、Ｄ－５区に位置する。第４層上面で確認、上端平面形は長軸1.74ｍ、短軸1.65ｍの円形である。深さ106ｍ、底面は平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がるが一部内傾するところもある。埋土は15層で構成されており８層にロームブロックを含む。

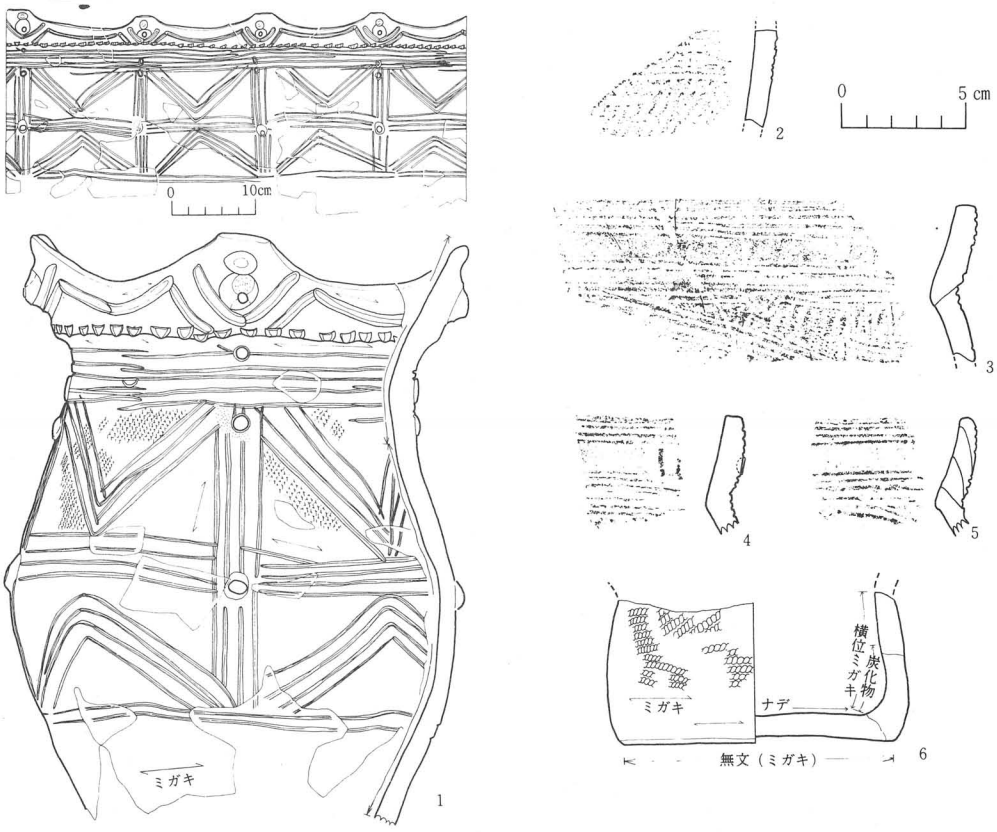
遺物は縄文土器１点（第48図１）、縄文土器底部１点（第48図６）、縄文土器片52点、微細剥離痕のある剥片１点、凹石１点が出土した。第48図１、６及び縄文土器片の約半数は７層より上層から出土している。第48図１は３群３類１種に属する深鉢形土器である。底部を欠く。残存器高24cm、口径17.6cm、胴部径18.3、文様帯は頸部をめぐる平行沈線文（B－1－3）により口縁部と胴部に二分され、さらに貼付文、刺突文、縦位平行沈線文により四区画されている。口縁は四波状を呈し、口縁部には波状頂部の直下に円形刺突文（A－3－1）とコブ状貼付文（A－2－1）を縦位並列させる。太い斜行沈線文及び２本１組の太い平行沈線文（A－1－2）が施文され、口縁下端には半截竹管先端による半月形刺突文（A－3－2）がめぐり直下に段を有する。頸部には半截竹管による平行沈線文（B－1－3）が、胴部には半截竹管による縦位（C-1-4）、横位（C-1-3）、山形沈線文（C－1－1）が施文され、波状頂部から垂下するライン上には、頸部にはボタン状貼付文（B－2－2）、平行沈線の交叉する胴部中位にはコブ状貼付文（C－2－1）が、上位にはボタン状貼付文（C－2－2）が施される。地文は単節斜行縄文が施文され薄い撫で消しがなされている。胴部下半は火熱をうけたため剥落が激しい。胎土はもろく、0.1～3mmの粒状の角礫凝灰岩を多量に含む。第48図６は３群８類に属する底部破片である。底径10.8cm、器壁はやや内弯気味に立ち上がる。４類あるいは５類の底部と考えられる。第48図３～５は３群５類１種に属する口縁から胴部上半に及ぶ同一個体の破片である。平縁で口縁はやや内弯気味に外傾する。口縁部上端及び上端と頸部に半截竹管先端により刺突がなされている（A－3－2）。胴部上半には半截竹管文による斜行平行沈線文（C－1－2）や幾



23 号 土 壙

23号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	炭化物・明黄褐色土ブロック少量含む。
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
3	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	風化礫粒・炭化物少量含む。
4	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	炭化物全体に多量含む。
5	褐　色	10Y R 4/4	シルト	炭化物わずかに含む。
6	褐　色	7.5 Y R 4/6	シルト	炭化物少量含む。
7	明褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	
8	褐　色	10Y R 4/4	シルト	ロームブロック全体に含む。
9	褐　色	10Y R 4/6	シルト	
10	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	
11	黒褐色	7.5 Y R 3/2	シルト	
12	褐　色	10Y R 4/6	シルト	ローム粒子全体に少量含む。
13	褐　色	10Y R 4/6	シルト	ローム粒子わずかに含む。
14	褐　色	7.5 Y R 4/4	シルト	
15	明褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	



遺構名	層　位	出土状況	遺　存	法　量	施　文　・　調　整
23号土坑（D－5）	10層上面＋3　層	一括	胴部末端と底部欠損	口径 17.6cm	〈口縁部〉●小突起 ／ 凹　孔 沈線文 → 刺突文 ／ 〈頸部～胴部〉●縄文（横位 LR）→ 細沈線（頸部 横位 → 胴部 縦 → 横 → 山形）小　突　起

第48図　23号土壙（縄文時代前期末葉）

何学文が施文されている。第48図2は第3群8類に属する胴部破片である。横位平行沈線文(C－1－3)と山形平行沈線文(C－1－1)が施文される。

24号土壙（第49図・写真5－7）

調査区北側中央、D－6区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.72m、短軸1.24mの楕円形である。深さ32cm、底面にはやや起伏がある。壁面は内弯気味にゆるやかに立ち上がる。埋土は5層で構成されている。

遺物は縄文土器片7点、微細剥離痕のある剥片1点、凹石1点が出土した。第49図1は3群8類に属する口縁部破片である。複合口縁であり肥厚している。竹管先端による縦位連続刺突文(A－3－2)が2列に施文されるが一部は横位に施文されている。口縁部中間帯に窓わく状に凹部を設けている。口縁上端には爪先による横位連続刺突文(A－3－2)、口縁部下端、及び凹部の周囲には断面が三角形状の工具による連続刺突文(A－3－2)が施されている。

25号土壙（第49図・写真5－8）

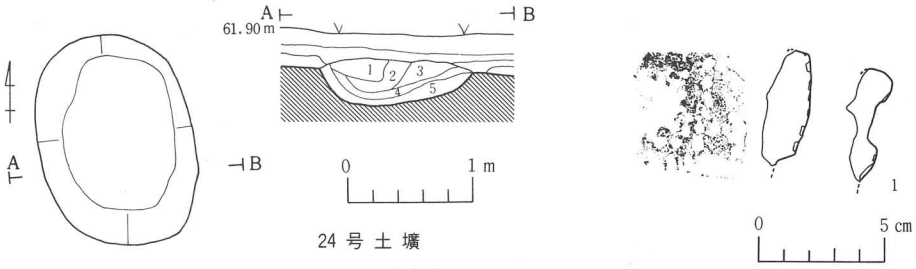
調査区北側中央、D－6区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.41m、短軸1.20mの楕円形である。深さ84cm、底面は平坦でありほぼ中央に27×27cm、深さ14cmのピットを有する。壁面は直線的に垂直に立ち上がる。埋土は8層で構成されている。

遺物は縄文土器片23点、石器5点、礫3点が出土した。第49図2～4は3群8類に属する。第48図2は横位平行沈線文(C－1－3)と弧状沈線文(C－1－7)が施文された胴部破片である。第48図4には折り返し口縁が見られる。第49図3は山形沈線文(C－1－1)と半截竹管先端による横位連続刺突文(C－3－3)が2段に施された胴部破片である。石器はドリル＋スクレイパー1点、石核1点、二次加工のある剥片2点、磨石1点である。

26号土壙（第49・50図・写真6－1）

調査区北側中央、D－6区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.69m、短軸1.61mのほぼ円形である。深さ62cm、底面はほぼ平坦であり壁は急激に立ち上がる。埋土は6層で構成され、4層上面に焼土が乗っている。

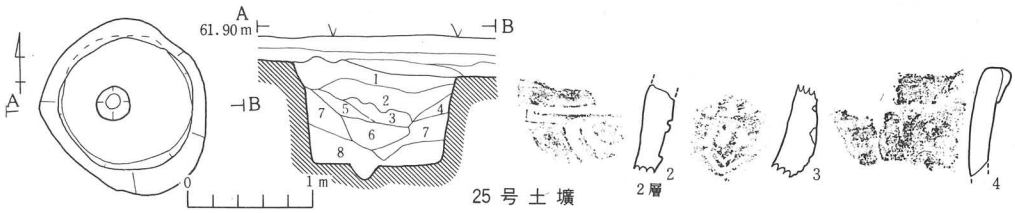
遺物は縄文土器1点（第50図1）、縄文土器片36点、石器6点、礫1点が出土した。第50図1は土壙北側の焼土下4層上面より一括出土した。第3群2類に属する深鉢形土器である。器高36.4cm、口径32.7cm、底径14.9cm、最大径は口縁にある。平縁であり、口縁部は肥厚せず弧状沈線2本によって描かれた馬蹄形沈線文(A－1－5)が上下から交互に施文され、沈線内は1個ずつ円形刺突文(A－3－1)が配される。口縁上端には半截竹管による短い山形沈線文(A－5－1)が、頚部には隆帯上に山形沈線文(B－5－1)がそれぞれ施文され、口縁部と胴部とを区画している。地文は単節斜行縄文が施文されるが薄い撫で消しがなされている。胎土はもろく0.1～3mmの粒状の角礫凝灰岩を多量に含む。第50図6は3群5類1種に属する口縁部及び胴部上半の破片である。口縁部に無文帯があり胴部



24 号 土 壙

24号土壙　埋　　土

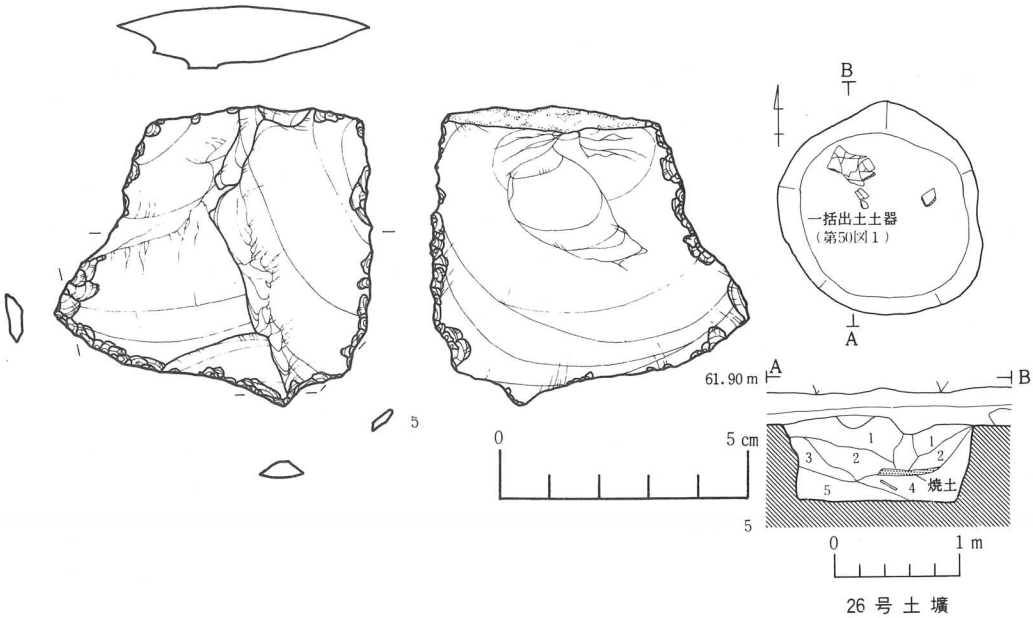
層　位	土　色		土　性	備　考
第　1　層	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	
2	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	
3	褐　色	7.5 Y R 4/3	シルト	
4	にぶい黄褐色	10Y R 4/3	シルト	ロームを微量含む。
5	明黄褐色	10Y R 6/8		



25 号 土 壙

25号土壙　埋　　土

層位	土　色		土　性	備　考
1	褐　色	7.5 Y R 4/6	シルト	炭化物を少量含む。
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	炭化物・ロームを多量含む。
3	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	炭化物を多量含む。
4	褐　色	7.5 Y R 4/6	粘土質シルト	
5	明黄褐色	10Y R 6/8	粘土質シルト	暗褐色土ブロックに含む。
6	明黄褐色	10Y R 6/8	粘土質シルト	炭化物を微量，礫を少量含む。
7	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	ローム・スコリアを少量含む。
8	暗褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	炭化物少量含む。

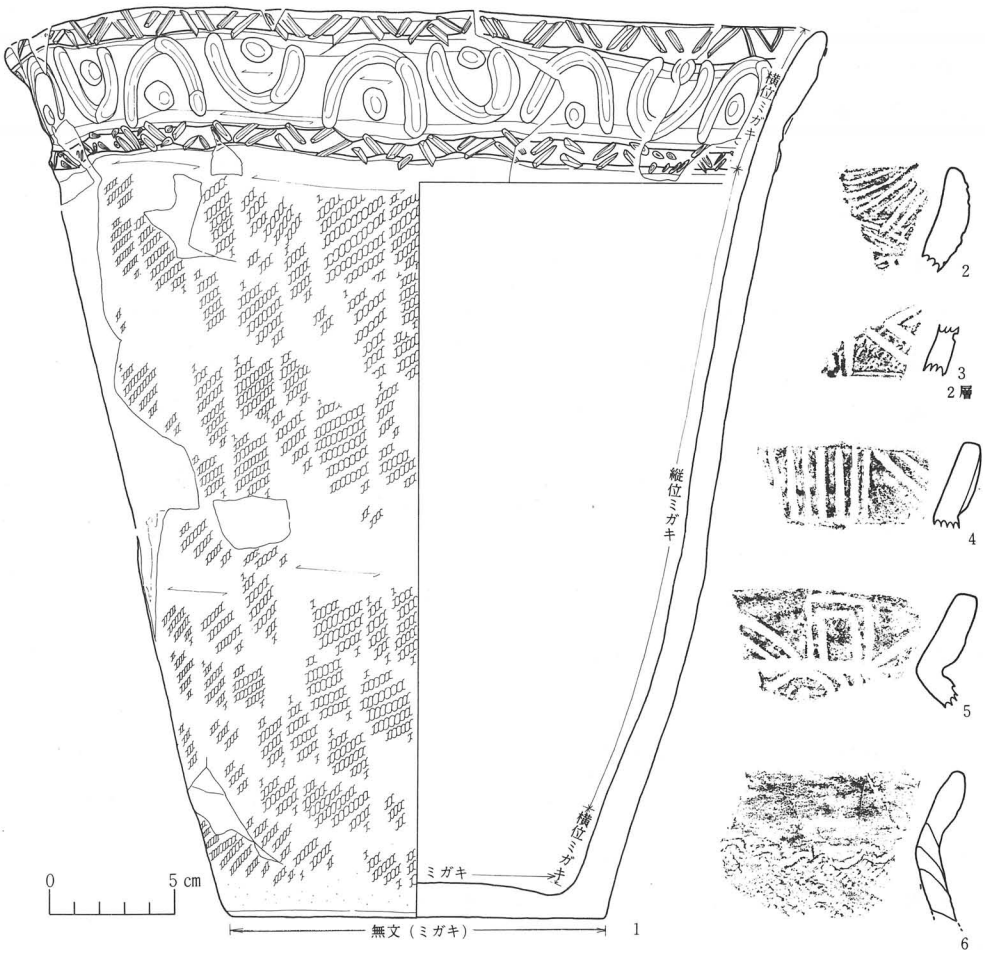


26 号 土 壙

第49図　24・25・26号土壙（縄文時代前期末葉）

埋　土

層位	土　色		土　性	備　考
1	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	
2	暗褐色	10YR 3/4	シルト	炭化物を多量，ローム・焼土を少量含む。
3	黄褐色	10YR 5/6	シルト	炭化物を少量含む。
4	暗褐色	10YR 3/3	シルト	焼土を微量含む。
5	明褐色	7.5 YR 5/8	粘土質シルト	
6	褐　色	7.5 YR 4/4	シルト	



遺構名	層　位	出土状況	遺　存	法　量	施　文　・　調　整	備考
26号土壙（D－6）	4層上面	一括	口縁～胴部½欠損	器高 36.4cm 口径 32.7cm 底径 14.9cm	●隆　帯＋刻　み → 沈線 凹孔 → ミガキ　●横位LR縄文	やや磨滅

第50図　26号土壙（縄文時代前期末葉）

には横位綾絡文が施文される。第50図４、５は３群５類１種に属する口縁部破片である。第50図４は２本１組の斜行平行沈線文(A－1－2)、縦位沈線文(A－1－4)及び横位平行沈線文(A－1－3)が施文され、第50図５は頚部に横位沈線文(B－1－3)、胴部には弧状沈線文が施文されている。石器は二次加工のある剥片１点、磨石２点、凹痕と磨痕のある礫石器１点、凹痕と敲打痕のある礫石器１点、石皿１点である。

27号土壙（第51、52図・写真６－２）

調査区北西区、Ｅ－９区に位置する。第５層上面で確認、28号土壙を切っている。上端平面形は長軸2.14ｍ、短軸2.02ｍのほぼ円形である。深さ80cm、底面は平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は９層で構成され、上下２層に大別される。

遺物は縄文土器片多数、石器３点が出土している。遺物はほとんどが２ａ層中より出土しており、第51図１、第52図１、２、９～12は２ａ層から出土した。第52図10は３群５類に属する口縁から胴部にかけての破片である。平縁であるが、半円状の突起を有し、ボタン状貼付文(A－2－2)を伴う。また縄文原体による圧痕文(A－7－1)が施文されている。地文は単節斜行縄文であるが、撫で消しについては不明である。第51図１は３群６類に属する円筒形の深鉢形土器の口縁部破片である。口唇直下に粘土紐による隆帯(A－4－1)をめぐらし、縦位沈線文を施されたコブ状貼付文(A－2－1)を４ケ所に配してある。地文は無節の斜行縄文である。第51図１は３群３類１種に属する口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁端の内外面に隆帯(A－4－1)をめぐらし、口縁部文様は上下に平行沈線、その中間に山形沈線(A－1－1)を施文し、４ケ所にコブ状貼付文(A－2－1)を配している。胴部には曲線的な沈線文、縦位平行沈線文が施文される。第52図２は３群８類に属する底部破片である。底径14.9cmを測る。地文は施文されていない。第52図12は３群３類２種に属する胴部破片である。半截竹管による山形平行沈線文が二段に施文され、山形頂部の接点には円形沈線文が施文される。胴部文様帯の四区画が行なわれている。第52図９は３群８類に属する口縁部破片である。半円状とコブ状の突起３個をもち、半円状の突起の直下には刺突の加えられたコブ状貼付文(A－2－1)が配され、コブ状突起には縦位の沈線文が施文される。石器は縦形石匙１点、剥片１点、磨石１点である。

28号土壙（第51・52・53図・写真６－３）

調査区北西部、Ｅ－９区に位置する。第５層上面で確認、27号土壙に南半を切られている。上端平面形は長軸1.25ｍ、短軸約1.23ｍのほぼ円形と考えられる。深さ72cm、底面は平坦であり、壁面は強くオーバーハングする。埋土は４層で構成されており、27号土壙へ倒れ込むような状況を示している。

遺物は縄文土器多数、石器16点、礫５点が出土した。第52図７、８は３群１類１種に属する口縁部破片である。横位沈線文が施され、第52図７は口縁部下端に段を有し、第52図８は双コブ状突起を有する。第52図４は棒状貼付文(A－2－3)が施され、小突起を口縁を有する。第52図３、６は

3群8類に属する口縁部破片である。第52図3には山形平行連続刺突文(A－3－2)が、第52図6には渦巻状の沈線文が施文され、口縁下端に段を有する。石器は石匙2点、石核1点、ドリル2点、2次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片8点、凹石1点である。

29号土壙（第52図・写真6－4）

調査区中央やや北西寄りのF－8区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.86m、短軸0.82mの円形である。深さ62cm、底面は中央が低く、ゆるやかな傾斜をもち、壁面は急激に立ち上がる。埋土は6層で構成されている。

遺物は縄文土器2点が出土している。第52図13は3群8類に属する胴部破片である。縦位(A－1－4)、横位(A-1-3)、斜行(A-1-2)、弧状(A-1-7)の各平行沈線文が施文されている。

30号土壙（第53図・写真6－5）

調査区中央、G－6区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.82m、短軸0.78mのほぼ円形である。深さ44cm、底面は平坦であるが、扁平な輝石安山岩が敷いてあった。壁面は急激に立ち上がる。埋土は5層で構成され、全層にわたってローム粒が認められた。

遺物は縄文土器片5点、石器3点、礫5点が出土した。太い縦位沈線文をもつ3群8類に属する口縁部破片が出土している。石器は微細剥離痕のある剥片1点、釣針形石器1点(第52図5)、板状磨石1点である。釣針形石器は、実用品とは考えにくい。

31号土壙（第54図・写真6－6）

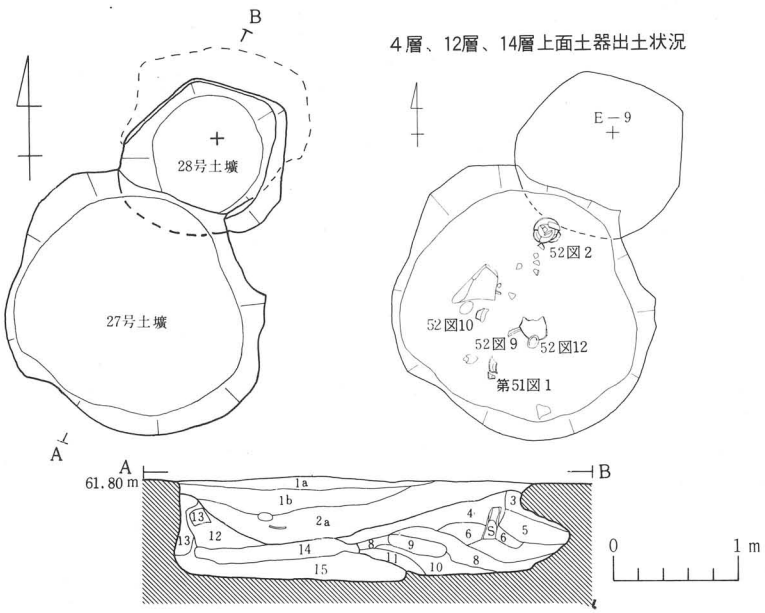
調査区中央、G－6区に位置する。第5層上面で確認、芋穴により上半はほとんど削平を受けている。上端平面形は長軸推定約1.46m、短軸推定約1.11mの楕円形と考えられる。深さ47cm、底面は中央が低くゆるやかな傾斜をもち、中央にピットを有する。壁面はゆるやかに立ち上がる。埋土は9層で構成されている。

遺物は縄文土器片10点、剥片2点が出土している。第54図1は第3群1類1種に属する口縁部破片である。弧状沈線文(A－1－7)、斜行沈線文(A－1－2)、横位沈線文(A－1－3)が施文され、口縁部が肥厚し下端に段を有する。

32号土壙（第54図・写真6－7）

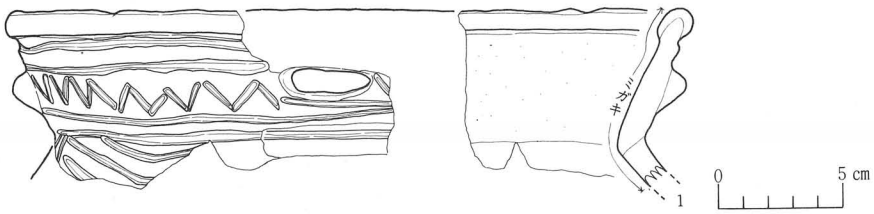
調査区中央北西寄り、H－8区に位置する。第5層上面で確認した。上端平面形は長軸0.97m、短軸0.79mの楕円形である。深さ28cm、底面はほぼ平坦であり、壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。埋土は単層である。上部は削平を受けていると考えられる。

遺物は縄文土器片28点が出土した。第54図3は3群1類2種に属する口縁部破片である。口縁は肥厚し、口唇直下に横位沈線文、その下に縦位弧状沈線文が横位連続施文(A－1－6)される。口縁下端に段を有する。第54図2は3群3類2種に属する口縁部から胴部上半へかけての破片である。山形突起を有する。口縁部には半截竹管による横位平行沈線文(A－1－3)、棒状貼付文(A－2－3)が施され、胴部上



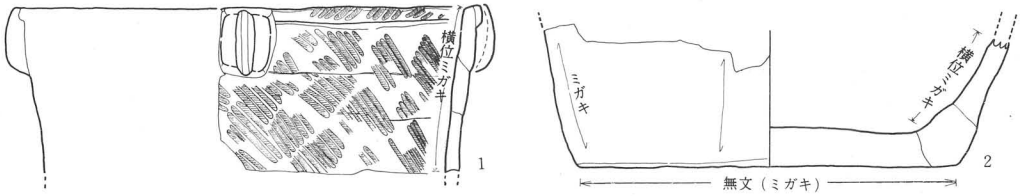
27・28号土壙　埋　　土

層	位	土	色	土　性	備　　考
共有埋土	1 a	暗褐色	10Y R ¾	シルト	
	1 b	暗褐色	10Y R ⅜	シルト	風化礫少量，炭化物を含む。
	2 a	黒褐色	10Y R ⅔	シルト	風化礫粒・炭化物を含む。
28号土壙埋土	3	黄褐色	10Y R ⅚	粘土質シルト	風化礫少量，ロームを含む。
	4	暗褐色	7.5 Y R ¾	シルト	風化礫を全体に含む。
	5	暗褐色	10Y R ¾	シルト	
	6	暗褐色	10Y R ⅜	シルト	炭化物少量，風化礫を全体に含む。
	7	褐　色	7.5 Y R ⅘	粘土質シル ト	
	8	黄褐色	10Y R ⅚	粘土質シルト	
	9	明褐色	7.5 Y R ⅚	粘土質シルト	ローム？
	10	暗褐色	7.5 Y R ¾	粘土質シルト	炭化物少量，風化礫を全体に含む。
	11	褐　色	10Y R ⅘	粘土質シルト	
27号土壙埋土	12	褐　色	7.5 Y R ¾	シルト	
	13	黄褐色	10Y R ⅚	粘土質シルト	風化礫少量，ロームを含む。
	14	黄褐色	10Y R ⅝	粘土質シルト	風化礫を全体に含む。
	15	黄褐色	10Y R ⅚	粘土質シルト	風化礫を全体に含む。

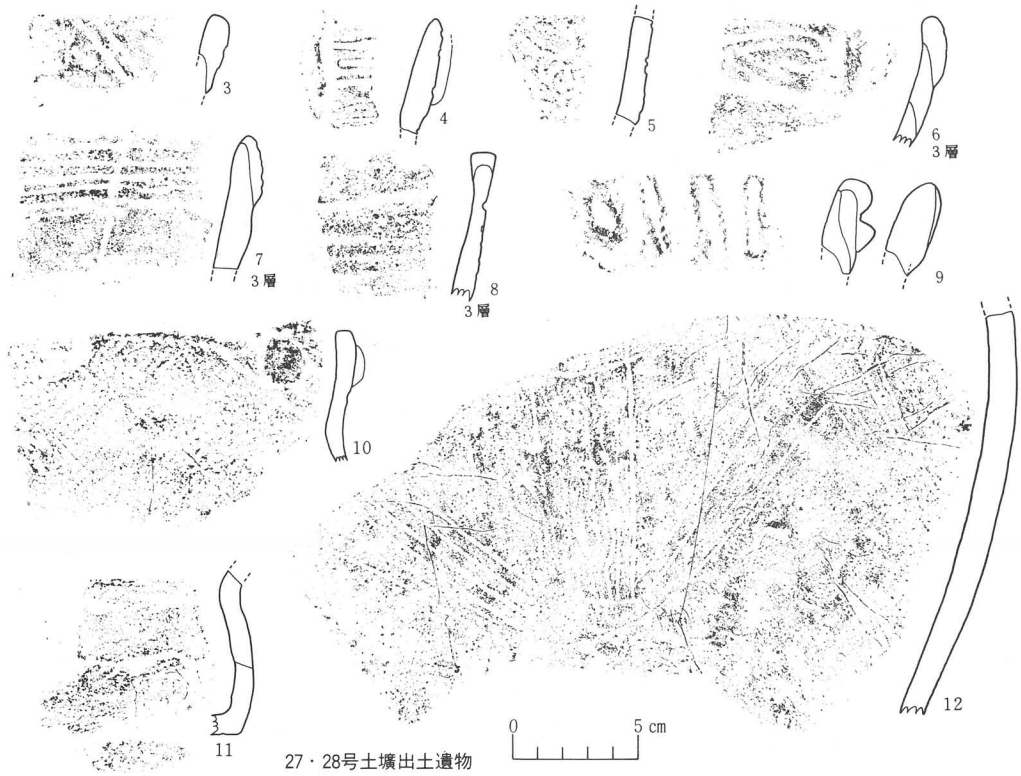


遺　構　名	層　位	出土状況	遺　存	法　量	施文・調整	備　　考
27，28号土壙（E－9）	4層上面		口縁部	口径27.4cm	小突起 → 沈線文	磨滅している。

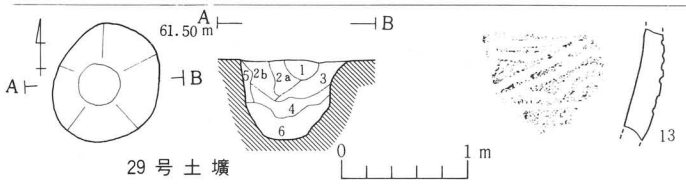
第51図　27・28号土壙（縄文時代前期末葉）



遺構名	層位	出土状況	遺存	法量	施文・調整	備考
27，28号土壙（E－9）	2 a 層		口縁部	口径18.5cm	縄文（縦位L）→ 隆帯（口唇部）→突起＋沈線（縦位）	輪積痕あり。



27・28号土壙出土遺物

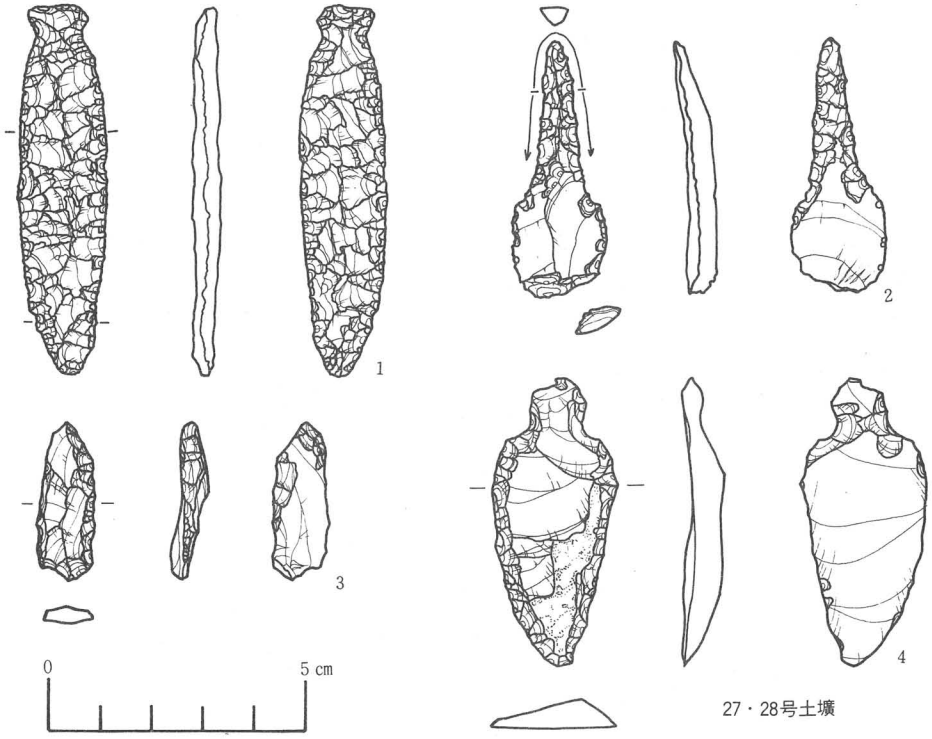


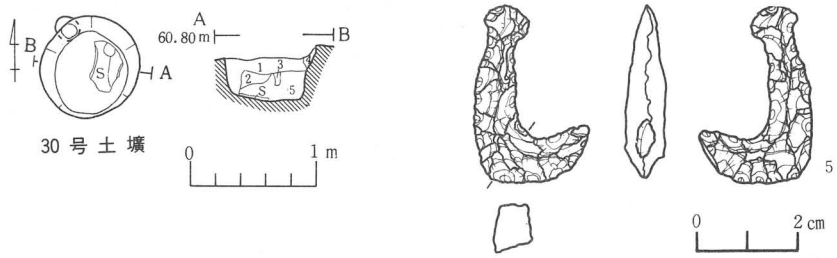
29 号 土 壙

29号土壙 埋 土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR ¾	シルト	
2 a	暗褐色	7.5 YR ¾	シルト	
2 b	暗褐色	7.5 YR ⅔	シルト	
3	褐色色	7.5 YR ⅚	シルト	
4	暗褐色	10YR ¾	シルト	
5	暗褐色	10YR ⅚	シルト	ロームブロック少量。
6	褐 色	10YR ⅚	粘性シルト	ローム・炭化物を含む。

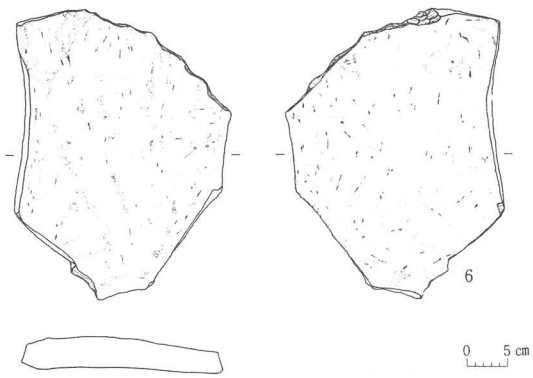
第52図　27・28号土壙出土遺物・29号土壙（縄文時代前期末葉）



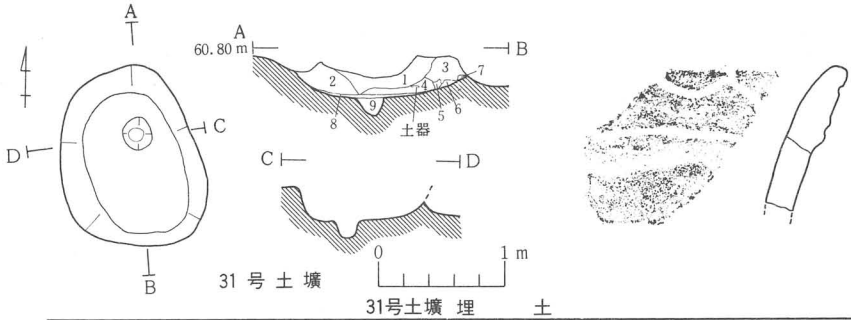


30号土壙　埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	暗褐色	7.5 Y R ¾	シルト	ロームブロックと炭化物を含む。
2	暗褐色	10Y R ¾	シルト	ロームとカーボンを微量含む。
3	にぶい黄褐色	10Y R ¾	シルト	カクラン。
4	黄褐色	10Y R ⅚	シルト	ロームを少量含む。
5	黄褐色	10Y R ⅝	シルト	ロームと石を含む。



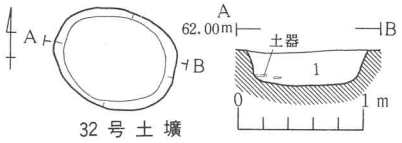
第53図　27・28号土壙出土遺物・30号土壙（縄文時代前期末葉）



31 号 土 壙

31号土壙 埋　　土

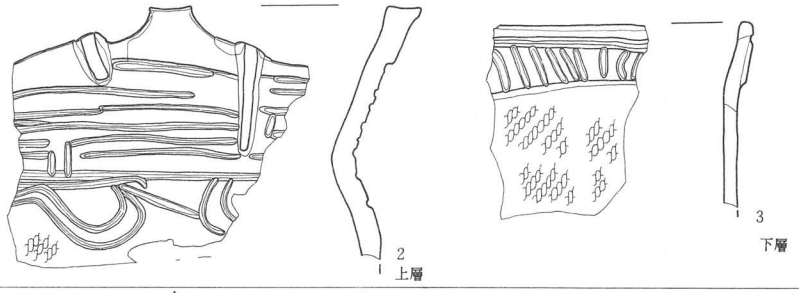
層位	土　　色		土　性	備　　考
1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	黄褐色ブロックと炭化物を含む。
2	暗褐色	7.5 Y R 3/3	シルト	ロームブロックを含む。
3	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	ロームを含む。
4	黒褐色	10Y R 3/4	シルト	ロームを含む。
5	黒褐色	7.5 Y R 3/4	シルト	
6	黒褐色	10Y R 3/4	シルト	
7	明黄褐色	10Y R 6/6	シルト	
8	黄褐色	10Y R 5/6	シルト	暗褐色ブロックを含む。
9	にぶい黄褐色	10Y R 5/3	シルト	

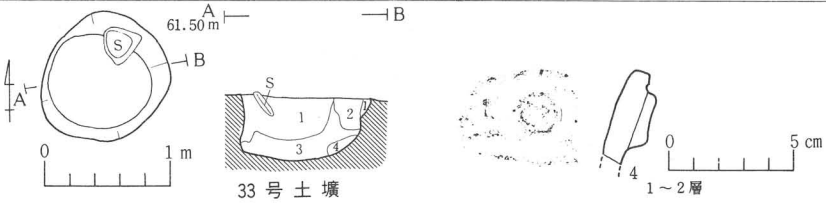


32 号 土 壙

32号土壙 埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	炭化物を若干含む。



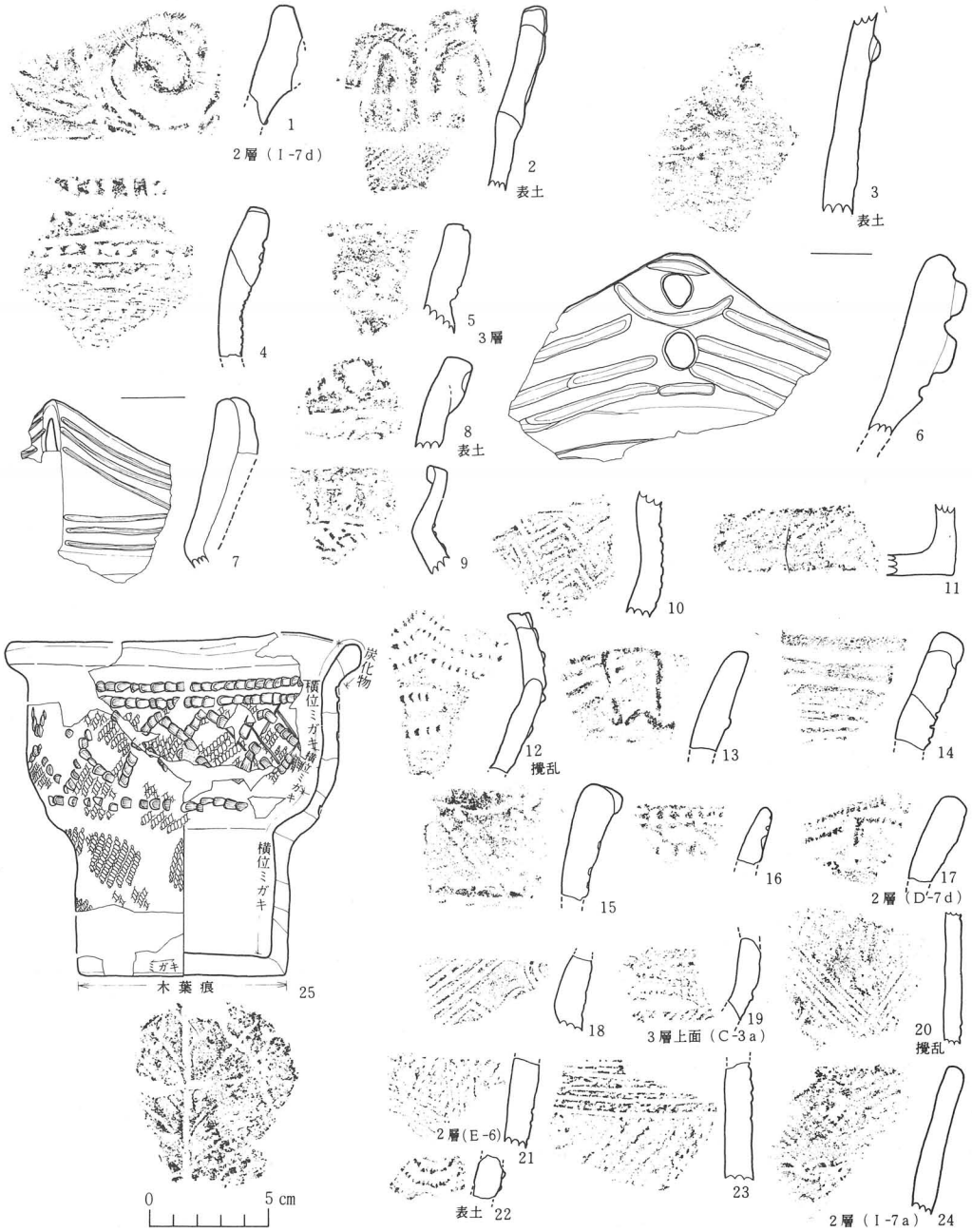


33 号 土 壙

33号土壙 埋　　土

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	炭化物少量混入。
2	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	
3	褐　色	10Y R 4/4	シルト	明黄褐色粘土を部分的に含む。
4	褐　色	7.5 Y R 4/3	シルト	明褐色粘土ブロックを多量に含む。

第54図　31・32・33号土壙（縄文時代前期末葉）



遺構名	層位	出土状況	遺存	法量	施文・調整
1号竪穴（D－5）	上層	一括	½欠損	口径 17.6cm	（胴部・刺突文）

第55図　遺構外出土の縄文土器（前期末葉）

半には曲線的な平行沈線文が施文される。
(A－1－7)

33号土壙（第54図・写真６－８）

調査区南西部、Ｉ－８区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸1.06ｍ、短軸0.94ｍのほぼ円形である。深さ34cm、底面は中央が低くゆるやかな傾斜をもつ。壁面は急激に立ち上がる。埋土は４層で構成され、３層４層にはロームブロックを含む。また１層中には扁平な円礫が認められた。

遺物は縄文土器片20点、石器３点、礫１点が出土した。第54図４は３群８類に属する口縁部破片である。ボタン状貼付文(A－2－2)が施され、口縁上下端に横位沈線文(A－1－3)が施文され、その間に弧状の沈線文が連続施文(A－1－6)される。

遺構外出土遺物について（第55図）

第54図１～３は３群１類１種に属する口縁部破片である。第55図１は山形突起をもち、コブ状貼付文(A－2－1)の周囲に細い粘土紐を渦巻状(A－2－4)に貼り付けている。第55図２は第50図１で見られた馬蹄形沈線文を連続して施され半円状の突起をもつ。頸部に横位沈線(A－1－5)がめぐる。第55図３は頸部から胴部上半へかけての破片である。頸部に隆帯＋連続刺突文(B－1－3)、胴部には綾絡文(B－6－1)が施文される。

第55図４は３群１類２種に属する口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部は肥厚し横位平行沈線文(A－1－3)が施され、その間に竹管文による連続刺突文(A－3－2)が施文される。胴部上半には半截竹管による横位平行沈線(C－1－3)が施文され、その上に半截竹管による半月形刺突文(C－3－2)が２段に施される。

第55図９は３群３類１種に属する口縁部破片である。口縁部上端内面に段を有する細い粘土紐の貼り付けによる幾何学文を施す。

第55図５・６は３群３類２種に属する口縁部破片である。第55図４は平縁であり口縁が肥厚し下端に段を有する。口縁上端に斜行沈線文、下端には弧状沈線文(A－1－7)、横位沈線文(A－1－3)が施される。第55図５は波状口縁で肥厚する。３本の斜行する平行沈線が波状頂部へむかい、頂部直下にコブ状貼り付け文(A－2－1)が縦位に２個施され３本の短い横位沈線文(A－1－3)にはさまれる。第55図７も波状口縁であり、口縁上端で３本の斜行する平行沈線(A－1－2)が波状頂部へむかい、頂部から棒状貼り付け文が施され、口縁には３本の横位平行沈線(A－1－3)が施文される。

第55図８は３群３類２種に属する口縁部破片である。上下幅の狭い口縁部に円形刺突文(A－3－1)と連続弧状沈線文(A－1－6)が施文される。口縁は肥厚し下端に段を有する。

第55図10、11は３群４類に属する。第55図10は胴部破片であり山形平行沈線文(C－1－1)が２段に施文される。上端には横位沈線文(C－1－3)が施文される。第54図11は底部破片である。器壁は内弯気味に立ち上がる。

第55図12は３群７類に属する口縁部から胴部上半にかけての破片である。山形突起を有する。

隆帯＋半截竹管文による連続押し引き刺突文を口縁に山形に３列、胴部に２列配している。

第55図13～17は３群８類に属する口縁部破片である。第55図13は口縁がやや波状をなす。波状頂部へむかう斜行平行沈線文（A－1－2）が施文され、細い粘土紐により縦位及び弧状の貼り付け文（A－2－6）が施される。第47図６と共通する。第55図14は横位平行沈線が施文されている。第55図15は口縁上端と下端に半截竹管による連続刺突文（A－3－2）が施文され、その間に斜行する連続刺突文（A－3－2）が施文される。第55図16は半截竹管による弧形刺突文が２段に連続刺突（A－3－2）されるものである。第55図17は波状口縁であり、波状頂部に円形刺突文、口縁端に沿って隆帯＋半截竹管文による連続押し引き刺突（A－6－2）文が施文される。

第55図18～23は３群８類に属する胴部破片である。第55図18・20・21・23は半截竹管による平行沈線が施文されたものである。第55図18・20では胴部文様帯の四区画が行なわれていると考えられる。第55図19・22は隆帯＋半截竹管先端による連続押し引き刺突文（C－6－2）が施文されている。

第55図24は３群８類に属する口縁部破片である。単節斜行縄文が施文されている。

第55図25は３群４類に属する深鉢形土器である。器高14.0cm、口径15.0cm、底径8.6cmで、最大径は口縁にある。平縁であり、口縁部はやや肥厚する。口縁部は無文であり、文様帯は胴部上半にある。文様は先端がヘラ状の工具による横位連続押し引き刺突文（C－6－2）が胴部上半の上端に２条、下端に１条めぐり、その間に同じ工具による山形連続押し引き刺突文が２段に施文されており、一部には文様の割りつけのためと考えられる細い沈線がみられる。地文は単節斜行縄文が施文されるが、文様施文前に薄くなで消してある。胎土は緻密であり、砂粒の混入は少ない。また底部には木葉痕が認められる。

5．縄文時代中期の遺構と遺物

1号竪穴遺構（第61図・写真8 a－1）

調査区北東部、C－4区、C－5区に位置する。第4層上面で確認、12号土壙と47号土壙と重複関係があり、両遺構より新しい。上端平面形は長軸3.33m、短軸3.03mの円形である。深さ13cm、底面は平坦である。底面中央部はさらに竪穴状に落ちこみ、平面形は長軸2.50m、短軸1.71mの楕円形である。深さは35cm、底面は平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は9層で構成され大きく上下2層に分かれる。

遺物は南西部の確認面から第3群4類土器（第55図25）が出土、また北東部の上段の底面から第3群土器の破片1点が出土し、下層より第4群土器破片14点が一括出土したことから、第4群土器の時期の遺構とした。また石器は石匙3点（第56図8・10）、石核1点（第56図9）、剥片2点が出土している。

第56図1～6は同一個体である。第4群1類に属する。1～2は口縁部上半の破片である。隆帯と沈線による渦巻文・曲線文（A－5－2）（A－5－3）が施文される。3は口縁部下半の破片であり無文帯を有し、隆帯と沈線による横位直線文（A－1－3）が施文されている。4～6は胴部破片である。4・5には直曲平行沈線文（C－1－8）が、6には平行沈線による棘状文（C－1－9）が施文されている。

9号住居跡（第57・58・59図・写真7－1～4）

調査区ほぼ中央東寄り、F－6区・G－6区を中心に位置する。第5層上面で確認された。遺構の保存状況は極めて悪く、遺構の北側3分の2は幅約40cmの機械掘りの芋穴が東西に7列走りさらに遺構全面にわたって東西に手掘りの芋穴が走るため、壁面及び周溝は北西部で確認されたにすぎず、床面はほとんど残っていない。遺構の上端平面形は明確にはわからないが長軸約7.60m、短軸約6.80mの楕円形と考えられる。主軸方向はN－16°－E である。深さ32cm、床面については不明であるが本来は平坦であったと考えられる。壁面はゆるやかに立ち上がる。南西部で一部段差が認められるが、本遺構との関係は不明である。

周溝は幅約40cm、深さ6cmを計り、北西部のみに認められるが本来は全周していたと考えられる。柱穴は13個確認された。P3とP2、P6とP7に重複関係が認められ、P2よりP3が、P7よりP6が古い。柱痕は確認されなかった。炉跡は遺構南部に位置する。平面形は長軸約2.90m、短軸1.50mの北側でやや幅の狭くなる楕円形である。土器埋設石組部、石組部、前庭部で構成される複式炉である。炉石は前庭部東西壁面、石組部四面に存在していたと考えられるが削平をうけており残存する炉石は前庭部東壁に扁平な角礫が1個、石組部東西壁面で扁平な角礫がそれぞれ1個、前庭部と石組部との仕切石（角礫及び円礫）が6個である。前庭部の平面形は長軸1.85m、短軸1.50mの隅丸長方形で深さは18cmである。南壁際に幅約30cm、深さ約20cmの溝状の落ち込みが認められ、中央がピット状にやや深くなっている。底面は中央

がやや低くなっておりゆるやかな傾斜をもつ。また径10～30cm、深さ５～10cmの円形の浅いピットが５個認められる。石組部には掘り方があり、前庭部との仕切り石を埋め込み底面は南側を低くしゆるやかな傾斜をもつように構築されている。また底面下には性格不明のピットがある。石組部の平面形は長軸約1.20m、短軸1.05m以上の北側で幅の狭くなる台形と考えられ、深さは18cmである。底面は前底部底面より一段下がり、全面焼けている。特に北半の燃焼度が強く底面下３～５cmまで加熱により赤変している。土器埋設石組部には径約48cm、深さ14cmの掘り方があり深鉢形土器の胴部が埋設されてある。掘り方に円礫・角礫を配している。炉跡の埋土は18層で構成されている。10層に焼土粒を多く含み石組部最下層11層には焼土粒と炭化物を極めて多量に含む。土器埋設石組部では掘り方埋土には焼土粒が認められるが埋設土器内部の埋土中にはほとんど認められず底面も焼けていない。また、遺構北部の主軸線上に埋設土器が１個存在する。径57cm、深さ10cmの円形の掘り方があり深鉢形土器の胴部が埋設されてある。掘り方底面は壁際を土器に合わせてやや深く掘り込んである。埋土は10層で構成される。掘り方埋土には焼土粒が認められるが埋設土器内部の埋土中には焼土粒は認められず、底面は焼けてはいない。

９号住居跡は内部施設に複式炉と埋設土器を有しているが、炉の改築が行なわれた痕跡はない。また柱穴は13個のうち重複関係をもつものが計４個あるが、他の柱穴に建て替えは行なわれていない事から、一部の柱穴の建て替えがあるにせよ住居の建て替えはなかったものと判断できる。柱穴はＰ３とＰ12がやや内側に位置することから、西側はＰ１とＰ３、東側はＰ13とＰ12の計４本が石組部と土器埋設石組部を覆う形で組み、北半部では西側がＰ４、Ｐ５、Ｐ６、東側ではＰ11、Ｐ10、Ｐ９あるいはＰ８が対応すると考えられる。住居の規模が比較的大形なために10本柱穴という構造にしたと考えられる。

遺物は第５群土器と石器16点が出土している。第59図１は炉に伴なう埋設土器である。口縁部の上半と胴部下半及び底部を欠く。最大径38.5cmを計る。第５群２類１種に属する深鉢形土器である。口縁部には隆帯と沈線による渦巻文（A－５－２）と曲線文（A－５－３）、胴部には楕円文（C－１－９）・懸垂文（C－１－10）が施文されている。地文は単節ＬＲ斜行縄文が沈線区画内に施文されている。第59図2は埋設土器である。口縁部の上半と胴部下半及び底部を欠く。最大径29.0cmを計る。第５群２類２種に属する深鉢形土器である。胴部には楕円文（C－１－10）と懸垂文（C－１－11）・逆「U」字文（C－１－12）・「C」字文（C－１－13）が施文される。地文は単節ＬＲ斜行縄文が沈線区画内に施文されている。第59図３は炉跡から出土した第５群２類に属する胴部破片である。楕円文と懸垂文が施文されている。

石器は石鏃３点（第58図２、３、４）、スクレイパー１点、石匙１点（第58図５）、ヘラ状石器（第58図１）、ピエスエスキーユ１点、二次加工ある剥片１点、剥片２点、磨石１点、礫６点が出土している。

10号住居跡（第60図・写真７－５～８）

調査区南西端、Ｊ－10区に位置する。第４層上面で確認した。西側で２号溝、67号土壙、68号土壙と重複関係があり、３遺構より古い。南側は崖面になっており南側壁面は消失している。上端平面形は長軸6.22m、短軸5.78m以上のほぼ円形である。主軸方向はＮ－30°－Ｗである。深さ16cm、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。貼り床はない。

周溝は２条確認された。外側の１号周溝は幅約30cm、深さ８～22cmとやや段差があり一部とぎれるが炉跡を除いて全周すると考えられる。内側の2号周溝は幅約16cm、深さ9～13cmである。南西部では確認されなかった。柱穴は18個確認されＰ10とＰ４とＰ５、Ｐ６とＰ７、Ｐ３とＰ17に重複関係がみられ、Ｐ５よりＰ４が、Ｐ４よりＰ10、Ｐ７よりＰ６、Ｐ17よりＰ３が古い。柱痕は確認されなかった。また他にピットが４個検出された。炉跡は２基検出された。１号炉は遺構南西部に位置し、主軸方向はＮ－40°－Ｅである。２号炉・Ｐ8・Ｐ9と重複関係がありこれらより古い。長軸2.50m以上、短軸1.20m以上の不整楕円形で深さ12cmある。前庭部と石組部を確認したが２号炉構築の際に破却されたらしく前庭部及び石組部に炉石が散乱していた。複式炉である。前庭部は長軸1.75m、短軸1.30mの楕円形である。底面は中央部が低くゆるやかな傾斜をもつ。石組部は長軸1.20m、短軸1.16mの楕円形であり、炉石は原位置を保っていたのは南東壁際の角礫２個と前庭部との仕切り石３個（角礫）だけであり、他は抜き取り痕を確認した。底面は平坦であったと考えられる。２号炉は遺構南部に位置し、主軸方向はＮ－3°－Ｗである。前庭部と石組部ａ・ｂで構成されている複式炉である。平面形は長軸2.5m以上、短軸0.96mの楕円形を２つ合わせた形をしている。前庭部は長軸1.97m、短軸1.70m以上の楕円形で深さ12cmである。底面は中央が低くゆるやかな傾斜をもつ。石組部ａは平面形が長軸1.10m、短軸0.95mの楕円形で深さ20cmある。底面は平坦で焼けている。円礫と角礫を使用して構築されている。石組部ｂは平面形が径0.45mの円形の掘り方を有し小礫を配している。深さは10cmである。また２号炉の主軸線上、北壁際に埋設土器が１個存在する。径38cm、深さ16cmの円形の掘り方があり深鉢形土器の胴部が埋設されてある。

10号住居跡は炉の重複関係、柱穴の重複関係、２条の周溝から３時期の変遷が考えられる。第１期は主軸方向は北東方向で、北西側がＰ16・Ｐ11・Ｐ15、東南側はＰ２・Ｐ13・Ｐ19が組み２号周溝が対応する。第１期の炉は１号炉の石組部の可能性がある。第２期の主軸方向も北東方向で、柱穴は北西側がＰ４（Ｐ10）、Ｐ６、Ｐ８、東南側はＰ１・Ｐ14・Ｐ17が組み１号周溝が対応する。炉は１号炉である。第３期の主軸方向は北方向であり柱穴は西側がＰ５、Ｐ７・Ｐ９、東側はＰ３・Ｐ12・Ｐ14が組み１号周溝が対応する。炉は２号炉である。埋設土器は第３期のものと考えられる。

遺物は第５群土器と石器40点が出土している。第61図1は埋設土器である。口縁部と胴部下半

及び底部を欠損している。第５群２類３種に属する深鉢形土器である。地文だけが施文されている。第62図１は床面より出土した深鉢形土器である。胴部下半と底部を欠損する。口縁部には楕円文(C－1－10)、隆帯と沈線による渦巻文(A－5－2)・曲線文(A－5－3)が施文され、横位平行沈線文(B－1－3)が頚部文様として施文される。胴部には縣垂文(C－1－10)あるいは楕円文(C－1－11)・隆帯と沈線による縦の渦巻文(C－5－2)が施文されていると考えられる。第62図２－４は第５群２類に属する。胴部破片である。３・４は隆帯と沈線による渦巻文(C－5－2)が施文されている。３はP13出土、４は埋土１層出土である。２は２号炉底面から出土している。楕円文(C－1－10)が施文されている。

石器はスクレイパー２点、石匙１点（第62図７）、ピエスエスキーユ２点（第62図６、８）、二次加工のある剝片３点、ドリル１点、微細剝離痕のある剝片５点、剝片16点、磨石２点、凹痕と磨痕のある礫石器２点、珪化木４点、礫１点、小石皿様礫器１点（第62図５）、有溝砥石１点が出土している。

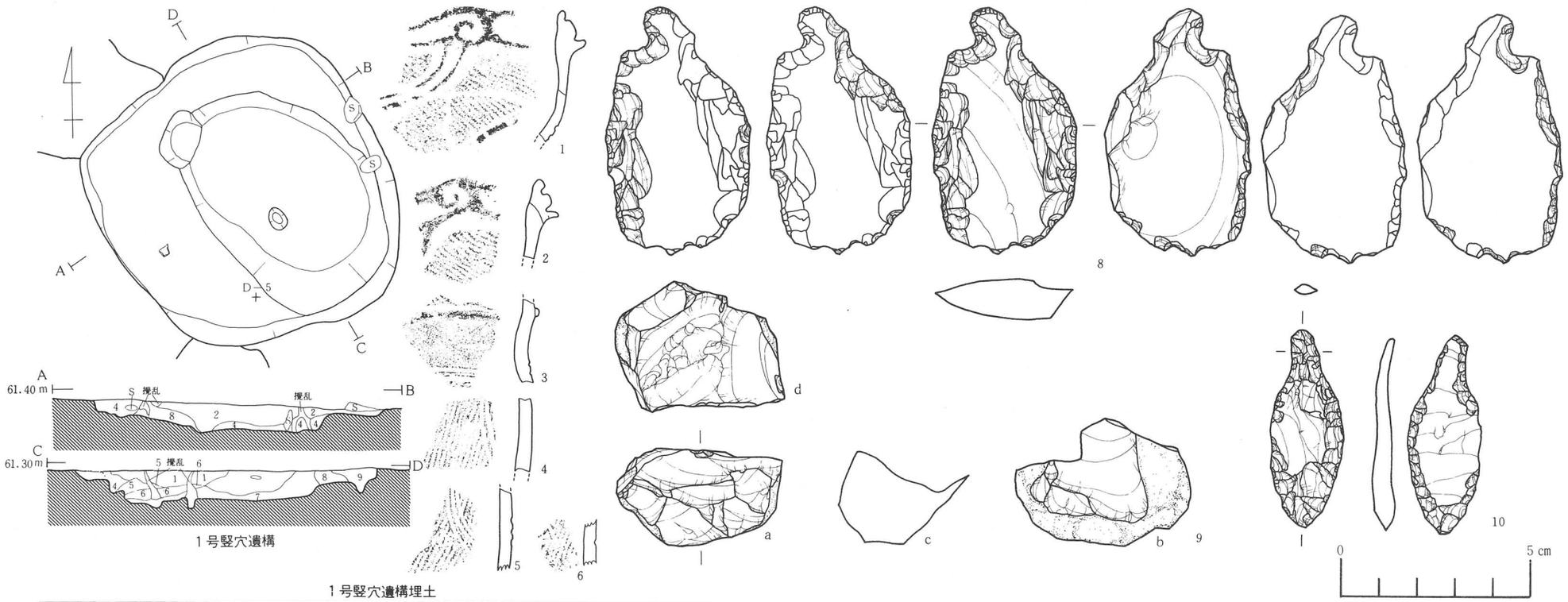
１号埋設土器（第56図・写真８ａ－２）

調査区北側中央、Ｄ－７区に位置する。第４層上面で確認、掘り方の上端平面形は長軸37cm、短軸約31cmの円形で、深さは16cmである。底面は平坦であり、壁面は急激に立ち上がる。埋土は３層で構成されている。

埋設土器（第56図７）は底面からやや浮いて倒立した状態で出土した。口縁から胴部上半にかけて残存している。第５群２類２種に属する深鉢形土器である。口径35.5cmを計る。頚部文様として横位沈線文(B－1－3)が施文される。胴部には楕円文(C－1－10)が施文され、縦位沈線文(C－1－4)により区画されている。また埋設土器のすぐ北には40cm程の扁平な角礫があり、西側50cm程の所には第63図１の土器が第４層上面から出土している。

遺構外出土遺物（第63・64図）

第63図２・３は第４群２類に属する同一個体の口縁部破片である。波状口縁を呈する。口縁部は無文で口唇部に隆帯と沈線による渦巻文(A－5－2)が施文される。第64図５・６は第４群あるいは第５群に属する同一個体の胴部及び底部の破片である。隆帯と沈線による縦位直線文(C－5－4)を有する。第63図５は第４群あるいは第５群に属する口縁部近くの破片である。隆帯と沈線による横位直線文に連続刺突文が加えられている。第63図１は第５群２類に属する上半部を欠損する深鉢形土器である。底径5.8cmを計る。縣垂文(C－1－11)が施文される。地文は単節斜行縄文が施文されている。第62図８は第５群２類に属する口縁部破片である。隆帯と沈線による縦位の渦巻文(A－5－2)が施文され口縁に突起を形成する。また楕円文あるいは縣垂文が施文されていると考えられる。第63図７は第５群３類に属する口縁部破片である。隆帯と沈線による渦巻文と、縣垂文あるいは楕円文が施文されている。第63図９～11、第64図１～３は第５群に属する胴部破片である。楕円文が施文されている。第64図４は第４群あるいは第５群に属する胴部破片である。剝落面に粘土紐

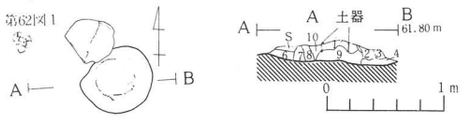


1号竪穴遺構

1号竪穴遺構埋土

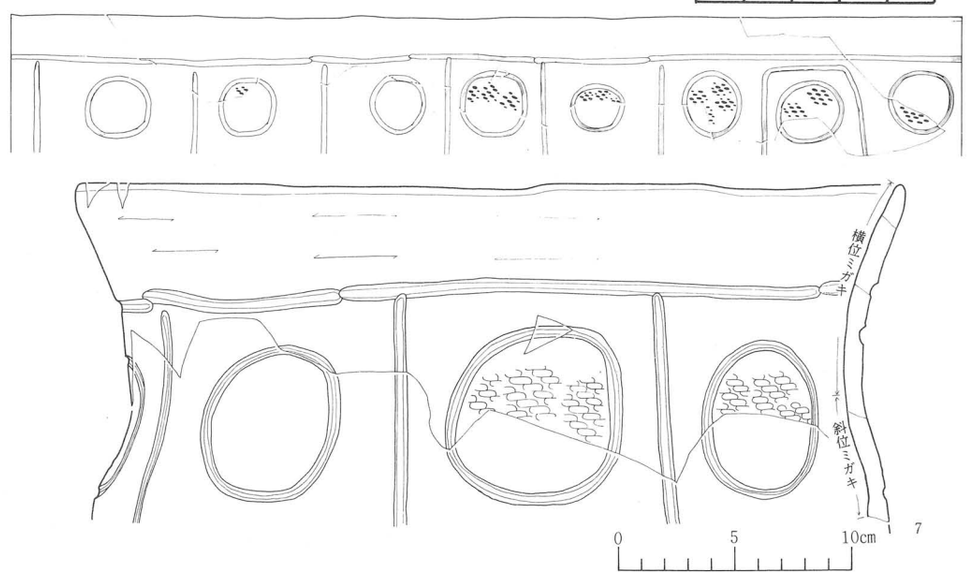
層位	土色		土性	備考
1	黒褐色	10YR 2/3	シルト	
2	暗褐色	7.5YR 3/3	シルト	
3	暗褐色	7.5YR 3/3	シルト	ロームを少量含む。
4	暗褐色	10YR 3/4	シルト	褐色土ブロックを少量含む。
5	暗褐色	7.5YR 3/4	シルト	ロームブロック少量，炭化物を少量含む。
6	黒褐色	7.5YR 3/2	シルト	炭化物を微量含む。
7	褐色	7.5YR 4/6	シルト	
8	黄褐色	10YR 5/6	シルト	ロームブロックを少量含む。
9	褐色	10YR 4/4	シルト	

1号埋設土器平面図

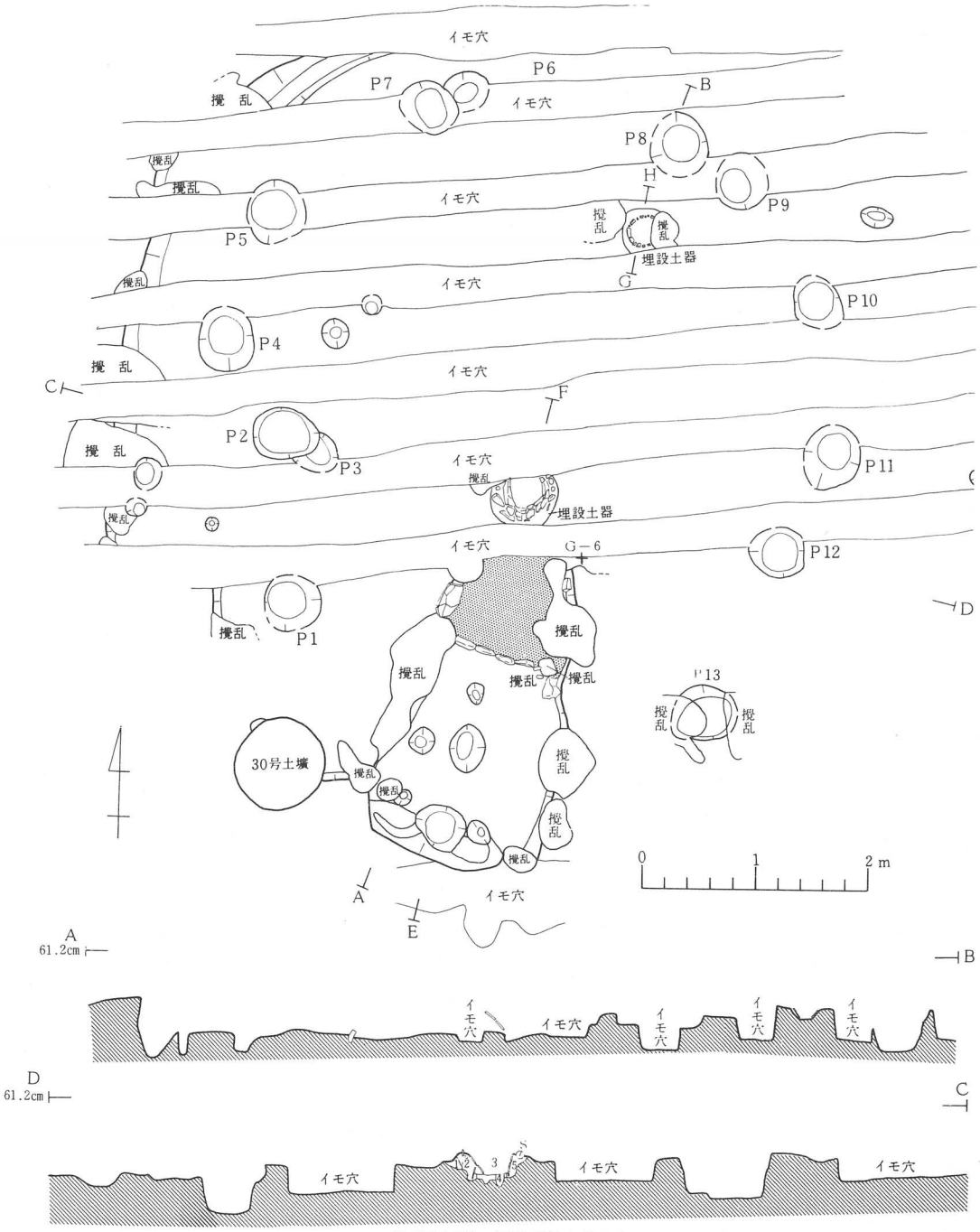


1号埋設土器埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR 3/3	シルト	
2	暗褐色	10YR 3/3	シルト	
3	暗褐色	10YR 3/4	シルト	
4	褐色	7.5YR 4/4	シルト	
5	暗褐色	10YR 3/4	シルト	
6	褐色	7.5YR 4/4	シルト	
7	褐色	10YR 4/6	シルト	
8	褐色	7.5YR 4/4	シルト	
9	褐色	7.5YR 5/4	シルト	橙色土を含む。
10	暗褐色	10YR 3/3	シルト	



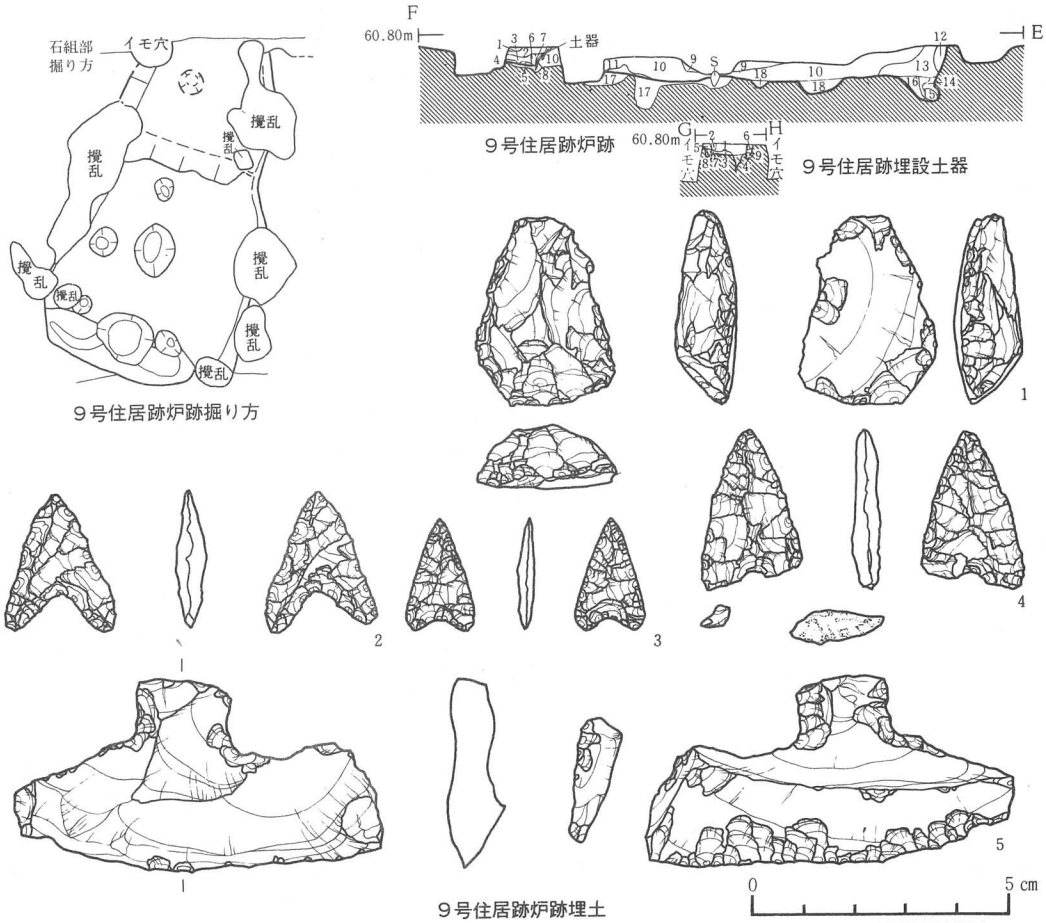
第56図　1号竪穴遺構（縄文時代中期中葉）・1号埋設土器（縄文時代中期後葉）



9号住居跡・炉跡埋設土器埋土

層位	土　色		土　性	備　考
1	褐　色	10Y R 5/4	シルト	撹　乱
2	褐灰色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粘土・炭化物・焼土粒を含む。
3	褐灰色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粘土・炭化物・焼土粒を含む。
4	褐　色	10Y R 5/4	シルト	撹乱，黒褐色土を含む。
5	褐灰色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粘土・炭化物・焼土粒を含む。

第57図　9号住居跡（縄文時代中期後葉）



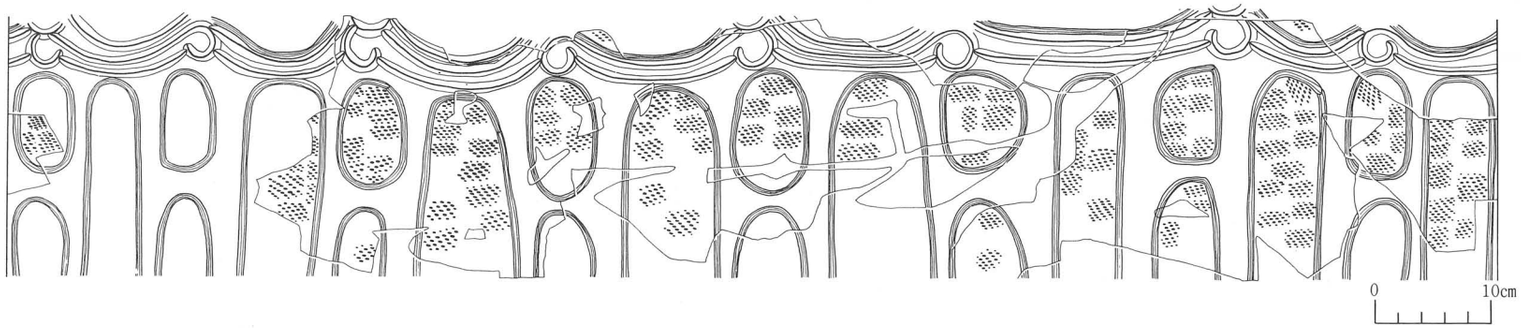
9号住居跡炉跡埋土

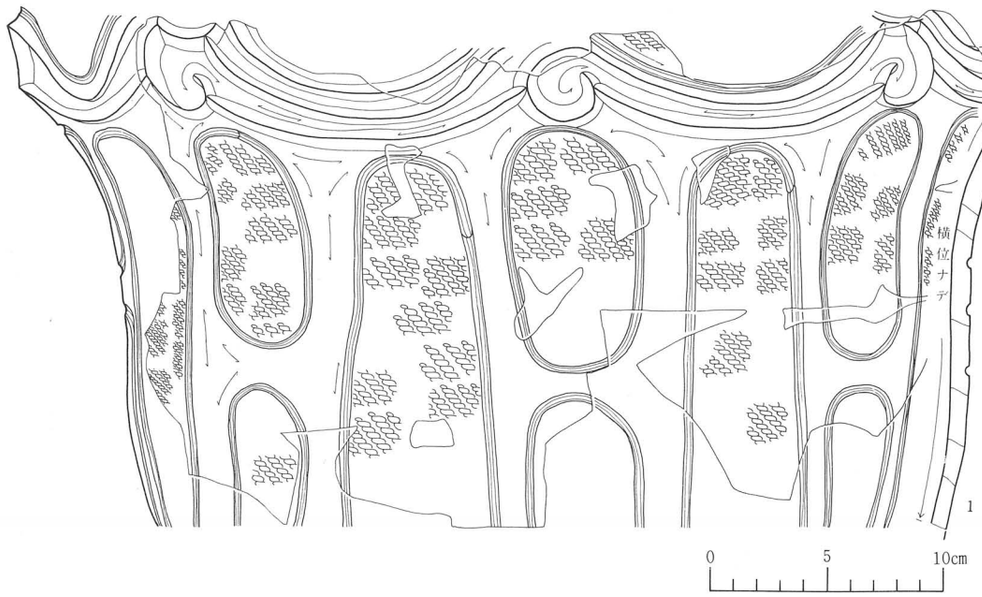
層位	土	色	土 性	備 考
1	黒褐色	10YR 3/2	シルト	撹 乱
2	褐 色	10YR 4/6	シルト	橙色土（2～4mm）をまばらに含む。
3	暗褐色	10YR 3/4	シルト	橙色土（2～4mm）を多く含む。
4	暗褐色	10YR 3/4	シルト	黄褐色土をブロック状に含む。
5	黄褐色	10YR 5/8	シルト	
6	黒褐色	10YR 2/3	シルト	橙色土を多く含む。
7	暗褐色	10YR 3/4	シルト	橙色土（2～4mm）を多く含む。
8	褐 色	10YR 4/4	シルト	橙色土を少量含む。
9	褐 色	10YR 4/4	シルト	
10	にぶい黄褐色	10YR 4/3	シルト	黄褐色土を全体に含み、焼土粒・炭化物を極少含む。
11	褐 色	10YR 4/4	シルト	焼土粒・炭化物を全体に含む。
12	暗褐色	10YR 3/4	シルト	
13	暗褐色	10YR 3/3	シルト	黄褐色土を部分的にブロック状に含む。
14	褐 色	10YR 4/6	シルト	
15	褐 色	10YR 4/4	シルト	黒褐色土をブロック状に少量含む。
16	褐 色	10YR 4/4	シルト	黄褐色土（1mm）を全体に多く含む。
17	暗褐色	10YR 3/4	粘土質シルト	ロームブロックを含む。
18	黒褐色	10YR 3/2	シルト	

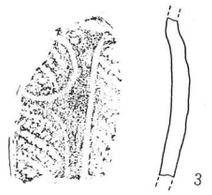
9号住居跡埋設土器埋土

層位	土	色	土 性	備 考
1	褐 色	7.5YR 4/4	シルト	橙色焼土（2～3mm）を全体に含む。
2	褐 色	10YR 4/6	シルト	黄褐色土を少量含む。
3	黄褐色	10YR 5/8	粘土質シルト	褐色土を少量含む。
4	暗褐色	10YR 3/4	シルト	褐色土を多く含み、炭化物・焼土粒を少し含む。
5	黒褐色	10YR 2/2	シルト	炭化物・焼土粒を多量に含む。
6	黒褐色	10YR 2/2	シルト	炭化物・焼土粒を多量に含む。
7	黒褐色	10YR 2/2	シルト	撹 乱
8	褐 色	10YR 4/4	シルト	黒褐色土・炭化物・焼土粒を含む。
9	褐 色	10YR 4/4	シルト	黒褐色土・炭化物・焼土粒を含む。

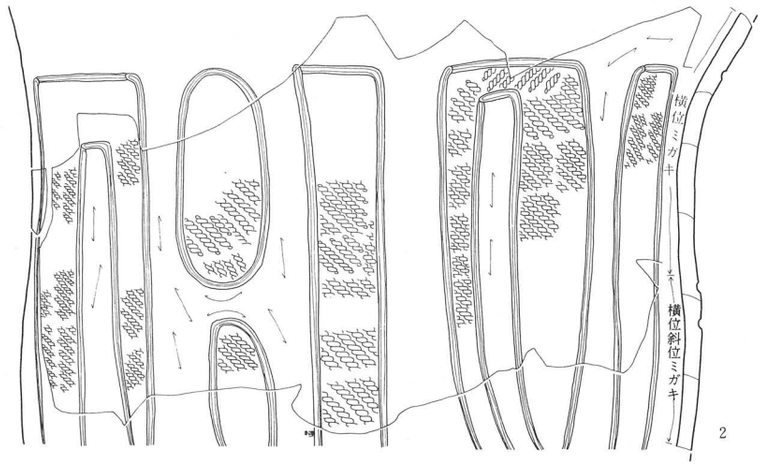
第58図　9号住居跡（縄文時代中期後葉）

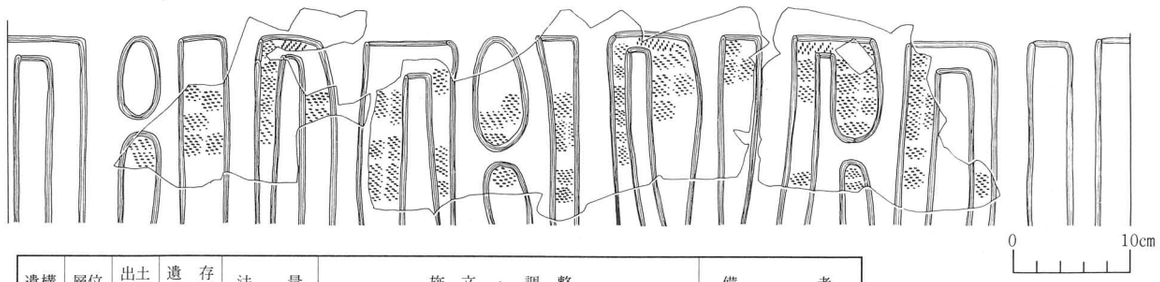






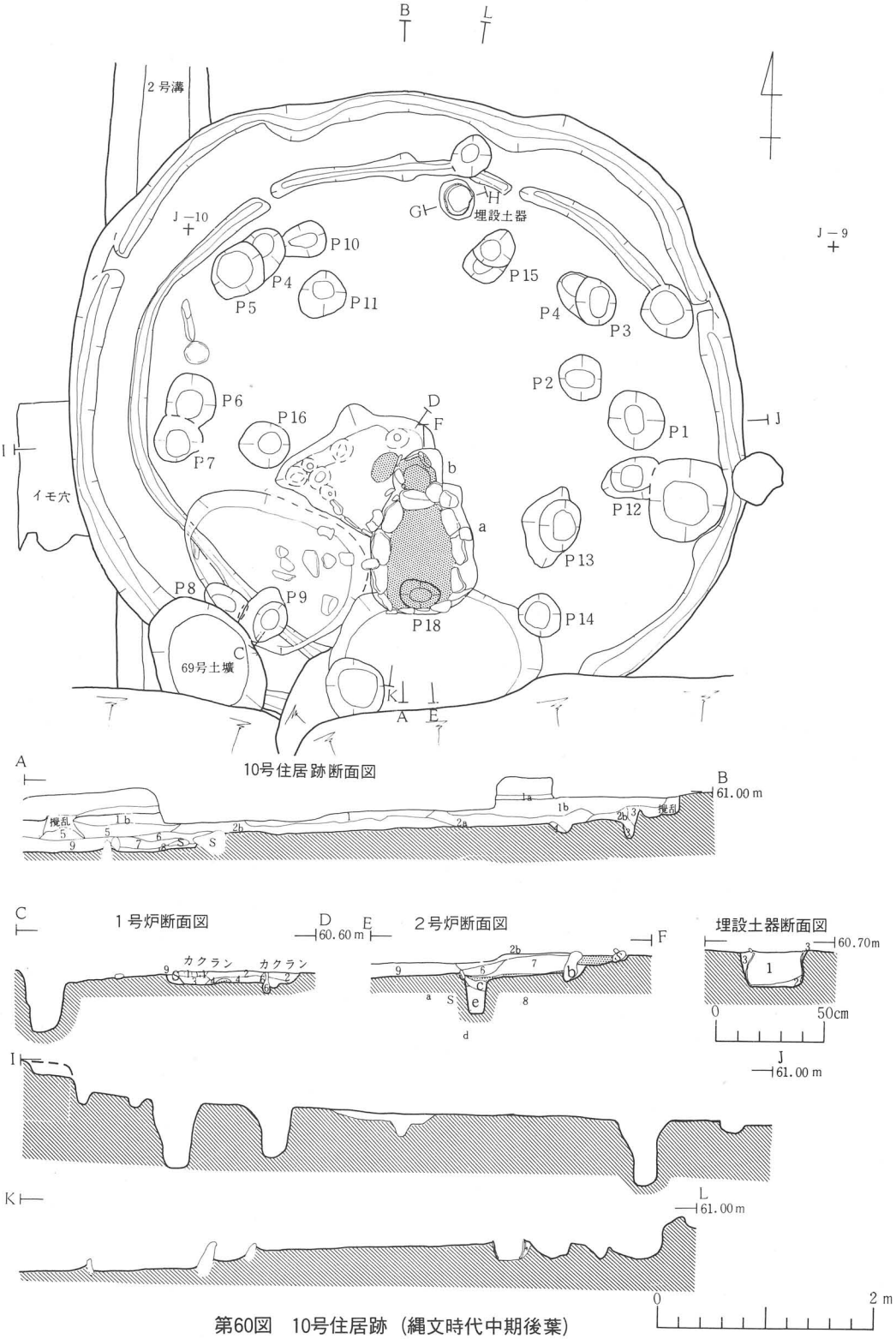
遺構	層位	出土状況	遺存状況	法量	施文・調整	備考
9住		炉埋設	胴部⅘遺存	胴部最大径38.5cm	隆線文・縄文（LR縦位回転）→沈線文 →調整（ミガキ）	





遺構	層位	出土状況	遺存状況	法量	施文・調整	備考
9住		埋設	胴部¾遺存	胴部最大径29.0cm	縄文（LR縦位回転）→沈線文 →調整（ミガキ）	

第59図　9号住居跡出土遺物



第60図　10号住居跡（縄文時代中期後葉）

10号住居跡埋土

層位	土色		土性	備考
1 a	褐　色	7.5 YR 4/4	シルト	7.5YR 3/2黒褐色シルトを帯状に含む。
1 b	黒褐色シルト	7.5 YR 3/2	シルト	炭化物を微量含む。
1 c	黒褐色	7.5 YR 3/2	シルト	1 bより土が硬い。
2 a	暗褐色	10　YR 3/3	シルト	風化礫を微量含む。
2 b	黒褐色	7.5 YR 3/2	シルト	
3	褐　色	7.5 YR 4/3	シルト	
4	にぶい黄褐色	10　YR 3/3	シルト	
5	褐　色	7.5 YR 4/3	シルト	焼土粒を少量含む。
6	褐　色	10　YR 4/4	シルト	焼土粒（2 mm）を多量に含む。
7	赤褐色	5　YR 4/6	シルト	焼土粒を含む。
8	明赤褐色	5　YR 5/8	シルト	焼土を含む。
9	褐　色	10　YR 4/4	シルト	ロームを少量含む。
10	赤褐色	2.5 YR 5/8	シルト	非常に硬い（焼土）

10号住居跡１号炉跡埋土

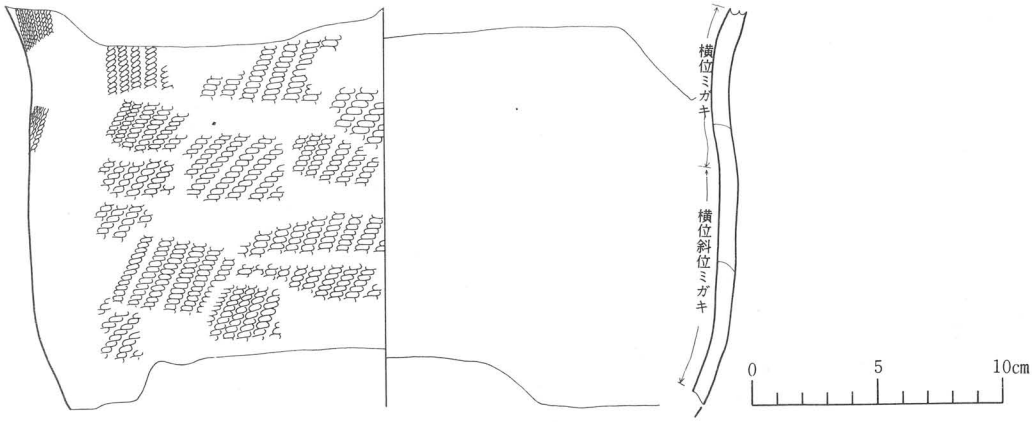
層位	土色		土性	備考
1	褐　色	10　YR 4/6	シルト	ロームをブロック状に含む、焼土粒を微量含む。
2	褐　色	7.5 YR 5/6	シルト	ロームを含む、焼土粒を微量含む。
3	赤褐色	5　YR 4/8	シルト	少量の炭化物と焼土粒を多量に含む。
4	赤褐色	2.5 YR 4/8	シルト	焼土粒を多量に含む。
5	赤　色	10　YR 4/8	シルト	焼　土
6	明赤褐色	5　YR 5/8	シルト	焼土粒を微量に含む。
a	明褐色	7.5 YR 5/6	粘土質シルト	
b	橙　色	7.5 YR 6/6	粘土質シルト	

10号住居跡２号炉跡埋土

層位	土色		土性	備考
2 b	黒褐色	7.5 YR 3/2	シルト	
6	褐　色	10　YR 4/4	シルト	焼土粒を少量含む。
7	赤褐色	5　YR 4/6	シルト	焼土粒（2 mm）を多量に含む。
8	明赤褐色	5　YR 5/8	シルト	焼土粒を含む。
9	褐　色	10　YR 4/4	シルト	ロームを少量含む。
10	赤褐色	2.5 YR 5/8	シルト	非常に硬い（焼土）
a	褐　色	7.5 YR 4/6	粘土質シルト	焼土粒を少量含む。
b	明褐色	7.5 YR 5/6	粘土質シルト	焼土粒を少量含む。
c	暗赤褐色	5　YR 3/6	シルト	焼土粒を少量含む。
d	黄褐色	10　YR 5/8	シルト	ロームを少量含む。
e	暗褐色	10　YR 3/4	シルト	

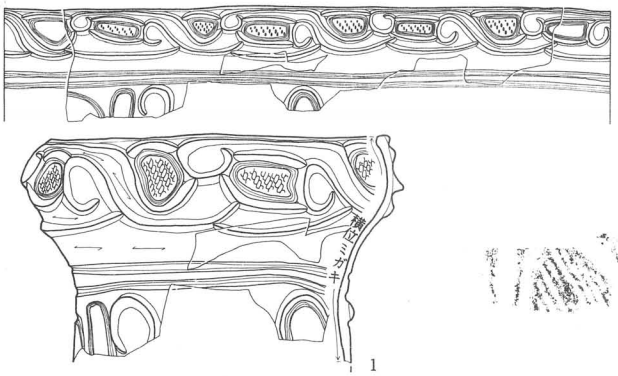
10号住居跡埋設土器埋土

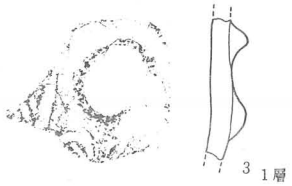
層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	ロームを微量含む。
2	暗褐色	10　YR 3/4	シルト	焼土粒を少量含む。
3	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	

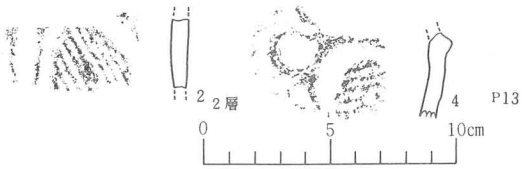


遺構	層位	出土状況	遺存状況	法量	施文・調整	備考
10 住		埋設	胴部のみ遺存	胴部最大径 28.0cm	縄文（RL縦位回転）	

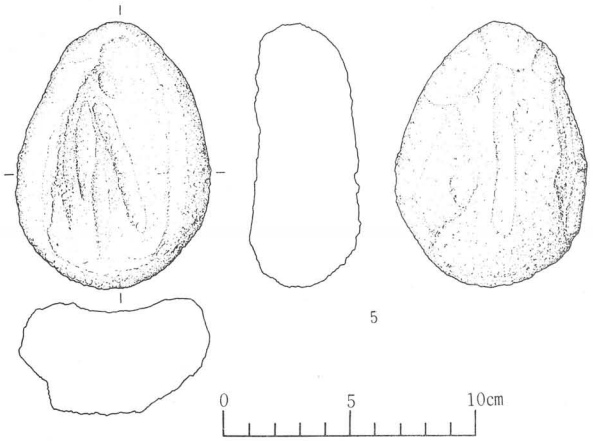
第61図　10号住居跡出土遺物（縄文時代中期後葉）

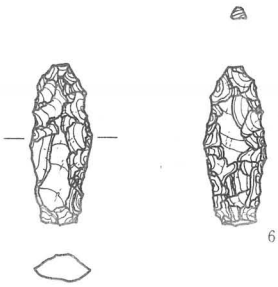


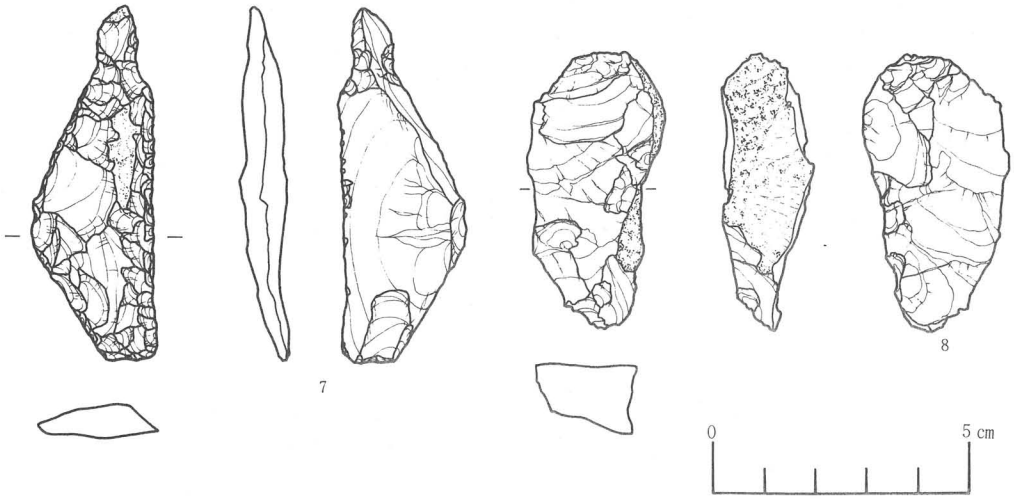




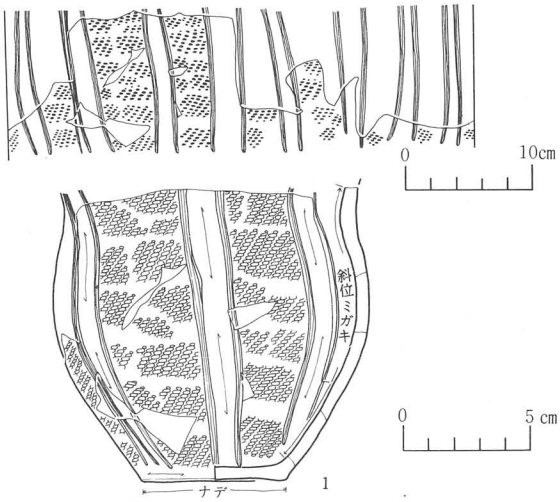
遺構	層位	出土状況	遺存状況	法量	施文・調整	備考
10住	床面	一括	口縁部 4/5 遺存	口径13.5cm	隆線文・縄文（RL横位回転）→沈線文 →調整（ミガキ）	



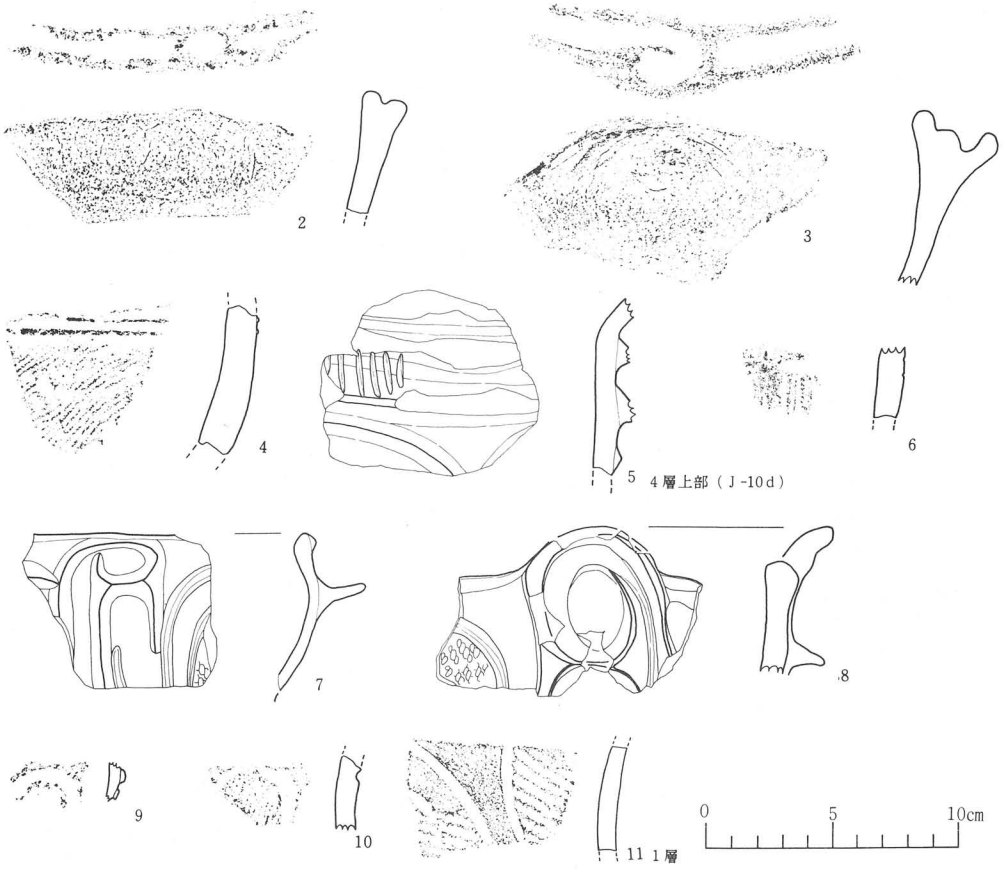




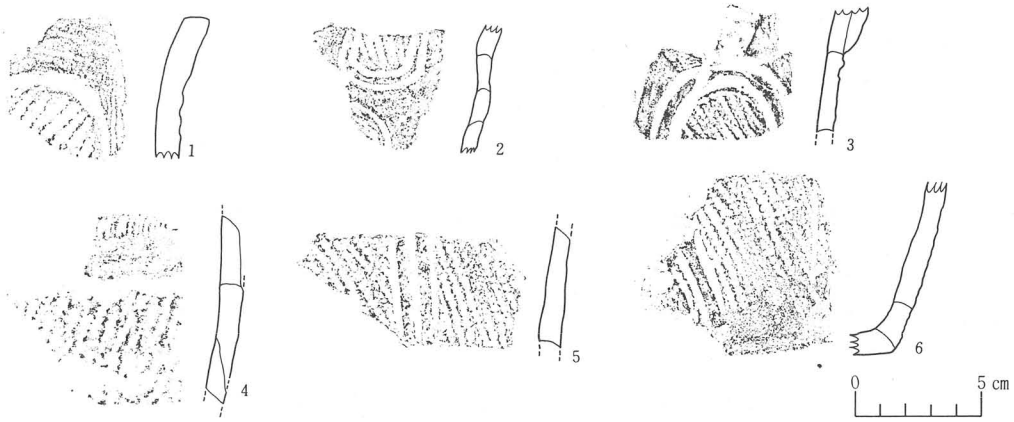
第62図　10号住居跡出土遺物（縄文時代中期後葉）



区	層位	出土状況	遺存状況	法量	施文・調整	備考
D－7	4層上面	一括	底部・胴部1/3遺存	底径 5.8cm	縄文（RL縦位回転）→沈線文→調整（ミガキ）	



第63図　遺構外出土遺物（縄文時代中期）



第64図　遺構外出土の縄文土器（中期）

9号住居跡ピット一覧表

Pit	長 軸	短軸	深さ	備考	Pit	長軸	短軸	深 さ	備考
1	51cm	48cm	39cm		8	55cm	52cm	41.9cm	
2	59cm	46cm	40cm		9	48cm	45cm	47.7cm	
3	25cm以上	35cm	30cm		10	50cm	44cm	28.8cm	
4	56cm	48cm	26cm		11	58cm	50cm	45cm	
5	58cm	52cm	29cm		12	49cm	43cm	44cm	
6	42cm	36cm	38.5		13	58cm	49cm	36cm	
7	48cm	45cm	38.5						

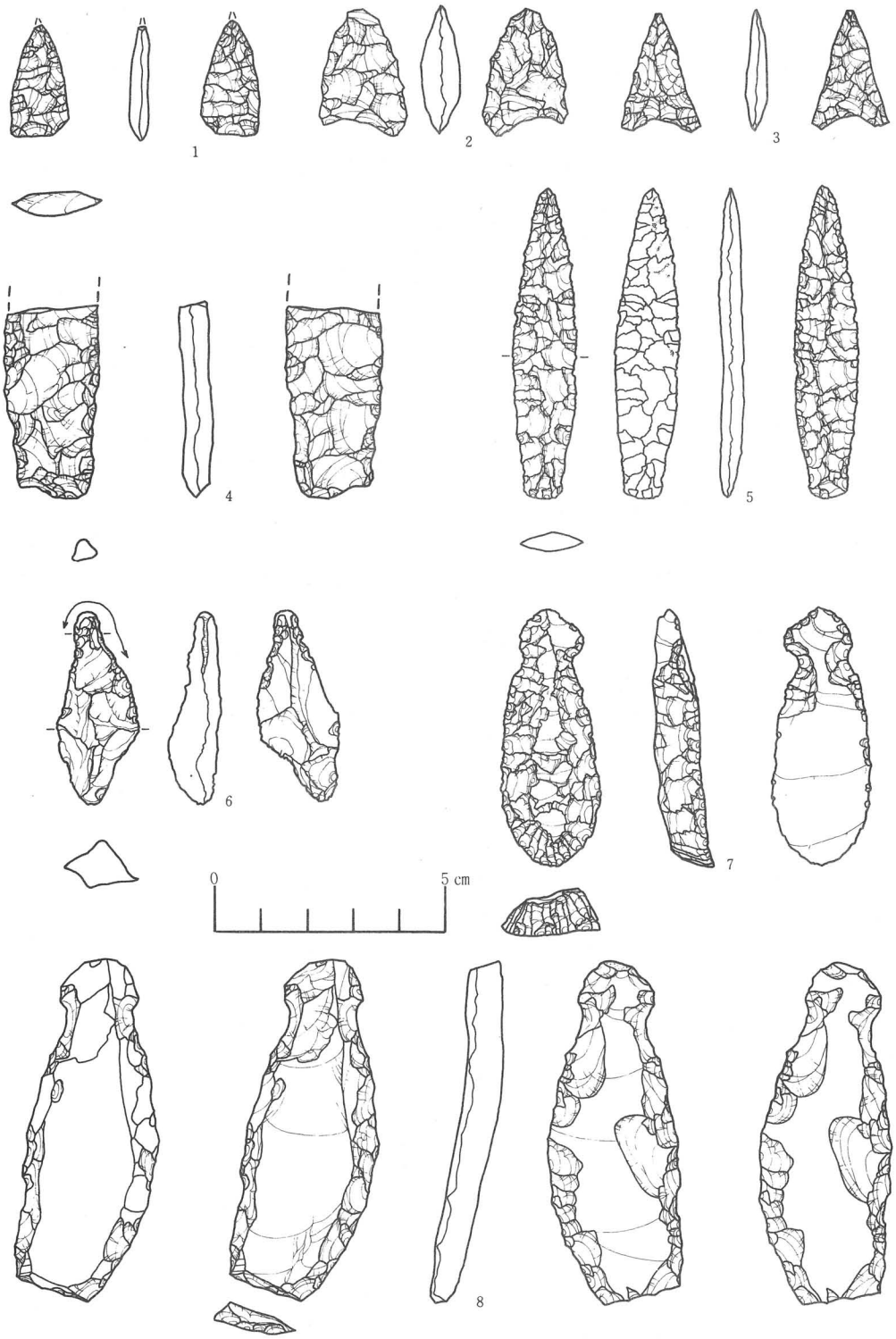
10号住居跡柱穴一覧表

Pit	長 軸	短 軸	深さ	備考	Pit	長 軸	短軸	深さ	備考
1	56cm	51cm	41cm		10	40cm以上	34cm	62cm	
2	44cm	41cm	38cm		11	44cm	42cm	55cm	
3	42cm	30cm	53cm		12	47cm	34cm	60cm	
4	28cm以上	42cm	62cm		13	52cm	37cm	45cm	
5	55cm	48cm	64cm		14	40cm	40cm	58cm	
6	52cm	44cm	——		15	38cm	32cm	68cm	
7	44cm	37cm	——		16	51cm	48cm	54cm	
8	40cm以上	20cm以上	27cm		17	40cm以上	28cm	41cm	
9	55cm	42cm	40cm		18	38cm	27cm	37cm	

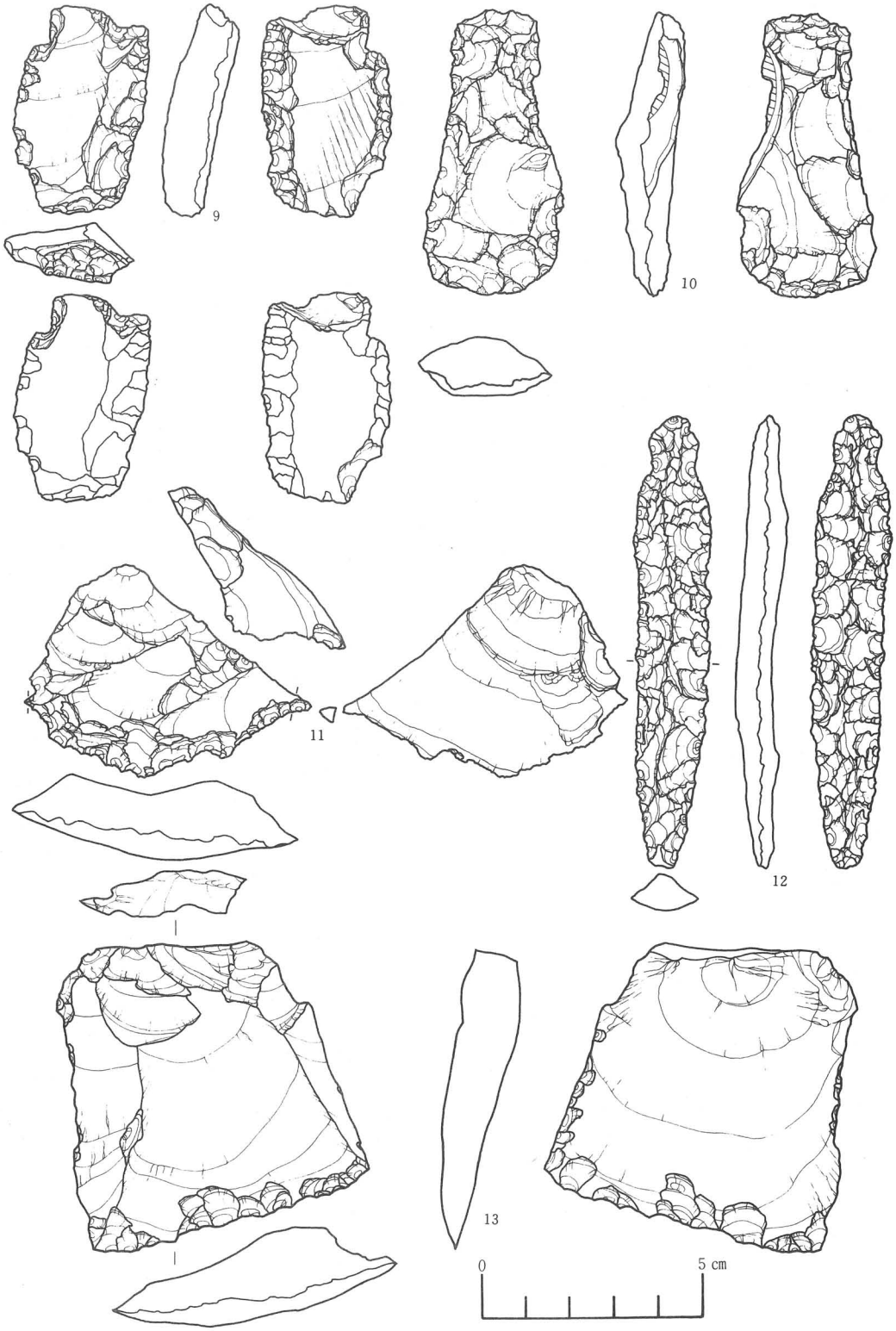
積みあげのための調整痕と考えられる爪先による連続した刻目がみられる。

ま と め

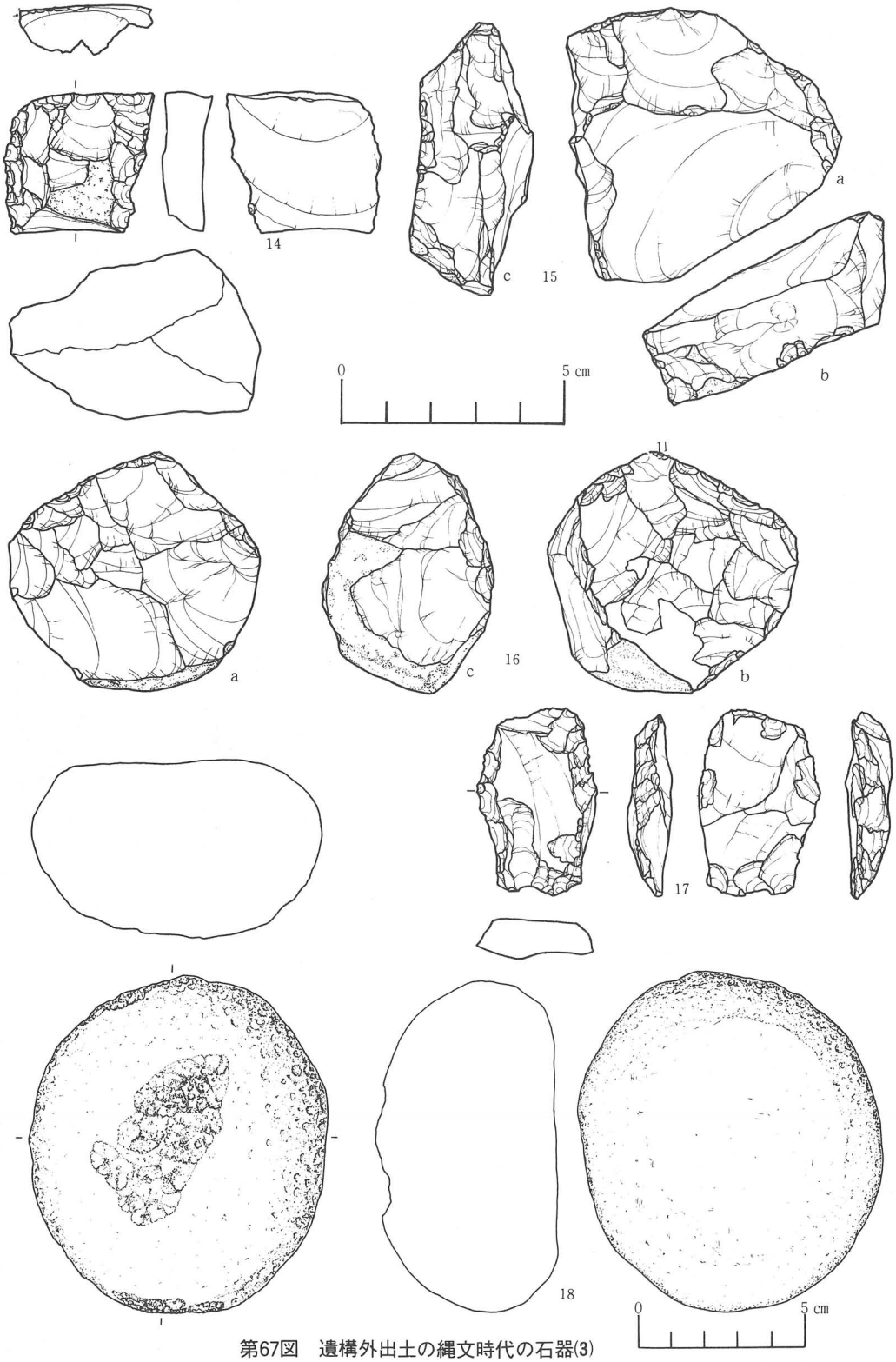
縄文時代中期の遺構は竪穴遺構1基、竪穴住居跡2棟、埋設土器1基が検出された。1号竪穴遺構からは第４群土器が出土している。第４群土器は大松沢貝塚（加藤、1956）出土遺物に類似しており１号竪穴遺構は大木８ｂ式期の遺構と考えられる。性格は不明である。９号住居跡・10号住居跡からは第５群土器が出土しており、埋設土器も第５群に属する。第５群土器は青島貝塚（加藤、後藤、1976）、上深沢遺跡（丹羽、1978）に類似資料が認められることから、これらの遺構は大木９式期のものと考えられる。９号住居跡・10号住居跡は共に複式炉を伴ない、炉の主軸線上に埋設土器がある。９号住居は壁面がほとんど確認されなかったが、長軸約7.5ｍと大形の住居であり、10本柱穴と考えられる。また10号住居跡には３時期の変遷が認められる。埋設土器の性格については不明である。



第65図　遺構外出土の縄文時代の石器(1)



第66図　遺構外出土の縄文時代の石器(2)



第67図　遺構外出土の縄文時代の石器(3)

6．平安時代の遺構と遺物

11号住居跡・12号住居跡（第68、69、70図、写真８ｂ－１・２・３）

調査区南部Ｈ－５区・Ｈ－６区に位置する。第３層上面で確認した。11号住居が古く12号住居が新しい。遺構全面にわたる芋穴による攪乱、また４号溝が東西に走りさらに南半部は削平を受けており、床面及び壁面を確認できない所もある。保存状況は良好ではない。

11号住居跡の上端平面形は長軸4.75ｍ以上、短軸約4.6ｍの方形と考えられる。深さは北壁際で20cm、壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。床面は芋穴による攪乱を受けているが本来は平坦であったと考えられる。埋土は３層で構成される。

壁溝は北西コーナーで確認され幅28cm、深さ８cmを計る。柱穴は４個である。柱穴の壁面・底面には粘土を貼りつけてある。カマドは東壁中央に存在したが、12号住居のカマド構築の際に破却されている。北側の袖石が２個残存していた。カマドの北側には貯蔵穴が認められた。長軸1.25ｍ、短軸0.80ｍ、深さ18cmを計る。また北西コーナー附近には住居に付属すると考えられる土壙が１基床下から検出された。長軸0.87ｍ、短軸0.52ｍ、深さ14cmを計る。

遺物は埋土から第６群土器の破片が多数出土した。内黒の坏の破片がほとんどであり甕の胴部破片が少量見られた。第70図１は北壁際のやや西寄りから一括出土した第６群１類土器である。

12号住居の上端平面形は長軸3.87ｍ、短軸約3.57ｍの方形と考えられる。深さは24cm、壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。床面は４号溝の削平を受けているがほぼ平坦である。埋土は４層で構成され、３層には灰白色火山灰を含む。

周溝は存在しない。柱穴は中央西寄りに１個ある。柱穴の壁面には粘土が貼り付けてあるが底面にはない。カマドは東壁中央に存在する。焚口には焼土が一面に広がるが、芋穴による攪乱が激しく北側の袖と一部の袖石が残存しているにすぎない。北側袖部先端部の下でＰ６を検出したが、これは４号溝底面で検出したＰ７と対応すると考えられる。Ｐ６とＰ７の埋土には焼土が見られ、土師器片を出土している。煙道は確認できなかったが、本来存在しない可能性もある。床面中央東寄りに焼土が２カ所認められた。南東コーナーには貯蔵穴が検出されている。長軸0.72ｍ、短軸0.57ｍ、深さ12cmを計る。また、南東コーナーからピット列が南へ伸びるが、あるいは11号住居の周溝に伴うものかもしれない。

遺物は埋土から第６群土器の破片が多数出土した。内黒の坏の破片がほとんどである。２は南東コーナー付近から、３・４は住居跡周溝より出土した１類土器である。５・６はカマド内より出土した２類土器口縁部破片である。また底径10cm程の薄い内黒の底部破片が２点出土している。切り離し痕はヘラ調整により全く消失している。埦あるいは鉢の底部と考えられる。

11号・12号住居は東壁を共有しており、遺物からはほぼ同時期と認められることから、11号

住居から12号住居への立て替えによる新旧関係を示していると考えられる。住居の規模が縮小し、柱穴数も４個から１個へと減少している。

34号土壙（第70図）

調査区南部中央、Ｈ－６区に位置する。第５層上面で確認、62号土壙と重複関係があり62号土壙より新しい。上端平面形は長軸0.72ｍ、短軸0.48ｍの隅丸長方形である。深さ７㎝、底面は平坦であり壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。

遺物は第６群土器破片が出土している。

35号土壙（第70図、写真８ｂ－４）

調査区南部中央、Ｉ－６区に位置する。第５層上面で確認、８号住居跡の埋土を掘り込んでいる。上端平面形は長軸1.26ｍ、短軸1.12ｍの隅丸長方形である。埋土は４層で構成される。

遺物は第６群土器破片が出土している。

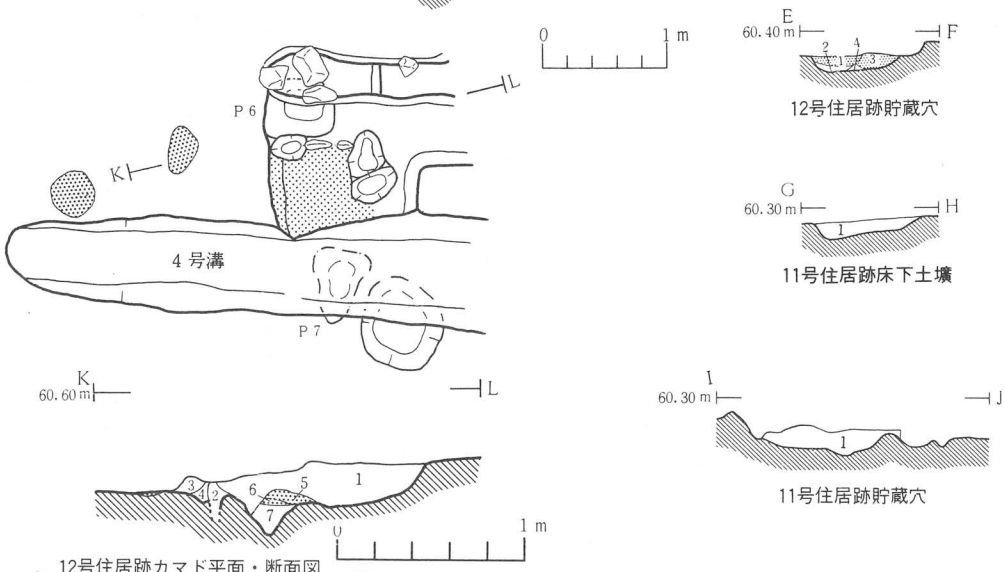
36号土壙（第70図）

調査区南部中央、Ｉ－６区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸1.02ｍ以上、短軸1.06ｍの楕円形である。深さ34㎝、中央が低くゆるやかな傾斜をもつ。壁面はゆるやかに立ち上がる。埋土は４層で構成され、１ａ層１ｂ層３層に炭化物、２層に焼土粒を含む。

遺物は第６群１類に属する坏形土器１点（第70図５）と第６群土器破片が出土した。

ま と め

平安時代の遺構は住居跡２棟と土壙３基を検出した。遺構は調査区南部に集中する。遺物はすべてロクロ成形であり、表杉ノ入式である。12号住居跡の埋土３層に灰白色火山灰を含むことから住居の時期は９世紀代と考えられる。（山田他、1980)。また煙道は検出されなかったが本来煙道のないカマドであった可能性もある。また11号住居跡出土の土師器坏（第70図１）と12号住居跡出土の土師器坏（第70図２・３・４）とは底径にやや差違が見られるが口径・器高はほぼ同一である。これに対し36号土壙出土の土師器坏（第70図５）は器高が住居跡出土のものに比べやや高い。36号土壙は34・35号土壙が隅丸長方形と規格化された形態を示すのに対し埋土に焼土、炭を含み形態も楕円形と性格を異にするものと考えられる。これら３土壙と住居跡とが同一時期に存在した可能性は高いが現段階では不明と言わざるを得ない。



第68図　11・12号住居跡（平安時代）

11号・12号住居跡埋土

層位	土色		土性	備考
1	黒褐色	10 YR 3/2	シルト	褐色粘土粒を少量含む
2	暗褐色	10 YR 3/3	シルト	
3	褐色	7.5YR 4/4	シルト	火山灰をブロック状に含む
4	暗褐色	10 YR 3/3	シルト	褐色粘土粒を部分的に含む
①	黄褐色	10 YR 5/8	シルト	黄橙色粒を全体的に含む
②	暗褐色	10 YR 3/4	シルト	
③	暗褐色	10 YR 3/4	シルト	褐色粘土粒を全体的に含む
④	暗褐色	10 YR 3/4	シルト	
⑤	明黄褐色	10 YR 6/6	シルト	黒褐色土を少量含む

12号住居跡貯蔵穴埋土

層位	土色		土性	備考
1	褐色	7.5YR 4/4	シルト	焼土を多量含む
2	暗褐色	10 YR 3/4	シルト	黄褐色土を少量含む
3	暗褐色	10 YR 3/4	シルト	焼土を少量含む
4	褐色	10 YR 4/6	シルト	黄橙色土を少量含む

11号住居跡床下土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10 YR 3/4	シルト	炭化物を少量含む

11号住居跡貯蔵穴埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10 YR 3/4	シルト	焼土粒子を少量含む。

12号住居跡カマド埋土

層位	土色		土性	備考
1	黒褐色	10 YR 2/3	シルト	攪乱
2	暗褐色	7.5YR 3/4	シルト	ローム粒子を少量含む
3	暗褐色	7.5YR 3/4	シルト	ロームブロック火山灰を少量含む
4	黄褐色	10 YR 5/8	シルト	攪乱
5	褐色	7.5YR 4/4	シルト	焼土、炭化物少量含む
6	褐色	7.5YR 4/6	シルト	焼土を多量含む
7	暗褐色	7.5YR 4/6	シルト	凝灰岩を少量含む

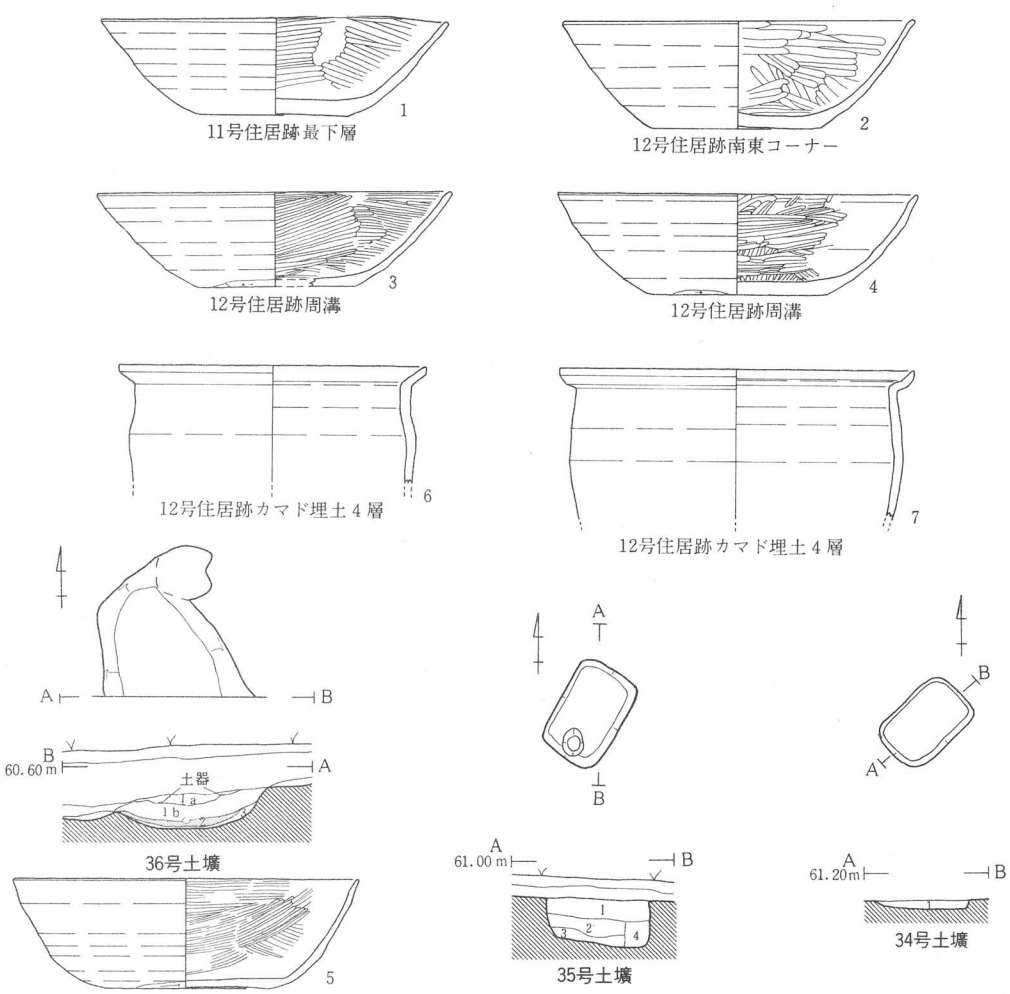
土師器観察表

No	出土状況	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	成形	調整	底部	胎土	焼成	色調他
1	11号住居跡北壁際最下層	坏	4.0	13.8	6.0	ロクロ	内面ミガキ、黒色処理、底部放射状ミガキ	回転糸切り後ヘラ削り(一部体部まで及ぶ)	緻密	良好	7.5YR 6/4 にぶい橙色
2	12号住居跡南東コーナー	坏	4.05	14.4	7.1	ロクロ	内面ミガキ、黒色処理	回転糸切り後ヘラ削り(一部体部まで及ぶ)	緻密	良好	7.5YR 6/4 にぶい橙色
3	12号住居跡周溝	坏	4.3	14.1	6.6	ロクロ	内面黒色処理、底部放射状ミガキ後底周に沿ってミガキ	回転糸切り後ヘラ削り	緻密	良好	7.5YR 7/4 にぶい橙色
4	12号住居跡周溝	坏	3.8	14.2	6.3	ロクロ	内面ミガキ、黒色処理、底部放射状ミガキ	ヘラ削り(一部体部まで及ぶ) 切離しは不明	緻密	良好	7.5YR 7/4 にぶい橙色
5	36号土壙フク土層	坏	4.6	13.8	6.4	ロクロ	内面ミガキ、黒色処理、底部放射状ミガキ	回転糸切り後ヘラ削り(一部体部まで及ぶ)	緻密	良好	7.5YR 6/6 橙色
6	12号住居跡カマド内4層	甕	4.7 (残存高)	(12.3)		ロクロ			緻密	良好	5 YR 6/6 橙色
7	12号住居跡カマド内4層	甕	5.8 (残存高)	(14.2)		ロクロ			緻密	良好	2.5YR 6/6 橙色

11号住居跡・12号住居跡柱穴一覧表

No	住居	長軸	短軸	深さ
P 1	11号住居	40.0	36.0	52.0
P 2	11号住居	36.0	35.0	42.0
P 3	11号住居	42.0	42.0	52.0
P 4	11号住居	32.0	20.0	42.0
P 5	12号住居	66.0	55.0	56.0

第69図　11・12号住居跡（平安時代）



34号土壙埋土

層位	土	色	土　性	備　考
1	黒褐色	10YR 2/3	シルト	ローム粒，ブロックを多量に含む。

35号土壙埋土

層位	土	色	土　性	備　考
1a	褐　色	10YR 4/6	シルト	炭化物を微量含む。
1b	暗褐色	7.5YR 3/3	シルト	炭化物を少量含む。
2	黒　色	7.5YR 1.7/1	シルト	炭化物の層。
3	暗褐色	10YR 3/3	シルト	焼土を少量含む。

36号土壙埋土

層位	土	色	土　性	備　考
1	暗褐色	10YR 3/3	シルト	ロームブロック一部含む。
2	暗褐色	10YR 3/4	シルト	ロームブロック全体に含む。
3	暗褐色	10YR 3/4	シルト	ロームブロック少量含む。
4	暗褐色	10YR 3/3	シルト	

第70図　11・12号住居跡出土遺物・34・35・36号土壙（平安時代）

7．江戸時代以降の遺構と遺物

1号溝（第71図・写真9－1）

1号溝は、調査区南部H・I・Jの各7区に位置する。確認面は第4層上面である。4号溝および65号土壙を切っている。南部は、崖によって消失しているが、本来はさらに南側に続くものである。埋土は、4層で構成されるが、場所によって異なる。規模は、上端幅1.30m～2.05m、下端幅0.47m～0.77m、深さ10～50cmである。底面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土2a層よりビール瓶が出土している。他に縄文土器の細片と、小形磨製石斧（第71図1）・ヘラ状石器（第71図2）・礫石器（第71図3）が出土している。溝の性格は不明であるが、下位に存在する4号溝を再利用したものと考えられる。時期は明治以降のものであろう。

2号溝（第71図・写真9－2）

2号溝は、調査区西端F～Jの各7区に位置する。確認面は第4層上面である。58号・64号・68号・69号土壙・10号住居跡を切っている。南部は、崖によって消失しているが、本来はさらに南側に続くものである。また、北半部では耕作による攪乱を受けている。埋土は2層で構成されている。規模は、上端幅0.38m～1.06m、下端幅0.22m～0.56m、深さ10～21cmである。底面は皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。遺物は、わずかに縄文土器の細片が出土しているだけである。時期については、おそらく江戸時代以降であろう。

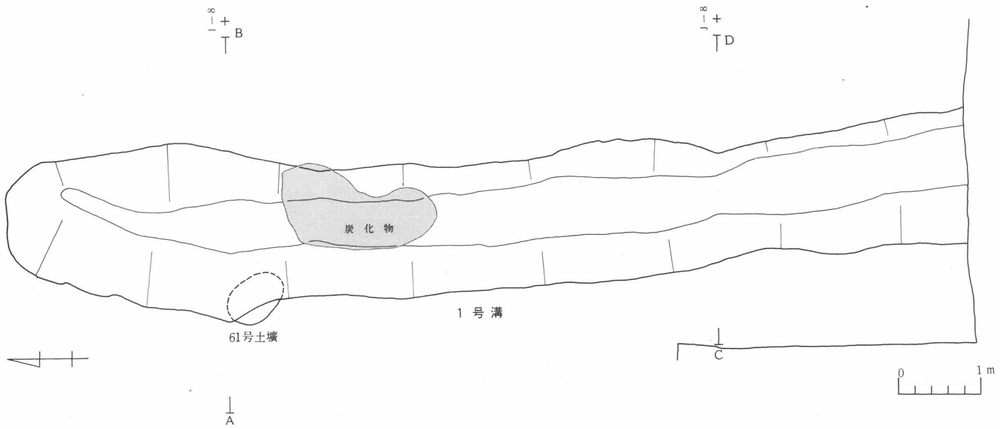
3号溝（第72図・写真2－1・9－3）

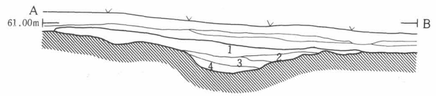
3号溝は、調査区北部Cライン付近に位置する。溝はさらに東西に延びる。確認面は第2層上面である。工房跡、6号溝、14号・46号土壙、1号住居跡を切っている。5号溝との切り合いは不明である。規模は、上端幅1.28m～1.94m、下端幅0.71m～1.30m、深さ20～50cmである。埋土は4層、5層で構成され、場所によって異なる。底面は比較的平坦な面が多く、壁はゆるく立ち上がる。底面から鉄製の寛永通宝などが出土していることから、溝の時期は江戸時代後半であろう。

出土遺物は、B－7区底面から鉄製寛永通宝2枚、C－6区底面から口径7.9cm、底径4.6cm、器高1.7cmの土師質土器（第72図1）が出土している。この土器は、ロクロ水挽きによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りである。埋土の上部より煙管の吸口（第72図2）が、1層より一銭銅貨が出土している。

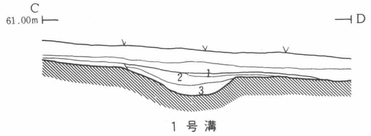
4号溝（第73図・写真9－4）

4号溝は、調査区南部H－5～8区、I－8区、J－8区に位置する。溝はL字形に延びているが、J－8区、H－5区で削平を受け、消失している。確認面は、西側では第4層であるが、H－5区の一部で第2層上面より確認された。耕作による攪乱を受け、1号溝に切られる。

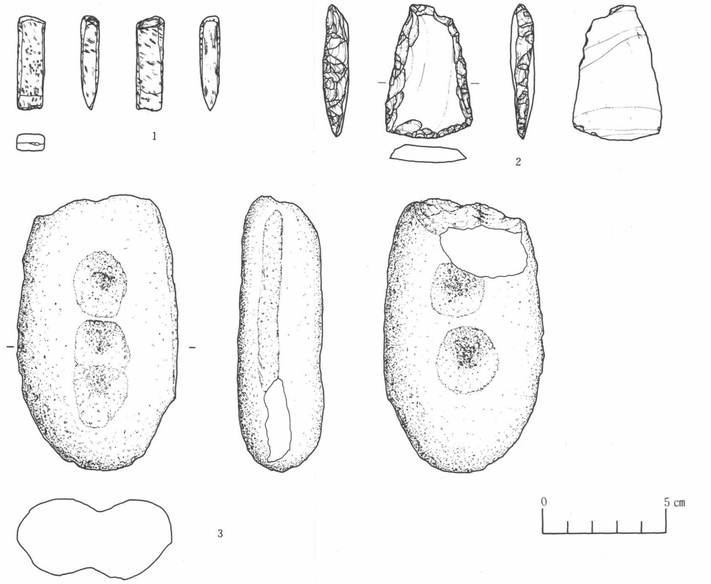


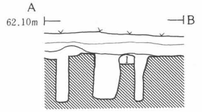


層位	土色		土性	備考
1	褐色	7.5YR4/4	シルト	炭化物少量。
2	褐色	10YR4/4	シルト	
3	褐色	7.5YR4/6	シルト	明黄褐色土ブロック含む。
4	暗褐色	10YR3/4	シルト	

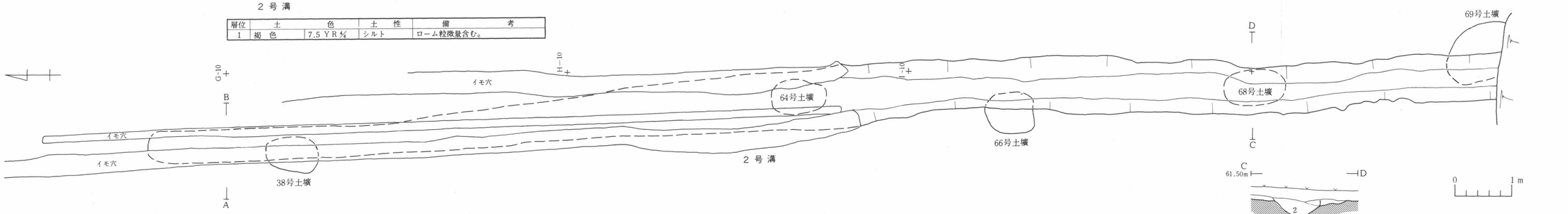


層位	土色		土性	備考
1	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	
2	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	I－8～I－7断面3層に相当。
3	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	I－8～I－7断面4層に相当。



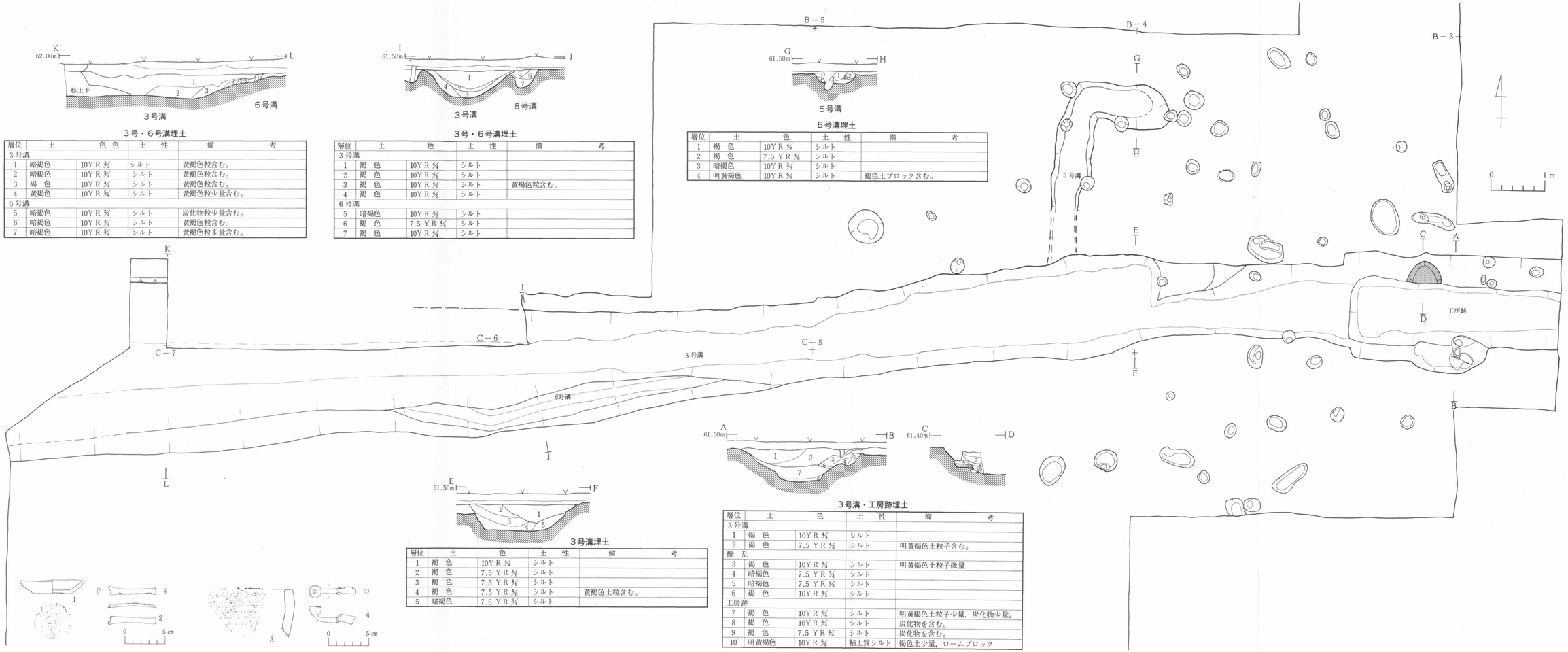


層位	土色		土性	備考
1	褐色	7.5YR4/4	シルト	ローム粒微量含む。



層位	土色		土性	備考
1	褐色	10YR4/4	シルト	
2	褐色	10YR4/4	シルト	ローム粒少量含む。

第71図　1号溝・2号溝（江戸時代）



3号・6号溝埋土

層位	土色		土性	備考
3号溝				
1	暗褐色	10YR 3/3	シルト	黄褐色粒含む。
2	暗褐色	10YR 3/4	シルト	黄褐色粒含む。
3	褐　色	10YR 4/4	シルト	黄褐色粒含む。
4	黄褐色	10YR 5/6	シルト	黄褐色粒少量含む。
6号溝				
5	暗褐色	10YR 3/4	シルト	炭化物粒少量含む。
6	暗褐色	10YR 3/4	シルト	黄褐色粒含む。
7	暗褐色	10YR 3/4	シルト	黄褐色粒多量含む。

3号・6号溝埋土

層位	土色		土性	備考
3号溝				
1	褐　色	10YR 5/4	シルト	
2	褐　色	10YR 5/6	シルト	
3	褐　色	10YR 5/6	シルト	黄褐色粒含む。
4	褐　色	10YR 5/6	シルト	
6号溝				
5	暗褐色	10YR 3/3	シルト	
6	褐　色	7.5YR 5/4	シルト	
7	褐　色	10YR 5/4	シルト	

5号溝埋土

層位	土色		土性	備考
1	褐　色	10YR 5/6	シルト	
2	褐　色	7.5YR 5/6	シルト	
3	暗褐色	10YR 3/3	シルト	
4	明黄褐色	10YR 6/6	シルト	褐色土ブロック含む。

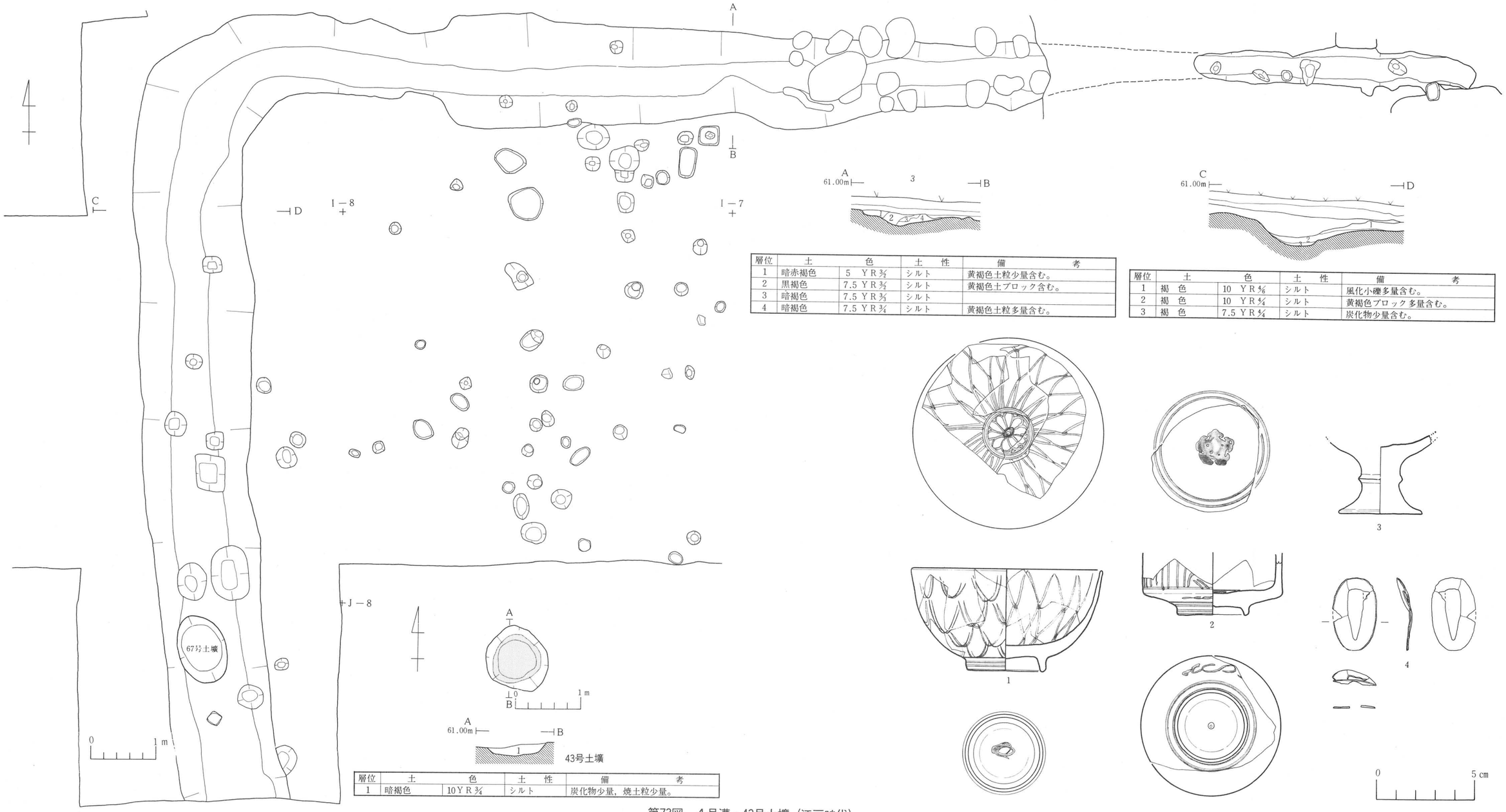
3号溝埋土

層位	土色		土性	備考
1	褐　色	10YR 5/4	シルト	
2	褐　色	7.5YR 5/6	シルト	
3	褐　色	7.5YR 5/6	シルト	
4	褐　色	7.5YR 5/6	シルト	黄褐色土粒含む。
5	暗褐色	7.5YR 3/4	シルト	

3号溝・工房跡埋土

層位	土色		土性	備考
3号溝				
1	褐　色	10YR 5/4	シルト	
2	褐　色	7.5YR 5/6	シルト	明黄褐色土粒子含む。
攪　乱				
3	褐　色	10YR 5/4	シルト	明黄褐色土粒子微量
4	暗褐色	7.5YR 3/4	シルト	
5	暗褐色	7.5YR 3/3	シルト	
6	褐　色	10YR 4/4	シルト	
工房跡				
7	褐　色	10YR 5/4	シルト	明黄褐色土粒子少量，炭化物少量。
8	褐　色	10YR 5/4	シルト	炭化物を含む。
9	褐　色	7.5YR 5/4	シルト	炭化物を含む。
10	明黄褐色	10YR 6/6	粘土質シルト	褐色土少量，ロームブロック

第72図　3・5・6号溝（江戸時代）



層位	土色		土性	備考
1	暗赤褐色	5 YR 3/2	シルト	黄褐色土粒少量含む。
2	黒褐色	7.5 YR 3/2	シルト	黄褐色土ブロック含む。
3	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	
4	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	黄褐色土粒多量含む。

層位	土色		土性	備考
1	褐色	10 YR 4/6	シルト	風化小礫多量含む。
2	褐色	10 YR 4/4	シルト	黄褐色ブロック多量含む。
3	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	炭化物少量含む。

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10 Y R 3/4	シルト	炭化物少量，焼土粒少量。

第73図　4号溝・43号土壌（江戸時代）

また、11号・12号住居跡、５号・65号土壙を切っている。規模は、上端幅0.88m～1.76m、下端幅0.20m～0.93m、深さ５cm～33cmである。埋土は３層ないし４層で構成される。底面は比較的平坦であり、壁はゆるく立ち上がる。底面にはピットが認められ、特にＩ－８区に集中している。切り合いが認められないことから、溝に伴うものであろう。また、67号土壙がＪ－８区の底面より検出された。遺物は、磁器がＨ－８区・Ｉ－８区の３層より多く出土している。時期は、３層出土の磁器および67号土壙の鉄製寛永通宝を考慮すれば、江戸時代後半と考えられる。

出土遺物は、茶碗・仏飯器・金属器（第73図１～４）がある。１は、染付網目文茶碗である。〈注〉体部の⅔を欠く。推定口径9.7cm、器高5.2cm、高台径3.7cmを測る。全面に施釉され、外面と内面の網目文の表現が異なっている。見込みには10弁の花文がみられる。高台の内側に文様がみられる。貫入は認められない。２は、半筒型の染付茶碗である。全体の⅔以上を欠く。体部下半径7.1cm、現存高2.8cm、高台径3.4cmを測る。現存部位では全面に施釉されている。見込みには五弁花がみられる。３は、仏飯器である馬上杯であろう。底径4.1cm、現存高4.0cmを測る。底面以外の残存部に施釉（灰釉）されている。底面には回転糸切り痕が残る。１・２は伊万里系の磁器であろうか。また、これらの磁器の製作年代は、溝の時期より古くなるであろう。４は、鐔の１部の切羽である。銅製である。長さ3.7cm、幅推定2.2cm、厚さ約0.1cmを測る。茎櫃の長さ2.6cm、最大幅0.8cmを測る。

５号溝（第72図）

５号溝は、調査区北東端Ｂ－４区に位置する。確認面は第４層上面である。１号住居を切るが、３号溝との切り合い関係は不明である。規模は、上端幅0.48m～0.70m、下端幅0.36m～0.54m、深さ34cm～37cmである。形態は、北側で方向を変えＬ字形を呈する。埋土は４層で構成される。底面は平坦で、壁はゆるく立ち上がる。時期を決定できる遺物はないが、おそらく江戸時代以降のものである。

６号溝（第72図・写真９－３）

６号溝は、調査区北部Ｃ－５・６区に位置する。確認面は第２層上面である。３号溝に切られ、全体の状況は不明である。また、14号溝を切る。規模は、上端幅0.48m～0.72m、下端幅0.12m～0.20m、深さ32～42cmである。埋土は３層で構成される。底面はＵ字形を示し、壁はやや急に立ち上がる。時期を決定できる遺物はないが、しまりがなく３号溝の埋土と類似していることなどから、３号溝より古いが江戸時代に属する可能性がある。

７号溝（第74図）

７号溝は、調査区北部Ｅ－５～７区に位置する。確認面は場所によって異なるが、基本的には第２層上面である。東側では23号土壙を切り、西側では攪乱を受けている。いずれも、切り

合い部分で消失している。規模は、上端幅0.20m～0.40m、下端幅0.12m～0.20m、深さ12～25cmである。溝断面はU字形を呈する。埋土は単層である。遺物は、縄文土器の細片がわずかに出土している。時期は、埋土にしまりがないことなど他の溝の特徴と共通する点が多いことから、江戸時代以降であろう。

8号溝（第74図）

8号溝は、調査区中央E－4区からF－7区にかけて位置する。確認面は場所によって異なるが、基本的には第2層上面である。東西端ともに攪乱を受けている。規模は、上端幅0.20m～1.05m、下端幅0.04m～0.20m、深さ6cm～30cmである。埋土は単層である。底面は皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。遺物は、縄文土器の細片がわずかに出土している。時期は、年代決定遺物を欠くことから不明であるが、他の溝（特に7号溝）と共通する特徴をもつことから、江戸時代以降の溝であろう。

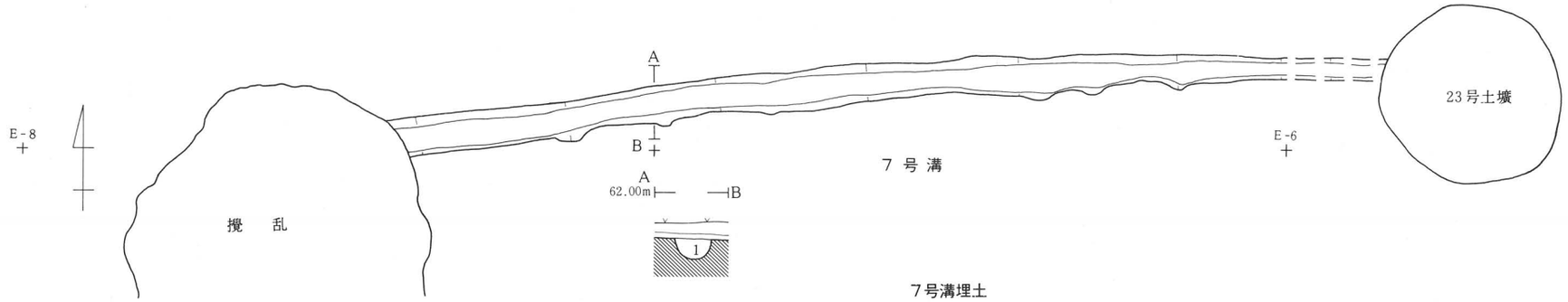
37号墓壙（第75図・写真9－7）

本墓壙は、調査区北東部D－4区に位置する。確認面は第2層上面で、切り合いはない。規模は、長軸1.26m、短軸1.12m（下端1.07m×0.85m）、深さ46cmである。形態は隅丸方形を呈する。埋土は3層で構成されるが、一度に埋められたものである。また、最下層である3層は、白濁しており、脂肪分が溶け込んだものと考えられる。底面はゆるく皿状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壙の確認面と同一面上の西側で焼土が確認されている。送り火のようなものが想定されよう。墓壙の主軸はおよそN－13°－E を示し、人骨はほぼ解剖学的位置を留めていることから、北枕で埋葬されたものである。人骨は極めて保存が悪く、顎骨（上下歯の一部と脛骨と腓骨の破片が検出されたにすぎない。墓壙の規模が小さいことが、人骨の検出状況から判断して屈葬の可能性が強い。後述するように、棺の大きさが小さいことから、子供の可能性も考えられる。人骨の位置は、棺からはみ出している。これは死後硬直によるものであろうか。

出土遺物は、棺と考えられる木箱の底板の1部（長さ1.35m・巾0.55m）、南側に偏在する鉄釘23点、六道銭である寛永通宝6枚（第76図1～4・第8表1～4）がある。このうち、寛永通宝2枚は盗難にあった。六道銭は頭骨のすぐ南に位置している。

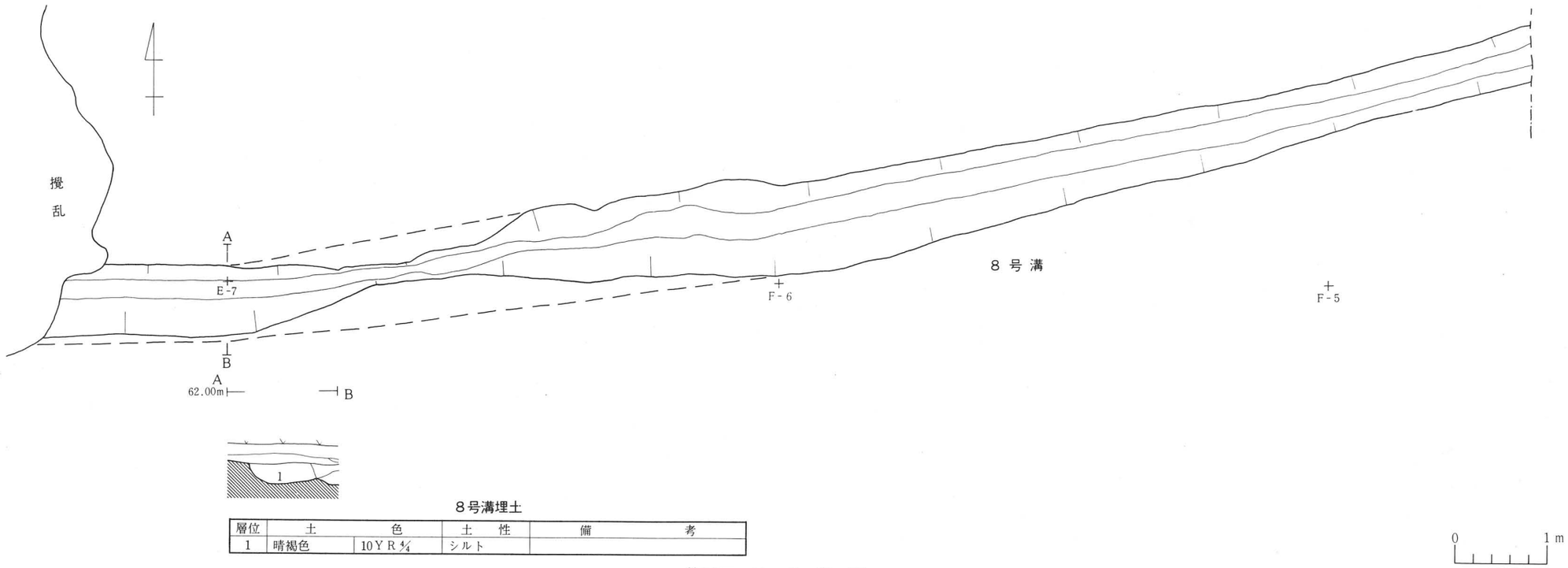
38号墓壙（第75図・写真9－8）

本墓壙は、調査区北東部D－4区に位置する。確認面は第2層上面で、切り合いはない。規模は長軸1.32m、短軸1.20m（下端0.93m×0.87m）、深さ75cmである。形態は、上面では不整の楕円を呈すが、底面は円形を呈する。埋土は3層で構成されるが、いずれも粘性やしまりがなく、ロームブロックを含む点で共通している。底面は皿状を呈し、ほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。底面付近には、かなり腐敗した骨片と六道銭が出土している。底面が狭く、円形



7号溝埋土

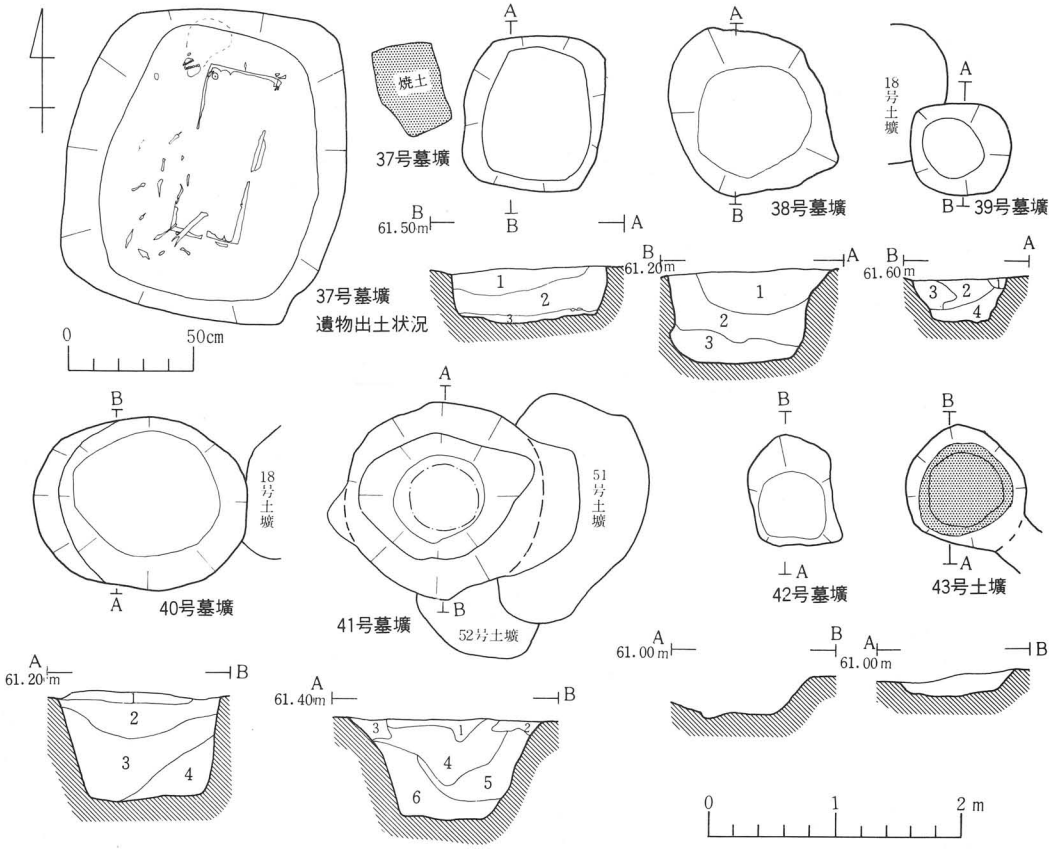
層位	土　色		土　性	備　考
1	暗褐色	10YR 3/4	シルト	明黄褐色土粒含む。



8号溝埋土

層位	土　色		土　性	備　考
1	晴褐色	10YR 4/4	シルト	

第74図　7・8　号　溝



37号墓壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	多量のロール粒子，ブロックを含む。
2	黒褐色	10 YR 2/3	シルト	少量のローム粒子，炭化物を含む。
3	褐色	10 YR 4/4	シルト	

38号墓壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR 3/3	シルト	0.2～10.0cmのロームブロックを含む。カーボン粒少量。
2	にぶい黄褐色	10YR 5/4	シルト	0.2～10.0cmのロームブロックを含む。
3	暗褐色	10YR 3/4	シルト	0.2～3.0cmのロームブロックを含む。

39号墓壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR 3/4	シルト	ローム粒子を少量含む。
2	暗褐色	10YR 3/3	シルト	ロームブロック(5.0cm)を含む。
3	暗褐色	10YR 3/4	シルト	ローム粒子を微量含む。
4	暗褐色	10YR 3/4	シルト	ローム粒子を全体に含む。

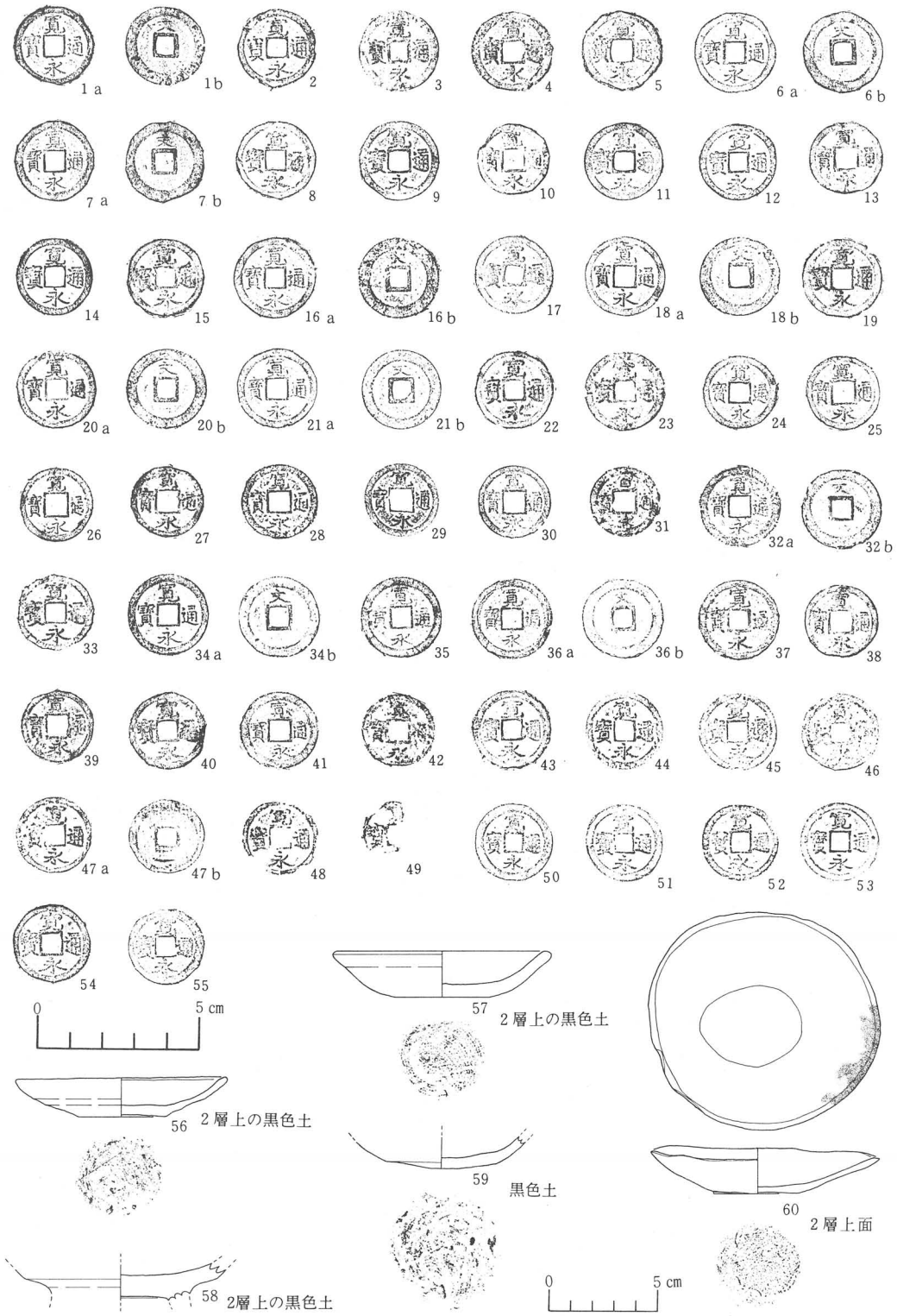
40号墓壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR 3/3	シルト	ロームブロックを含む(0.2～5.0cm)
2	暗褐色	10YR 3/4	シルト	ロームが全体的に混入。
3	暗褐色	10YR 3/4	シルト	ロームが全体的に混入。
4	黒褐色	10YR 3/2	シルト	ロームブロックを含む(0.2～5.0cm)

41号墓壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	明褐色土を多量に含む。
2	褐色	7.5 YR 5/4	シルト	明褐色土を多量に含む。
3	褐色	10 YR 3/4	シルト	明黄褐色土を全体に含む。
4	褐色	7.5 YR 5/6	シルト	
5	暗褐色	10 YR 3/3	シルト	明黄褐色土を少量含む。
6	暗褐色	10 YR 3/3	シルト	明黄褐色を多量に含む。

第75図　37・38・39・40・41・42・43号土壙（江戸時代）



1～4、37号墓壙　5～9、38号墓壙　10～43、39号墓壙　44～49、41号墓壙　50～55、42号墓壙
56、F－4区2層上の黒色土、57・58、G－5a区2層上、59、12号住居跡上の黒色土、60、H－5区2層上

第76図　古銭・土師質土器

を呈することから、座棺の可能性が考えられよう。

出土遺物は、六道銭である寛永通宝５枚（第76図１～５・第８表１～５）がある。

39号墓壙（第75図・写真10ａ－１）

本墓壙は、調査区北東部Ｄ－４区に位置する。確認面は第２層上面であり、18号土壙を切っている。規模は、長軸０.８ｍ、短軸0.74ｍ（下端0.49ｍ×0.44ｍ）、深さ37cmである。形態はほぼ円形を呈する。埋土は４層で構成され、いずれも粘性やしまりがなく類似した層相を示す。底面はほぼ平坦で、壁はゆるく立ち上がる。底面中央より骨片が、やや北東よりに古銭が出土している。

出土遺跡は、六道銭と考えられる寛永通宝34枚（第76図10～43・第８表10～43）がある。この中に布片？の付着したものが認められることから、これらの古銭は布袋のようなものに入れられていたか、紐に通されていたものであろう。

40号墓壙（第75図・写真10ａ－２）

本墓壙は、調査区北東部Ｄ－４区に位置する。確認面は第２層上面であり、18号土壙を切っている。規模は、長軸1.70ｍ、短軸1.39ｍ（下端1.16ｍ×1.03ｍ）、深さ82cmである。形態は上面および底面ともに楕円形を呈する。埋土は４層で構成され、ロームブロックの混入などいずれも類似した層相を示す。底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面付近のほぼ中央に、かなり腐敗した骨片が出土した。他に出土遺物はない。

41号墓壙（第75図・写真10ａ－３）

本墓壙は、調査区北東部Ｄ－５区に位置する。確認面は第２層上面であり、51号・52号土壙を切っている。規模は、長軸1.58ｍ、短軸1.57ｍ（下端0.72ｍ×0.65ｍ）、深さ77cmである。形態は、東側と西側の一部を掘り過ぎたが、本来はほぼ円形を呈する。埋土は５層で構成され、いずれもロームブロックを含むなど類似した層相を示す。底面は平坦であり、壁はゆるく立ち上がる。底面には径約53cmで、幅・深さともに約２cmの細い溝が検出された。これはおそらく棺桶の枠の痕跡と考えられる。底面中央には腐販した骨片、中央よりやや北側に六道銭が出土している。

出土遺物は、六道銭である寛永通宝６枚（第76図44～49・第８表44～49）である。

42号墓壙（第75図）

本墓壙は、調査区北部Ｄ－６区に位置する。確認面は第２層上面であり、木の根によって底面付近まで攪乱を受けている。かろうじて北側の上面プランだけ確認しえたが、他は明確ではない。確認しえた規模は、長軸0.92ｍ、短軸0.65ｍ（下端0.53ｍ×0.50ｍ）、深さ30cmである。形態は攪乱を受け不明であるが、おそらく円形あるいは楕円形を呈していたと考えられる。残存部分から判断して、床面はほぼ平坦であり、壁はゆるく立ち上がるようである。

出土遺跡は、六道銭である寛永通宝６枚（第76図50～55・第８表50～55）である。人骨などは確認されなかった。

43号土壙（第75図・写真10ａ－４）

本土壙は、調査区南部Ｈ－７区に位置する。確認面は第４層上面である。切り合いはない。規模は、長軸1.0ｍ、短軸0.88ｍ（下端0.76ｍ×0.7ｍ）、深さ22cmである。形態は不整円形を呈する。埋土は単層（10ＹＲ3/4暗褐色シルト）で、焼土・炭化物を含む。また、底面に密着するように炭化物が認められた。底面は皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。他に遺物は出土していない。埋土はしまりがなく、４号溝埋土と類似することなどから、時期は江戸時代以降であろう。

67号土壙（第80図・写真12－７）

本土壙は、調査区南西部Ｊ－８区に位置する。４号溝の底面より確認された。４号溝との切り合いは明確ではないことから、４号溝に帰属する可能性が強い。規模は、長軸1.07ｍ、短軸0.74ｍ（下端0.73ｍ×0.58ｍ）、深さ26cmである。形態は楕円形を呈する。埋土は３層で構成される。底面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、３層より鉄製寛永通宝１枚が出土している。遺物などから判断して、江戸時代後半の土壙である。

工房跡（第72図・写真９－５）

工房跡は、調査区北西端Ｂ－２・３区に位置する。確認面は第２層上面である。南部は木の根の攪乱を受け、上部は全面に渡って３号溝に切られる。規模は、確認長約２ｍ、幅0.84ｍ～1.0ｍ、深さ49cmである。形態は全面を調査していないので不明であるが、確認範囲内では、長方形を呈すると推定される。埋土は２層で構成され、とりわけ下層（８層）には炭化物を多量に含む。付属施設として、北壁にカマドが検出された。この内部には焼土・炭が多量に認められ、さらに鉄滓１個（写真28－58）が出土した。時期は、出土遺物から江戸初期であろう。

年代決定できる遺物として、第72図３・４がある。３は無釉の摺鉢の口縁部破片である。無釉であることと口縁部が肥厚しないことから、中世末～江戸初期と考えられる。４は煙管の雁首である。火皿部分は、口径1.5cmと大きく江戸時代でも古い様相を示す。

遺構外出土の土師質土器

遺跡全体で約15・16個体出土した。しかし、実測しえたものは５点であり、全体を知りえるものはそのうち３点である。したがって、この土師質土器の特徴を把握するのには、資料が少ない。ここでは個々の土器（第76図56～60）の特徴をまとめる。

56は、Ｆ－４区の第２層上に存在した黒色土より出土した。口縁の一部を欠く。口径９.７cm底径４.０cm、器高1.8cmである。ロクロ水挽きで、底部切り離しは回転糸切り無調整である。57は、Ｇ－5ａ区の第２層上にある黒色土より出土した。体部上半約2/3を欠く。口径10.0cm、底径

第８表　古銭（寛永通宝）一覧表

番号	遺構名	外径	内径	背字	番号	遺構名	外径	内径	背字
1	D－４区37号墓	2.315	0.4	正字文	29	D－４区39号墓	2.12	0.435	
2	〃	2.235	0.345		30	〃	2.10	0.435	
3	〃	2.31	0.355		31	〃	1.97	0.43	不明（密着）
4	〃	2.35	0.4		32	〃	2.205	0.37	
5	D－４区38号墓	2.32	0.485		33	〃	2.34	0.385	
6	〃	2.35	0.4	正字文	34	〃	2.335	0.405	正字文
7	〃	2.33	0.395	正字文	35	〃	2.325	0.385	正字文
8	〃	2.265	0.37		36	〃	2.335	0.39	正字文
9	〃	2.315	0.375		37	〃	2.32	0.375	正字文
10	D－４区39号墓	2.085	0.45		38	〃	2.11	0.44	
11	〃	2.260	0.355		39	〃	2.075	0.425	
12	〃	2.245	0.34		40	〃	2.25	0.335	
13	〃	2.10	0.34		41	〃	2.21	0.38	
14	〃	2.21	0.385		42	〃	2.05	0.415	
15	〃	2.215	0.365		43	〃	2.24	0.355	
16	〃	2.330	0.375	正字文	44	D－５区41号墓	2.24	0.385	
17	〃	2.25	0.32		45	〃	2.29	0.33	
18	〃	2.29	0.43	正字文	46	〃	2.27	0.37	
19	〃	2.31	0.485	正字文	47	〃	2.185	0.37	
20	〃	2.305	0.385	正字文	48	〃	2.185	0.33	
21	〃	2.285	0.38		49	〃（破損）			
22	〃	2.245	0.37		50	D－６区42号墓	2.27	0.32	
23	〃	2.285	0.355		51	〃	2.255	0.36	
24	〃	2.09	0.4		52	〃	2.22	0.37	
25	〃	2.12	0.46		53	〃	2.26	0.335	
26	〃	2.12	0.44		54	〃	2.26	0.4	
27	〃	2.07	0.475		55	〃	2.225	0.37	
28	〃	2.16	0.385						

（いずれも銅製である）

4.4cm、器高2.1cmである。ロクロ水挽きで、底部切り離しは回転糸切り無調整である。58は、G－５区の第２層上の黒色土より出土した。底径約5cm、現在高1.6cmである。ロクロ水挽きで、底部切り離しは回転糸切りである。底部には、高台が剝離した痕跡が認められる。59は、H－５区12号住居跡上の黒色土より出土した。体部上半を欠く。底径約５cm、現存高1.5cmである。成形はロクロ水挽き、底部切り離しは回転糸切り無調整である。60は、H－５区第２層上の黒色土より出土した。唯一の完形品である。口径11.4cm、底径 3.8cm、器高2.1cmで最も大形である。成形はロクロ水挽き、底部は回転糸切り無調整である。成形が雑で、一見手捏ね風にみえる。口縁部にタール状の炭化物が認められる。

口径は底径の２倍を越える長さのものが多く、器高は約２cm前後でほぼ一定している。すでに前述した３号溝より出土したものは、これらとは特徴を異にする。器高はほぼ同じであるが口径と底径の差は２倍を越えない。また色調は、橙色（５ＹＲ6/8）を基調とするものが多いが57と59は、くすんだ橙色（7.5ＹＲ6/6）を基調とする。

注　本例の類例として、石巻市西三軒屋遺跡（土墨）・市原市南総中学遺跡（H′－43遺構）がある。

8．時期不明の遺構と遺物

44号土壙（第77図、写真10ｂ－１）

調査区北東端、Ｂ－３区に位置する。第４層上面で確認、上端平面形は長軸1.36ｍ、短軸1.30ｍの円形で、深さ48㎝。底面は中央部が低く、ゆるやかな傾斜を有し、壁面は内弯気味にゆるやかに立ち上がる。埋土は４層で構成され、第４層にはロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片４点を出土、うち１点は早期である。

45号土壙（第77図）

調査区北東端、Ｂ－３区に位置する。第４層上面で確認、上端平面形は長軸1.40ｍ、短軸1.32ｍのほぼ円形と考えられる。深さ12㎝、底面は平坦であるが、南壁際に24㎝×20㎝、深さ８㎝の円形ピットを有する。壁面はゆるやかに立ち上がる。

遺物は皆無である。

46号土壙（第77図、写真10ｂ－２）

調査区北東部、Ｃ－４区に位置する。第４層上面で確認、遺構の北半分は３号溝に切られてている。３号溝よりも46号土壙の方が古い。上端平面形は、長軸約1.45ｍ、短軸約0.60ｍ以上の不整楕円形である。深さ３㎝、底面は平坦であり、壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。埋土は５層で構成されている。

遺物は尖頭器が１点出土している。

47号土壙（第77図、写真10ｂ－３）

調査区北東部、Ｃ－４区に位置する。第４層上面で確認、上端平面形は長軸1.40ｍ、短軸1.00ｍの楕円形である。深さ38㎝、底面は平坦であるが東壁際に47㎝×37㎝深さ５㎝の浅い隅丸長方形のピットを有し、壁面はほぼ直線的に急激に立ち上がる。埋土は３層で構成され、第１層は焼土で、第３層にはロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片９点が出土している。

48号土壙（第77図）

調査区北東部、Ｃ－４区に位置する。第４層上面で確認、上端平面形は長軸0.92ｍ、短軸0.51ｍの楕円形である。深さ12㎝、底面は中央部がやや低くなっており、壁面の立ち上がりは極めてゆるやかである。埋土は１層のみである。

遺物は皆無である。

49号土壙（第77図、写真10ｂ－４）

調査区北東部、Ｃ－４区に位置する。１号竪穴遺構と重複しており、１号竪穴遺構底面で確認された。１号竪穴遺構よりも49号土壙の方が古く、遺構上半は１号竪穴遺構に切られている。

上端正面形は長軸1.30ｍ、短軸0.98ｍの楕円形である。深さ64㎝、底面には凹凸があり、壁

面はわずかに内弯しながら急激に立ち上がる。埋土は4層で構成される。

遺物は皆無である。

50号土壙（第77図）

調査区北部中央、C－7区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.08m、短軸0.98mの不整円形である。深さ75cm、底面は平坦であり、壁面は直線的に立ち上がる。埋土は8層で構成される。

遺物は縄文土器片9点、剥片1点が出土しているが、土器片はもろく、胎土には砂粒を多量に含んでいる。

51号土壙（第78図）

調査区北東部、D－5区に位置する。第4層上面で確認、52号土壙と重複しており、52号土壙よりも51号土壙の方が新しい。上端平面形は長軸1.84m、短軸約1.64mの円形である。深さ45cm、底面は平坦で、壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。埋土は5層で構成され、全層にわたって炭化物の混入が認められる。

遺物は剥片2点が出土している。

52号土壙（第78図）

調査区北東部、D－5区に位置する。第4層上面で確認、41号土壙、51号土壙と重複しており、新旧関係は52号土壙が最も古く、遺構の大半は両遺構に切られており、長軸1.0m、短軸0.64mを計るのみで、上端平面形は不明である。深さ26cm、底面は平坦で、壁面は直線的に、ややゆるやかに立ち上がる。埋土は2層で構成されており、ローム粒を多量に含む。

遺物は皆無である。

53号土壙（第78図、写真11－1）

調査区北部中央、D－7区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.73m、短軸1.63mの不整円形であるが、遺構上半が攪乱を受けている事から、下端平面形長軸1.36m、短軸0.82mを重視し、平面形は楕円形と考えられる。深さ76cm、底面は平坦であり、壁面は直線的にほぼ垂直に立ち上がり、一部オーバーハングする所もある。埋土は6層で構成される。

遺物は縄文土器片15点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点が出土している。

54号土壙（第78図、写真11－2）

調査区中央部西寄り、F－8区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸1.74m、短軸1.68mの円形である。深さ28cm、底面は平坦であり、壁面は直線的にゆるやかに立ち上がる。埋土は単層である。（10YR3/4暗褐色シルト、ローム粒、炭化物少量含む。）

遺物は縄文土器片2点が出土している。

55号土壙（第78図、写真11－３）

調査区西部、Ｆ－10区に位置する。第５層上面で確認、南北に走る芋穴により分断されているが、上端平面形は長軸約2.50ｍ、短軸0.63ｍの不整長方形と考えられる。深さ22㎝、底面は平坦であり、壁面は内弯してゆるやかに立ち上がる。埋土は２層で構成される。

遺物は皆無である。

56号土壙（第78図、写真11－４）

調査区中央部西寄り、Ｇ－７区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸1.07ｍ、短軸0.98ｍの円形である。深さ64㎝、底面は平坦であり、壁面はやや内弯気味に急激に立ち上がる。埋土は４層で構成され、第４層にはローム粒を多量に含む。

遺物は縄文土器片15点、剝片１点が出土している。

57号土壙（第79図、写真11－５・６）

調査区西部、Ｇ－10区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸2.02ｍ、短軸1.74ｍの楕円形である。深さ121㎝、底面は平坦で、長軸2.12ｍ、短軸2.04ｍを計る。壁面は直線的に内傾し、壁中位上半から外形する。北西壁中位下半に奥行き42㎝の横穴を持つ。埋土は14層より構成されるが、大きく上下２層に分かれ、下層はロームブロックを多量に含む。

遺物は縄文土器片33点、石器６点出土。石鏃１点、二次加工のある剝片２点、剝片１点、破損礫２点が出土した。土器片はすべて小破片で、時期のわかるものはなかった。

58号土壙（第79図）

調査区西部、Ｇ－10区に位置する。第５層上面で確認、２号溝と重複しており、２号溝よりも古いので、残存状態は非常に悪く、上端平面形は長軸約0.91ｍ、短軸0.61ｍの楕円形と考えられる。深さは26㎝以上である。

遺物は皆無である。

59号土壙（第79図、写真11－７・８）

調査区南部、Ｈ－５区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸1.12ｍ、短軸0.69ｍの楕円形である。深さ70㎝、底面は平坦であり、壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。埋土は９層より構成され、第７層中に焼土を含み、第８層中に地山ブロックを多量に含む。

遺物は縄文土器片６点が出土している。

60号土壙（第79図、写真12－１）

調査区南部、Ｈ－５区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸1.70ｍ、短軸1.41ｍの隅丸長方形である。深さ38㎝、底面は中央部がやや低くなっており、ゆるやかな傾斜をもつ。埋土は３層から構成される。

遺物は皆無である。

61号土壙（第79図、写真12－２）

調査区南部、Ｈ－６区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸0.92ｍ、短軸0.90ｍの円形である。深さ55cm、底面は中央がやや低くなっており、ゆるやかな傾斜をもち、壁面は内弯気味に立ち上がる。埋土は４層で構成され、第４層にロームブロックが多量に含まれる。また、径20cm程の円礫２個が重なり気味に２層３層中に存在した。

遺物は縄文土器片25点、石器４点出土。石核２点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片１点。縄文土器片は、すべて小破片で、時期のわかるものはなかった。

62号土壙（第80図、写真12－３）

調査区南西部、Ｈ－９区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸0.79ｍ短軸0.77ｍの円形である。深さ38cm、底面は平坦で、壁面はほぼ直線的に急激に立ち上がる。埋土は３層で構成され、第１層中に径30cm×25cm程の楕円形の礫を１個含んだ。

遺物は皆無である。

63号土壙（第80図、写真12－４）

調査区南西部、Ｈ－９区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸0.95ｍ、短軸0.79ｍの楕円形である。深さ40cm、底面は平坦であり、壁面はほぼ直線的に急激に立ち上がる。埋土は12層で構成される。

遺物は縄文土器片１点が出土している。

64号土壙（第80図）

調査区南西部、Ｈ－10区に位置する。１号溝底面で確認、底面の半分程が残存しているのみで、上端径0.98ｍ、下端径0.62ｍ、深さ約39cmを計る。

遺物は縄文土器片10点が出土している。

65号土壙（第80図、写真12－５）

調査区南西部、Ｉ－８区に位置する。第５層上面で確認、上端平面形は長軸0.75ｍ、短軸0.52ｍの楕円形である。深さ40cm、底面は中央部がやや低く、ゆるやかな傾斜をもつ、壁面は内弯気味に急激に立ち上がるが、一部ほぼ垂直に立ち上がる所もある。埋土は４層で構成される。

遺物は皆無である。

66号土壙（第80図、写真12－６）

調査区南西部、Ｉ－10区に位置する。２号溝に東側を３分の１程切られている。第５層上面で確認、上端平面形は長軸0.84ｍ、短軸0.71ｍの楕円形で、深さ49cm、底面は平坦であるが東側に向かって傾斜し、壁面はほぼ直線的に急激に立ち上がる。埋土は４層で構成される。

遺物は皆無である。

68号土壙（第80図）

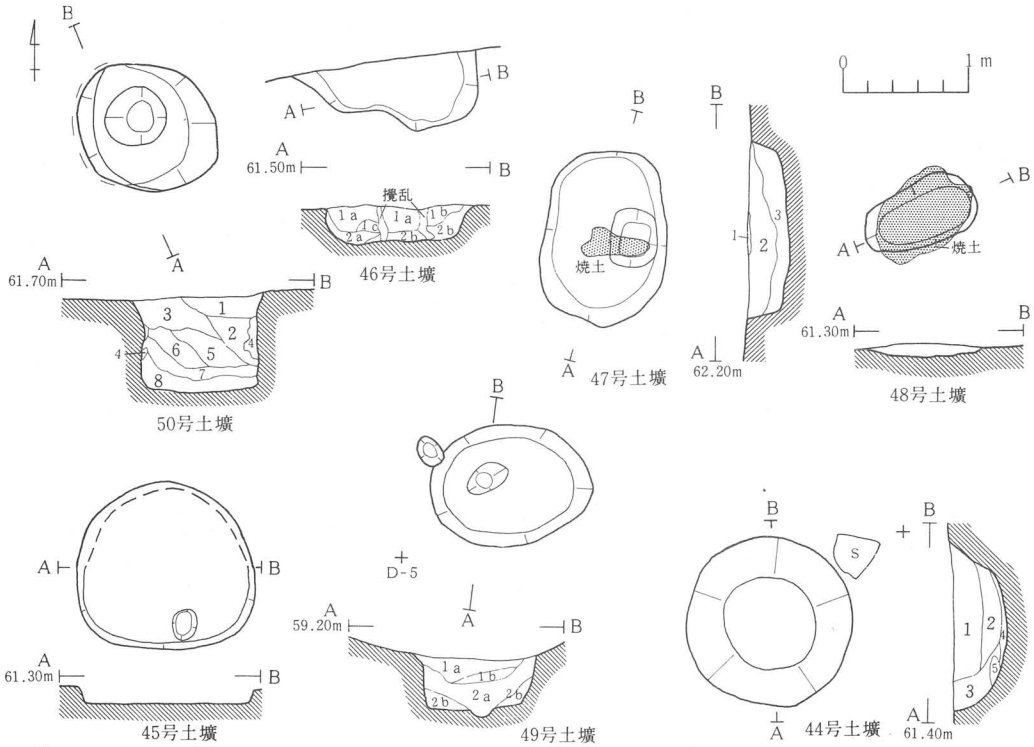
調査区南西端、J－9区に位置する。第4層上面で確認、10号住居と重複しており、68号土壙の方が新しい。南側を一部切られている。上端平面形は長軸1.34m、短軸0.7mの楕円形であると考えられる。

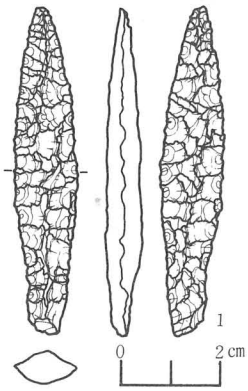
遺物は皆無である。

69号土壙（第80図）

調査区南西端、J－10区に位置する。第4層上面で確認、2号溝にほとんど切られている。10号住居よりは新しい。上端平面形は長軸1.11m、短軸0.64m程の楕円形と考えられる。深さ28cmを計る。

遺物は皆無である。





46号土壌

44号土壌埋土

単位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	多量の明黄褐色土と炭化物・焼土を含む。
2	黒褐色	10 YR 2/3	シルト	
3	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	炭化物を少量含む。
4	黒褐色	10 YR 2/3	シルト	ロームブロックを少量含む。
5	明黄褐色	10 YR 6/8	シルト	

46号土壌埋土

層位	土色		土性	備考
1a	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	
1b	褐色	10 YR 4/6	シルト	
1c	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	ロームブロック多量。
2a	褐色	7.5 YR 4/6	シルト	
2b	黄褐色	10 YR 5/6	シルト	

47号土壌埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗赤褐色	5 YR 3/6	シルト	焼土
2	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	
3	明褐色	7.5 YR 5/8	シルト	黄褐色ブロック含む。

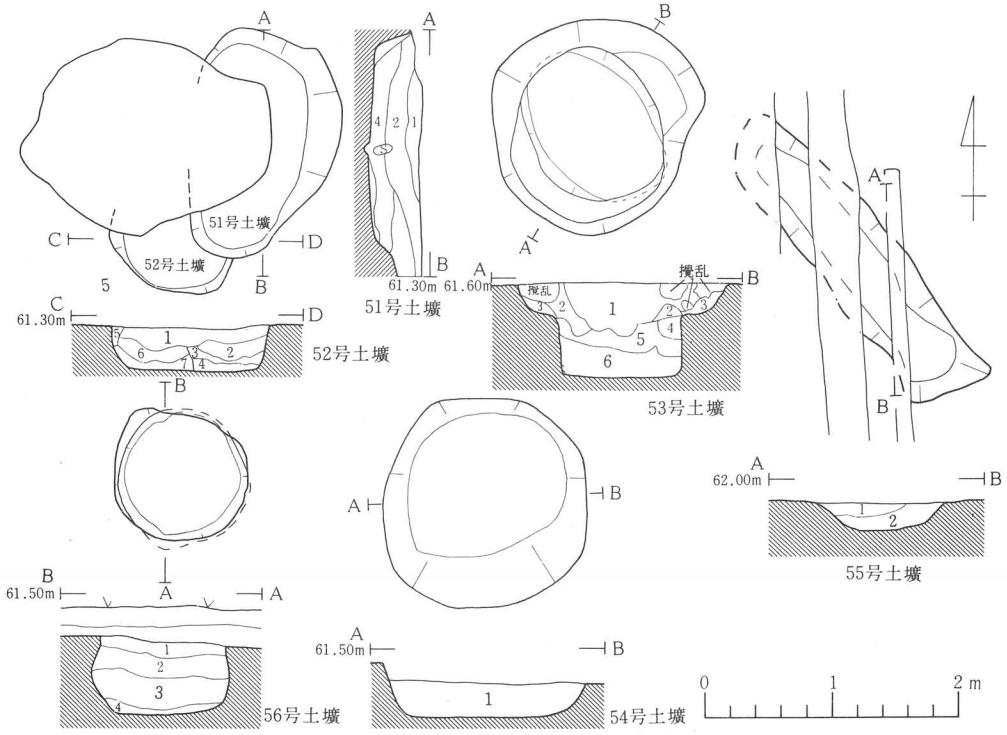
49号土壌埋土

層位	土色		土性	備考
1a	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	炭化物少量含む。
1b	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	炭化物少量含む。
2a	黄褐色	10 YR 5/8	粘性シルト	
2b	明褐色	7.5 YR 5/8	粘性シルト	

50号土壌埋土

層位	土色		土性	備考
1	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	
2	褐色	7.5 YR 4/6	シルト	ローム粒少量含む。
3	褐色	7.5 YR 4/3	シルト	
4	明黄褐色	10 YR 6/6	粘土質シルト	ロームブロック
5	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	炭化物微量含む。
6	暗褐色	10 YR 3/4	粘土質シルト	
7	褐色	7.5 YR 4/4	粘土質シルト	ローム粒少量含む。
8	暗褐色	10 YR 3/4	粘土質シルト	ローム粒・炭化物微量含む。

第77図　時期不明土壌（44号～50号土壌）



51号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	ロームブロック・炭化物を少量含む。
2	極暗褐色	7.5 YR 2/3	シルト	ローム，炭化物を含む。
3	黒褐色	7.5 YR 2/2	シルト	炭化物を含め。
4	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	ローム炭化物を少量含む。
5	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	炭化物を少量含む。
6	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	ロームブロック・炭化物を少量含む。

52号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	極暗褐色	7.5 YR 2/3	シルト	ローム・炭化物を含む。
2	黒褐色	7.5 YR 2/2	シルト	炭化物を含む。
3	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	ローム・炭化物を少量含む。
4	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	炭化物を少量含む。
5	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	ロームブロックを少量含む。
6	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	多量のロームと少量の炭化物を含む。
7	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	多量のロームと少量の炭化物を含む。

53号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5 YR 3/4	シルト	
2	褐色	10 YR 4/6	シルト	
3	褐色	10 YR 4/4	シルト	ロームブロックを含む。
4	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	ロームブロックを含む。
5	褐色	10 YR 4/6	シルト	
6	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	礫（3.0cm）炭化物を少量含む。

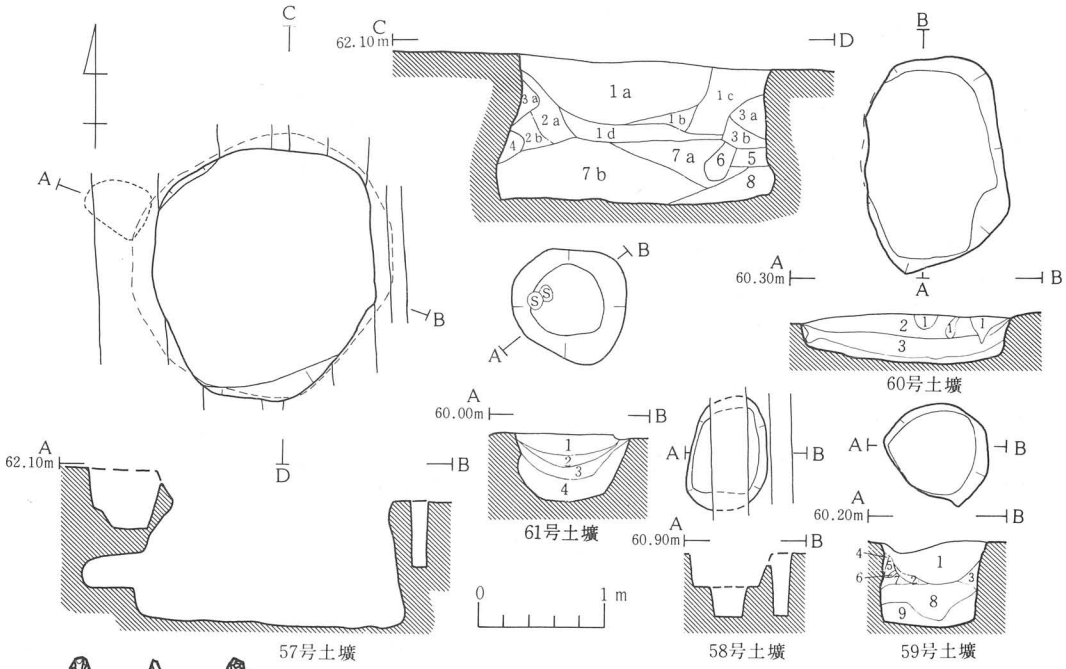
55号土壙埋土

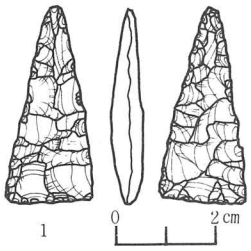
層位	土色		土性	備考
1	褐色	7.5 YR 4/4	シルト	ロームブロックを少量含む。
2	暗褐色	10 YR 3/4	シルト	炭化物を少量含む。

56号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5 YR 3/3	シルト	褐色土粒・炭化物粒を含む。
2	曙褐色	7.5 YR 3/3	シルト	褐色土粒・炭化物粒を含む。
3	極暗褐色	7.5 YR 2/3	シルト	褐色土粒・炭化物粒を含む。
4	褐色	7.5 YR 4/3	シルト	ローム粒多量に含む。

第78図　時期不明土壙（51号～56号土壙）





57号土壙

57号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1 a	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	風化礫・炭化物・焼土少量含む。スコリア含む。
1 b	暗褐色	10YR3/4	シルト	炭化物・スコリア少量含む。
1 c	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	風化礫・焼土少量含む。
1 d	褐　色	10YR4/4	粘土質シルト	礫・スコリア少量含む。
2 a	褐　色	7.5YR4/6	粘土質シルト	礫粒少量含む。
2 b	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	
3 a	褐　色	7.5YR4/4	粘土質シルト	ロームブロック少量含む。
3 b	褐　色	7.5YR4/4	粘土質シルト	
4	明黄褐色	10YR6/8	粘　土	ローム崩壊土。
5	明褐色	7.5YR5/8	シルト	
6	褐　色	7.5YR4/6	シルト	
7 a	黄褐色	10YR5/6	粘　土	ローム粒・礫多量含む。
7 b	明褐色	7.5YR5/6	粘　土	ローム粒・礫多量含む。
8	暗褐色	10YR3/4	粘　土	礫少量含む。

59号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	スコリア（約10mm）を一部含む。
2	褐　色	10YR4/4	シルト	ロームブロックを量に含む。
3	褐　色	10YR4/6	シルト	炭化物とロームブロック少量を含む。
4	黄褐色	10YR5/8	シルト	ロームブロックを含む。
5	褐　色	10YR4/4	シルト	炭化物を一部に微量に含む。
6	明黄褐色	10YR6/8	シルト	
7	黄褐色	10YR5/6	シルト	スコリアと焼土を一部に含む。
8	褐　色	10YR4/4	シルト	多量のロームブロックと炭化物を含む。
9	褐　色	10YR4/4	シルト	スコリアと炭化物を少量含む。

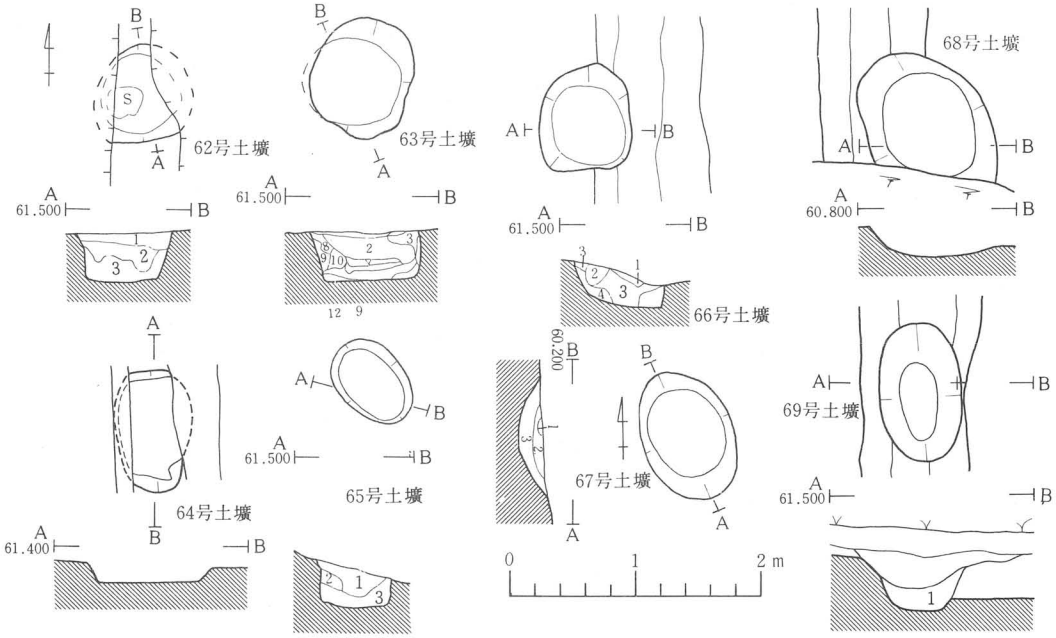
60号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	ロームブロックを少量含む。
2	褐　色	10YR4/6	シルト	
3	褐　色	7.5YR3/6	シルト	
4	褐　色	10YR4/6	シルト	スコリア（約10mm）を微量含む。

61号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	スコリアを一部に含む。
2	暗褐色	10YR3/4	シルト	スコリア粒わずかに含む。炭化物を少量含む。
3	褐　色	7.5YR3/4	シルト	スコリア粒わずかに含む。
4	褐　色	10YR4/4	シルト	ロームブロック多量含む。

第79図　時期不明土壙（57号～61号土壙）



62号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR3/4	シルト	黄褐色土粒（0.2～0.3cm）をまばらに含む。
2	褐色	7.5YR4/3	シルト	黄褐色土粒（0.2～1.0cm）を全体的に含む。
3	褐色	7.5YR4/4	シルト	黄褐色土粒（0.1～0.2cm）をまばらに含む。

63号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	
2	黒褐色	10YR3/3	シルト	炭化物少量、黄褐色土粒をまばらに含む。
3	褐色	7.5YR4/3	シルト	明黄褐色土粒少量含む。
4	褐色	10YR5/4	シルト	明黄褐色粘土が混入。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	
6	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	黒色土を部分的に含む。
7	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	
8	褐色	7.5YR4/4	シルト	
9	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色土が混入。
10	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物を少量含む。
11	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	
12	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	黄褐色粘土ブロックが混入。

65号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	明黄褐色土粒を全体にまばらに含む。
2	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	褐色土が混入。
3	褐色	10YR4/6	シルト	黒色土が混入。

66号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	黒褐色	10YR3/3	シルト	明黄褐色土粒（0.1～0.3cm）多量。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	焼土粒・黒褐色土含む。
3	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	明黄褐色土粒（0.1～0.5cm）多量。
4	暗褐色	10YR3/4	シルト	明黄褐色粘土をブロック状に含む。
5	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	明黄褐色土（0.1～1.0cm）多量に含む。

67号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色粘土をブロック状に多量に含む。
3	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	炭化物を少量含む。

69号土壙埋土

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR4/3	シルト	ロームブロック少量含む。

第80図　時期不明土壙（62号～69号土壙・67号土壙は近世の土壙である。）

第Ⅳ章　考察とまとめ

1．縄文時代早期

土器の属性と編年的位置

胎土

第１群土器は、わずか２点なので明確な判断はできないが、砂粒を多く含み、繊維は含まない。とりわけ胎土に大きな特徴は見い出せない。器面調整や焼成は良好である。

第２群土器の胎土は、砂粒を多く含み、繊維の少ないものが多い。そうした中で、極めて特徴的な胎土をもつものが存在する。第３群土器の中のものと類似した白色砂粒（角礫凝灰岩）を多量に含むもの、金雲母を多く含むもの、白色針状物質（佐藤洋：1981）を含むものがある。これらは、いずれも第２群土器全体の１割未満である。金雲母は、特に２類ｂ・ｇに見られる。白色針状物質は、第２群土器だけの特徴ではなく、時期に関係なく含有されている。

原体

縄文は、基本的に単節・単節多条文の２種類の原体が認められる。このうち、第２群土器の主体となる原体は、単節多条文であり、およそ６～７割を占めるようである。しかも左撚が比較的多いようである。羽状縄文にも単節多条文を原体として使用しているものもある。しかし、この羽状縄文は、全体の１割未満である。

文様

第１群土器についてはわずか２点であるので、ここでは論じられない。したがって、第２群土器について述べたい。

第２群土器の文様は、大きく２分される。第１は口縁部文様帯をもつもの、第２は文様帯をもたず、地文（単節・単節多条文・羽状縄文）のみのものである。

口縁部文様帯をもつものは、半截竹管による平行沈線文を組合せて、幾何学的なモチーフを表現する点が大きな特徴といえよう。これらはさらに細分が可能である。まず、文様帯の巾がほぼ一定して、口縁部に集中し、口唇部直下に隆帯をもつグループ（１類ａ・ｂ・ｃ）があり、隆帯を伴わず、文様帯が体部上半まで広がり、曲線文が加わるグループ（１類ｄ・ｅ・ｆ２類ｆ・ｇ）がある。この後者のグループの土器群は、大畑Ｇ式土器（馬目・他：1975）と共通性をもつ。逆に前者のグループは、在地性の強い土器群と考えられようか。このグループの口縁部文様帯のモチーフは、梨木畑式（林：1967）と共通するが、梨木畑では、押圧縄文が盛行する。しかし、第２群土器では、沈線文で表現される。押圧縄文の施文例としては、口縁部文様帯と体部文様の区画に使用されているものが、わずか１点のみである。

また、口縁部文様帯と体部文様の区画に隆帯を使用するものがわずかに存在する。これは、

それ以前の名残りと解したい。

編年上の問題

従来より、縄文条痕土器群として、素山Ⅱｂ式、上川名Ⅰ式、梨木畑式、船入島下層式が存存するが、形式内容については、今だ不十分な点が多い。

今回出土した第２群土器は、先の４形式のうち梨木畑式に近い内容をもつが、梨木畑式そのものではないようである。

また、船入島下層式とは、羽状縄文が伴出する点で共通するが、器内面の縄文が盛行する点や、帯状縄文・撚糸文が存在しない点で区別される。

したがって、厳密にみた場合該当形式がない。北前式とでも呼ぶべきかもしれないが、そう呼ぶためには内容が不十分である。この第２群土器と極めて類似する内容をもつものに、南境貝塚第２層土器（宮城県教委：1969）が存在する。今後、良好な出土資料を待って、検討が必要である。

土器の分布とその問題点

今回、北前遺跡から出土した縄文時代早期の土器は総数1279点（第５表）である。このうち第１群土器は、わずか２点のみであり、十分な特徴をつかむことができないが、およそ、大寺式のものであろうか。

第２群土器は、総数1277点で、早期の土器の主体を占める。このうち、口縁部は110点で全体の約９％、体部は1137点で全体の約89％、底部付近は26点で全体の約２％を占める。また、円盤状土製品４点が出土している。遺構別に見ると、住居跡出土点数は577点で45.2％、土壙出土点数は55点で４.３％、包含層及び遺構外出土点数は645点で50.5％を占める。

これらの土器群の分布（第81図）を見ると、Ｃ－４区、Ｄ－５区に主体をもつ１号住居跡のグループ（第１グループ）、２号～８号住居跡を含みＨ－５区、Ｇ－５区、Ｉ－６区に主体をもつ南東部のグループ(第２グループ)、また、図には表現できなかったが、Ｉ－９区、Ｊ－10区に比較的多く出土している南西部のグループ（第３グループ）の３ケ所が、出土頻度が高い。それぞれのグループは、１類ａ・ｂ、２類ａ・ｂ、３類ａ・ｂを主体的に保有するという基本的な共通点が存在する。しかし、これら３つのグループはそれぞれ、細部において内容が異っている。第１グループには平底（揚底）や、羽状縄文が伴ない１類ｄ～ｊ、２類ｄ～ｊが多い。胎土に金雲母を含むものがある。第２グループは、特異な例や偏在性は認められず、斉一性が強い。第３グループは、出土点数がやや多いが、このグループの主体はさらに西あるいは、南に存在するものと考えられる。したがって特徴を明確に捉えることができないが、第１グループと同様に胎土に金雲母を含むものや、第２グループになく、第１グループに保有される体部文様との区画に隆帯をもつもの（１類ｇ）がある。

これら3つのグループの時間的な関係については、明確にできないが、第1グループに1類iや、2類eを含む点などを考慮すれば第2グループから第1グループに変遷した可能性が考えられる。

石器について

石器に関しては、以下の2点について指摘しておきたい。

①縄文時代早期に属する石器が全出土点数の約5割を占める。

②縄文時代の石器の約5割を5号住居跡が占める。

住居跡の特徴について

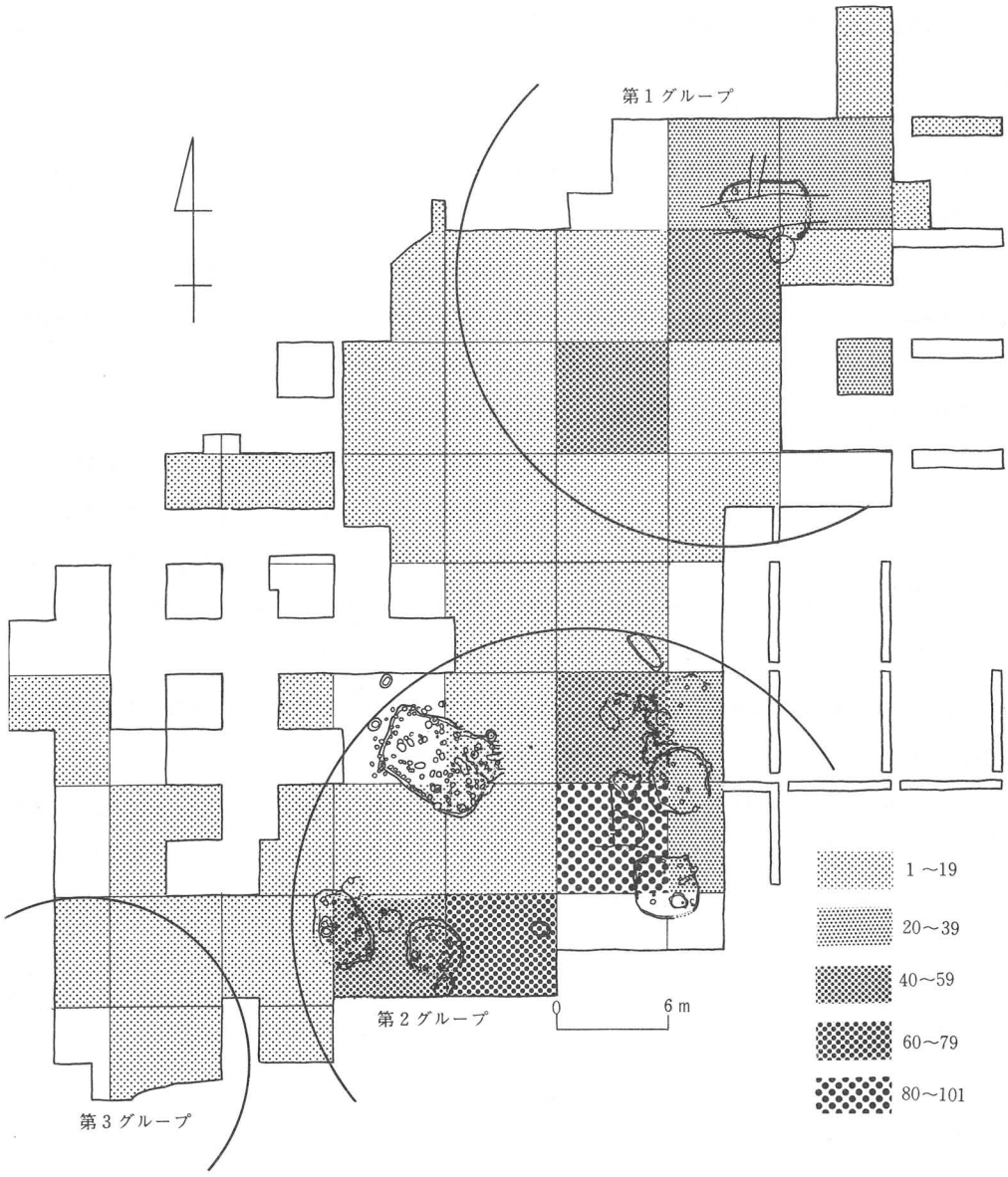
今回検出された住居跡は、規模が約3～4mで炉の存在しないものが一般的である。主柱穴数は各住居跡によって異なるが、住居内に土壙を伴なう点は共通する。ただし、1号住居跡については、3号溝に大半を切られているために、詳細は不明である。この土壙は、住居内の西側か南側に位置している。8号住居跡は、両方に付設されている。

5号・6号住居跡については、他の住居跡に比較した場合、規模が大きく、柱穴の数が多くまた深い。特に5号住居跡には炉が存在するし、出土した石器数は、早期の全出土点数の約5割を占めている。これらの特徴から、少なくとも5号住居跡の性格は、他の住居跡と区別されよう。おそらく、共同作業場や集会所等の性格をもつものであろう。6号住居跡については、5号住居跡に切られており、その特徴は明確にとらえられない。

住居跡外の土壙は、形態を比較すると、隅丸長方形・円形・不整形の3種類があり、ほぼ住居群の内側に点在する。その性格については不明である。

今回、8棟の住居跡が検出され、2号住居跡と3号住居跡、5号住居跡と6号住居跡にそれぞれ切り合いが認められた。したがって、第2グループの住居群には、少なくとも2時期の変遷があったと考えられる。また、1号住居跡については前述したように、第2グループの住居群よりさらに新しくなる可能性をもつ。

以上の特徴がみられる。全体としてみた場合、これらの住居群は、同一型式内において変遷した集落跡と考えられる。



第81図　第２群土器頻度分布図

2．縄文時代前期

前期末の土壙群と時期不明土壙群について

前期末の時期の土壙とした11～33号土壙の23基は、重複関係及び、出土土器が第３群に属するものであることを判断基準としている。ここでは分布・規模・形態について分析を行ない、前期末の土壙群の特徴を捉え、後に時期不明土壙群との対比を行なう。

最初に規模について分類する。分類基準を長軸とし、１類＞２ｍ、２ｍ≧２類＞1.2m、1.2ｍ＞３類に分けた。１類は16、27号土壙の２基、２類は11、12、13、15、17、18、20、21、22、23、24、25、26、31号土壙、３類は14、19、29、30、32、33号土壙である。１類及び２類は31号土壙を除き調査区北半に、３類は14、19号土壙を除き調査区南西部にそれぞれ分布域を示す。

次に形態について分類する。分類基準は上端平面形、壁面の立ち上がり角、長軸と深さの比率について設けた。上端平面形は円形：$\frac{長軸}{短軸}$＜1.1、楕円形：1.1≦$\frac{長軸}{短軸}$＜２、長楕円形：２≦$\frac{長軸}{短軸}$とした。円形は14、15、21、23、26、27、28、29、30号土壙、楕円形は11、12、13、14、15、16、18、19、20、22、24、25、31、32、33号土壙で、長楕円形はない。17号土壙は分類不能である。楕円形を示すものは全て1.5未満である。壁面の立ち上がり角度は断面形において便宜的に下端と上端を直線で結び下端から立てた垂直線との角度とした。壁面が内傾するものはマイナスにした。１類＜－10°、－５°≦２類≦５°、10°≦３類≦25°、30°≦４類≦50°、50°＜５類。１類は13、16、17、20号土壙、２類は11・18、21、23、25、27号土壙、３類は22、26、29、30、32、33号土壙、４類は24、31号土壙で、12、14、15、19、28号土壙は分類不能である。また長軸と深さの比率は、１類：$\frac{長軸}{短軸}$＜2.5、２類：2.5≦$\frac{長軸}{短軸}$＜４、３類：４≦$\frac{長軸}{短軸}$と６、１類は11、13、15、18、21、22、23、25、29、30号土壙、２類は16、20、26、28、31、32、33号土壙、３類は24号土壙であり12、14、19、27号土壙は分類不能である。

以上のことから前期末の土壙群には規模と分布に相関関係が見られ、大形のものが北半部に小形のものが南半部に分布域を示す。形態的には上端平面形は円形及び楕円形を呈するが$\frac{長軸}{短軸}$が1.5を越すものはなく円形に近い楕円形が多い。立ち上がり角度は他の時期と比べると、１類、２類は前期末に特徴的であり、北半部の大形のものに見られるが、南半部にはない。また南半部の29、30、32、33号土壙は立ち上がり角度３類に属し、この４土壙全てが長軸の３類に属しており南半部の土壙群の特徴と言える。また$\frac{長軸}{深さ}$は１類・２類がほとんどである。

次に時期不明土壙25基について、単一要素により消去を行なう。

１．重複関係から縄文時代中期以降のもの……68・69号土壙

２．1.5＜$\frac{長軸}{短軸}$……44・59・64・69号土壙

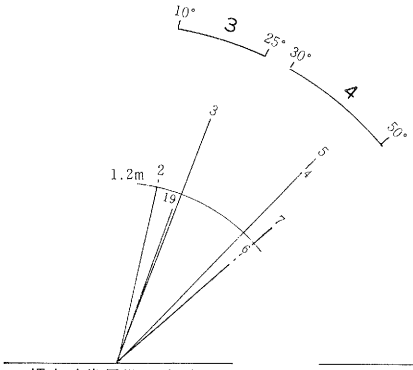
３．$\frac{長軸}{深さ}$が３類に属するもの……48・54・60号土壙

８基が消去された。残り17基について規模・形態の共通性により抽出を行なう。

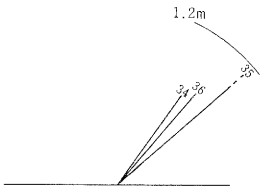
前期末の土壙

土壙名	長軸÷短軸	角　度	長軸÷深さ	土壙名	長軸÷短軸	角度	長軸÷深さ
11	1.372	−5°	2.107	23	1.054	5°	1.641
12	1.214	—	—	24	1.387	36°	5.375
13	1.210	−29.5°	2.256	25	1.175	5°	1.678
14	—	—	—	26	1.049	18°	2.725
15	1.065	—	1.837	27	—	4°	2.675
16	1.143	−22.5°	3.783	28	1.059	—	1.708
17	—	−19°	—	29	1.048	13.5°	1.387
18	1.447	2°	1.5	30	1.051	17°	1.864
19	1.328	—	—	31	1.315	43.5°	3.106
20	1.121	−18.5°	2.588	32	1.227	15°	3.464
21	1.065	5°	2.093	33	1.128	19°	3.117
22	1.360	24°	2.023				

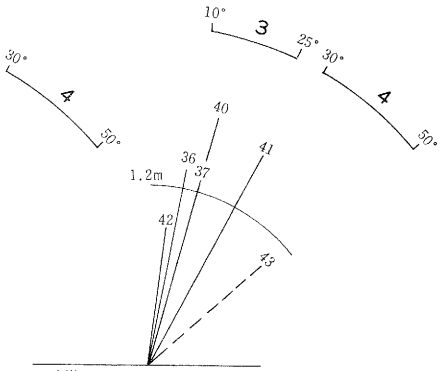
第82図　前期末土壙分布図と形態分類表



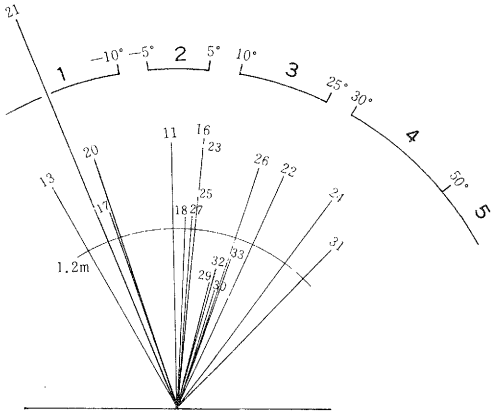
縄文時代早期の土壙　1



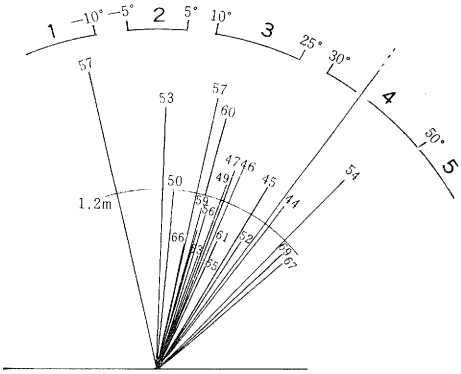
平安時代の土壙　2



近世の土壙（墓壙含む）　3



縄文時代前期の土壙　4



時期不明の土壙　5
(67は近世の土壙)

時期不明の土壙

土壙名	長軸÷短軸	角度	長軸÷深さ	土壙名	長軸÷短軸	角度	長軸÷深さ
44	1.768	38°	2.833	57	1.160	−12.5°	1.669
45	1.061	31°	11.66	58	1.492	—	3.640
46	—	23°	4.677	59	1.623	15°	1.600
47	1.400	21°	3.684	60	1.220	15°	4.526
48	1.804	26°	7.666	61	1.022	25°	1.672
49	1.327	20.5°	2.031	62	1.026	19°	2.078
50	1.157	5°	1.573	63	1.234	15°	2.375
51	—	12.5°	4.089	64	1.581	—	2.510
52	—	33°	—	65	1.442	25°	1.875
53	1.061	2°	2.276	66	1.183	12°	1.714
54	1.036	44.5°	6.214	68	1.381	—	6.700
55	—	36.5°	—	69	1.734	47.5°	3.964
56	1.091	17°	1.672				

表９表　土壙形態分類表

1．長軸が1類か2類で、$\frac{長軸}{短軸}<1.5$、立ち上がり角度が1類か2類か3類に属するもの……47・49・50・53・57号土壙

2．長軸が3類で、$\frac{長軸}{短軸}<1.5$、立ち上がり角度が3類のもの……56・59・61・62・63・65・66号土壙

これら12基は規模及び形態において前期末の土壙の性格を有する。また分布域も1は北半部2は南半部を示す。尚50号土壙は長軸1.18mで長軸3類であるが、立ち上がり角度を重視し、1に入れた。

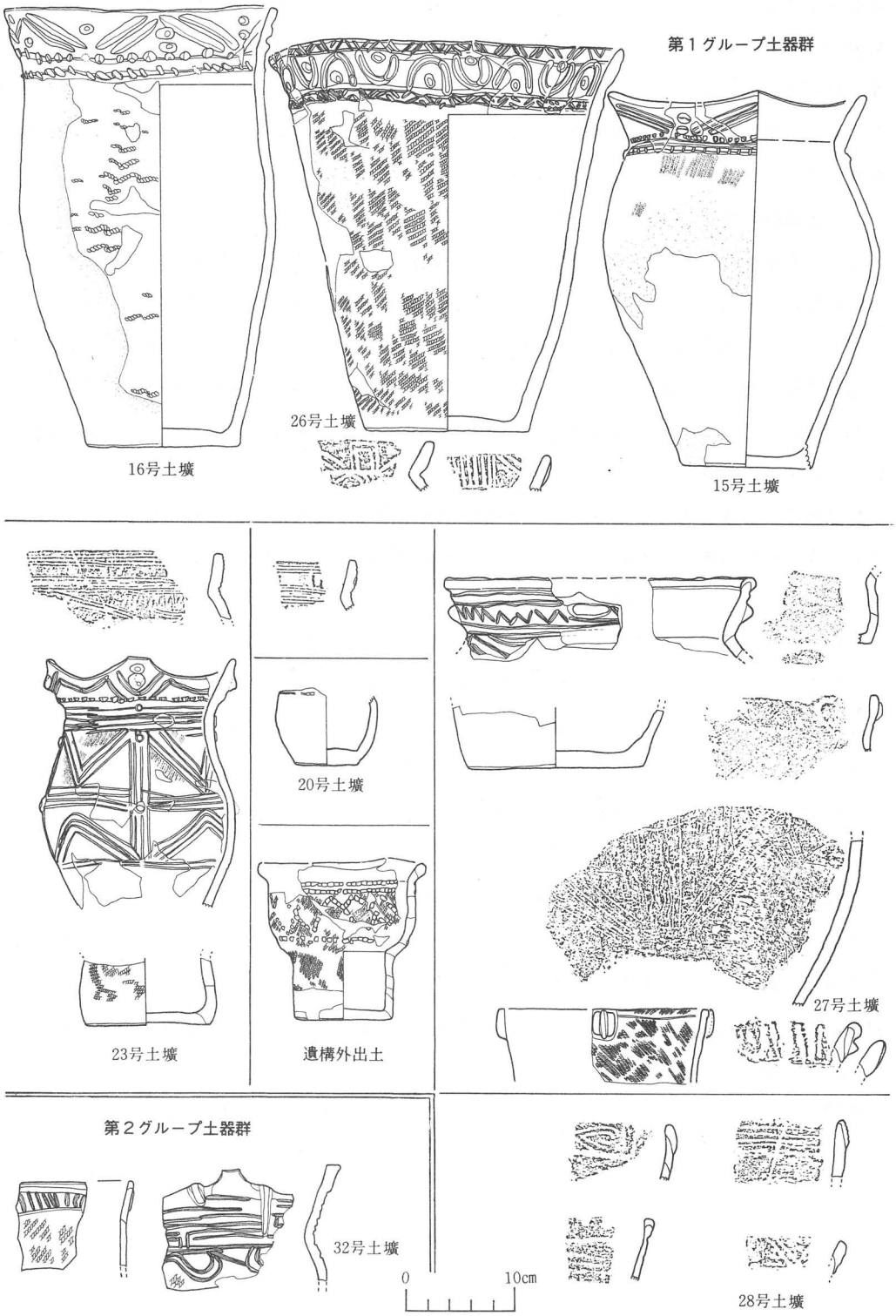
前期の土壙群は分布の結果、大きく2つのグループに分けることができる。第1グループは調査区北半に東西方向に帯状に分布域をもち、等高線が開く北東部の平坦面に集中する傾向がある。土壙の規模は大きく（長軸>1.2m）、平面形は円形及び楕円形$\left(\frac{長軸}{短軸}<1.5\right)$で、立ち上がり角度はほとんどが1類・2類・3類に属する。また、$\frac{長軸}{深さ}$は1基を除き全て1類か2類である。第2グループは調査区南半に分布域をもち、土壙の集中はないが、南へ広がる傾向が認められる。土壙の規模は小さく（長軸≦1.2m）、平面形は円形及び楕円形$\left(\frac{長軸}{深さ}<1.5\right)$で、立ち上がり角度は3類が、$\frac{長軸}{深さ}$は1類がほとんどであり、第1グループに比べ規格性がある。

第3群土器について（第83図）

第3群土器は口縁部と胴部が明瞭に区別のつく深鉢形土器を主体としており、深鉢形土器の中での器形の多様性を認めることができる。口縁は四波状口縁を有するものが多い。文様帯も口縁部・胴部と二分され頚部文様を施文することでより明確な区画を示す場合もある。さらに文様帯の4区画が行なわれるものもあり、区画性を有する土器群と言える。地文は横位綾絡文・単節斜行縄文が施文されるが薄く撫で消してあるものがある。文様施文要素は沈線文が主流を占め、文様要素では横位沈線文・連続刺突文・ボタン状貼付文などが施文される。半截竹管の使用が顕著である。また胎土に角礫凝灰岩粒を多量に含む。

第3群土器類似資料は長根貝塚(藤沼、1969)、沼崎山遺跡(遊佐、1980)、糠塚貝塚（興野、1981）などで出土しており大木6式土器と捉えることができる。長根貝塚では大木6式土器を2つに分けており、第3群1類1種、3類1種、5類1種、5類2種は長根第1群に比定することができ、本調区では14・15・16・18・19・20・21・22・23・26・27・28号土壙から出土しており、第1グループに属する土器群と考えられる。また第3群1類2種、3類2種は長根第2群に比定することができ、本調査区では32・33号土壙から出土しており第2グループに属する土器群と考えられる。本調査区2類·4類・6類は共伴関係から、7類は同一文様要素をもつものが21号土壙で5類1種と共伴していることから第1グループの土器群に入ると考えられる。

第3群土器はほとんどが第1グループ土器群と捉えられる。この第1グループ土器群は第2グループ土器群には見られない細い粘土紐隆帯による幾何学文や、隆帯に連続刺突文を加えた



第83図　縄文時代前期末葉の土器

頚部文様を有するものがある点、また、山形沈線文・山形連続刺突文といった「山形文」が特徴的である。これを大木４式・大木５式からの山形貼付文の施文要素の沈線文、刺突文への転換と見ることができれば、ボタン状貼付文・コブ状貼付文・棒状貼付文といった、貼付文が残るにせよ、第１グループ土器群は貼付文土器から沈線文土器へ移行する過渡的段階の土器群であり、そのために文様要素の多様性が認められると考える。

土壙群の性格について

２つの土壙群は分布域を異にしている。第１グループでは土壙に形態差があり重複関係も認められ集中区を形成している。集中区の形成は土壙を掘る時に撰地性を持っている事によるものであり、この場合は平坦面を撰地する傾向が窺える。このため調査区北東部の等高線が開く最も平坦な場所に土壙が集中したと考えられる。第２グループは規模・形態に規格性があり重複関係はなく集中する傾向は認められない。このことは土壙群が第１グループに比べやや傾斜がある地域に分布している事から地形的な撰地性よりもある一定の域を設定し、そこに土壙が配されている事を考えさせる。この土壙群形成の相違は時期差によるものなのか、性格によるものなのか現段階では不明であるが、以下各土壙及びグループ間において見られた特徴的な事がらを列挙しておき、今後の参考としたい。

１．第１グループの方が第２グループよりも遺物出土量は圧倒的に多い。

２．第１グループでは一括土器が15・16・23・26号土壙から出土した。このうち16号土壙では底面から出土したが、他の３土壙は底面からの出土ではなく埋土の上面に乗ってやや浮いた状態で出土している。15号土壙では下層に人為的と考えられるロームブロックを含む層が薄い炭化物の層をはさんだ状態で確認され、土器はその上の層の上面に乗って出土している。

３．第１グループには底面にピットを１個有する土壙が６基あるが、第２グループにはない。

４．底面に石を敷いたと思われる土壙が第１グループ・第２グループ共に見られる。18号土壙では４個の円礫・角礫が底面に敷いてあり、その下から炭化物が検出されている。また30号土壙では底面に扁平な輝石安山岩が１個敷いてあり、埋土中からは実用品とは考えにくい釣針形石器が１点出土している。18・30号土壙は、石の検出状況などから墓壙と考えられる。

５．埋土上層から円礫を出土している土壙がある。21・23・61号土壙である。

現段階では２つの土壙群の性格については不明と言わざるを得ない。今後類例を待ち土壙群の性格に迫りたい。最後に大木６式土器の細分の可能性を指摘し本稿を了とする。

3．ま と め

1．北前遺跡は、名取川が形成した段丘上に位置する。

2．旧石器時代の文化層が確認された。前期旧石器時代は、15層上面（D－3 a区）・17層上面（I－5 b区）で確認され、後期旧石器時代は第5層上面において確認された。

ところで、旧石器時代の調査面積が狭小なため、層の対比、文化層としての認定（第6層・第9層上面）、石器群の面的広がりなどの問題が調査上の課題として残される。また、石器群の内容検討や他遺跡の資料との対比などが研究上の課題となろう。

3．今回の3万年以前の石器の出土は、宮城県内では発掘調査の結果確認された遺跡としては、座散乱木遺跡・山田上ノ台遺跡についで3番目である。今後の前期旧石器時代の研究に貴重な資料を提供した。

4．縄文時代早期末の集落跡（8棟）が発見された。県内では、今まで1遺跡において1～2棟の住居跡の発見は報告されているが、今回のような集落跡として報告された例はなく、貴重な資料である。同時に、この時期の集落構造の解明という大きな問題が提起されたといえよう。また、今回出土した第2群土器についても、その編年的位置づけを明確にしなければならない。

5．仙台市では初めてであり、県内でも数少ない縄文時代前期末大木6式の土器が出土した。また、この時期に属する遺構（土壙群）についても県内では数少なく、貴重な発見となった。

土壙が発見されたことによって、この時期の住居跡の発見が今後期待される。

6．縄文時代中期後葉の大木9式の住居跡が2軒検出された。特に、9号住居跡は県内でも有数の規模をもつ資料である。

7．平安時代の改築されたと考えられる住居跡が検出された。今回の調査面積に比較して、極めて住居跡の数が少ない。同様の傾向が山田上ノ台遺跡においても指摘でき、段丘や丘陵上での平安時代の集落跡のあり方が問題となろう。

8．江戸時代の遺構については、その性格を明らかにできたものは数少ない。今回の調査では、墓壙のみが明確に把握できた。また、小鍛冶と考えられる工房跡が検出されたが、この時期の鉄生産に関連する遺跡の報告例がほとんどなく、その解明は今後の課題である。溝の性格については不明であるが、遺跡の中に所在する杉土手との関連がつかめ、杉土手（土塁）が築造された時期は、江戸時代中期以前である可能性が強まった。また、秋保街道（江戸時代以来のもの）沿いに、江戸時代の遺構が点在することが判明した。

最後に、短期間のうちに、報告書をまとめあげなければならなかったために、調査に参加された方々はもちろん、整理参加された方々や協力していただいた方々に対して、担当者とし

て、改めて感謝申し上げたい。

第10表

住居跡

遺構名	時期	上端長軸	短軸	下端長軸	短軸	深さ	備考
1号住居跡	縄文時代早期末葉	4.60m	3.14m	4.48以上	3.04m	0.22m	
2号住居跡	〃	約3.9 m	約3.6 m		3.74m	0.23m	
3号住居跡	〃	3.56m	3.49m	3.4 m	2.90m	0.33m	
4号住居跡	〃	3.48m	3.32m	3.34m	3.12m	0.22m	
5号住居跡	〃	6.28m	推3.60m	6.14m	推3.4 m	0.13m	
6号住居跡	〃	約5.0 m	約3.0 m	4.6 以上	1.2 以上	0.10m	
7号住居跡	〃	4.27m	3.01m	3.76以上	2.08	0.17m	
8号住居跡	〃	約3.30m	3.06m	2.72以上	2.76	0.17m	
9号住居跡	縄文時代中期後葉	推7.60m	推6.80m	推7.40	推6.50	?	
10号住居跡	〃	5.78以上	6.22m	5.72以上	6.02	?	
11号住居跡	平安時代	推3.70m	3.46m	推3.50m	3.30m	22	
12号住居跡	〃	推4.80m	4.76m	推4.50m	4.50m	32	

工房跡

遺構名	時期	上端長軸	短軸	下端長軸	短軸	深さ	備考
1号工房跡	江戸時代	4.0m以上	2.12m	3.7m以上	0.92m		

竪穴

遺構名	時期	上端長軸	短軸	下端長軸	短軸	深さ	備考
1号竪穴遺構	縄文時代中期中葉	3.33m	3.03m	約2.5 m	1.71m		

溝一覧

遺構名	上端最大幅	最小幅	下端最大幅	最小幅	深さ最深	最浅	備考
1号溝	2.05m	1.30m	0.77m	0.47m	0.5 m	0.1 m	
2号溝	1.06m	0.83m	0.56m	0.22m	0.21m	0.1 m	
3号溝	1.94m	1.28m	1.30m	0.71m	0.30m	0.2 m	
4号溝	1.76m	0.88m	0.93m	0.20m	0.33m	0.05m	
5号溝	0.7 m	0.48m	0.54m	0.36m	0.37m	0.34m	
6号溝	0.72m	0.48m	0.20m	0.12m	0.42m	0.32m	
7号溝	0.40m	0.20m	0.25m	0.12m	0.25m	0.12m	
8号溝	1.05m	0.20m	0.2 m	0.04m	0.35m	0.06m	

第11表　土壙一覧表(1)

遺構名	上端長軸	短　軸	中端長軸	短　軸	下端長軸	短　軸	深　さ	備　考
1号土壙	1.23m	0.61m			1.12m	0.43m	0.40m	
2号土壙	約1.20m	0.69m			1.3m	0.56m	0.34m	
3号土壙	1.72m	1.43m			1.57m	1.33m	0.22m	
4号土壙	1.75m	1.53m			1.57m	1.28m	0.16m	
5号土壙	1.88m	1.85m			1.77m	1.68m	0.15m	
6号土壙	1.35m	約1.00m			1.25m	0.94m	0.10m	
7号土壙	1m以上	0.97m			0.95m以上	0.9m	0.16m	
8号土壙	2.45m	0.95m			2.28m	0.76m	約0.09m	
9号土壙	1.09m	0.85m			0.9m	0.64m	0.29m	
10号土壙	1.20m	1.03m			1.07m	0.75m	0.14m	
11号土壙	1.77m	1.29m			1.47m	1.20m	0.84m	
12号土壙	1.53m	1.26m			1.29m	1.08m	――――	
13号土壙	1.67m	1.38m	1.15m	1.13m	1.20m	1.06m	0.74m	
14号土壙	1.04m	1.02m			1.37m	1.42m	1.08m	
15号土壙	1.47m	1.38m			1.07m	1.04m	0.80m	
16号土壙	2.80m	2.45m	2.30m	2.12m	2.22m	2.20m	0.74m	
17号土壙	1.26m	――			1.12m	0.80m以上	0.90m	
18号土壙	1.23m	0.85m	0.98m	0.61m	0.81m	0.38m	0.82m	
19号土壙	0.85m	0.64m			0.54m	0.39m	――――	
20号土壙	1.76m	1.57m	1.80m	1.50m	1.67m	1.19m	0.68m	
21号土壙	1.80m	1.69m	1.36m	1.26m	1.35m	1.18m	0.86m	
22号土壙	1.70m	1.25m	1.55m	0.96m	1.21m	1.19m	0.84m	
23号土壙	1.74m	1.65m	1.56m	1.46m	1.45m	1.45m	1.06m	
24号土壙	1.72m	1.24m			1.23m	0.89m	0.32m	
25号土壙	1.41m	1.20m	1.07m	1.03m	1.11m	1.00m	0.84m	
26号土壙	1.69m	1.61m			1.44m	1.33m	0.62m	床直上クルミ出土
27号土壙	2.14m	2.02m			1 45m	1.3m以上	0.72m	
28号土壙	1.23m	推1.25m	0.87m	0.91m	1.81m	1.72m	0.80m	
29号土壙	0.86m	0.82m			0.32m	0.32m	0.62m	
30号土壙	0.82m	0.78m			0.66m	0.57m	0.44m	
31号土壙	1.46m	1.11m			1.17m	0.74m	0.47m	
32号土壙	0.97m	0.79m			0.83m	0.69m	0.28m	
33号土壙	1.06m	0.94m			0.76m	0.82m	0.34m	
34号土壙	0.72m	0.48m			0.72m	0.39m	0.07m	
35号土壙	1m以上	1.06以上			0.9m以上	0.76m以上	0.34m	
36号土壙	0.8m	0.53m			0.68m	0.42m	――――	
37号土壙	1.26m	1.12m			1.07m	0.85m	0.46m	墓壙
38号土壙	1.32m	1.20m			0.93m	0.87m	0.75m	墓壙

第11表　土壙一覧表(2)

遺構名	上端長軸	短　軸	中端長軸	短　軸	下端長軸	短　軸	深　さ	備　考
39号土壙	0.80m	0.74m			0.49m	0.44m	0.37m	墓壙
40号土壙	1.70m	1.39m	1.49m	1.39m	1.16m	1.03m	0.82m	墓壙
41号土壙	1.58m	1.57m	1.41m	0.98m	0.72m	0.65m	0.77m	墓壙
42号土壙	0.92m	0.65m			0.53m	0.50m	約0.30m	墓壙
43号土壙	1.00m	0.88m			0.70m	0.76m	0.22m	
44号土壙	1.36m	1.30m			0.94m	0.72m	0.48m	
45号土壙	1.40m	1.32m			1.31m	1.23m	0.12m	
46号土壙	1.45m	0.6m以上			1.13m	0.5m以上	0.31m	
47号土壙	1.40m	1.00m			1.21m	0.81m	0.38m	
48号土壙	0.92m	0.51m			0.76m	0.34m	0.12m	
49号土壙	1.30m	0.98m			1.04m	0.75m	0.64m	
50号土壙	1.18m	1.02m			0.95m	0.87m	0.75m	
51号土壙	1.84m	推1.64m			1.64m	1.35m	0.45m	
52号土壙	推1.00m	0.64m			——	——	0.26m	
53号土壙	1.73m	1.63m	1.48m	1.32m	1.32m	0.86m	0.76m	
54号土壙	1.74m	1.68m			1.32m	1.17m	0.28m	
55号土壙	2.5m以上	0.63m			2.1m以上	0.38m	0.22m	
56号土壙	1.07m	0.98m	1.09m	1.05m	0.96m	0.93m	0.64m	
57号土壙	2.02m	1.74m			2.12m	2.07m	1.21m	
58号土壙	0.91m	0.61m			0.10m	0.52m	0.25m	
59号土壙	1.12m	0.69m			1.04m	0.53m	0.70m	
60号土壙	1.72m	1.41m			1.61m	1.33m	0.38m	
61号土壙	0.92m	0.90m			0.58m	0.57m	0.55m	
62号土壙	0.79m	0.77m			0.68m	0.64m	0.38m	
63号土壙	0.95m	0.79m			0.76m	0.69m	0.40m	
64号土壙	0.98m	0.62m			0.82m	約0.55m	0 39m	
65号土壙	0.75m	0.52m	0.61m	0.46m	0.59m	0.35m	0 40m	
66号土壙	0.84m	0.71m			0.64m	0.56m	0 49m	
67号土壙	1.07m	0.71m			0.73m	0.58m	0 26m	
68号土壙	1.34m	0.97m			0.92m	0.76m	約0.20m	
69号土壙	1.11m	0.64m			0.62m	0.29m	0.28m	

第12表　出土石器集計表(1)

時期	遺構名又は区分	石鏃	尖頭器	石匙	ヘラ状石器	スクレイパー	石錐	スクレイパー＋石錐	ピエス・エスキーユ	打製石斧	釣針形石器	石核	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	磨製石斧	有溝砥石	砥石	石皿	凹石	磨石	敲石(ハンマーストーン)	凹＋磨	凹＋敲	磨＋敲	凹＋磨＋敲	板状磨石	珪化木	礫	計	
縄文時代早期	1住														4															4	
	2住 埋												1								1									2	3
	2住 床																									1				1	
	3住	1	1		1				4				3	14	38							1							2	65	
	4住	1	1		2	1			2			1	4	2	20															34	
	5住 埋	8	2		1	3			7			1	16	13	183				1		5					1		5	246	284
	5住 床	2							3				1		32															38	
	6住	1										1	2	1	7															12	
	7住 埋					1			1					1	7					1	3								5	19	20
	7住 床								1																					1	
	1壙				1																									1	
	3壙					1									1															2	
	5壙	1											8	2	17															28	
	6壙																				1									1	
	G－5		1						1			1	3	2	15														1	24	
	H－4					1							2		4														1	8	
	H－5	2	1	1	1	2							8	4	37														1	57	
	I－6		1																		1									2	
	I－7					1						1	1		6						3		1		1				6	20	
	J－8					1																								1	
	計	16	7	1	6	11			19			5	49	39	371				1	1	14	1	1		1	2			21	566	
縄文時代前期	11壙					1							1	2	1						1		1							7	
	14壙																												1	1	
	15壙																												1	1	
	16壙											1			1														1	3	
	17壙				1										1															2	
	18壙											1		1	1														1	4	
	20壙													1	5						2									8	
	21壙	1			1								1	1	1				1				1					1	4	12	
	22壙														1						1								1	3	
	23壙													2	1					1			1		1			1	4	11	
	24壙													1						1										2	
	25壙							1				1	2								1								3	8	
	26壙												1						1		2		1	1					1	7	
	27壙			1											1						1									3	
	28壙			1			2					1	1	1	8					1									5	20	
	30壙										1			1													1		5	8	
	31壙														2															2	
	32壙														3															3	

第12表　出土石器集計表(2)

時期	遺構名又は区名	石鏃	尖頭器	石匙	ヘラ状石器	スクレイパー	石錐	スクレイパー＋石錐	ピエス・エスキーユ	打製石斧	釣針形石器	石核	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	磨製石斧	有溝砥石	砥石	石皿	凹石	磨石	敲石(ハンマーストーン)	凹＋磨	凹＋敲	磨＋敲	凹＋磨＋敲	板状磨石	珪化木	礫	計
縄文時代前期	33壙												2	1															1	4
	計	1		2	2	1	2	1			1	4	8	11	26				2	3	8		4	1	1		1	2	28	109
縄文時代中期	9住	3		1	1				1				2	1	5						1								6	21
	10住 埋			1			1		2				3	4	15						2		1					4	33	40
	10住 床					2								1	1		1		1										1	7
	1竪			3								1			2														13	19
	計	3		5	1	2	1		3			1	5	6	23		1		1		3		1					4	20	80
平安時代	11住		1			1	1		1				4	2	7	1												1		19
	12住													2	4															6
	35壙								1				2		1										1				1	6
	36壙															1														1
	計		1			1	1		2				6	4	12	2									1			1	1	32
江戸	40壙														2															2
近世以降	1溝				1											1							1						1	4
	2溝				1				1						2															4
	3溝					2			1			1	1	1	4			1		2	2		1	1					4	21
	4溝			1					1				1	1							1									5
	5溝														1															1
	計			1	2	2			3			1	2	2	7	1		1		2	3		2	1					5	35
表土・包含層	A－2											1																		1
	A－3	1													2															3
	B－3	1			1	2						1	1	1																7
	B－4			1		1								1	3															6
	C－2														1					1										2
	C－3																									1				1
	C－4												2	1															4	7
	C－5														1						1									2
	C－6					1								1	1															3
	C－7					2		1							1															4
	D－3														1															1
	D－4				1																								2	3
	D－5	1				1						1	1	1	3					1	1								7	17
	D－6					1							1	1							1								1	5
	D－7												2	1															1	4
	E－3					1								1	1															3
	E－4												1	1	1															3
	E－5			1									1		1								1							4
	E－6												3	2	1															6
	E－7												1		1														2	4
	E－8													1						1	2								2	6
	F－4												1		2															3
	F－5			2		1			1			1	2	1	1														6	15
	F－6			1		1							1	2							3									8
	F－8			1																										1
	G－4												1		1															2

第12表　出土石器集計表(3)

時期	遺構名又は区名	石鏃	尖頭器	石匙	ヘラ状石器	スクレイパー	石錐	スクレイパー＋石錐	ピエス・エスキーユ	打製石斧	釣針形石器	石核	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	磨製石斧	有溝砥石	砥石	石皿	凹石	磨石	敲石（ハンマーストーン）	凹＋磨	凹＋敲	磨＋敲	凹＋磨＋敲	板状磨石	珪化木	礫	計
表土・包含層	G－5					4			1				5	1	13						2			1				1	2	30
	G－6					2	1						6	4	12							1						1	2	29
	G－7					1							3	2	6															12
	G－9					1						1																		2
	G－10			1		1							1							1									1	5
	H－3													1																1
	H－4					1						1	3	3	7						1									16
	H－5		1			5			1	1			4	3	16						2								3	36
	H－6												4	1	7															12
	H－7	1												1	1															3
	H－8														1						1									2
	H－9														2															2
	H－10					1								1						1										3
	I－5																				1									1
	I－6												2		10															12
	I－7					1						1	1		3														1	7
	I－8	1							1				1	1	3															7
	I－9						1								1														1	3
	J－8					1																								1
	J－10											1		2							2									5
	計	5	1	7	2	29	2	1	4	1		8	48	35	104					5	17	1	1	1		1		2	35	310
不明土壙	44壙																				1									1
	46壙		1																											1
	50壙														1														1	2
	51壙												1		1															2
	53壙												1	1							2								2	6
	54壙																				1									1
	56壙														1															1
	57壙	2											2		1														2	7
	61壙											2		1	1															4
	69壙													1																1
	計	2	1									2	4	3	5						4								5	26
表採																				1	1				1		1			4
総計		27	10	16	13	46	6	2	31	1	1	21	122	100	550	3	1	1	4	12	50	2	9	3	4	3	2	9	115	1164

第12表は、本遺跡より出土した縄文時代に属する石器の集計表である。本遺跡は複合遺跡であるので、原則として各時期の遺構ごとに石器の種類別に集計するという方法を用いた。遺構外出土の石器に関しては６ｍ×６ｍの区単位に集計した。

第13表　縄文時代の石器属性表(1)

石鏃属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破　損	素材打点位置	加工状況	備　考
第65図1	A－3　第4層	流紋岩	24.5	12.5	4.0	0.9	基部右		両面	
第65図3	I－8　第1層	珪質頁岩	26.0	16.5	4.5	1.2	尖端・基部両端		両面	付着物あり
第47図16	21号土壙	珪質頁岩	20.0	21.5	2.0	1.1	先端	左下	周辺	
第58図3	9号住居跡柱穴	珪質頁岩	21.0	12.5	2.5	0.5			両面	
第58図2	9号住居跡	珪質頁岩	26.5	21.0	6.0	1.9	先端		両面	付着物あり
第58図4	9号住居跡	珪質頁岩	31.0	19.0	5.5	2.4	基部両端		両面	
第65図2	H－7　表土	黒曜石	25.5	18.0	7.5	3.2	先端		両面	
第30図7	5号住居跡Pit73埋土	珪化凝灰岩	26.5	14.2	5.6			下	両面	
第79図1	57号土壙	珪質頁岩	39.0	18.0	6.0	2.9	先端・基部		両面	付着物あり

尖頭器属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破　損	素材打点位置	加工状況	備　考
第77図1	46号土壙	チャート	65.5	12.5	7.0	5.1			両面	
第41図5	I－6　第3層	珪質頁岩	(41.0)	14.0	5.0	2.7	基部		両面	
第65図4	H－5　撹乱	珪質頁岩	(41.0)	20.5	6.0	6.7	先端		両面	
第65図5	G－9　撹乱	珪質頁岩	(68.0)	13.5	5.0	4.3			両面	

石匙属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破　損	素材打点位置	加工状況	備　考
第41図6	H－5　第3層	珪質頁岩	61.5	14.0	6.0	6.2			両面	
第53図1	27号土壙　埋土	珪質頁岩	71.5	16.0	4.5	6.0			両面	
第53図4	28号土壙　埋土上層	珪質頁岩	56.5	24.5	8.5	8.9		上	片面	
第58図5	9号住居跡　埋土	珪質頁岩	37.5	72.0	12.0	22.9		上	片面	
第62図7	10号住居跡　埋土	チャート	69.0	25.0	8.0	11.5		右	片面	
第56図10	1号竪穴遺構埋土	珪質頁岩	51.5	19.0	5.5	5.1		下	周辺	
第56図8	〃　埋土上層	珪質頁岩	65.0	38.0	11.5	26.3		左	周辺	二重パティナ
第65図7	F－6　第4層	珪質頁岩	56.0	21.5	9.5	11.2		上	片面	
第66図11	E－5　第4層	珪質頁岩	102.5	17.5	10.5	14.5			両面	
第65図8	F－5　撹乱	珪質頁岩	74.5	29.0	8.5	20.7		上	周辺	二重パティナ

ヘラ状石器属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破　損	素材打点位置	加工状況	備　考
第26図7	3号住居跡埋土1層	珪質岩	71.5	52.5	21.0	83.8		右	片面	砂岩（？）
第28図3	4号住居跡埋土1層	流紋岩	45.0	28.0	13.0	14.1		下	半両面	
第28図4	4号住居跡埋土1層	珪質頁岩	(22.0)	27.0	10.0	6.1	基部		両面	ヘラ状石器を素材とした石鏃(?)
第35図1	1号土壙　埋土下層	珪化凝灰岩	61.0	38.5	21.0	41.9		上	両面	
第41図7	H－5　第3層	流紋岩	53.0	29.0	11.0	13.7		上	両面	
第58図1	9号住居跡　埋土	珪質頁岩	35.5	25.5	11.0	10.6		左	片面	
第71図2	1号溝　埋土	珪質頁岩	54.5	35.5	9.5	17.6		下	片面	
第66図10	D－4　第1層	珪化凝灰岩	64.3	30.5	14.1				両面	

石錐属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	尖端部長	尖端部幅	尖端部断面形	破損	素材打点位置	加工状況
第53図3	28号土壙埋土上層	珪質頁岩	49.5	19.5	6.5	3.4	30.5	7.0	△		下	先端部両面・基部周辺
第53図2	〃　埋土2a層	珪質頁岩	31.0	11.5	5.0	1.6	2.0	3.5	□		左	周辺
第62図6	10号住居跡　埋土	珪質頁岩	31.5	11.5	6.0	2.5			△	先端		両面
第65図6	I－9　第2層	珪質頁岩	41.6	16.5	11.0	4.7	11.5	6.0	△	※先端摩滅		周辺

スクレイパー属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破　損	加工状況	備　考
第28図5	4号住居跡埋土1層	珪質頁岩	70.0	64.0	16.5	66.8		片面	
第41図8	H－4　第3層	砂岩	37.0	52.0	12.0	19.4		片面	
第66図13	C－7　第2層	珪質頁岩	67.5	79.0	18.5	75.7		両面	
第66図9	H－10　撹乱	珪質頁岩	47.0	28.0	11.0	16.5		両面	二重パティナ
第67図17	J－9　撹乱	玉髄	41.5	26.5	9.0	11.7		周辺	ウッド・オパール？

第13表　縄文時代の石器属性表(2)

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破　損	加工状況	備　考
第67図14	H－5　第1層	凝灰質シルト岩	30.5	33.5	11.5	12.6		片面	折れ面あり
第32図6	7号住居跡埋土上層	凝灰質シルト岩	72.0	37.5	24.5	54.9			素材は石核1

石錐＋スクレイパー属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	尖端部長	尖端部幅	尖端部断面形	破損	素材打点位置	加工状況	備　考
第49図5	25号土壙　埋　土	珪質頁岩	54.0	63.0	13.0	46.4	2.0 4.0	3.0 6.5	△ △		下	周辺	
第66図11	C－7　第4層上面	珪質頁岩	48.0	64.0	19.0	36.0	2.5 4.5	1.5 3.5	△ △		上	片面	

ピエス・エスキーユ属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考
第30図6	5号住居跡　埋土2層	流　紋　岩	31.0	16.0	8.5	4.3	
第30図9	〃　〃	粘　土　岩	30.5	22.0	12.5	6.0	
第30図8	〃　床　面	粘　土　岩	30.0	28.0	5.0	1.4	接合
第30図8	〃　〃	粘　土　岩	29.0	12.0	3.5	0.7	
第32図7	7号住居跡　床　面	珪質頁岩	40.0	22.5	14.5	10.4	
第62図8	10号住居跡 Pit18埋土	珪質頁岩	53.0	28.0	17.0	20.1	

釣針形・磨製石斧属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	加工状況	備　考
第53図5	9号住居跡　埋　土	珪質頁岩	35.0	22.5	8.0	3.3	両面	釣針形を呈する
第71図1	1号溝　埋　土	不　明	38.0	11.0	7.0	6.2		小形磨製石斧

石核属性表

実測図No	出土区・層位	石質	作業面					最終剥離面の大きさ	剥離角	備　考
			数	位置関係	加撃方向	打　面	大きさ（長×幅×厚）			
第56図9	1号竪穴遺構底面	玉　髄	2	表裏（a、b）	a、↓↘	自　然　面	(25.0)×41.0×(38.8)	不　明	不明	34.8g
					b、↓	不　明	(27.0)×31.6×(38.8)	不　明	不明	
第67図15	I－8　第1層	珪質頁岩	2	a、c面	a、→←←	自、b面	58.0×59.6×21.0	16.8×25.3	72°　70°	93.9g 裏面は自然面
					c、↑	自	18.3×55.0×60.0			
第67図16	J－10　第1層	流紋岩	3	a、b、c面	a、↓←←	自、b、c	52.4×55.4×46.5	18.6×10.3	80°	98.1g
					b、↓←←	a、c	53.0×49.0×36.5			
					c、↓←←	b、abの稜	52.6×35.1×55.0	30.3×27.2	90°	

礫石器属性表

実測図No	出土区・層位	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	凹　痕	摩　痕	打　痕	備　考
第32図1	5号住居跡埋土1層	花崗閃緑岩	81.5	40.0	31.5	147.3			両　端	ハンマー・ストーン？
第34図5	7号住居跡埋土1層	安　山　岩	(109.0)	76.5	51.0	670.8		右側辺		半欠、受熱
第34図1	〃　埋　土	安　山　岩	67.0	59.0	37.0	206.7	表　面			
第24図7	1号土壙　底　面	花崗閃緑岩	95.5	82.5	57.0	734.2	表1、裏1	両　面		
第38図1	5号土壙　最下層	安　山　岩	110.5	64.0	37.0	373.3	表2、裏1		下　端	
第38図2	6号土壙　埋　土	安　山　岩	(80.0)	65.0	45.5	328.2		右側辺		半欠
第53図6	30号土壙　底　面	安　山　岩	360.0	265.0	40.5			表　面		整形される
第62図5	10号住居跡　床　面	溶　岩	104.5	70.0	43.5	204.5		表面全体凹状に摩痕		
第71図3	1号溝　埋　土	安　山　岩	(109.5)	64.5	33.5	311.7	表2、裏3			一端欠
第67図18	E－5　表　採	花崗閃緑岩	102.0	88.0	57.0	734.2	表多数	裏　面		

注1、時間的制約によってすべての石器の属性表を作成することはできなかった。本表は、本報告書に実測図・写真図版を掲載した石器についてのみの属性表である。

注2、石鏃、尖頭器、ヘラ状石器は石器の中軸線の長さを計測した。石匙はつまみ部を上にした場合の最大長を長さとした。その他の石器は、最大長をもつ部分を長さとし、それに直交する最大の長さを幅として計測した。

注3、素材打点位置の上下左右は、主要剥離面が表現されている実測図の上下左右である。

注4、石核属性表でのa、b、cは実測図に表示されるa、b、cである。また「自」は自然面を表わす。

引用・参考文献（五十音順）

赤沢威・小田静夫・山中一郎　1980『日本の旧石器』

阿部朝衛　1979「第５章Ⅷピエス・エスキーユ」『峠下聖山遺跡』ＰＰ.153～159 七飯町教育委員会

板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫　1981「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」『東北地理』第33巻第１号　ＰＰ.48～53

伊東信雄　1940「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」『東北大学法文学部奥羽資料調査部研究報告第二』

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　ＰＰ.1～14

岡村道雄　1976ａ「約二万五千年前とそれを遡る時期の東アジア旧石器文化と日本の関連」,『文化』第４巻第１・２号　ＰＰ.1～30

1976ｂ「北関東前期旧石器時代における二石器群」『野州史学』第３号　ＰＰ.1～12

1976ｃ「日本前期旧石器時代の始源と終末」『考古学研究』第23巻第３号　ＰＰ.73～92

岡村道雄・鎌田俊昭　1980「宮城県北部の旧石器時代について」『東北歴史資料館研究紀要』第６巻　ＰＰ.1～28

岡本勇編　1982『縄文土器大成１－早・前期』講談社

小野田町教育委員会　1980『鹿原Ｄ遺跡』小野田町文化財調査報告第１集

加藤孝　1951「宮城県上川名貝塚の研究―東北地方縄文式文化の編年学的研究(1)」『宮城学院女子大学研究論文集』１号　ＰＰ.213～237

1956ａ「陸前国大松沢貝殻塚の研究　その一」『宮城学院女子大学研究論文集』９号　ＰＰ.63～72

1956ｂ「陸前国大松沢貝殻塚の研究　その二」『宮城学院女子大学研究論文集』10号　ＰＰ.139～156

加藤孝・後藤勝彦他　1975「登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史資料編』ＰＰ.1～274

興野義一　1968「大木式土器理解のためにⅣ」『考古学ジャーナル』24　ＰＰ.17～19

1969「大木式土器理解のためにⅤ」『考古学ジャーナル』32　ＰＰ.6～9

1970ａ「大木５ｂ式土器の提唱―宮城県長者原遺跡出土資料による―」『古代文化』第22巻第４号　ＰＰ.97～102

1970ｂ「大木式土器理解のためにⅥ」『考古学ジャーナル』48　ＰＰ.20～22

1981「糠塚貝塚について」『一迫町史』

倉田芳郎編　1978「千葉・南総中学遺跡」『先史10』

後藤勝彦　1968「宮城県七ケ浜町吉田浜貝塚〔Ⅰ〕」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城県の地理と歴史第３集　ＰＰ.1～20

後藤勝彦・斎藤良治・金子浩昌　1969『埋蔵文化財第四次緊急調査概報―南境貝塚―』宮城県文化財調査報告書第20集　宮城県教育委員会

佐藤洋　1981「第Ⅰ章２、遺跡の環境」「第Ⅲ章６、土器胎土中における白色針状物質について」『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第33集　ＰＰ.1～13　ＰＰ.229～230

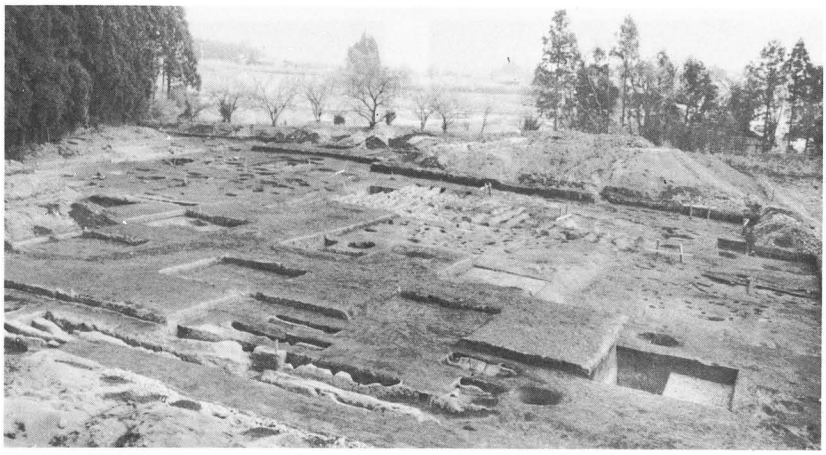
荘内古文化研究会　1955『吹浦遺跡』

石器文化談話会　1978『座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』石器文化談話会誌第１集

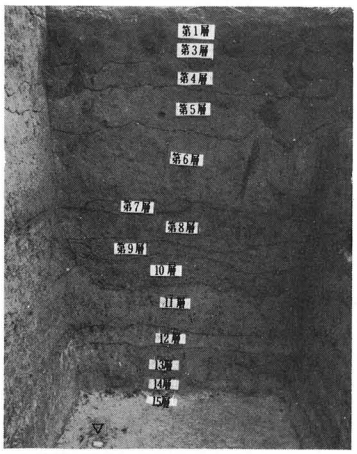
1981『座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』石器文化談話会誌第２集

芹沢長介　1962「旧石器時代の諸問題」『岩波講座日本歴史１』ＰＰ.77～107

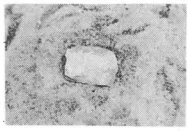
1979「日本旧石器時代の編年について」『考古学ジャーナル』167 ＰＰ.2～6
芹沢長介編　1970『星野遺跡第３次発掘調査報告書』
芹沢長介・岡村道雄・小林博昭・戸田正勝　1974『碁石遺跡』
仙台市教育委員会　1981『山田上ノ台遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第30集
1981『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第33集
1981『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第34集
田山利三郎　1933「北上山地の地形学的研究其一　Ａ．仙台市近傍の河岸段丘」『斎藤報恩会学術研究報告』第17号　ＰＰ.1～83
地学団体研究会仙台支部編　1980『新編　仙台の地学』
中川久夫・小川貞子・鈴木養身　1960「仙台付近の第四系および地形(1)」『第四紀研究』第１巻第６号　ＰＰ.219～227
中川久夫・相馬寛吉・石田琢二他　1961「仙台付近の第四系および地形(2)」『第四紀研究第２巻第１号　ＰＰ.30～39
中田高・大槻憲四郎・今泉俊文　1976「仙台平野西縁・長町―利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第28巻第２号　ＰＰ.111～121
中村光一　1973「石巻市西三軒屋遺跡の発掘調査」『石巻地方の歴史と民俗』宮城県石巻工業高等学校創立十周年記念論集　ＰＰ.139～150
丹羽茂　1981「大木式土器」『縄文文化の研究』第４巻　ＰＰ.43～60
林謙作　1965「Ⅱ．縄文文化の発展と地域性　２．東北」『日本の考古学　Ⅱ』ＰＰ.64～132
樋口清之・麻生優　1971「十三菩提遺跡」神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告２　神奈川県教育委員会
藤沼邦彦　1969『埋蔵文化財緊急発掘調査概報―長根貝塚―」宮城県文化財調査報告第19集ＰＰ.3～24　宮城県教育委員会
Ｆ．ボルド　1968『旧石器時代』邦訳　芹沢長介・林謙作　1971　平凡社
町田貞他編　1981『地形学辞典』二宮書店
馬目順一・原川雄二・山内幹夫　1975「第６章、Ｈ、編年上の問題」『大畑貝塚調査報告』福島県いわき市教育委員会
宮城県教育委員会　1974「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書35集　ＰＰ.161～274
1978「上深沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書１』宮城県文化財調査報告書第52集
1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集　ＰＰ.3～540
山田一郎・庄子貞雄　1980「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡研究所年報1979』ＰＰ.97～102
遊佐五郎　1980『沼崎山遺跡』豊里町文化財調査報告書第２集　豊里町教育委員会
米沢市教育委員会　1977『米沢市八幡原埋蔵文化財調査報告書第３集』



1

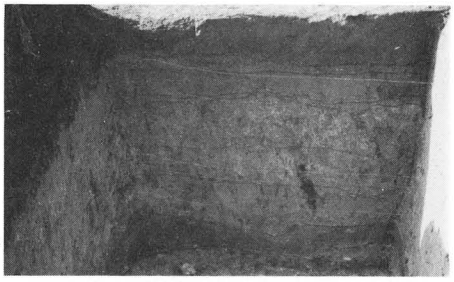


2



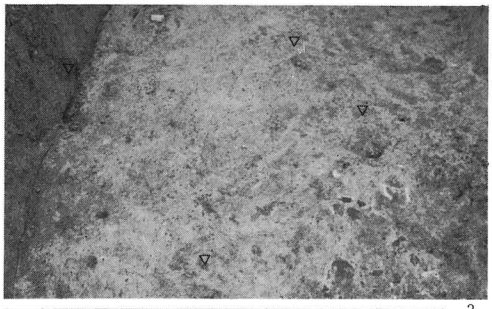
4

5

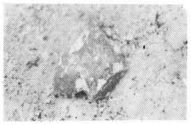


8

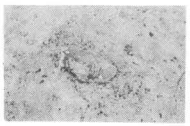
9



3



6



7

10

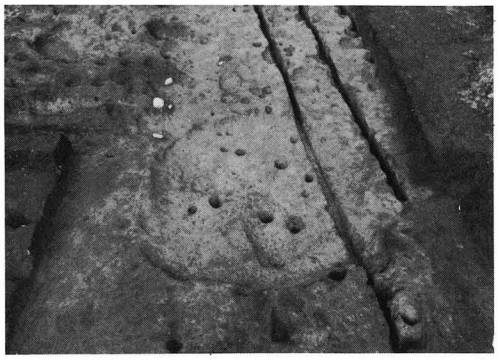
11

1．遺跡全景（西より）　2．D－3 a区東側断面　3．D－3 a区石器出土状況　4～7．同、個別出土状況
8．I－5 b区西側断面　9．同、石器出土状況　10．A－3 d区石器出土状況　11．A－3 d区「風倒木痕」南側断面
（3～9前期旧石器時代　10．11．後期旧石器時代）

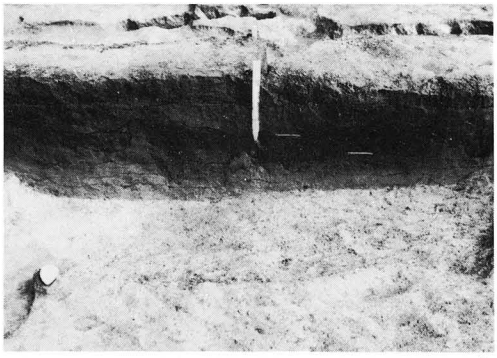
写真1　遺跡全景・旧石器時代の石器出土状況

1

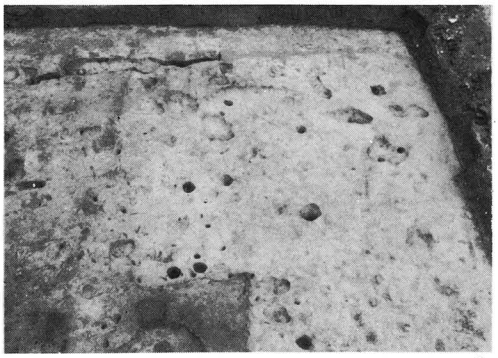
2



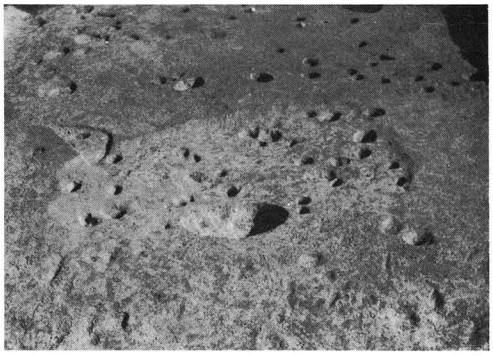
3



4



5

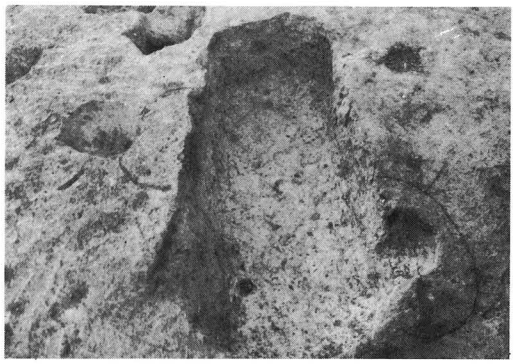


6

7

1．1号住居跡・3号溝(江戸時代)　2．2号住居跡　3．3号住居跡　4．3号住居跡断面(西側)　5．4号住居跡
6．7号住居跡　7．5号・6号住居跡

写真2　縄文時代早期の住居跡

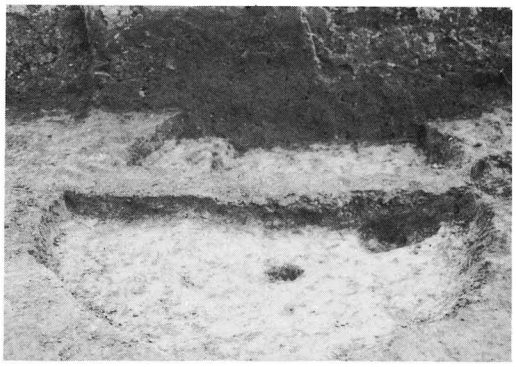


1

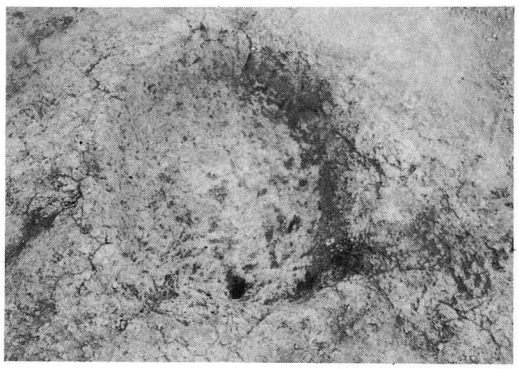
2

3

4



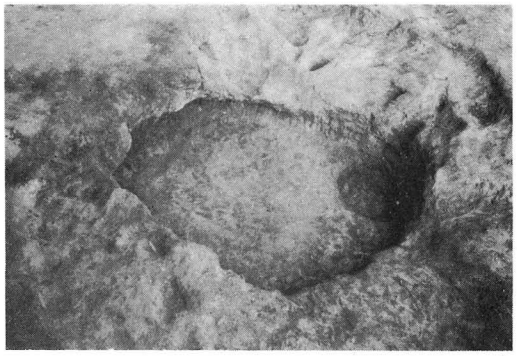
5



6

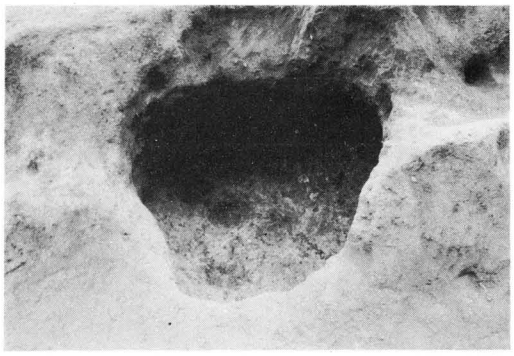
1．1号土壙　2．2号土壙　3．4号土壙　4．5号土壙　5．7号土壙　6．9号土壙

写真３　縄文時代早期の土壙



1

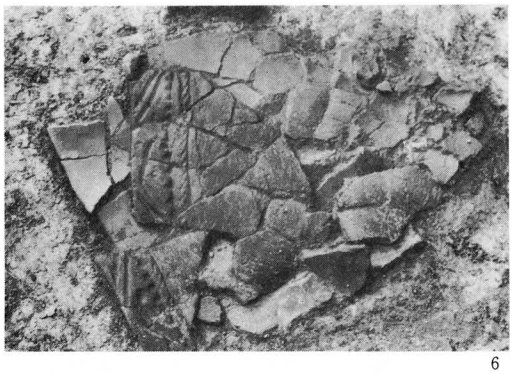
2



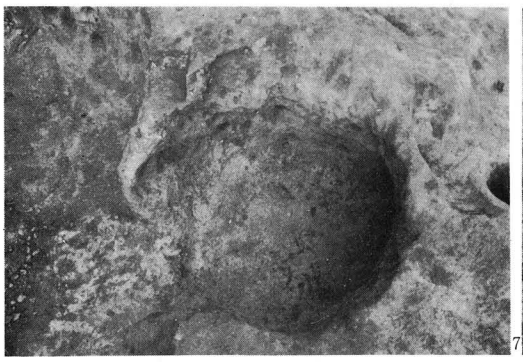
3

4

5



6

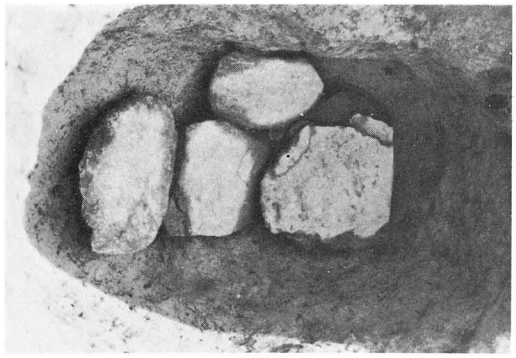


7

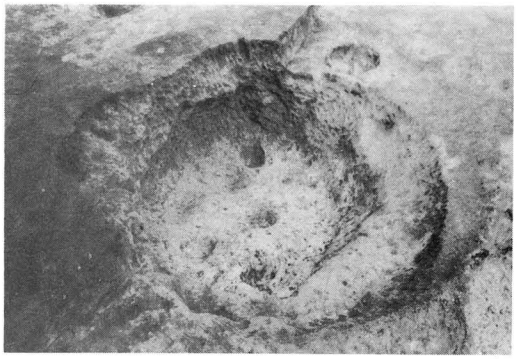
8

1．11号土壙　2．13号土壙　3．14号土壙　4．15号土壙　5．16号土壙　6．同、一括土器出土状況
7．17号土壙　8．18号土壙

写真４　縄文時代前期末葉の土壙（1）

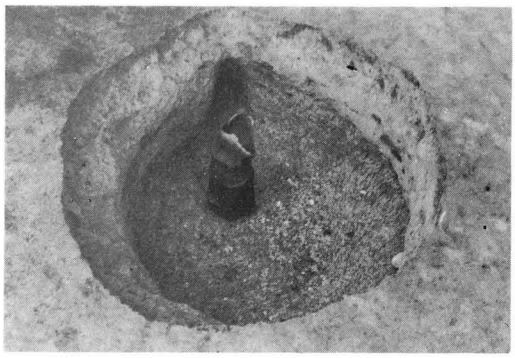


1



2

3

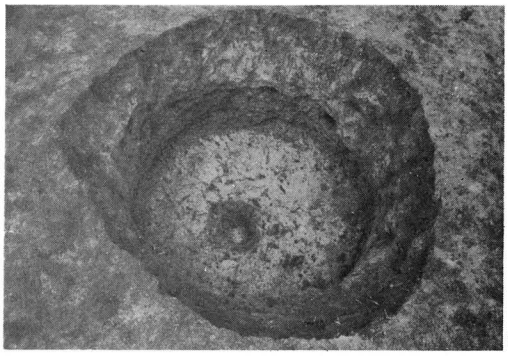


4

5

6

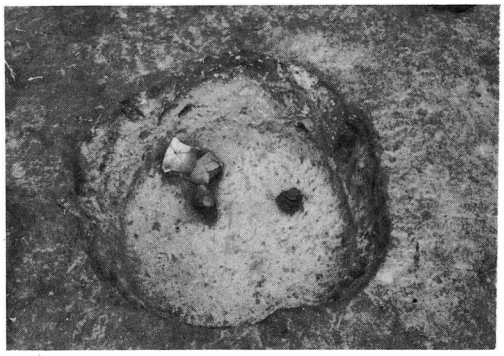
7



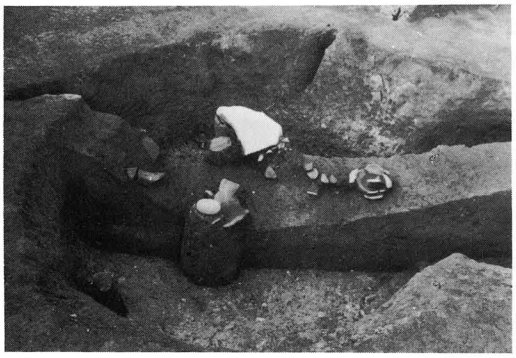
8

1．18号土壙　2．21号土壙　3．20号土壙(上)22号土壙(下)　4．23号土壙　5．同、土器出土状況
6．同、断面（南側）　7．24号土壙　8．25号土壙

写真５　縄文時代前期末葉の土壙 (2)



1

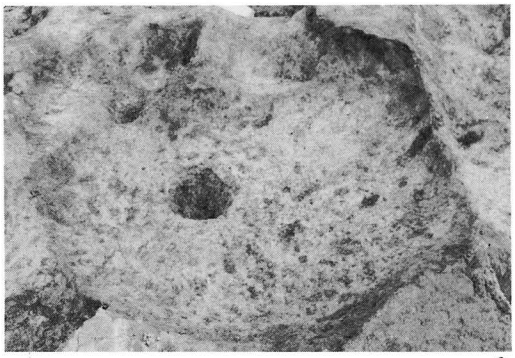


2

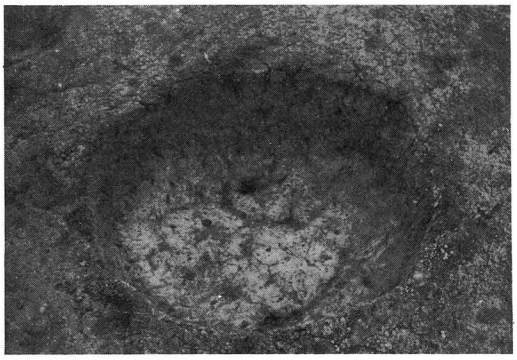
3

4

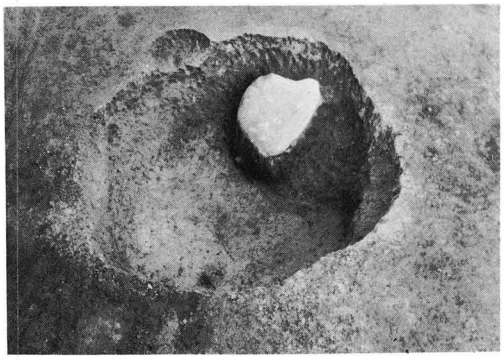
5



6



7



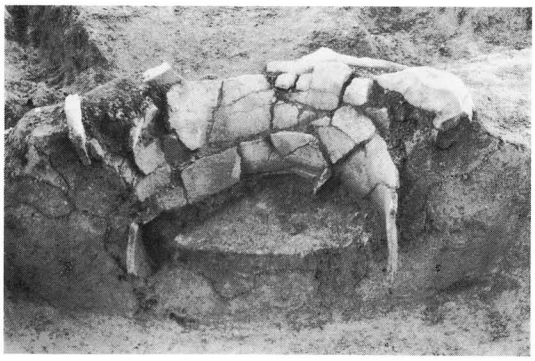
8

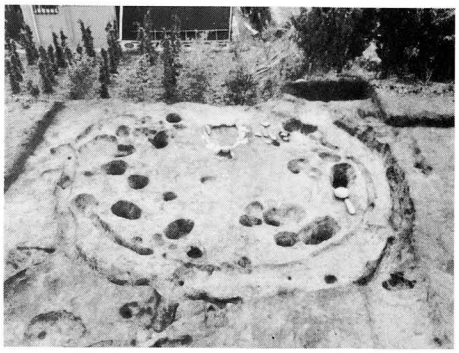
1．26号土壙（一括土器出土状況）　2．27・8号土壙土器出土状況　3．28号土壙(右)、27号土壙(左)　4．29号土壙
5．30号土壙　6．31号土壙　7．32号土壙　8．33号土壙

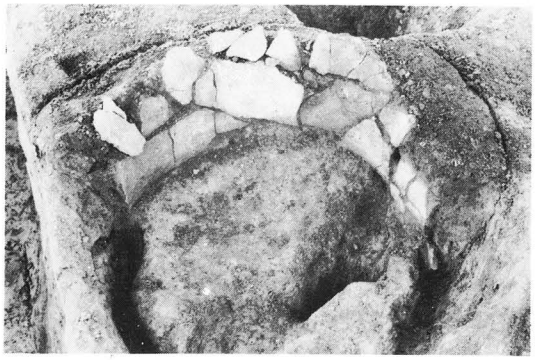
写真6　縄文時代前期末葉の土壙 (3)

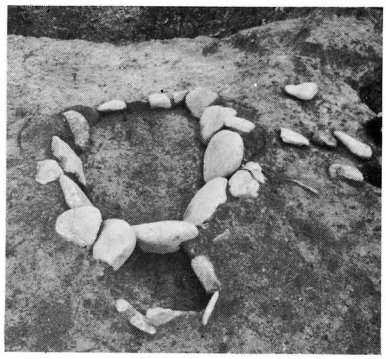
1

2


3


5


4


6

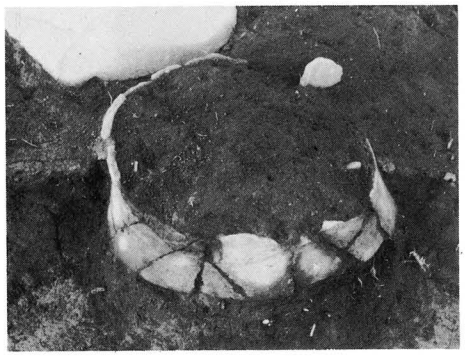
7

8

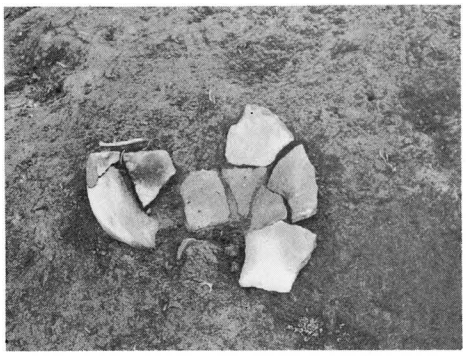
1．９号住居跡（南より）　2．同炉跡　3．同、炉土器埋設部　4．同、埋設土器　5．10号住居跡（北より）
6．同、炉跡　7．8．同埋設土器

写真７　縄文時代中期の住居跡

1



2

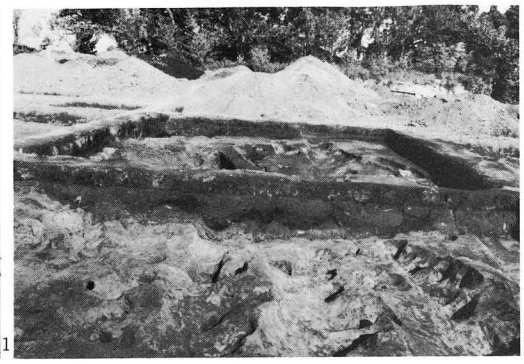


3

1．１号竪穴遺構（南より）　2．１号埋設土器　3．Ｄ－７区一括土器出土状況

写真８ａ　縄文時代中期の竪穴遺構・埋設土器・一括土器出土状況

1



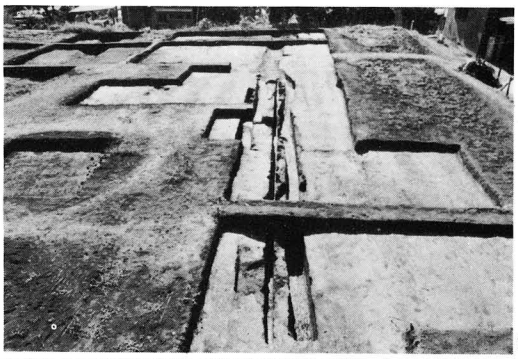
2

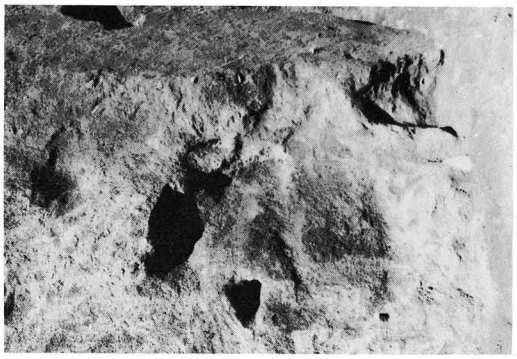
3

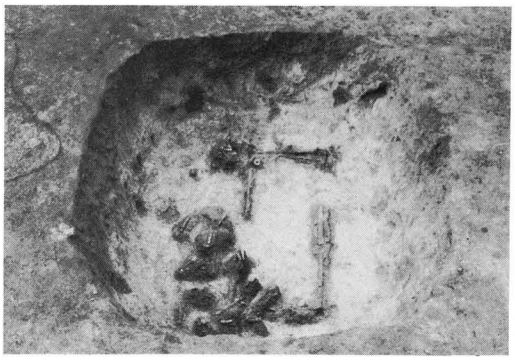
4

1．11、12号住居跡　2．同西側断面　3．12号住居跡土器出土状況　4．35号土壙

写真８ｂ　平安時代の住居跡、土壙

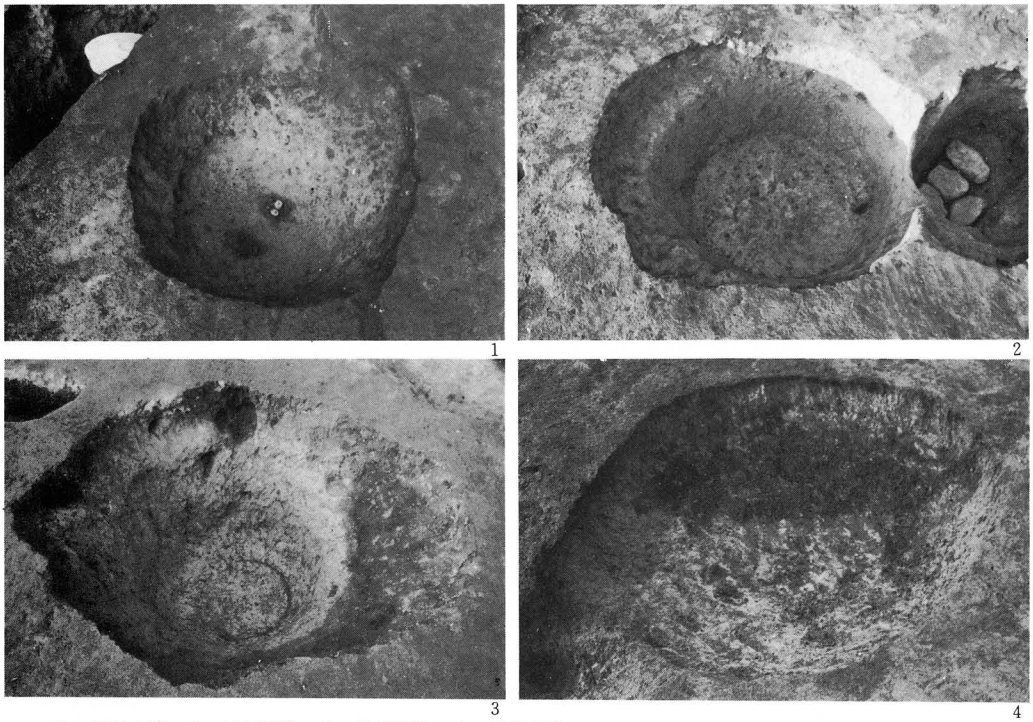






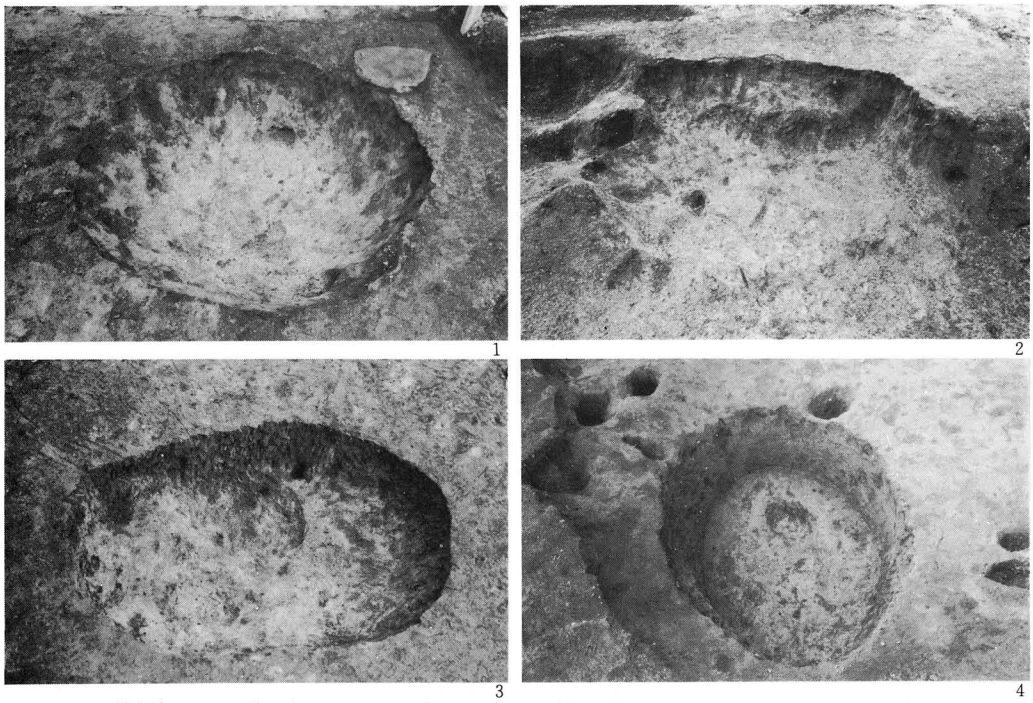
1．1号溝　2．2号溝　3．3号・6号溝　4．4号溝　5．工房跡　6．同、カマド　7．37号墓壙　8．38号墓壙

写真9　江戸時代の溝・土壙（1）



1．39号土壙　2．40号墓壙　3．41号墓壙　4．43号土壙

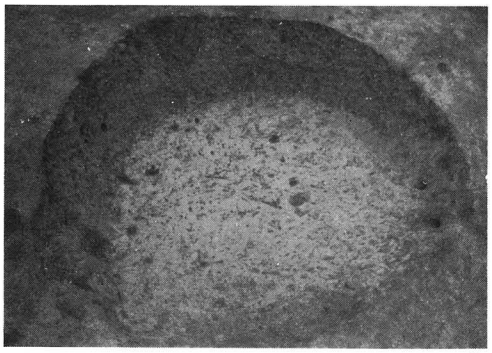
写真10ａ　江戸時代の土壙（2）



1．44号土壙　2．46号土壙　3．47号土壙　4．49号土壙

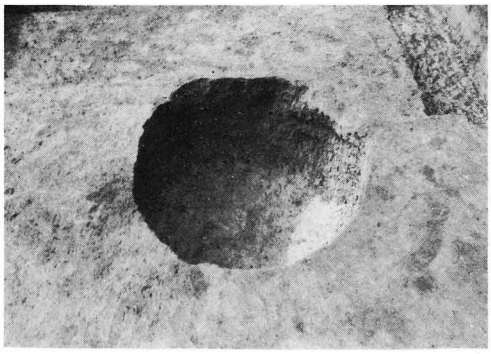
写真10ｂ　時期不明の土壙（1）

1



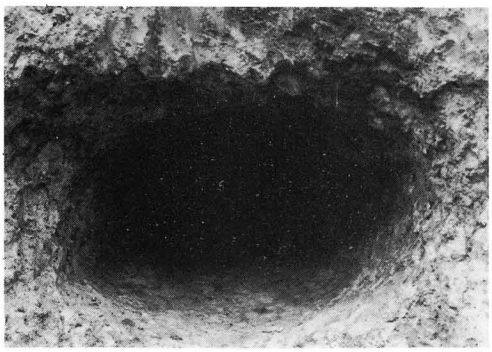
2

3

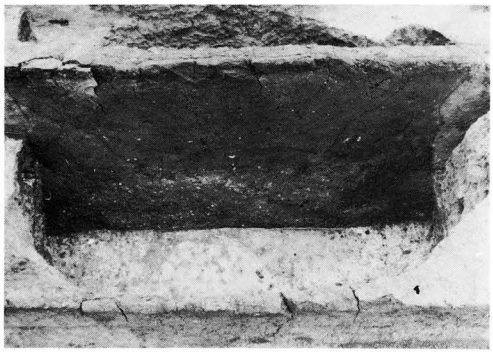


4

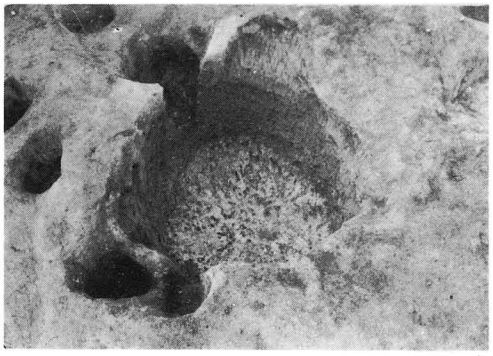
5



6



7

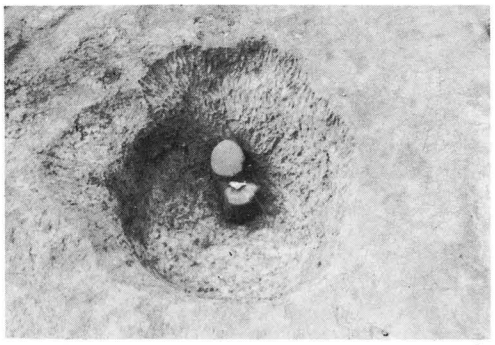


8

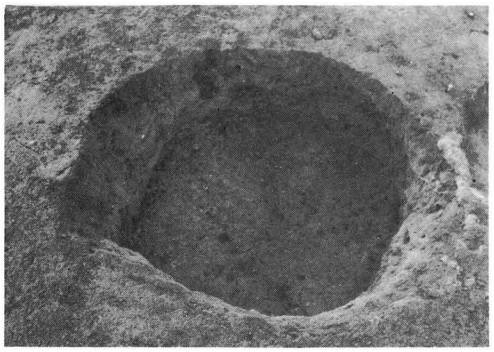
1．53号土壙　2．54号土壙　3．55号土壙　4．57号土壙　5．56号土壙　6．57号土壙細部（横穴）
7．59号土壙西側断面　8．59号土壙

写真11　時期不明の土壙（2）

1

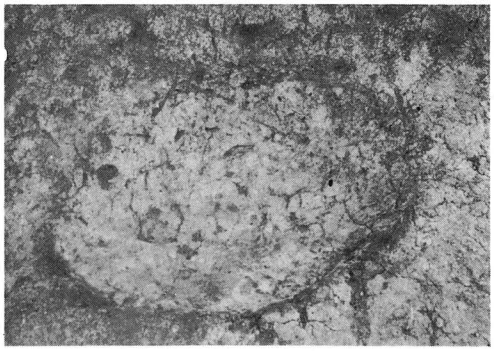

2

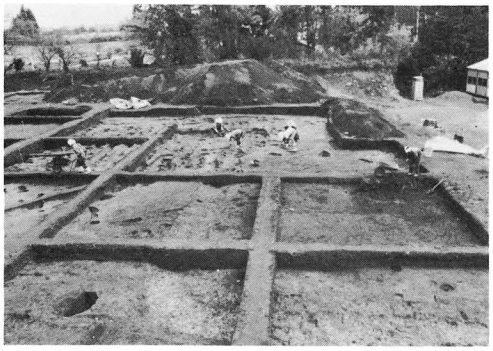
3


4

5

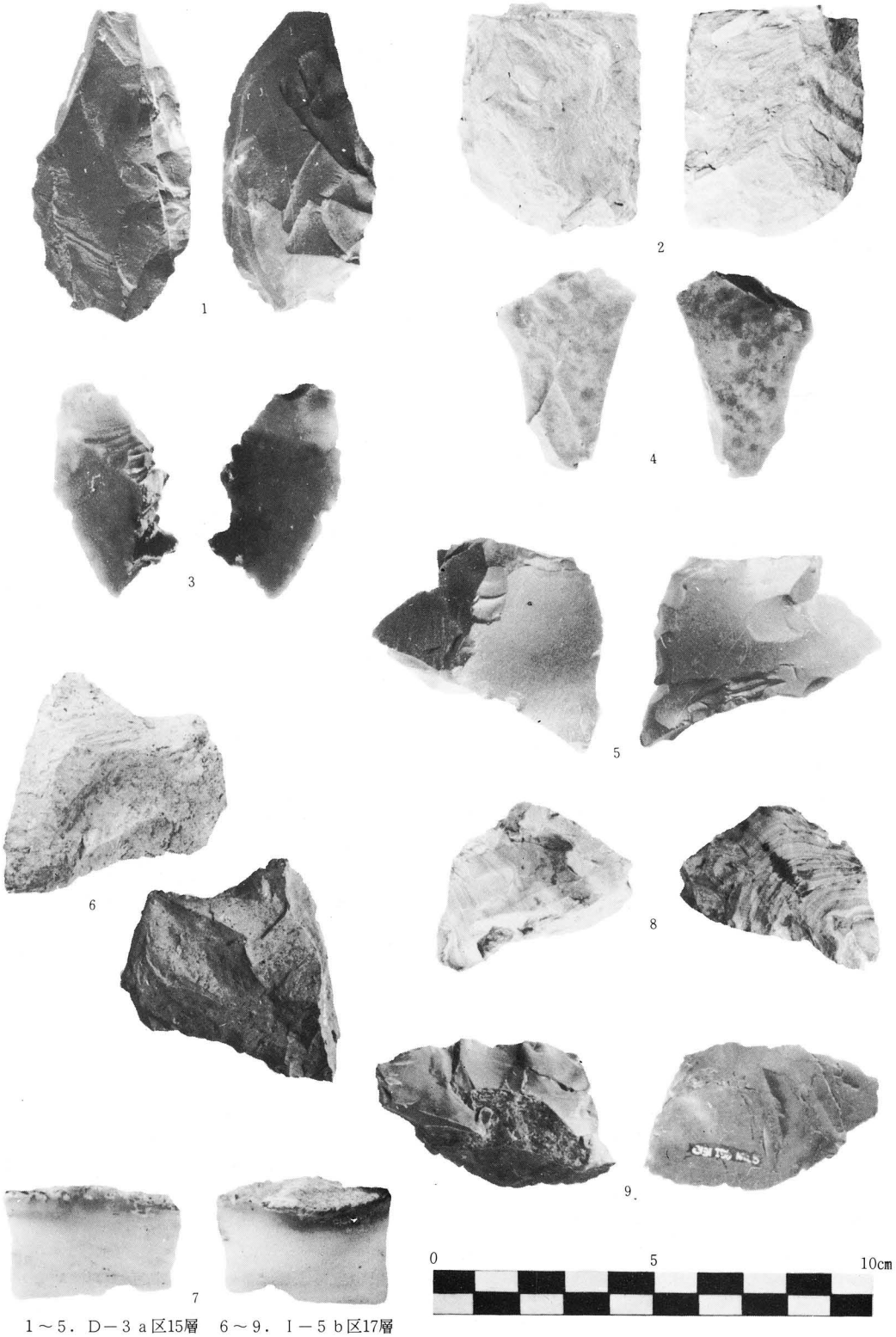
6


7


8

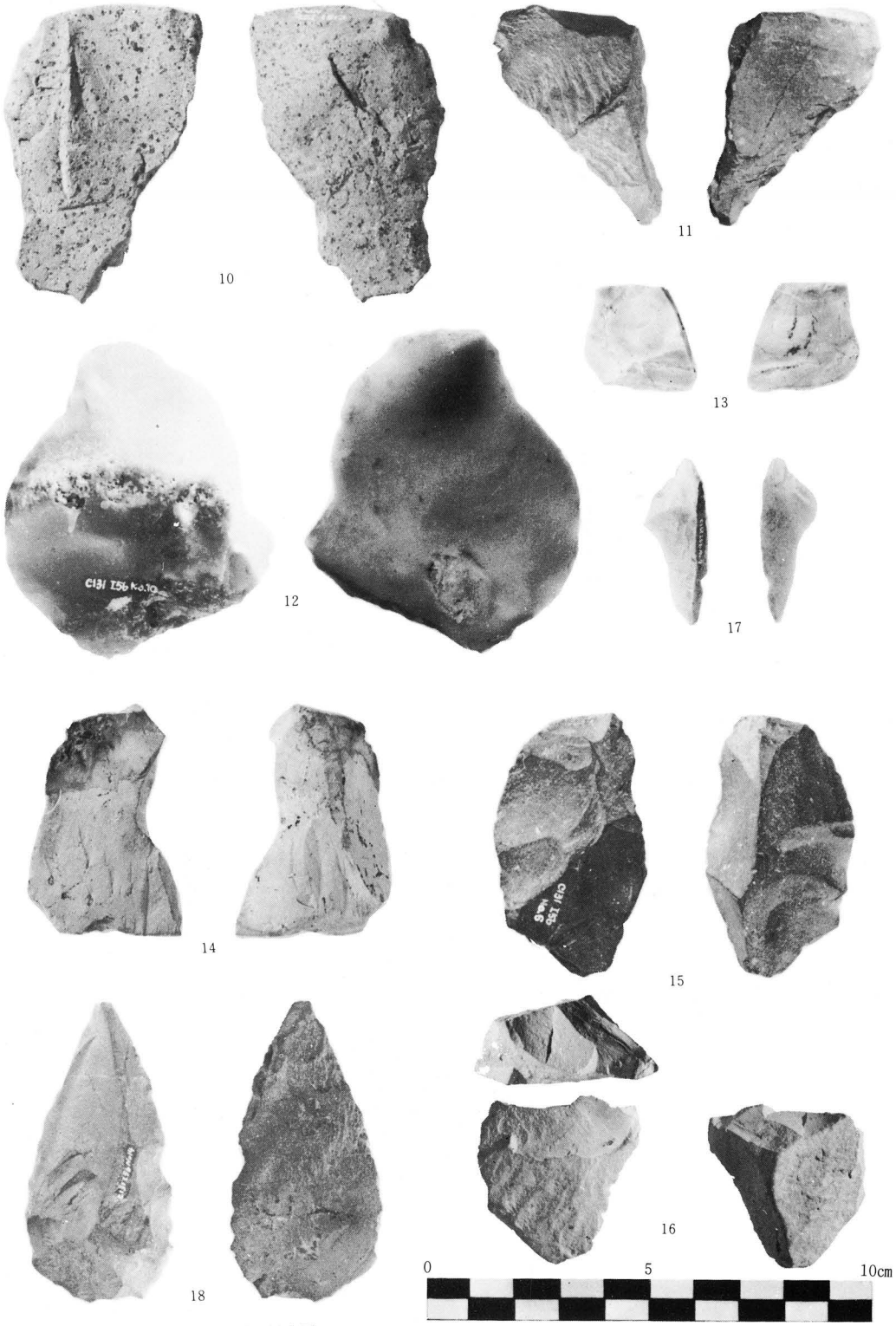
1．60号土壙　2．61号土壙　3．62号土壙　4．63号土壙　5．65号土壙　6．66号土壙　7．67号土壙　8．調査風景

写真12　　時期不明の土壙（3）・調査風景



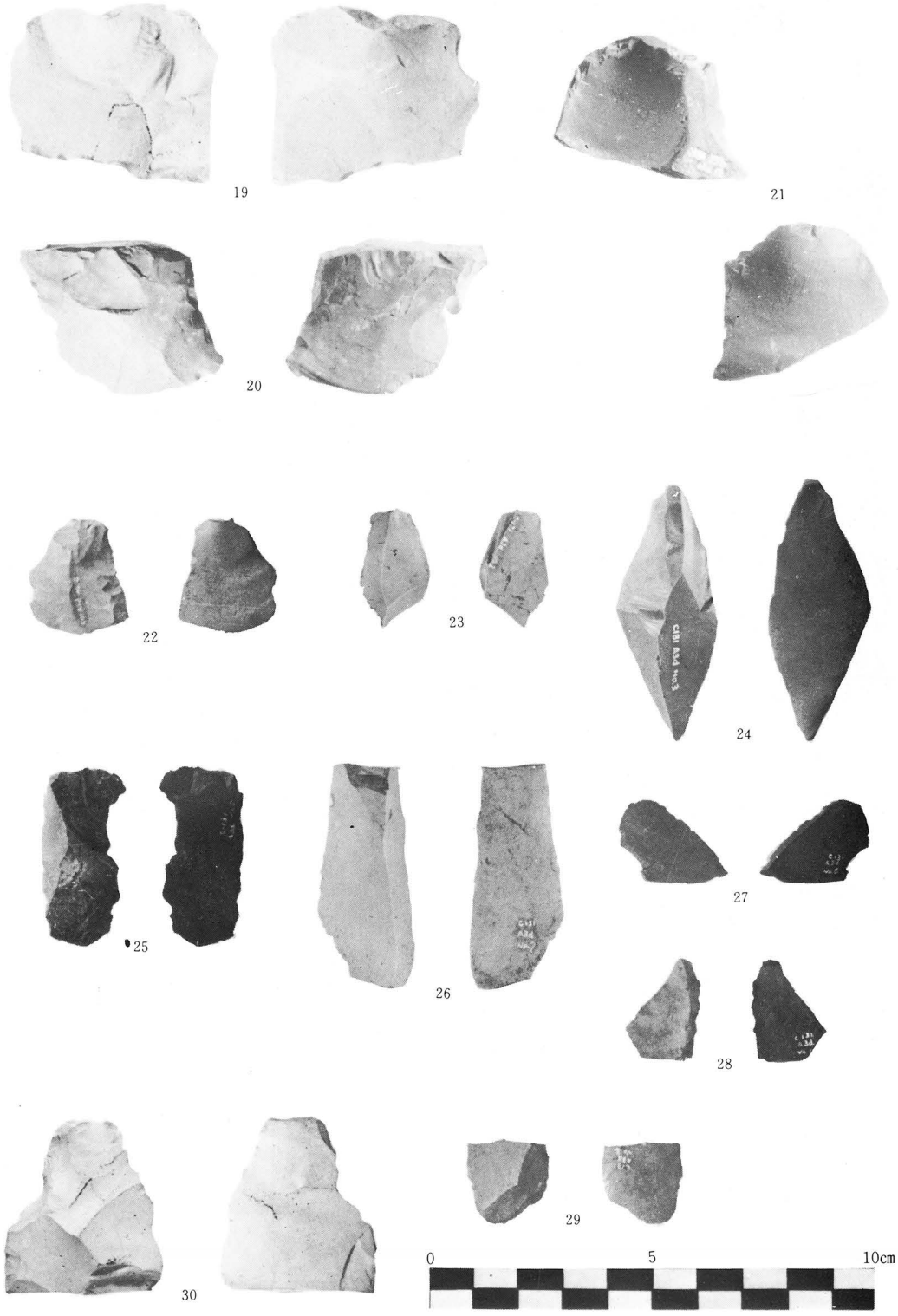
1～5．D－3 a区15層　6～9．I－5 b区17層

写真13　旧石器時代の石器（1）



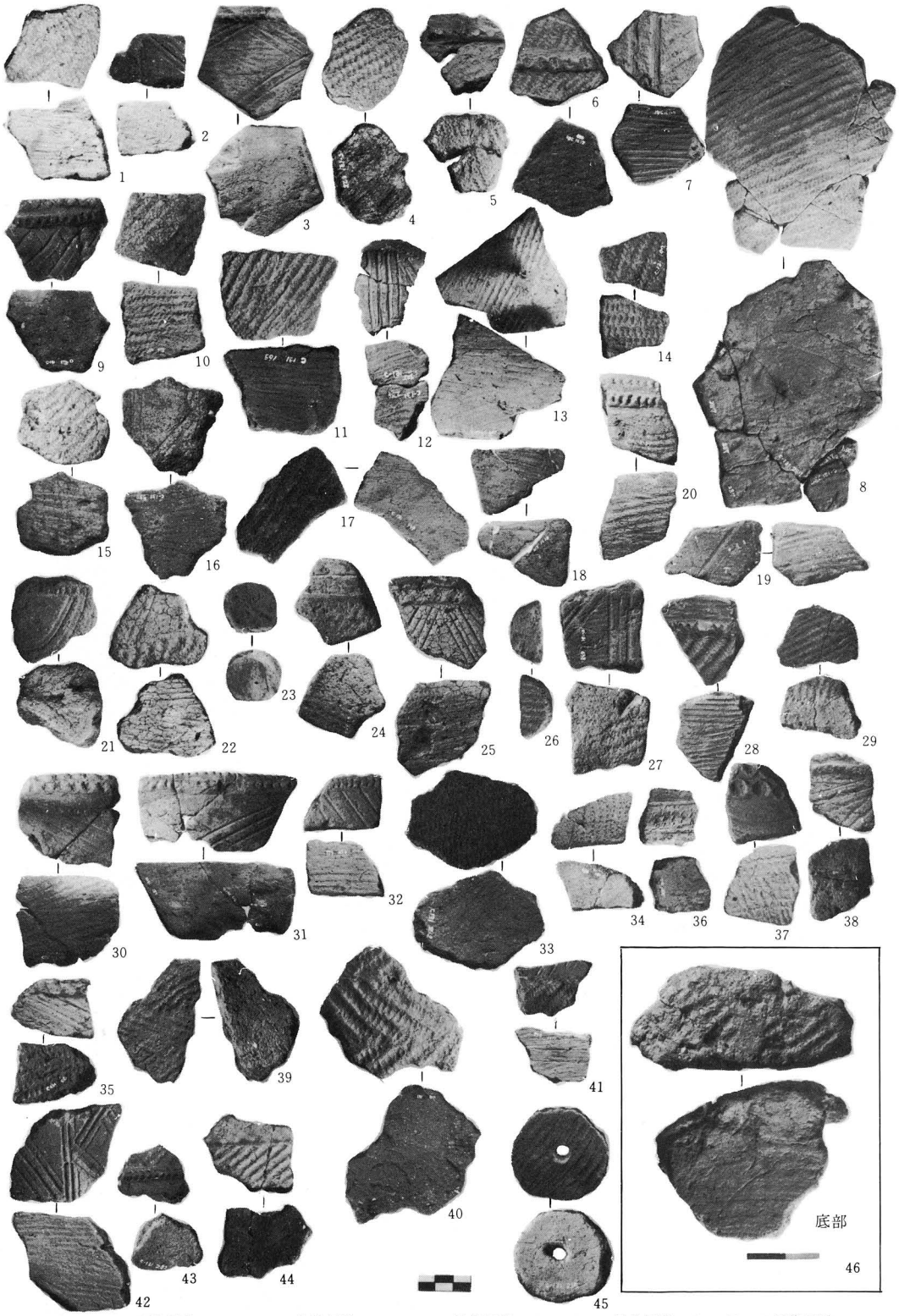
10～18. Ⅰ－5 b区17層上面

写真14　旧石器時代の石器 (2)



19. 20. Ⅰ－5 b区17層上面　21. Ⅰ－5 b区第9層上面　22～30. A－3 d区第5層上面

写真15　旧石器時代の石器 (3)



1．2．1号住居跡　3～8．2号住居跡　9～14．3号住居跡　15．16．4号住居跡　17～20．5号住居跡
21～23．7号住居跡　24～26．8号住居跡　27．3号土壙　28．29．5号土壙　30～35．36時期不明土壙
26．第3層　44．第4層上部　45．第3層　46．第1層上面（23、26、45は円盤状土製品）

写真16　縄文時代早期の土器

1．2．14号土壙　3．15号土壙　4．5．6．16号土壙　7～9．18号土壙　10．11．19号土壙　12～16．20号土壙
17～21．22号土壙　22～31．21号土壙

写真17　縄文時代前期末葉の土器 (1)

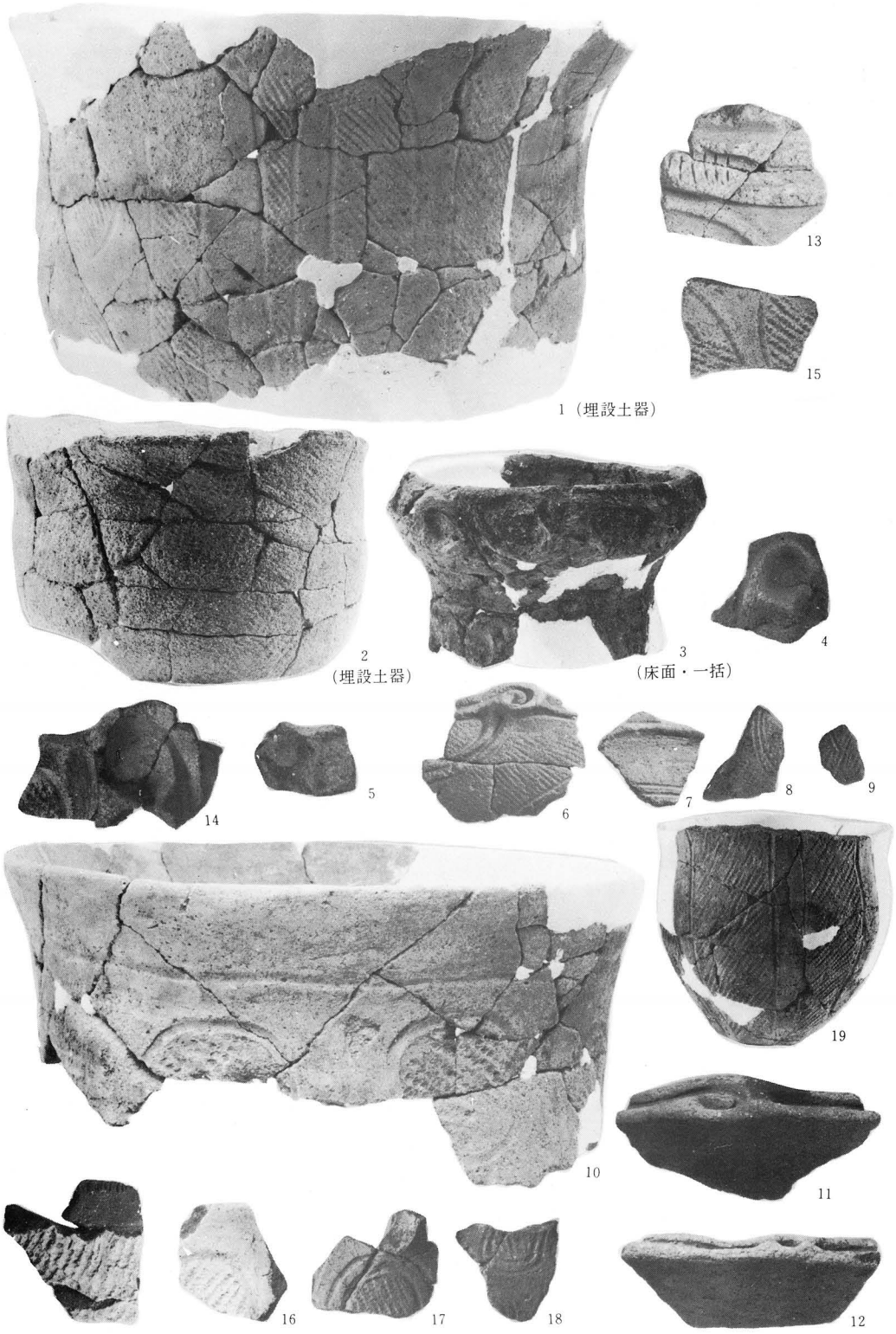
1～5．23号土壙　6．24号土壙　7～9．25号土壙　10～15．26号土壙　16～26．27・28号土壙

写真18　縄文時代前期末葉の土器 (2)

1．29号土壙　2．31号土壙　3．4．32号土壙　5．33号土壙　6～26．遺構外　28．29．9号住居跡
30．1号竪穴

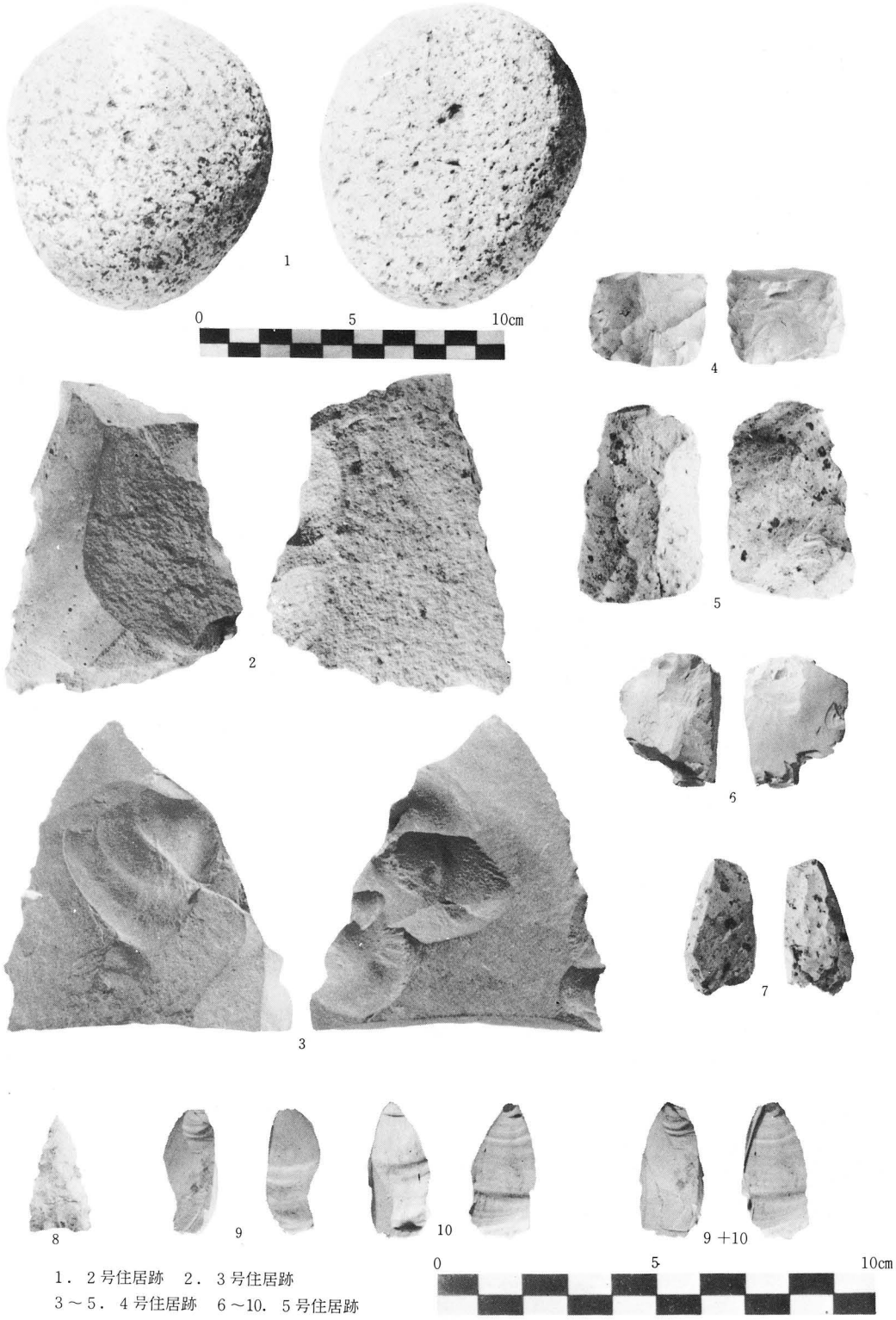
28　（炉埋設土器）

写真19　縄文時代前期末葉の土器(3)・中期の土器（1）



1．9号住居跡　2～5．10号住居跡　6～9．1号竪穴遺構　10．1号埋設土器　11～19．遺構外出土

写真20　縄文時代中期の土器（2）

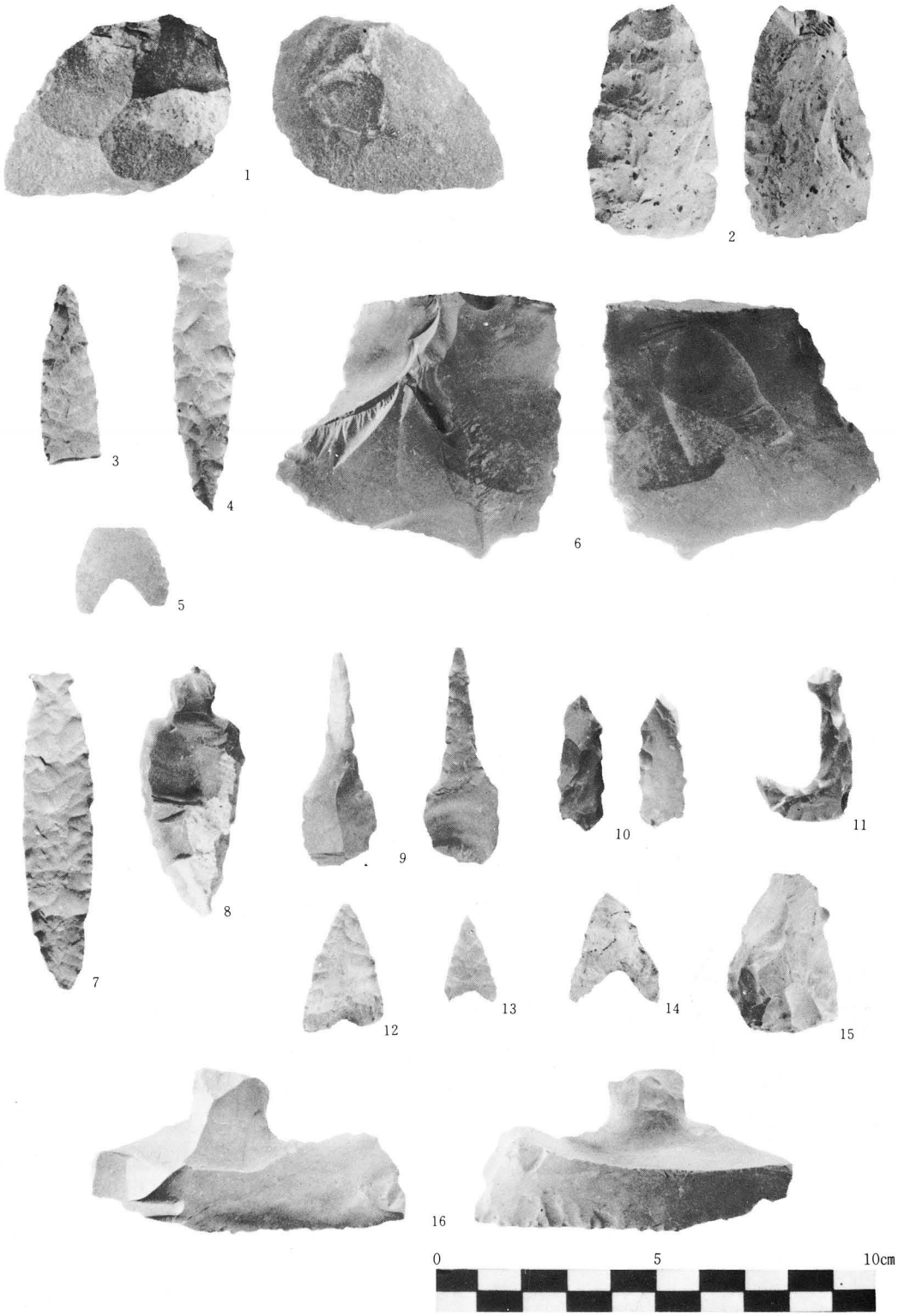


1．2号住居跡　2．3号住居跡
3～5．4号住居跡　6～10．5号住居跡

写真21　縄文時代の石器（1）

1．6号住居跡　2～4．7号住居跡　5．8号住居跡　6．1号土壙　7．5号土壙　8．6号土壙

写真22　縄文時代の石器 (2)



1～4．早期包含層　5．21号土壙　6．20号土壙　7～10．29号土壙　11．30号土壙　12～16．9号住居跡

写真23　縄文時代の石器 (3)

1～4．10号住居跡　5．46号土壙　6．57号土壙
7．8．1号竪穴遺構　9～11．1号溝

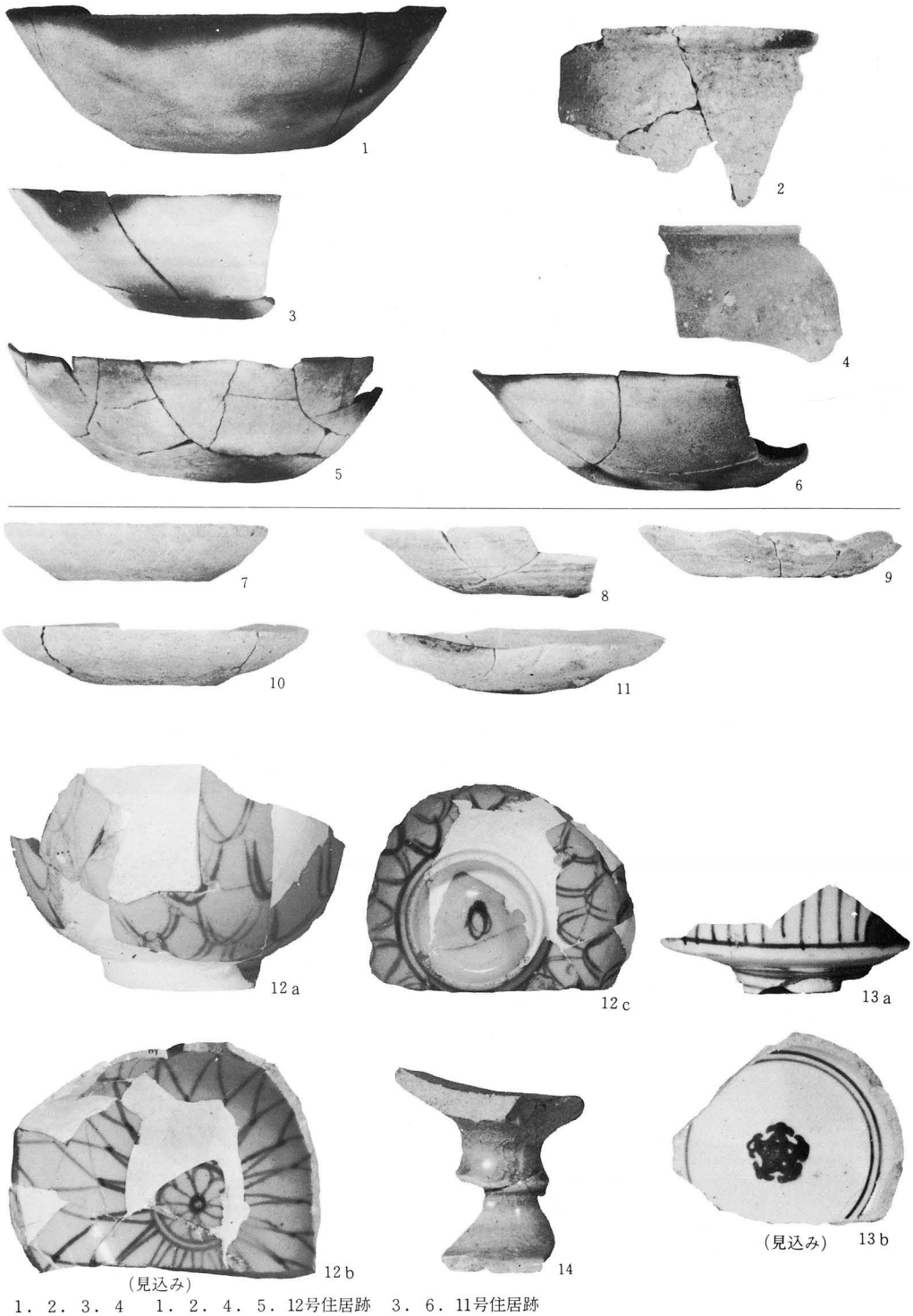
写真24　縄文時代の石器 (4)

1～11. 表土・攪乱

写真25　縄文時代の石器 (5)

1～6．表土・攪乱

写真26　縄文時代の石器 (6)



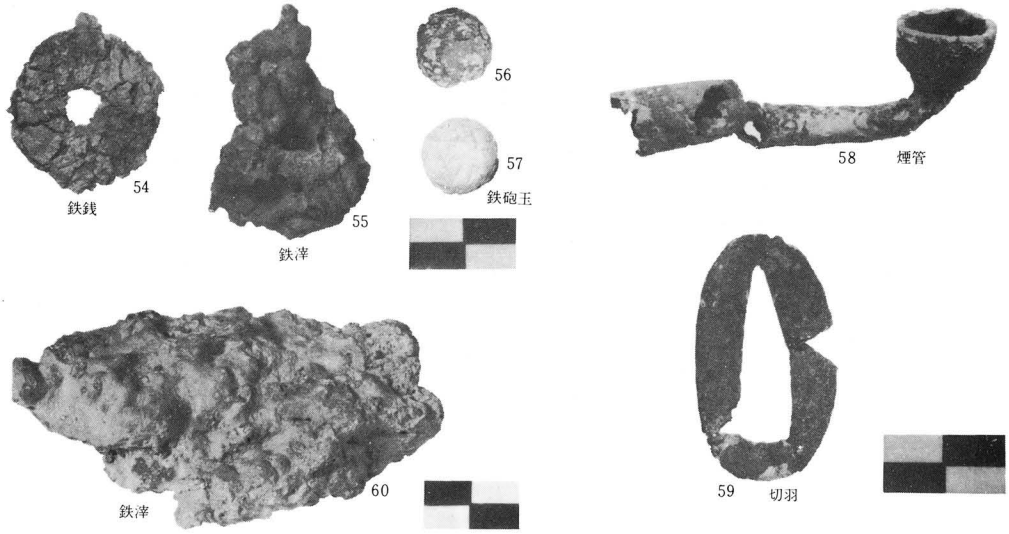
1．2．3．4　1．2．4．5．12号住居跡　3．6．11号住居跡

写真27 a　平安時代の土器（土師器）

7．3号溝　8．第2層上の黒色土層(G－5 a)　9．12号住居跡（埋土層）10．撹乱（F－4）11．第2層（H－5）
12．7号溝　23．24．4号溝（最下層）

写真27 b　江戸時代の土師質土器・磁器

墓壙出土の寛永通宝銭



1～4．37号墓壙　5～15．38号墓壙　16～48．39号墓壙　49～53．41号墓壙　54．67号土壙　55・58．工房跡
56．Ⅰ－5撹乱　57．表採　59．1号溝　60．3号溝

写真28　江戸時代及び江戸時代以降の遺物

職　員　録

社会教育課

課　長　永野昌一
主　幹　早坂春一

文化財管理係

係　長　鈴木昭三郎
主　査　鈴木高文
（10月1日異動）
主　事　山口　宏
〃　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　論　佐藤　隆
〃　渡辺忠彦
〃　佐藤　裕
〃　加藤正範
主　事　田中則和
〃　結城慎一
〃　成瀬　茂
教　論　青沼一民
主　事　柳沢みどり
〃　木村浩二
〃　篠原信彦
〃　佐藤　洋
〃　金森安孝
〃　佐藤甲二
〃　吉岡恭平
〃　工藤哲司
〃　渡部弘美
〃　主浜光朗
〃　斎野裕彦
〃　長島栄一
〃　荒井　格
臨時職員　高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年4月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年　）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
第22集　経ケ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年発掘調査概報―（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第一次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年3月）

仙台市文化財調査報告書第36集

北前遺跡 ―発掘調査報告書―

昭和57年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社 東北プリント
仙台市立町24－24　TEL 63－1166